能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年1月～2月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）
1月23日　「東北」（再）（宝生流）　高橋章ほか
1月30日　「富士松」「御田」（大蔵流）山本則直ほか
2月6日　「羽衣」（観世流）　津村礼次郎ほか
2月13日　「巻絹」（宝生流）　亀井保雄ほか
2月20日　未定
2月27日　「女郎花」（再）（金春流）　金春安明ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ「能・狂言」番組
1月29日㈯　午後2時45分～4時15分
観世流能　「胡蝶」大槻文蔵・中村弥三郎ほか
大蔵流狂言「子の日」ほか　茂山千之丞ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［1月］
22日㈯　さわってみよう能の世界（整理券必要）
23日㈰　名古屋宝生会定式能（有料）
29日㈯　青陽会（有料）（番組②面）

［2月］
11日㈮　冨耀会（無料）
12日㈯　名古屋学生連盟主催 第49回学生能・狂言の会（無料）
13日㈰　名古屋観世会定式能（有料）（番組②面）
20日㈰　名古屋観世九皐会能（有料）（番組③面）

万博記念能9月1日
平成17年度　能楽協会名古屋支部
薪能は8月6日

能楽協会名古屋支部（福井啓次郎支部長）主催による平成十七年度の演能予定はつぎのとおりである。

◎熱田神宮奉納能
六月五日㈰　熱田神宮能楽殿
◎名古屋薪能
八月六日㈯　熱田神宮境内特設舞台
◎愛知万博記念能
九月一日㈭　「愛・地球博」さしまサテライト会場
◎初秋能
九月四日㈰　名古屋能楽堂
◎歳末助け合い能
十二月四日㈰　名古屋能楽堂

16年度は年6回公演
名古屋能楽堂定例公演

能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛による名古屋能楽堂定例公演は、全六回の公演が予定されている。日程は次のとおり

▽六月十日㈮午後六時三十分始
▽七月八日㈮午後六時三十分始
▽十月十四日㈮　午後六時三十分始
▽十一月十九日㈯午後二時始
▽一月三日㈫午後二時始
▽三月十一日㈯午後二時始

なお名古屋支部による催しとして次の演能が予定されている。

●小牧市制五十周年記念薪能
九月十七日㈯　＝観世流予定
●豊田市中学生鑑賞能
八月二日㈫・三日㈬・四日㈭・二十三日㈫・二十四日㈬・二十五日㈭・二十六日㈮

'04市民芸術祭賞受賞
能楽・鏡座　伝統芸能部門

名古屋市は昨年十、十一月に開かれた「市民芸術祭2004」に参加した音楽、演劇、舞踊、伝統芸能の各部門の公演について、「市民芸術祭賞」「審査員特別賞」の受賞公演を発表、伝統芸能部門では、さる十月二日名古屋能楽堂で行われた「第八回能楽・鏡座公演」が受賞した。表彰式は二月七日挙行される。

「市民芸術祭2004」には、前記の四部門で二十七公演が行われ、部門別審査委員会で選考された。

能楽・鏡座の公演は、昨秋名古屋能楽堂で芸術祭参加として能「道成寺」狂言「狐塚」を上演。

能楽「鏡座」は、名古屋と京都で活躍している若手能楽師五人により結成され、平成九年七月、名古屋能楽堂で第一回の公演を行いすでに八回の公演を催している。

同人は、シテ方観世流・味方團（まどか）、笛方藤田流・大野誠、小鼓方幸清流・後藤嘉津幸、大鼓方石井流・河村眞之介、狂言和泉流・野村小三郎の五氏。

伝統芸能部門以外の各部門の受賞は▽音楽部門＝中岡秀彦、中岡祐子「ピアノデュオリサイタル」▽演劇部門＝劇団B級遊撃隊公演「直・似・禁」（マネキン）▽舞踊部門＝2004塚本洋子バレエ団公演「コッペリア」

能楽協会名古屋支部
新年謡初式

能楽協会名古屋支部では、一月三日午前十時から恒例の新年謡初式を名古屋能楽堂で開催した。

ひきつづいて同能楽堂の集会室で新年総会を開き、福井支部長から平成十六年度の支部主催によるいろいろな催能に対する支部員の協力に感謝する年頭のあいさつが述べられた。

さらに担当役員から平成十七年度の支部主催の演能日程（別項）また名古屋能楽堂の定例公演について発表が行われた。

邦謡会で「鉢木」
梅田邦久師の職分昇格

観世流シテ方・梅田邦久師は、本紙前号既報のように、観世流職分に昇格、中部地区としては始めてのことで、梅田師は「恩師片山九郎右衛門先生はじめ、皆様のお力添えの賜物と感謝、中部地区の能楽界ならびに観世流のために力を尽くしたい」と語っている。なお、同師が主宰する邦謡会は、きたる三月二十日㈰名古屋能楽堂で演能、梅田師は能「鉢木」を上演、またこの機会に梅田嘉宏師が「猩々乱」を披曲する。

（邦謡会演能番組③面掲載）

古作「花筐」
大槻能楽堂研究公演

大阪

2005年大槻能楽堂自主公演能2月公演は、2月19日午後2時から、古作「花筐」が研究公演として開催される。

能　古作「花筐」シテ赤松禎英、ワキ福王和幸　後見・泉嘉夫ほか、地謡・大槻文蔵、上野朝義ほか。

現行演出の曲舞「李夫人の曲舞」は「後の曲舞」といわれ、以前は「前の曲舞」と併せて二つの曲舞があったことが指摘されている。原曲は、「前の曲舞」だけであったことを踏まえ、古作「花筐」の全貌を探る。

愛知万博関連としては、「万博五流能」が九月十二日㈪中日新聞社と能楽協会本部との共催で開催、支部としては、九月一日㈭「愛・地球博」さしまサテライト会場で、記念能として参加することになった。

また会員動向として、日本能楽会新加入者（平成十六年六月から）が次のように報告された。（敬称略）

観世流・近藤幸江、宝生流・竹内澄子、玉井博祐、稲川寿一、藤田流・鹿取希世、石井流・河村眞之介

また観世流シテ方・加藤保彦氏の計（平成十六年十一月三日逝去）が報告された。

謹賀新年

名古屋観世会
観世清和

鉄仙会
観世栄夫
観世鉄之丞

梅猶会
猶諷会
梅若吉之丞

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町A番七号　電話（〇六）六七六四－〇八九八番

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル　電話〇五二（七三二）三七三六

名古屋観鴎会
山本勝一

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
高橋瞭一
外山圭一

井上嘉介
井上裕久
〒603－8175　京都市北区紫野下鳥田町六

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306　電話（〇五二）八三二－三一八五　西宮市甲陽園目神山町二三－二五　電話（〇七九八）㉓二四五八

観世芳宏門人会
観世芳宏

観芳会
観世芳伸

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
今沢美和
梅田嘉宏
〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五　電話（〇五二）八四一－四六三三番

大西智久

青陽会定式能（第49期 第1回）

一月二十九日(土)十一時開演
名古屋能楽堂

能　仕舞　組

龍田（キリ）　近藤幸江　地謡　三村恵子　今沢美和　生駒里翠　久田三津子

嵐山　姥　勝手　子守　星野路子　須部甫　高橋瞭一　前野郁子　間　杉江元　杉江淳　佐藤融　相元正樹　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世

巴　能　後見　今沢美和　久田勘鷗　地謡　黒田博　八神孝充　松山幸親　近藤幸江　加賀敏彦　祖父江修一　古橋正邦　梅田嘉宏

定家　仕舞　清沢一政　久田勘鷗　祖父江修一　地謡　黒田嘉博　梅田邦弘　武田孝充　八神

善界

妄女　能　梅田邦久　飯冨雅介　美奈保之傳　後見　今沢美和　久田勘鷗　地謡　黒田博　八神孝充　松山幸親　近藤幸江　加賀敏彦　祖父江修一　古橋正邦　梅田嘉宏

鐘の音　狂言　鹿島俊裕　佐藤友彦　後見　井上靖浩　間　井上祐一　後見　三村恵子　近藤幸江　地謡　星野路子　今沢美和　松山幸親　須部甫　高橋瞭一　祖父江修一　武田邦弘　清沢一政

富士太鼓　能　子方　久田勘吉郎　久田三津子　相元正樹　現之楽　河村眞之介　後藤嘉津幸　間　今枝靖雄　後見　前野郁子　梅田邦久　地謡　星野路子　黒田博　須部甫　高橋瞭一　加賀敏彦　古橋正邦　久田勘鷗　清沢一政　大野誠

附祝言

主催　青陽会

［有料］
前売券　二五〇〇円
当日券　三〇〇〇円
学生　一〇〇〇円
○入場券はチケットピア
電話〇五七〇―〇二―九九九九（Pコード七八三―一四七）
及び各出演者宅
○お問合せ
名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鷗方
電話〇五二―七〇五―一五八五

冨耀会

二月十一日(金・祝日)午前十時半始
名古屋能楽堂

「舞囃子」高砂ほか十三番、「居囃子」石橋ほか十四番、「連調」玉之段

［御来場歓迎］

主催　冨耀会
柳原冨司忠

第49回学生能・狂言の会

二月十二日(土)午前十一時始
名古屋能楽堂

「舞囃子」鶴亀ほか七番、「狂言」骨皮

［御来場歓迎］

名古屋観世会定式能（初回）

二月十三日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

神歌　素謡　小島一英　梅田嘉宏　地謡　祖父江修一　観世芳伸　観世芳宏　久田勘鷗

遊行柳　能　片山九郎右衛門　山本順三　中村弥三郎　河村総一郎　青柳之舞　森本幸治　福井啓次郎　助川治　大野誠　間　井上靖浩　後見　梅田嘉宏　藤井完治　地謡　本田勲　須部甫　加賀敏彦　古橋正邦　清沢一政　梅田邦久　片山清司　武田邦弘

素袍落　狂言　井上佑一　佐藤友彦　大野弘之　後見　佐藤融

高砂　仕舞　観世芳伸

屋島　観世芳宏

東北（クセ）　藤井完治

国栖　片山清司　地謡　梅田嘉宏　小島一英　梅田邦久　古橋正邦

小鍛冶　能　観世清和　高安勝久　相元正樹　黒頭　河村眞之介　大倉源次郎　助川治　藤田六郎兵衛　間　鹿島俊裕　後見　武田邦弘　片山清司　地謡　外山圭一　松山幸親　高橋瞭一　祖父江修一　久田勘鷗　観世芳宏　藤井完治　観世芳伸

附祝言

［要会員券］
※初回に限り当日券の発売はありません。

主催　名古屋観世会

（終了四時半頃）

大垣浦声会
稽古場　大垣市伝馬町大垣別院
電話〈〇五八四〉七二―三三六二
浦田保利
浦田保浩
浦田保親

〒606―0814　京都市左京区下鴨芝本町五八
電話〈〇七五〉七八一―七〇三〇
久田観正会
大倉流小鼓　松月会　久田舜一郎
郁諷会　前野郁子
松諷会　松山幸親
星野路子

〒465―0083　名古屋市名東区一社3―162
電話〈〇五二〉七〇五―一五八五
名古屋修諷会
梅若修一

松音会
泉泰孝

〒168―0081　東京都杉並区宮前四―一九―四
電話〈〇三〉三三三一―八二八〇番
泉雅一郎

〒201―0002　東京都狛江市東野川四―六―八
電話〈〇三〉三四八八―二四八五番
財団法人　鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太

下田雄三
豊中市曽根東町四―一―一二
雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
倭文之屋社中

春鶯会
梅若善高

〒560―0084　豊中市新千里南町三丁目18―12
電話〈〇六〉六八三一―七八五四
〒166―0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・903
電話〈〇三〉三三一一―〇五七〇
武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

山本章弘

〒560―0021　豊中市本町6―10―6
電話〇六（六八四六）三三六九
名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子

〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162
電話〈〇五二〉七〇五―一五八五
初陽会
武田宗和
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15―3　浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

名古屋正花会
山本博通
上田観正会能楽堂
社団法人　観正会　TEL〇七八―六九一―五四四九
上田観正会
上田貴弘
拓司
公威
大介

梅春会
井戸和男
良祐

〒545―0004　大阪市阿倍野区文の里3―16―17
電話〇六―六六二一―二二一九
笙月会中川雅章

〒526―0036　長浜市地福寺町八ノ二九
電話〈〇七四九〉62〇六三〇番
賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加賀敏彦

〒463―0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話〈〇五二〉七七一―八九四五番
松盛会
小松勝憲

松舞台
〒511―0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX〈〇五九四〉二三―四五八二
洗心会奥村富久子

〒606―8433　京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七一）〇七六七番
観修会祖父江修一

〒507―0848　多治見市日ノ出町2の2
電話〈〇五七二〉二二―三六五六
猶恵会熊沢恵美子

〒465―0097　名古屋市名東区平和ヶ丘3―76
日車マンション四〇四

名古屋観世九皐会能

二月二十日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能
朝長
杉江 元　河村総一郎　鬼頭 義命
橋本 宰　柳原冨司忠　鹿取 希世
桑田 貴志
小島 英明
高橋 暸一
間 佐藤 融
後見 長沼 範夫　外山 圭一　中所 宜夫
観世 喜之　地謡 坂 真太郎　駒瀬 直也
佐久間二郎　五木田三郎
中森 貫太　観世 喜正

狂言 **酢薑** 佐藤 友彦　井上 祐一
後見 井上 靖浩

仕舞 **二人静** 外山 圭一
鶴亀 中所 宜夫
弱法師 駒瀬 直也
地謡 桑田 貴志
佐久間二郎
中森 貫太
小島 英明
観世 喜之

能
雷電 観世 喜正
高安 勝久　加藤 洋輝
橋本 宰　後藤孝一郎　竹市 学
杉江 淳　笠 鉱一
間 鹿島 俊裕
後見 長沼 範夫　外山 圭一　佐久間二郎
五木田三郎　地謡 桑田 貴志　中所 宜夫
坂 真太郎　駒瀬 直也
小島 英明　中森 貫太

全自由席一回券　五〇〇〇円
（三枚セット割引券一三五〇〇円）
学生券　二〇〇〇円
問い合わせ、申込み
フリーダイヤル　TEL0120・150・950
（03・3268・7311）観世九皐会
チケットぴあ　0570・02・9999
松坂屋・名鉄・他各プレイガイドへ

附祝言
主催　**名古屋観世九皐会**
名古屋事務所
名古屋市守山区八剣2―1913
外山圭一方

もっと身近に能を知ろう！

観世九皐会では、公演に使用する能面や能装束などを間近に見て曲目の見どころ、エピソードなども詳しく解説する〝事前講座〟を用意している。

講座は、公演当日午前十一時より、名古屋能楽堂内にて。講師は観世喜正師。参加費千五百円（学生千円）

お問い合わせ＝0120・150・950

ホームページ　www・kanze・com／

第二十七回 邦謡会能

三月二十日(日)十時三十分開演
名古屋能楽堂

素謡 **神歌** 清沢 一政　本田 勲
地謡 武田 大志　分林 道治　片山 伸吾　梅田 嘉宏

仕舞 **高砂** 須部 甫
田村 クセ 松山 幸親
網之段 今沢 美和
蝉丸 高橋 暸一
葵上 久田 勘鵬
地謡 外山 圭一　古橋 正邦　橋本 忠樹　橋本 礒道

舞囃子 **三笑** 片山 伸吾
片山慶次郎　笠 鉱一
片山 清司　後藤孝一郎　竹市 学
地謡 加藤 洋輝　青木 武田　久田 勘鵬　大志 小島　分林 弘一　一英

仕舞 **西王母** 橋本 忠樹
経正 クセ 分林 道治
玉葛 味方 玄
天鼓 祖父江修一
善界 古橋 正邦
地謡 加賀 敏彦　清沢 一政　武田 邦弘　梅田 嘉宏

能
鉢木 青木 道喜
梅田 邦久
高安 勝久　杉江 元
相本 正樹　河村総一郎
柳原冨司忠　鹿取 希世
従者 野村又三郎
早打 野村小三郎
後見 武田 欣司　本田 勲
片山九郎右衛門　須部 甫　味方 玄
地謡 清沢 一政　武田 邦弘
祖父江修一　片山 清司
古橋 正邦

仕舞 **老松** 泉 嘉夫
小鍛冶 クセ 小林 慶三
杜若 キリ 分林 弘一
国栖 武田 欣司
地謡 黒田 博　青木 道喜
橋本 保向　青木 智彦

狂言 **清水** 野村又三郎　野村小三郎
後見 伴野 俊彦

舞囃子 **熊野** 片山九郎右衛門　河村総一郎
福井啓次郎　大野 誠
村雨留
地謡 味方 玄　橋本 忠樹
分林 道治　梅田 邦久
片山 伸吾

仕舞 **難波** 橋本 礒道
女班 アト 橋 保向
鵜之段 小島 一英
融 武田 邦弘
地謡 八神 孝充　小林 慶三
武田 欣司　大志

能
猩々乱 梅田 嘉宏　飯冨 雅介　河村眞之介
後藤嘉津幸　上田 悟　大野 誠
後見 梅田 邦久　塩見 保　橋本 礒道
片山 清司　地謡 松山 幸親　小林 慶三
加賀 敏彦　片山慶次郎
高橋 暸一　橋 保向
（終了 四時半）

［入場料］
指定席　八〇〇〇円（正面）
自由席　五〇〇〇円
前売券　邦謡会　〇五二―八四一―四六三二（梅田）
チケットぴあ　〇五二―三二〇―九九九九
市内プレイガイド

主催　**邦謡会**

謹賀新年

幸謡会　近藤 幸江
〒444―2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神 孝充
〒464―0062 名古屋市千種区向陽町2―16
電話（〇五二）七六二―二一〇一

恵謡会　三村 恵子
〒445―0831 西尾市住吉町三―一二
電話〇五六三（五七）二五九四番

桜月会　加藤 春枝
〒509―0236 可児市皐ケ丘3―113
電話（〇五七四）六四―二三〇六

宝生 英照

近藤乾之助
〒170・0002 東京都豊島区巣鴨五―二三―八
電話〇三（三九一五）一三七六番

名古屋巽会
辰巳 孝
辰巳 満次郎

佐野 由於
〒150―0011 東京都渋谷区東2―14―21
〒921―8034 金沢市泉野町4―15―18―108

倉本 雅
〒658―0081 神戸市東灘区田中町1―13―22―809
電話（〇七八）四四一―五四六五番

惠美寿会
衣斐 正宜
衣斐正宜後援会
〒466―0051 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

宝生流
嘉宝会　鬼頭 嘉男
〒466―0855 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会　佐藤 耕司
〒468―0056 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅一三三〇電話（八〇三）七三七二

金剛永謹

廣田鑑賞会
廣田 陛一
廣田 幸稔

菊之会
菊扇会
廣田 泰三
廣田 泰能

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋 三千春

㈱大阪能楽会館
〒530・0015 大阪市北区中崎西2―3―17

宇高通成
竜成
徳成
〒606―8313 京都市左京区吉田中大路町19―1
〒791―8013 松山市山越4丁目11―38
松山景雲会

松野恭憲能の会
松野 恭憲
松野 洋樹
〒616―8241 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL〇七五（四六二）二一四八番
FAX〇七五（四六二）六〇九八番

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川 周子
〒464―0825 名古屋市千種区西崎町三―六
電話（〇五二）七六一―二二五七

金春信高
金春安明
〒167―0052 東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話〇三（三三三一）二五七一番

本田光洋
〒164―0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

春敲会
名古屋春栄会
金春穂
廣瀬瑞弘
廣瀬雅高
弘

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516―0076 伊勢市八日市場町5―16
電話〇五九六（25）五二九八

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

戦後名古屋能楽史 ㊶

〔第十四章〕

昭和三十五年（一九六〇）

竹尾　邦太郎

（承前）

この柴田初太郎金婚古稀祝賀能に寄せて、『狂言』紙の歌村彦四郎は、第三十六号（昭和三十五年六月一日）に次のようなエピソードを紹介、祝意を述べている。

名古屋観世流の長老柴田初太郎翁（見たところまだ御元気でお若う見えますが敢へて翁の称号を呈上）偕老の契り浅からず、相助けてこゝに五十年の喜びを迎えられる。伝来の職を抛ち、自からの趣味に生き通し而も今日の隆運を得られたことは偏に同氏の生一本な灘の酒のような芸熱心の然らしむる所以と思います。修業中の逸話は数かぎりがありませんが、中にも最も有名なのは銭湯の洗場で洗い桶を持って差廻シの稽古に夢中、浴客の頭を撲るなど、広小路を歩いていてフト右手を翳しハイヤーを止めたり、その一例であります。その当時の熱心さを御想像下さい。

奥さんもこの天真らんまん、無邪気な御夫君の五十年のお守りは大変なことであったと謹んで敬意を表します。これを祝い、番組には五十年の枕の契りも夢のようなと「邯鄲」を自身に、息収武氏には金婚に因んで「金札」を上演しての自祝の表現は誠にお目出度い限りであります。まだ〳〵若人のような柴田さん、元気でいつ迄も名古屋の能楽界のために御奮闘を御願いいたします。

共同社を代表して御祝いの言葉を申し上げます。

さて盛夏、いわゆる装束納のあとは能閑期であるが、冷房完備の愛知文化講堂では八月十三日、第一回の大衆普及能が行われる。この足掛りとなったのは『狂言』紙第二十七号（昭和三十四年六月一日）のコラム「狂言人語」にもあるように、「大衆能の催し」と題する歌村彦四郎の次の文章に因ろう。「昨夏中部能楽師会が文化講堂に、名城建設献金能を催し好成績を納め各方面から激励を受けました。

今後も毎年一回はこのような催しを致したいと協議のうえ本年も、来る八月十五日に文化講堂で開く予定で目下企画中であります。皆様のお力添へをお願い致します。」この催し、行われはしたが名目は能楽協会名古屋支部皇太子殿下御成婚記念能、恒例となる大衆普及能は三年越しに実現ということである。

番組冒頭に「普及能を催すについて」とあり、「能は年とともに隆盛になって参りました。これは最近一般に古典ものを見直すと云ふ傾向の現れかと思われます。これまでも折にふれ普及能を催して参りましたが、今回これが後援会の発足となって、みなさまに平易に判りやすく見ていただくよう特に番組を組みました。何卒御誘い合され御観賞下さい」の口上。番組は舞囃子「養老」観世喜之、能「小督」内藤泰二（宝生）、舞囃子「羽衣」和谷亀二郎（喜多）、能「俊寛」柴田初太郎（観世）、独吟「鵜之段」前田昌広（金春）、狂言「梟山伏」川村丘造、能「船弁慶」大塚一二（金剛）、シテ方五流総出演で開演は午後五時の夜能。能三番、狂言一番の解説のあと「あとがき」として「文化講堂は冷房が完備しておりますので非常にすゞしく暑さ知らずです。

仮設とは申しながら実に立派な能舞台を組立てられます。おはきものは靴又はおぞうりが適しております」と、時代相を反映する。

八月二十八日午後一時、愛知県文化会館集会室（因に文化講堂は愛知県文化会館講堂の略称）に宝生九郎宗家を迎え名古屋官公庁実業団宝生会（参加団体は『宝生』誌第五十一巻第一号、鬼頭嘉男の記述に詳しい）が発足する。のち、午後三時半より名古屋宝生会第四期第三回例会。素謡会で「船弁慶」宝生公恵「半蔀」辰巳孝「高野物狂」宝生九郎の三番。なお、官公庁実業団の謡の普及には、当時の世情、九月五日には自民党が高度成長に伴う所得倍増政策を打ち出し、年末の十二月二十七日、これが閣議決定されるという好景気の背景も無縁ではなかろう。そして九月十日、NHK・日本テレビ・ラジオ東京・朝日放送・読売テレビがカラーテレビの本放送を開始する。

九月十一日、観世会第四回は残暑厳しい折柄、素謡会。番組は連吟「三井寺」飯田新子・芥川秀子、仕舞二番「経正」有賀滋子「玉鬘」加藤良久、素謡四番「盛久」岡久雄「遊行柳」林愿蔵「隅田川」藤波順三郎「融」藤井久雄、仕舞三番「通小町」藤井久雄「班女」柴田初太郎「松虫」岡久雄。

九月十八日、装束始で名匠鑑賞能第三十八回は宝生能。舞囃子「春栄」辰巳孝、「経政」野口禄久、「砧」宝生九郎、「隠狸」三宅藤九郎、「船弁慶・後ノ出・留ノ伝」宝生英雄、宝生流の「砧」は第九回に野口兼資が勤めて以来十一年振りである。

九月二十五日は名古屋観世会十周年記念で二部制の大能。第一部は素謡「神歌」観世元正・林愿蔵、舞囃子「養老」柴田初太郎、連吟「松虫」有賀滋子・飯田新子・芥川秀子、独吟「近江八景」国枝照清、仕舞五番「芦刈」殿島修二「小督」杉村竹翠「西王母」石谷初蔵「玄象」加藤総兵衛「龍虎」河村鉦二・久田秀雄、「弱法師・盲目之舞」観世元昭、素謡「安宅・勧進帳」藤波順三郎・山本博之、仕舞「花筐」武田太加志、「貴聟茂山弥五郎、「葵上・梓之出・空之祈」観世元正。第二部は仕舞六番「小塩」加藤良久「難波」塚本秀雄「嵐山」丹下三義「蝉丸」加藤丈太郎「唐船」岩田与司「小鍛冶」佐藤太俊、「花月」大槻十三、一調「龍田」小寺金七・林愿蔵・甲子夫、素謡「道成寺」木原康次・岡久雄、「萩大名」佐藤卯三郎、仕舞「松風」観世元正、「卒都婆小町・一度之次第」観世銕之丞、舞囃子「胡蝶」橋岡久太郎、「土蜘蛛・入違之伝」片山博通。観世宗家始め東西から大家・名手の来演があり、当地観世会々員も総出演。三役も当地在住者の外に福王茂十郎、杉市太郎、幸円次郎、谷口喜代三・斉田喜兵衛、小寺金七、茂山喜三・幸四郎らの来演があって壮観。先月号当紙で一部触れたが、『観世』誌九月号、座談会「十周年を迎えた名古屋観世会」の全容を次に再録する。

西田　名古屋観世会が生まれてからことし十周年を迎え、秋には立派な記念能もございますし、この機会に、その育成にあたっていられた林、柴田両先生から、いままでの思い出や、今後の抱負などを伺いたいと思います。まず名古屋観世会の発足はいつでしたか。

林　昭和二十六年九月廿九日、名古屋の愛知県商工館で、宗家と故華雪先生のご出席をねがって結成式を行いました。そこで宗家を会長にいただき、華雪先生には顧問になっていただいたのです。

発足まで

西田　それでは、その発足以前の名古屋の観世流の状態を少しお話しねがってから、話を進めたいと思います。

林　明治の頃には木下敬賢が居り、その流れとして柴田穀彦、加藤半外、松浦羽洲、それに穀彦の弟子青山越四郎などが名古屋観世流の中心をなしていましたが、これらの人々がだんだん亡くなったので、東京や大阪から先生を毎月よんで稽古をうけることが行われ、まず先代喜之師がこられ、そのうちに故武田宗治郎師、次で大槻十三師、橋岡久太郎師、山本博之師と出張稽古が盛んになってきました。現在では梅若六郎師もきていられます。

西田　名古屋ではこれらの稽古会を中心に、各々の師家に直属した師範がいるので、観世会をつくるとなると、師家は別として門下の師範だけを横に結んだもので組織することになるから。東京や関西の観世会とは性格の全然異なったものができている訳で、統率者もやりにくいと思いますね。

柴田　この情勢の中で戦前は素謡会としての「観友会」、能の会として「長能会」を定期的にやり、東西の大家をよんで続けていましたが戦争でやめてしまった。

林　戦後、玄人は私と柴田君のほかに師範の村瀬小右衛門、斎藤安太郎、飯田巴恵、高野瀬透、増田一雄の七人でしたが、その後師範が急に多くなり、廿五名（現在は卅四名）になりましたので、観世会をつくることに宗家も賛成され、私どもも決意したわけです。

会員券が売れ過ぎて悲鳴

西田　それでは十年間の主なできごとを。

植村　演能の舞台はどこでしたかね。

柴田　はじめは学校の講堂、商工会議所のホール、松坂屋ホール、中日会館などでやりましたが、舞台が不完全なので曲目が自由に選べず困りました。熱田神宮の舞台ができてからはズーッとそこでやっています。定期能の会員券が売れ過ぎて、会員が会場へはいり切れないので大問題がおこりましてね。熱田神宮でも二階の三列目に椅子を二段に積んだり、階下の最後列の椅子を取り外して立見席とするなど、少しでも多くの人を入れる様に苦心をしましたが、どうしても収容しきれないので観衆から抗議をうけるなど、うれしい悲鳴をあげました。それでも止むを得ず次年度からは会費を値上げしたり、券の割当制をつくり制限をして調整しました。

植村　いまはどうです。

柴田　現在は割当制限などはしていません。申込の全員が来られたら収容できませんが、欠席者もあるから、どうやらお叱りをうけることなく、うまくやっています。

西田　いままでの催会の数はどれほどですか。

林　定期能が六十回、別会を一回やりました。東西の諸先生も観世会ということでどなたも出演を辞退されるようなことはなく、気持よく出ていただけるので、嬉しく思っています。左近先生の十七回忌追善能を昭和三十年六月、御園座で昼、夜二部制でやったときも、あの広い会場も満員で非常な

（⑤面へつづく）

謹賀新年

長田驍後援会
〒514―2221 津市高野尾町三三五一―四六
電話〈〇五九二〉㉚〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516―0067 伊勢市中島二丁目26―12
電話〈五六〉㉕〇一五九番

福王茂十郎

高安勝久

宝生閑
欣哉
〒176―0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話〇三（三九七二）七二三〇
電話〇三（三九五五）四七九五

植田和光会
植田隆之亮
〒673―0862 明石市松ケ丘4の3　A6―301
電話・FAX〇七八―九一―一三七四

楽諷庵舞台
ご連絡は
名古屋市昭和区滝川町
名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話（八三二）三四九一番

谷田宗二朗
〒603―8372 京都市北区衣笠街道町31―7
電話〇七五（四六三）四八七五番

清水利宣
〒569―0817 高槻市桜ヶ丘北町11―25
電話〇七二六（九四）五〇一七

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

藤田龍吟の会
藤田六郎兵衛
〒451―0041 名古屋市西区幅下2―10―9（ロクサンヨイ）
TEL&FAX〇五二―五七一―六三四一

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良治
柳原冨司忠

（④面よりつづき）

盛況でした。あとで方々からよくやったといわれましたが、これも全会員協力の賜であり、左近先生のご恩に少しでも報いられたと嬉しく思っています。

地謡をよくするには

植村　内弟子制度がなく、素人から師範になる人ばかりだから、ときには力のある人がでても、名古屋では席次は入会順ですから、その点の扱いがむずかしいでしょうね。

林　これからは、そんなことがますますむずかしくなります。よく名古屋は地謡が揃わないとか、面白みがないとか聞きますが、各派の混成で、地頭もブッツケ本番ですから、ある程度いたしかたがないのです。自信のある人が乱すことが往々あるので困ります。藤波さんなどは地頭をしていられるときは、時々後ろから遠慮なくつつくとか、楽屋へ入るとすぐ当人に注意されるなど、名古屋ではこういう親切な注意者が必要なのではないかと思います。

西田　地謡をよくすることは、やはり正式の地頭に出て貰って申し合わせをすることだと思います。これには出演者の暇が一番問題となりますが、名古屋では是非それが望ましいと思います。（締めの部分、**定期能の番組は**、は先月号当紙に既載）

――以下次号――

◆酣秋の舞台から（その二）◆

「第九回・千作の芸を見る会」
「豊嶋弥左衛門二十五年祭追善豊春会」
「第三十七回・鳳の会」

竹尾邦太郎

「舟船」　渡し場、「ふなやーい」と呼び掛ける太郎冠者・千作、「ふな」に非ず「ふね」と主・千之丞。「ふな」に拘る太郎冠者は古歌を引用、事毎に主に楯突けば、その場凌ぎも限界の主。図に乗る太郎冠者に流石の主も「汝の分際で古歌立てをする」と烈火の怒り。丁々発止、掛合の迫力は絶妙の間（ま）が生む阿吽の呼吸、見事の一語。（12分）

「鶏聟」　「これは人の愛しがる花聟でござる」の名宣から少々はしゃぎ気味（当然か）の聟シテ逸平に聟入作法問われる何某・薫。「再々聟入をなされてよう御存知でござらう程に」と出られては、誤解とはいえ面白くない。今の流行は鶏の蹴合う真似をすること、と飛んでもない事を教え、洞烏帽子は鶏冠に似る、と士烏帽子に替え送り出す。舅・七五三の方へ罷り出れば、訝る舅も事態を察知、聟に物知らずと笑われては、と言い条、心は聟に恥をかかせては、の思い。自身も洞烏帽子を着し、「さて、皆の者に笑ふな、と言へ」と太郎冠者・宗彦に言い付けると、聟と二人して蹴合う裡に、今は心置き無く熱中してゆくところ、童心に返って御機嫌。七五三親子と薫。アンサンブルの好さ。（28分）

「椎茸典座・地獄編」　典座（てんぞ）は禅院で修行僧の食を司る役職。仏道の一とし、その意義と心構えを述べた道元の『典座教訓』と、弟子懐奘の編んだ道元の語録『正法眼蔵随聞記』を下敷きに敷衍翻案、道元生誕八百年及び七五〇回忌遠忌法要の記念に求められた千作自身による新作狂言。平成十一年五月、永平寺法堂で初演以来、全国十九箇所を回り、能楽堂での上演は今回が初という。この狂言の下敷き部分、前者は「また嘉定十六年（和暦は貞応二年、西暦一二二三年）癸未（みずのとひつじ）、五月の中、慶元（浙江省）の舶裏に在り、倭使頭と説話するの次で（日本の船長と口を利いた際）、一老僧あり来る。年六十許歳、一直に便（即）ち船裏に到り、和客（日本人船客）に問うて、倭椹（椎茸）を討（尋）ね買う。山僧（道元）他（彼）を請して茶を喫せしむ。他の所在を問えば、便ち是れ阿育王山（椹江省寧波の東。宋朝五山の一）の典座なり。云々」

後者は「示して曰く、学道の人、衣食を貪ること勿れ」で始まる第六の三、「昔、一人の僧あり、死して冥途に行く。閻王の曰く、此の人は命分未だ尽きず、返すべしと。冥官曰く、命分尽きずといへども食分すでに尽く。王の曰く、苛葉（蓮の葉）を食せしむべしと。然りしよりその僧蘇りて後、人中の食物食する事を得ず、只苛葉のみを食して残命を保てり。云々」であろうか。

曲の雰囲気は「博奕十王」や「政頼」に似るが、こちらは地獄の飢饉に非ず墜ちて来る罪人数知らずの好況。俗界同様の自堕落に、道元の分身たる椎茸典座が座禅を以て浄化刷新に現われる。

さて、五欲（財・色・飲食・名誉・睡眠）の罪は「金融疑惑」「俺々詐欺」「グルメ狂ひ」などくで地獄は「繁栄しきりで目出度いことでござる」と一畳台上は床几の閻魔王・千五郎に追従の二鬼は正邦・茂、当節の世相鋭く風刺する。そこへ連れて来られた罪人・千三郎、「歯医者に金を貰った覚えはござらぬ」と弁明するが、「書いた物は重宝ぢゃな」と罪状読み上げる閻魔王の得意。「今、舌を抜かれては弁明が出来ませぬ」の泣きごとも、「袖の下数多しと書いてあるではないか」と追求され、更にはそれ疑ひは人間に在り地獄に偽り無きものを、とおちょくられ、「己れの命を自ら喰い尽してしまったのぢゃ」と断罪されても尚、隙を窺い熨斗袋渡そう、の罪人の根性実に天晴れ。水を得た魚、活き活きした千三郎が光る。そこへ幕際から呼掛、笛（正規）のアシラヒでシテ典座・千作、へ菩薩の道を鎮めん、と舞台へ入る。「椎茸は仏道修行の象徴でござる」と典座、「地獄の修行を再度」と改善に乗り出す意気込みは、二鬼の責メに身じろぎもせず、錫杖で跳ね返せば、それを見て閻魔王、棒をおっ取り台を下りて立廻に勢威を示し、典座を責メルが責メ切れず、「久しぶりに責メたのでちと責メ疲れた」と二鬼に介添されて床几に戻る体たらく。「閻魔大王様はこの頃運動不足ではござりませぬか」と危惧する二鬼に、大王の列挙する飲食欲は明石の鯛、蛸、穴子、イタ飯、ワイン、コニャック、アイスクリーム等々。「裁かれる人間と同じ心を持っていてよいものか」と問われゝば、「ズキッ」「ズキッ」と胸に手を当て徹える一党は典座に帰依、「何処までもお供致します」と殊勝。「先づこの椎茸を嗅いで下され」と頭陀袋渡されて閻魔王、「有難い心を養ふには」と問えば、「座禅、只管打坐」の即答、典座は一畳台に上がると早速「合掌しながら静かに歩ませられい」と促し、笛がアシラフ。座着けば坐禅作法は座相を決めるところ、「右へ半分回って」「又、右へ半分回って」に閻魔王、「ワンワン」と吠えるのが可笑しい。気息を整え結跏趺坐の型（写真）、息を「吐いて」「吐いて吐いて」と命じられ一同が前のめりになれば、「これは冗談ぢゃ」と典座。キリは、へ衣食に労することなかれ、へ一切衆生を憐れみて只管打坐を行はば心身脱落疑ひ無し、と地謡（七五三・薫ら）で舞う典座、へ道元禅師の教へを伝受するこそ有難かりけり、と舞上げ、一同笛のアシラヒで入り留。千五郎家三代の芸達者がオーバーアクション気味に繰り広げる時勢風刺狂言の辛辣は、受けを狙う笑いの撰りに関西風のアクの強さがあるが、面白さに如くは無い。（50分・10月8日・第9回千作の芸を見る会・金剛能楽堂）

「二千石」　太郎冠者・千五郎の無断遠出が京内参りと分って彼地の世情知りたさ、許すシテ主・茂だが、流行だと得意気に謡うを聞けば、先祖が戦の恩賞に与り以後封印の謡「二千石」。軽率を咎め、その謂れ長々と語ってのち、粗末にした罰は手討ち、と太刀を抜けば、抜け目無い太郎冠者は亡父を懐しむ主の弱味に付け込み、事毎の所作が大殿様に似る、と怒りを感傷に転化させ、その上、主の持ち物まで貰い受ける図太さ。

（⑥面へつづく）

第9回千作の芸を見る会「椎茸典座・地獄編」前列左より茂山茂・千五郎・正邦・千三郎、台上茂山千作、後列は後見、囃子方、地謡『お豆腐通信21号』より転載

謹賀新年

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703 電話（八三二）一〇三一番
小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内（丸善前）

亀井俊一
忠雄
保雄
実

呉竹会
筧鉱一

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号
谷口有辞
〒520-0221 大津市緑町二四―二〇

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

飯島大輔
〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17 電話（〇七六）二六一―四三四〇

前川光隆
前川光長
名古屋稽古場
〒616-8095 京都市右京区御室芝橋町一の六 名古屋市東区葵二-13-3 ツインクルガーデン801前野舞台 電話九三二―八八〇六番

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-1153 和泉市青葉台2-17-25 電話〇七二五（56）八五二一
名古屋稽古場
名古屋市千種区今池4-15-3 浅井能舞台 電話〇五二（七三二）三七三六

長生会
鬼頭義命
愛知県中島郡平和町城西 電話（〇五六七）㊻一九六〇番

大蔵狂言会
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒177-0045 練馬区石神井台5-22-41-406 電話〇三―三九二〇―六七一七番

茂山
千作
千五郎
七五三
千三郎
正邦
茂
宗彦
逸平

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28 電話〇七五（七〇一）二〇一一番

（⑤面よりつづき）

千五郎年の功をみせれば、茂は独得の剽軽な味。（34分）

「姨捨」 音取置鼓に非ず次第で出る旅人ワキ茂十郎と従者ワキツレ和幸・知登。余光明るく澄み渡る空の下「月のさここそと思ひやる」旅人、余所者とみて声を掛ける面曲見・無紅唐織着流シは年増の里女シテ三千春。互いに身を明かせば、好いところへ来たとばかり「今宵の月の面白からんずらん」と里女。しかし、在の人と知って慮外にも姨捨のこと問う旅人に、里女は古歌を引くと、「あれに見へたる桂の木の」と右ウケ「藤こそ昔の姨捨の」と下を眺め「その亡き跡」と旅人に念を押すかにアシラフ。観月の舞台は一転、月の出前の闇、荒寥の景を地（恭憲・通成ら）が重く静かに謡えば、里女と旅人、再び問答に互いの素姓を質し、更に旅人が月と共に現れるという里女の身元追求すれば中入地は消えるところ、〽帰るとみへて、の返シ句に右へ小さく廻って詰メルと暫時佇立に意味ありげな風情をみせ、〽失せにけり、と橋懸へ。重くれず平明な中にも一入の余情感じさせる前シテである。

里人アイ千五郎、旅人の求めに姨捨山の謂れをしんみり位をもって語り退くと、後シテは面老女・襟白二・白地七宝繋文摺箔着付・白大口・白地枝垂桜蝶楓文長絹の姿、出端（洋一・賀光・正喜・光長）で杖を持ち出るが、しゃんとした気丈な老女の印象。白々とした月光の下に姿を曝す老女、恥しと言い条、何れこの世は夢の世へ月に染みて明かさん、と杖を扇に替え大小前へ。月の興趣は今宵の空の気色、姨捨の月に仮託し、仏の慈悲は弥陀の光明を説くクリ・サシ、何もせず佇立のまま居るのが月光に同化する趣である。続いて仏世界を説くクセは、舞グセに心持を示し、クセ切では月の満ち欠けをカザシて廻るところに象徴、伏せ気味の面に無常観をみせる。

やや間があって〽昔恋しき、と老女、この間（ま）は雑念払拭、純な心に復るまでの緩衝であろうか。序ノ舞は三段、二段目に扇左に取り、正中先で右膝ついて暫時月光を受けた扇面を眺めると、右へ面を外し、再び扇面沁々眺めるが、扇が開き切っていなかったのは聊か情緒を欠く。舞上げ、ワカから地との掛合に、心境は弥増す懐旧、〽返せや返せ、と招いて出るところや、〽偲ばしきは閻浮の、とシオルところに確とみる。シオリ解き、〽夜も既に、とカザシて廻ると扇を再び杖に替えて出、旅人達は橋懸へ退き、〽独り捨てられて、正中佇立の老女は〽姨捨山とぞ、と寂寥の気に包まれて胸杖。返シ句には常座、白々明けの冷気の中、いつしか姨捨山に融け込む老女、囃子の残り留である。一昨年の「檜垣」に続く三千春老女物の好舞台。主後見は永謹。（2時間11分・10月17日・豊嶋弥左衛門廿五年祭追善豊春会・金剛能楽堂）

「富士松」 シテ太郎冠者・友彦の無断遠出を詰責のため訪ねれば、富士詣と分り、富士権現への畏れもあって許す主・融、太郎冠者が持ち帰った富士松を所望するが、預り物とて交換条件ことごと拒絶されれば、連歌を持ち出し、付合成らぬ時は貰い受ける、と勝手に決めて先づは発句。もとより当時の流行、太郎冠者も嗜めば、直ぐ脇（句）を付ける。連歌は連想をもとにして付けなすもの（伊地知鉄男著『連歌の世界』）。

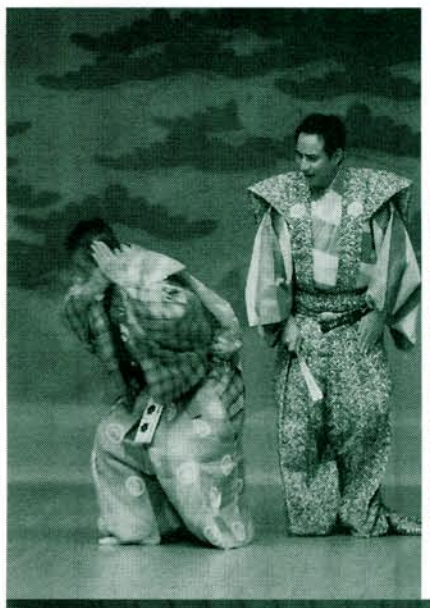
富士松に固執する主は、富士権現の連想から偶々今日が山王（権現）の縁日と思い到り、ビジター（訪問者）の不利は太郎冠者をホームグランド（自宅）から連れ出し、山王への道すがら付合にもっていこうの意図があろう。この場面が味噌と思うが、シテ・アドとも心理の微妙がみえず少々平板、一句を付けるのに忙しない印象である。キリは常套、図に乗る増上慢の太郎冠者を主が叱り留（写真）。（27分）

「柑子俵」 柑子（こうじ）は蜜柑の一種。正月用の柑子の仲買人・祐一、集荷の帰途、背負う俵の異変に気付けば、荷主・靖浩に謀られてすり替えられた、鬼に変装の童・宏貴に脅されることに（写真）。

前払いをされたが、柑子の荷は余所に回してしまい、窮余の策とはいえ我が子を出しに使い、子も亦親の苦境救わんと俵に入る、など一見孝子譚にもみえるが悪いは親、後味はよろしくない。ただ子方の可愛さは別、安貴君健気に勤め結構。蛇足ながら、「好事魔多し」とは此処から……。（18分）

「釣針」 妻を授け給え、と神前に祈願するのは当世でもあること、珍しくもないが、それが正夢で候補者ぞろ〳〵出てくるとなると怖物、正にシュール・リアリズムは超現実世界の面白さ。女性蔑視も別世界のこと、と強引に（?）客観視させるところが狂言の強かなところである。

御自身の奥様は御自身で、と唆す太郎冠者シテ祐一に、「はて、さう言はずとも釣ってくれい」と柄にも無く恥かしがる主アド弘之の初々しさ。若手では出ない味であろう。（34分・10月23日・第37回鳳の会）



鳳の会「富士松」佐藤友彦・佐藤融

鳳の会「柑子俵」井上祐一、米倉宏貴　（杉浦賢次氏撮影）

宝生流「船弁慶」

玉井博祐師 文化賞受賞記念
2月5日 岐阜市文化センター

宝生流シテ方・玉井博祐師は、昨年重要無形文化財能楽（総合認定）保持者として女性で初めて認定を受け、さらにこのたび岐阜市から平成16年度「岐阜ふるさと文化賞」を受賞したことを記念して、岐阜市では演能の機会がほとんどなかったことと、感謝の気持を表して「能への誘い」をテーマに能になじんでもらおうと企画、きたる2月5日岐阜市文化センター（岐阜市金町5－7－2、電話058・262・6200）で能「船弁慶」を上演する。入場無料、十二時三十分開場、一時開演。

主催／玉井博祐、玉兎会
後援／岐阜県教委、岐阜市教委
演組は次のとおり
お話　「能」と親しもう　辰巳満次郎
舞囃子「養老」辰巳満次郎、仕舞「籔」石黒実都、「羽衣」キリ竹内澄子、「笠ノ段」石黒孝
狂言「昆布売」井上祐一、佐藤友彦
能「船弁慶」後ノ出・留ノ伝、シテ玉井博祐、義経・田口将成、ワキ高安勝久、従者・椙元正樹
船頭・井上靖浩
笛・鹿取希世、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村眞之介、太鼓・鬼頭義命
後見・和久荘太郎、佐藤耕司
地謡・馬蝶富四夫、辰巳満次郎ほか。

おおさか・元気 能・狂言

2月25日～27日 NHK大阪ホール

「おおさか・元気・能・狂言」が二月二十五、二十六、二十七の三日間、NHK大阪ホールで開催される。主催は、大阪府、㈶大阪21世紀協会、㈶関西芸術文化協会、NHK大阪放送局。

S席二千円、A席千円、学生五百円。問い合わせは、㈶関西芸術文化協会（06・6943・4567）

能組は次のとおり

◉平成十七年度二月二十五日㈮
午後七時開演
狂言／「附子」野村万斎ほか
能　／「安達原」大西智久ほか

◉二月二十六日㈯　午後二時開演
狂言／「蚊相撲」善竹忠一郎ほか
能　／「葵上」梅若吉之丞ほか
午後六時開演
狂言／「鎌腹」茂山千之丞ほか
能　／「鞍馬天狗」大槻文蔵ほか

◉二月二十七日㈰　午後二時開演
狂言／「寝音曲」茂山千作（人間国宝）
能　／「隅田川」片山九郎右衛門（人間国宝）

各回とも司会者は、生稲晃子（女優）、葛西聖司アナウンサーがつとめる。

会場のNHK大阪ホールは、地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目駅」②番⑨番出口すぐ。

【短信】 能面研究会「面紹社」は第十三回「新春能面展」を一月三十日まで名古屋市鶴舞中央図書館で開催。

謹賀新年

名古屋狂言共同社
井上祐一
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝靖雄
今枝郁雄
鹿島俊裕
鷲見政行
名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3E　井上方
電話052・834・6112

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460－0021
名古屋市中区平和一－二〇－四
野村事務所　気付
電話　052(350)7971
FAX052(350)7972

能楽の友社

喪中につき
年賀欠礼いたします
片山九郎右衛門
清司

鳳の会
林和利
井上祐一
佐藤友彦

ウシマド写真工房
京都市西陣局区内北野上七軒
TEL(〇七五)四六二－一三四一

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五－六－四
電話(二六二)一一八三番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二－八〇二－二
電話(〇五二)八〇五－三三〇一
連絡先　名古屋市緑区鳴海町有松裏40－9
電話(〇五二)六二一－四二三八

〔おことわり〕年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。また1月号の発行が遅れましたことをお詫び致します。

片山慶次郎
伸吾

河村総一郎
河村大
河村眞之介

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年２月～17年３月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）
２月27日　「女郎花」（再）（金春流）　金春安明ほか
３月６日　「藤戸」（観世流）　坂井音重ほか
３月13日　「雲林院」（宝生流）　塚田光太郎ほか
３月20日　「船橋」（観世流）　杉浦元三郎ほか
３月27日　「養老」（再）（観世流）　遠藤六郎ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ　能狂言番組
３月５日　ハイビジョン　９：00～11：15
「ＮＨＫ能楽鑑賞会」
一調一管「五葉蘭曲」　狂言「金津地蔵」和泉流
能「熊野」　シテ梅若六郎
３月19日　教育テレビ　15：00～16：40
「ＮＨＫ能楽鑑賞会」
一調一管「五葉蘭曲」　能「熊野」　シテ梅若六郎

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
（TEL 052－231－0088）

［２月］
20日(日)　名古屋観世九皐会能　（有料）
［３月］
４日(金)　2005年茂山狂言会　（番組①面）（有料）
12日(土)　名古屋能楽堂定例公演　（番組①面）（有料）
20日(日)　第27回邦謡会能　（番組①面）（有料）
28日(月)　名古屋梅若六郎の会　（番組②面）（有料）

◆豊田市能楽堂◆
（TEL 0565－35－8200）

［３月］
５日(土)　豊田市能楽堂特別公演　（番組②面）（有料）

愛知万博の幕開けを祝う

能「谷行」「石橋」
3月5日　豊田市能楽堂 特別公演

豊田市能楽堂では愛知万博開催記念公演の第一弾として、きたる三月五日(土)、豊田市能楽堂で、ワキ方の秘曲、能「谷行」を金剛流宗家・金剛永謹師、松野共憲師らが来演、ワキ方高安流宗家・高安勝久師はじめ一門が出演して上演される。

能組は「谷行」はじめ、狂言・大蔵流「六地蔵」半能「石橋」の演能。

当日は午後一時三十分開場、午後二時開演、入場料（全席指定）正面席六〇〇〇円、脇正面席五〇〇〇円（学生二五〇〇円）中正面席三〇〇〇円。

チケットは、豊田市能楽堂（電話〇五六五・三五・八二〇〇）チケットぴあ（電話〇五七〇・〇二・九九九九）

主催／豊田市・豊田市教育委員会、共催／豊田市文化振興財団（番組②面掲載）

一色神社例祭　奉納能
3月13日　一色町公民館

伊勢市無形民俗文化財に指定されている「一色能」は、平成九年文部大臣より地域文化功労者表彰をうけ、地域の文化の高揚と活性化のため精進しているが、平成十七年の一色神社例祭「奉納能」がきたる三月十三日午前十時から一色町公民館能舞台で催される。

能組は、能「翁」「楊貴妃」「黒塚」狂言「萩大名」舞囃子「清経」「唐船」ほか連吟、連調、仕舞、独鼓など十五番

共催／一色町能楽保存会、一色町自治会

後援／三重県、三重県教委、伊勢市、三重県文化振興事業団、伊勢商工会議所など。

問い合わせ先　一色町能楽保存会＝事務局・伊勢市一色町一六七七番地、電話〇五九六・二二・一七二〇番

横浜能楽堂特別公演
能「恋重荷」狂言「金岡」

横浜能楽堂では〝名作を堪能する特別公演〟として、四月九日(土)観世流・山本順之師が演じる能「恋重荷」和泉流・野村又三郎師による狂言「金岡」を上演する。

「恋重荷」はワキ宝生閑　アイ井上祐一、地頭浅見真州、狂言「金岡」はツレ野村小三郎が出演する。

チケット料金S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、B席六〇〇〇円

チケット取扱い、問い合わせは横浜能楽堂（電話〇四五・二六三・三〇五五）

能楽・鏡座、市民芸術祭賞授賞式

本紙前号既報のように、名古屋市は「市民芸術祭２００４」参加の演劇、音楽、舞踊、伝統芸能の各部門の公演で芸術祭賞を選考、伝統芸能で昨年10月の「鏡座公演」の能「道成寺」が市民芸術祭賞を受賞。去る２月７日授賞式が行われた。同人は味方團、大野誠、後藤嘉津幸、河村眞之介、野村小三郎の五氏（写真）。

二〇〇五年　茂山狂言会

三月四日(金)午後六時三十分開演　名古屋能楽堂

財宝（ざいほう）
祖父　茂山千作
孫甲　茂山茂
孫乙　茂山逸平
孫丙　茂山童司
後見　茂山宗彦　丸石やすし

素袍落（すおうおとし）
太郎冠者　茂山あきら
主人　茂山正邦
叔父　茂山千之丞
後見　茂山千三郎

釣狐（つりぎつね）
伯蔵主（実は狐）　茂山千五郎
氣師　茂山七五三
笛　竹市学
後見　茂山千三郎　松本薫

附祝言

主催　茂山狂言会

［有料］
S席八〇〇〇円、A席五〇〇〇円
B席三〇〇〇円、学生二〇〇〇円
［取扱い］茂山狂言会事務局（電話　〇七五・二二一・八三七一）
チケットぴあ（電話　〇五七〇・〇二・九九八八）

名古屋能楽堂定例公演

三月十二日(土)午後二時開演　名古屋能楽堂

狂言　呂蓮
シテ　旅僧　野村又三郎
アド　男　野村小三郎
アド　妻　松田高義
後見　伴野俊彦

能　藤戸
前シテ　漁師の母　豊嶋三千春
後シテ　漁師の亡霊
ワキ　佐々木盛綱　高安勝久
ワキツレ　従者　椙元正樹
アイ　下人　松田高義
笛　鹿取希世
小鼓　柳原冨司忠
大鼓　河村總一郎
太鼓　鬼頭義命
後見　豊嶋訓三　豊嶋幸洋
地謡　百々康治　谷口雅彦　山口尚志　田中敏文　都丸勇　豊嶋見嗣　竹市幸司　中嶋謙昌
（午後四時頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

入場料　前売一般　三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生前売　二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ　0570・02・9999
市内プレイガイド

第二十七回　邦謡会能

三月二十日(日)十時三十分開演　名古屋能楽堂

素謡　神歌　清沢一政　本田勲
地謡　武田大志　田村砂　須部甫　分林道治　梅田嘉宏　片山伸吾　高砂クセ　松山幸親　今沢美和　高橋暸一　久田勘鬼

仕舞　網之段　外山圭一　古橋正邦　橋本忠樹　蝉丸　上田悟　葵　久田勘鬼

舞囃子　三笑　片山伸吾　片山慶次郎　片山清司　後藤孝一郎　地謡　青木智彦　武田大志　久田勘鬼　分林弘一　小島一英　加藤洋輝　竹市学

仕舞　西王母　橋本忠樹　分林道治　味方玄　地謡　加賀敏彦　清沢一政　武田邦弘　梅田嘉宏

仕舞　経正（キリ）　玉葛　天鼓　善界　祖父江修一　古橋正邦

能　鉢木　青木道喜　梅田邦久　高安勝久　杉江元　椙本正樹　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世　従者　野村又三郎　早打　野村小三郎　後見　武田欣司　片山九郎右衛門　地謡　本田勲　須部甫　清沢一政　武田邦弘　片山清司　祖父江修一　味方玄　古橋正邦

仕舞　老松　泉嘉夫　**小鍛冶**（クセ）　小林慶三　**杜若**（キリ）　分林弘一　**国栖**　武田欣司　地謡　黒田博　青木道喜　橋本保向　青木智彦

狂言　清水　野村又三郎　野村小三郎　後見　伴野俊彦

舞囃子　熊野　片山九郎右衛門　村雨留　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠　地謡　橋本忠樹　分林道治　味方玄　梅田邦久　片山伸吾

仕舞　難波　橋本礒道　**班女**（アト）　橋本保向　**鵜之段**　小島一英　**融**　武田邦弘　地謡　八神孝充　小林慶三　武田欣司　大志

能　猩々乱　梅田嘉宏　飯冨雅介　河村眞之介　後藤嘉津幸　塩見保　松山幸親　加賀敏彦　高橋暸一　後見　梅田邦久　片山清司　地謡　橋本礒道　小林慶三　片山慶次郎　橋本保向　大野誠　上田悟

［入場料］
指定席　八〇〇〇円（正面）
自由席　五〇〇〇円
前売券　邦謡会　〇五二―八四一―四六三二（梅田）
チケットぴあ　〇五二―三二〇―九九九九
市内プレイガイド

主催　邦謡会

名古屋幅下に 藤田舞台完成

笛方藤田流十一世家元 藤田六郎兵衛氏

2月12日 竣工披露の会

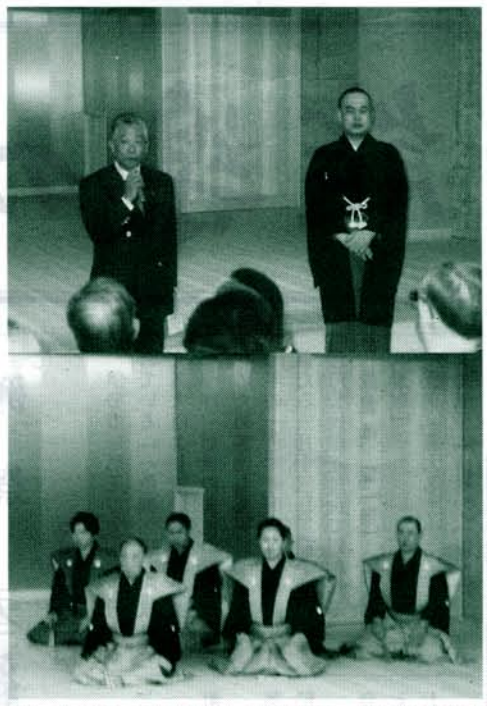
能楽笛方 藤田流十一世家元・藤田六郎兵衛氏は、かねて名古屋市西区幅下の現住地に稽古舞台の建築を進めてきたがこのほど完成。二月十二日、新設の藤田舞台の披露が行われた。

舞台披きは十二時半、藤田・龍吟の会・関戸佳基会長から「藤田家は近衛家につかえ、寛永六年（西暦1629年）尾張藩に仕え以来三百七十余年になる。家元藤田六郎兵衛氏は、昭和三十四年満五歳で初舞台をふみ、名古屋音楽短大を卒業、平成三年無形文化財能楽総合指定保持者認定、平成五年名古屋市民芸術祭大賞受賞、能楽普及のための公演は年間五十回以上、また能公演は年間百回を超える。このたび念願の能の研鑽の場として能舞台が建設され、家元夫妻の思いが実現された。藤田・龍吟の会として、さらなるご活躍を期待したい」とあいさつ。

家元藤田六郎兵衛氏は「藤田流が京都からこの幅下に移り住み四百年近く経つ。始めは姫町、ついで比米町といわれ、いま幅下となっている。その間には明治維新、戦災、道路拡張など諸事情で、それまで在った舞台も手離したりいろいろなことがあったが、このたび念願の稽古舞台が完成の運びとなった。決してきらびやかな舞台ではないが、能の研鑽の場、若手育成の場になればとの思いである。奇しくも十一代目を預かる私の代に舞台竣工の時を迎えるとはこの上ない慶びである。地元のため能楽界のために一層の努力をしていきたい」とお礼のあいさつを述べた。

つづいて完成披露として、素謡「神歌」（翁・片山九郎右衛門、千歳・片山清司、地謡・梅田邦久、赤松禎英、山本博通、武富康之）舞囃子「高砂」（シテ大槻文蔵、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井広忠、太鼓・助川治、地謡・赤松禎英、山本博通、武富康之）素囃子「獅子」（笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井広忠、太鼓・助川治）が上演され、午後一時四十分めでたくおひらきになった。

さらに夜の部として五時半から「神歌」（翁・観世清和、千歳・武田友志、地頭・大槻文蔵）舞囃子「高砂」（シテ武田志房）、囃子「獅子」（笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・山本哲也、太鼓・助川治）が上演され、昼夜にわたる披露会を終了した。



㊤ あいさつする藤田・龍吟の会・関戸佳基会長と藤田六郎兵衛氏
㊦ 舞台披露の「神歌」シテ片山九郎右衛門、千歳・片山清司

能の魅力シリーズ 能「正尊」

3月19日 大槻能楽堂

大阪

大槻能楽堂は三月定例公演を三月十一日（金）上演、六時開演。

能「藤戸」（多久島利之）

能の魅力を探るシリーズは、三月十九日（土）、能「正尊」（観世銕之丞）午後二時開演

入場料金 一般当日四三〇〇円、前売三八〇〇円

大槻能楽堂＝電話〇六・六七六一・八〇五五番。

名古屋 梅若六郎の会

三月二十八日（月）午後六時開演
名古屋能楽堂

新作能 **小野浮舟**
作 馬場あき子
演出・節付 梅若六郎
監修 山崎有一郎

浮舟 梅若六郎
浮舟の母 山本博通
侍女右近 川口晃平
小君 梅若美和音
笛 松田弘之
小鼓 成田達志
大鼓 柿原弘和
後見 赤瀬雅則 山中迂晶
古橋正邦 地謡 山崎正道 梅若晋矢 角当直隆

狂言 **咲嘩**
太郎冠者 野村又三郎
主人 野村小三郎
咲嘩 井上祐一

半能 **石橋**
獅子 梅若六郎
寂昭法師 高安勝久
仙人 野村小三郎
仙人 松田高義
仙人 佐藤融
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 成田達志
大鼓 河村総一郎
太鼓 助川治
後見 梅若晋矢 井上迂晶 赤瀬雅則 地謡 角当直隆 山崎正道 山中迂晶 和幸 古橋正邦 梅田邦久 山本博通

主催 名古屋梅若六郎後援会

〔有料〕SS席一三〇〇〇円、S席一〇〇〇〇円、A席七〇〇〇円、学生席三五〇〇円
〔お問い合わせ申込み〕名古屋梅若六郎後援会（電話〇五二・八三七・〇六九六）
梅若六郎事務所（電話〇三・三三六三・七七一八）
チケットぴあ（電話〇五七〇・〇二・九九九九）

豊田市能楽堂特別公演

三月五日（土）午後二時開演
豊田市能楽堂

〈番組〉

能〈金剛流〉 **谷行**
前シテ 松若の母 松野恭憲
後シテ 伎楽鬼神
後シテ 役行者 金剛永謹
子方 松若 原陸
ワキ 先達 高安勝久
ワキツレ 小先達 飯冨雅介
ワキツレ 小先達 原大
ワキツレ 立衆 杉江元 橋本宰 椙元正樹 小林努 辻本喜代次 杉江淳
アイ 松若家の下人 大蔵吉次郎
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 柳原冨司忠
大鼓 河村総一郎
太鼓 前川光長

狂言〈大蔵流〉 **六地蔵**
シテ すっぱ 大蔵彌太郎
アド 田舎者 大蔵基誠
すっぱ仲間 大蔵千太郎 大蔵教義
後見 宮本昇
ワキ後見 谷田宗二朗
後見 廣田泰能 廣田泰三 松野洋樹
地謡 宇高竜成 今井克紀 豊嶋幸洋 廣田通成 晃嗣幸稔 掛川昭二 種田道一

半能〈金剛流〉 **石橋**
和合連獅子
シテ 親獅子 今井清隆
ツレ 子獅子 廣田泰能
ワキ 寂昭法師 飯冨雅介
後見 廣田幸稔 廣田泰三 豊嶋幸洋
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 柳原冨司忠
大鼓 河村総一郎
太鼓 前川光長
地謡 竹市幸司 豊嶋晃嗣 今井克紀 百々康治 宇高通成 松野洋樹 台後見 宇高竜成 重本昌也 柴田良平 宇高徳成

〔入場料〕正面席六〇〇〇円 脇正面席五〇〇〇円 中正面席三〇〇〇円
〔チケット販売〕豊田市能楽堂（電〇五六五・三五・八二〇〇）
チケットぴあ（〇五七〇・〇二・九九九九）

主催 豊田市 豊田市教育委員会

戦後名古屋能楽史 ㊷

〔第十四章〕 昭和三十五年（一九六〇）

竹尾 邦太郎

（承前）

秋酣の能繁期、十月二日は狂言共同社七十年・狂言と能の会。明治二十四年（一八九一）創立の経緯を同人・歌村彦四郎は『狂言』紙第三十六号（昭和三十五年六月一日刊＝写真）に「共同社結成七十年記念能に際して」と題し、和泉流猿楽狂言記念碑の碑文を紹介のあと、次のように述べている。

宗家山脇元賀が明治九年、次いで十年に早川幸八、翌十一年には山脇得平が相次いで他界し、踵えて十三年には山脇九代目元清が東京に移住という。遺沢寥々将墜地たる和泉流根元の地に、これではと起ち上ったのが得平門下田中庄太郎・角淵新太郎、幸八門下井上菊次郎・伊勢門水、又三郎門の山本文平・河村鍵三郎この他に三橋正太郎氏が加わって創立員となり、明治二十四年六月共同社が組織された。秋風落莫の狂言界に新風を注ぎ狂言の振興に努め維新後宗家其の外師家の装束や面など各所に売却質入れされていたものを漸次回収し之を保存することに努力した。

和泉流の原本たる雲形本・浪形本等も保管されている。殊に数多い狂言面の内には、狸・見徳・狐・うそぶき・福之神・恵比寿・祖父、等の古面、痘面ノ乙・延命冠者等、珍重すべき面も多いのである。之等先覚創立者に感謝し、その卓越せる見識に敬意を表はし、併せて創立七十年を迎える今秋十月二日に全名古屋の各流能楽師範の総参加を得て、盛大なる記念公演が出来ることを心から喜びとするものであります。

当時から見ると此頃の能・狂言の演能の多い事は格段の差でありますが、昔の人々と見劣りのしない芸事を見る事の少ない事も事実ではないだろうか、奮起一番、先覚者にこたえて共同社同人は芸事に邁進すべきであります（顧みて平成の現代、能楽界の様子はどうだろうか）。

番組は舞囃子「養老」内藤泰二、狂言二番「末広」河村丘造「鳴子」野村又三郎、「安宅・勧進帳」柴田初太郎・高安滋郎、狂言「釣狐」佐藤秀雄・河村丘造、狂言小舞「海道下り」歌村彦四郎、狂言「くさびら」井上松次郎、「土蜘蛛・千筋ノ伝」大塚一二。「安宅・勧進帳」の柴田初太郎は還暦祝賀能で初演してをり今回は古希での再演、一世一代の最後、の意気込みで勤めると喧伝される。また「釣狐」は佐藤秀雄の披キ、四十八歳である。なお当日の番組に嘗ては和泉流の抱え主であった尾張徳川家の当代・義親公が「狂言・小謡・小舞の礼賛」の題で次の小文を寄せている。「狂言といえばすぐに大名・太郎冠者・スッパなんか思い出すが、狂言の好さ、面白さは小謡・小舞に格別なものがある。昔は良家の子弟は多く狂言の心得があった。伊藤守松君（先代伊藤次郎左衛門氏）岡谷清次郎君（現岡谷惣助氏）などが遊びに来て、興醒にして、ふと立って小謡・小舞をやる。品がよく、正に座興という文字にぴっ

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

たり当てはまる。それが書院の広間であっても、料亭の小座敷でも、見事であった。あの興趣は何十年かの後にも忘れ得ぬものがある。

小謡も小舞も今は殆んど忘れられている。過日、CBCクラブに和泉保之君を招いて、二三番小舞を演じてもらい、名古屋の智識人といはれる方々に見ていただいたのも、小謡・小舞を再認識され、我が中京に之をひろめたいと思う気持からであった。小謡は短かいのは一分位であろう。而もまとまっているし、ユウモラスで面白くもある。何とかして再び此中京の地で盛にしたいものと願っている。」

十月十五日、掬水青陽会は第四期第二回、「三輪」久田秀雄、「伯母が酒」井上松次郎、「松虫」河村鉦二、仕舞「熊野」柴田初太郎、「船弁慶」橋岡久共。

十月十六日、名古屋能楽倶楽部第九回公演は今回も喜多流を除く四流の社中が研鑽の成果を発表、仕舞十六、舞囃子二十九、独吟二連吟三、一調・狂言・能各一の計五十三番の盛況。能は水藤又吉が秘曲「三輪・白式神神楽」を地頭大槻十三、後見大槻秀夫で勤めたのが注目される。

十月二十二日は田鍋惣太郎舞台六十年・五流道成寺・『小鼓芸話』出版完了記念祝賀乱能である。番組の挨拶には記念となる三つを無事終了したことを感謝し「此の完了の悦びを何か記念したいと思って居りましたが、此度各先輩諸君のおすすめに依りいささか祝賀の催能を致します」とあり、以下のように続ける。

「乱能道成寺は小鼓を初め各役勤めて頂かなくては出来ません。幸ひ喜之氏小鼓お快諾（お先代より幸清流小鼓堪能）他の役も東西楽師皆さんお出勤頂き意外の大会になり悦んで居ります。古来より乱能は各々役一通り出来た方で催す事になって居ります。又道成寺など大曲は各本役勤められし方ならでは出演不可能です。今回のお顔ぶれの乱能は今後当地では一寸六ヶ敷しいと思はれます。定めて私のシテはお目だるいと存じますが、他役は皆お立派です。どうかお懇情にすがり無事勤め得度いと祈って居ります。御光来の程、又御声援を平にお願い申上げます。

右お礼を兼ね御挨拶申上げます。なほ翌日第三十九回名匠能開催、是もお願い申上げます。敬具」

更に番組には昵懇の著名な能評家沼艸雨も「大・乱能」と題し次の祝辞を寄せる。

「近頃何でも〈大〉という文字をつけることが流行していますが、実際はそれにふさわしいものは余りないようです。しかし敢てこの文字を使ったのはこういうのが最もふさわしいと感じたからです。私も三十年来能を見つづけて、乱能も沢山見て来ましたが、乱能で〈道成寺〉ということは見たことは勿論聞いたこともありません。

シテは勿論、各役それぞれ重い習物ですから、そんなに多くの人が専門外のことに通じることが出来るかどうかは大きな冒険なのか実現しなかったものでしょう。田鍋惣太郎氏という人は、人のしないことをやるという恐ろしい執念の人で、その執心がのこってこの〈道成寺〉になったものでしょう。この一番だけでたしかに、大乱能という文字がピッタリとあてはまりましょう。

私は今自分の作った新造語の語感に酔っています」

番組は「枕慈童」藤田六郎兵衛、「三人片輪」観世喜之・小島芳雄・五木田武計・観世武雄、仕舞「通小町」山本敬一郎、「花折」林愿蔵・大塚一二・立衆シテ方九人、「道成寺」田鍋惣太郎(76)ワキ田鍋惣一郎・田鍋洋一・後藤孝一郎、アイ鬼頭八郎・西尾孫太郎、ハヤシ観世武雄・観世喜之・山本勝一・辰己孝、地頭山本敬一郎、後見歌村彦四郎、鐘後見藤田六郎兵衛。

因に『小鼓芸話』は昭和三十三年六月二十日わんや刊、のち昭和四十三年五月二十日、増補版が上梓されるが、その中で田鍋惣太郎は此の乱能道成寺をこう回顧する。「鐘引は藤田・金森(準三)氏で無事鐘入りも出来ました。面を掛けてからサイダーを入れて置いて下さったことを思い出して、伯母ヶ酒の太郎冠者よろしく面を上げて飲みましたのが失敗で、鐘が上ったら全然前が真暗で、終演まで暗中模索の文字通り、とんだお笑い草でした」

また、当地の能評家西田三好は此の年の『能楽タイムズ』紙十二月号に次の感想を寄せている。

田鍋惣太郎が「舞台生活六十年」「五流道成寺」「小鼓芸話」出版完了記念として乱能「道成寺」を舞った。まだなにやらあるようだった。そうそう「道成寺小鼓五十回記念」というのが、自他待望のものだけに、おそらくしばらくのうちにあるに違いない。それまで待ちきれないで、この記念能を先にするのであろうから、催しの好きなこと、おして知るべしだ。

彼が舞台生活六十年記念能を、名古屋は勿論のこと、東京・大阪・京都までのばしていったときの勢いは凄いものであった。

このように日頃、能を催すことが心から好きでたまらない人であるのに、還暦・古稀のような年齢に関係した祝賀能は、いままでやったことも、やるとも一向に聞かないのは不思議だ。年齢のことをいうと、どうも気にさわるから、だれも本人からほんとうの年を聞いた者がないようだ。矍鑠とした精力家であるからこそ、古稀を幾つも過ぎた老体でありながら、好きで選んだ「道成寺」とはいえ、能の世界に初めての乱能「道成寺」をつつがなく舞い終えたのである。

ここでは老いてますます盛んな、そのたくましき催能意欲に敬意を表しておく。

前日の大乱能番組での催主挨拶にある通り、翌二十三日は第三十九回名匠鑑賞能。「弱法師・盲目之舞」梅若六郎、仕舞「二人静」小島芳雄・観世武雄、「井筒・物着」観世喜之、仕舞「熊坂」桜間龍馬、「寝音曲」和泉保之、「黒塚・白頭」本田秀男、ワキ福王茂十郎、大鼓谷口勝三の来演がある。なお「井筒・物着」の小鼓は田鍋惣太郎、前日の乱能「道成寺」と役が入れ替り、それ〳〵本来の役に就くが、シテの観世喜之は「乱拍子に全力を傾注したので、翌日の井筒では腕があがらなくて困りました」と、後日述懐するのを聞いた。

――以下次号――

山本定期能

4月2日　能2番上演

大阪

山本定期能楽会は、四月二日(土)山本能楽堂で定期能を開催する。

能「竹生島」（シテ山本博通、ツレ高橋京子、ワキ福王知登）

狂言「土筆」（茂山忠三郎、善竹忠重）

能「葵上」（シテ今村一夫、ツレ山下麻乃、ワキ中村彌三郎）

仕舞「氷室」（松浦信一郎）、「網之段」（山本章弘）、「西行桜」（山本勝一）、「国栖」（河村栄重）

入場料一般五五〇〇円。

◆酣秋の舞台から（その三）◆

「金剛巌七回忌追善能」と「第廿五回金春会」「観世会」「忠三郎狂言会」「名古屋能楽堂定例公演」「豊田市能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「無布施経」

「此狂言年若にては勤難し」と『狂言不審紙』。成程、世事百般に通じていなければ、を納得。「では勤めませう」と住持シテ千作、扇を無造作にポイと投げ、その手前に坐り誦経を始めるが、ふっと施主・千之丞を振り返ると取り留めのない雑談を暫し。再び何事もなく誦経を続ける、など狎れたもの。この狎れが施主に作用、住持にいつもの布施を出し忘れさせる因、あからさまに布施とは言い出せず、暗示をかけ施主の出方をひたすら見守る住持の、千々に乱れる心はいっそ切ない。よう〳〵布施に気付かせるがここまでの経緯、沽券にも関わると逡巡のうち小細工が露見のバツの悪さ。「ようお出でなされました」と施主に送り出されれば、照れ隠しか、腹を括ったか、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」は如何にも老練、千作・千之丞の練達の舞台。（38分）

「江口・平調返」

シテ永謹、前は襟白二・白地金露芝文摺箔着付・紅白段籠目籬ニ秋草文唐織に面孫次郎の艶麗は姿の美しさ。西行の一首をめぐり、「いやさればこそ」と旅僧ワキ茂十郎にアシラヒ、静かな中にも凛として論駁する態度には由ありげな里女の気品、この気品が羞恥をもって旅僧の前から消えてゆく中入の余情、嫋々とした笛（六郎兵衛）のアシラヒが利く。アイ里人・千三郎の格調高い居語から後場。

旅僧の待謡へ遊女の謡ふ舟遊、と揚幕の裾から舳だけを覗かせると船は一ノ松。緋大口・胴箔地団扇草花文唐織壷折の後シテは、面増女の典麗、辺りを払う風格（写真）である。〈今も遊女の舟遊、で最後に船を出るシテは大小前の床几に（ツレ二人は笛座上に下居）。クセ〈（夕べの風に）誘はれ、で立つと、舞グセは〈六塵の境に迷ひ六根の罪を、と踏む六ツ拍子の象徴性、クセ切には〈見ること聞く事に、で左右するところ〈迷ふ心、をみせる象徴性が印象的。序ノ舞は笛が殊に重い習という平調返、ゆったりと大きく優雅なる舞ぶりは先代譲りの永謹、あくまで品よく美しい。キリは〈思へば仮の宿に、と六ツ拍子からワキへ進み、〈諌めしは我なり、と膝をつく暇乞いの心は、〈（これまでなりや）帰るとて、と立つと、〈即ち普賢菩薩と現れ、とユウケン扇に遊君から一転、位が変る辺り、それと見せ、〈白雲にうち乗り、では音無しの乗込拍子、トメはシテ柱を見て詰メ留めた。ワキツレ浩史・知登、囃子は六郎兵衛・博朗・喜彦、地は三千春・恭憲・清隆・通成ら、主後見に陛一。流儀挙げての、先代宗家追善に相応しい立派な舞台だった。

（2時間1分・10月31日・金剛巌七回忌追善能・金剛能楽堂）

金剛巌七回忌追善能「江口・平調返」左より、廣田幸稔・金剛永謹・種田道一

「西行桜」

隠棲の西行ならワキ勝久は大口に非ずとも、とは思うが名ある僧ゆえか。能力アイ融が花見客ワキツレ雅介らを招じ入れる戸も「さら〳〵〳〵」と開ける引き戸で、山居は粗末な柴垣の枝折戸、開き戸であって欲しいが、これとても狂言特有のオノマトペア（擬音語）の効果考えてのことであろう。紫引廻シ取ると、白垂・金風折烏帽子・襟赤・浅黄地亀甲繋文厚板着付・濃緑大口・白立湧地紋枝垂桜文単狩衣・面皺尉のシテ光洋、端然と床几に居、桜の咎の有無を問う問答に、「さて桜の咎は」とワキにアシラフ辺り、骨っぽさは老桜ノ精の頑な。その己れの頑固も、申し開かんの心は、〈あたら桜の、と作物を出る姿も潔い。その名所を列挙する舞グセから序ノ舞は、無骨に太いといった味をみせ、そこに襟の赤と大口の濃緑に、枯れぬ色が反映、いかにも老桜ノ精の雅致。キリは〈夢は、と立つと六ツ拍子に〈覚めにけり、を具現、少々慌しく思ったが、面白かった。（1時間19分）

「鏡男」

辺土の妻・俊裕へ の土産に求めた鏡という珍しいものがとんだ騒動の因、夫・祐一は予期せぬ展開に為す術を知らない。「あれ〳〵あのわわしい顔で妾を見てゐる」と見知らぬ女の存在に妬心を顕にする妻は「向うたものの顔が写るのぢゃ」の夫の言を聞かばこそ、「もはや堪忍してくれ」「許してくれ許してくれ」と夫は悲鳴。好人物は祐一の柄。草創期のテレビ画面の不思議や驚きも似たようなものであったろう。（19分）

「船弁慶」

シテ静・穂高、前は小面・襟赤・撫子文白摺箔着付・胴箔地籠目ニ菊文唐織の豊麗、柄の大きさはしおらしさよりワキ武蔵坊・雅介の来意素直に受けぬ我(が)の強さ。〈静にこそは、と勧められる盃一顧だにせず、君との別れに〈かき昏れて、とシオルのも我を思わせる。物着に金色烏帽子を着、イロエからクセは上ゲ端あと、〈御身の科の無き由を、で子方義経・飛翔を見込み近付く瞬時、さすがに哀憐の情のよぎるのを見る。中ノ舞から中入は、床几を立つ子方に、烏帽子脱ぐ下居のシテは〈涙に咽ぶ、シオリ。立つとシオリのまま地一杯に常座を過ぎ、シオリ解くと橋懸へ入る。勝ち気な静も、いざ別れとなればその辛さ、この辺り穂高確りみせる。船中は、妖怪の存在いうワキツレ元を咎めるワキの尻馬に乗り、責めるアイ船頭・靖浩の調子のよさ。

後シテは面三日月・鍬型黒頭・襟紺・白地丸文尽厚板着付・青地金波頭文半切・金地紺飛雲文法被（袖折込）・太刀の知盛怨霊。豪快な舞働に勢威を示し、大きなところをみせる。キリは、ワキに〈祈り祈られ、と幕際まで追い詰められ、長刀捨て再び反撃に戻る所、アイは「えい〳〵〳〵」と漕ぎ退ける型、迫るシテは亦ワキに祈り退けられ一ノ松へ、〈跡白波、と膝つくと〈なりにける、と立ちトメ拍子。子方飛翔君、緊張気味だったが名は体を表す、更なる飛躍を。（1時間26分・11月6日・第

（④面へつづく）

（③面よりつづき）

25回金春会）　シテ祥六。後場、

「頼政」　宇治川の激流に馬乗り入れる敵の大軍、強々と踏む数拍子から〈ざっざっと打ち入れて、の勢いは大きく豪快な型、袖捌きの見事。〈此方の岸に、とシテ柱みてすっくと床几を立つのは、〈喚いて上がれば、の吶喊して敵方の上陸する心、一転、〈味方の（勢は）、で再び床几に掛かるも、直ぐ立ち上がるのは、〈我ながら、其処に踏み留まれない無念の老将頼政の心、鮮やかにみせ、〈此処を最期と、と太刀振り下ろすのも（写真）渾身の力。キリは〈扇の芝の、と正面に扇を捨て、常座で袖披キ膝をつき、〈帰るとて、と立って袖返シ右ウケ留拍子。硬骨の偉丈夫の、志を得ず自刃に及ぶ哀感も一入。（1時間18分・11月14日・観世会、他に「茶壷」小三郎、「船弁慶・前後ノ替」文蔵あるも所要で見ず）

「縄綯」　主・千之丞の借金の質（かた）に某・千作方へ遣られるシテ太郎冠者・忠三郎の煮え返る胸中。某に重宝に使われるのを拒むのがせめてもの主への抵抗、何の彼の事毎に出来ないと逆らえば、「あの様な口の強い者は使はれぬ」と抗議に出向く某。固より懐中不如意の主は人質頼り、一勝負で打ち返されたことにし、太郎冠者を一旦戻させ、縄綯も得手なことを某に見せようと企む。ここへ来て主の許で安堵の太郎冠者、ここぞとばかりに喋る某方の悪口雑言、嬉々として止まるところを知らず、の風情。就中、某のお内儀の人物描写は底意地悪い厭味に墜ちず、からりとあっけらかんなところ、いっそ痛快。千作・千之丞を相手に忠三郎持ち味を十二分に発揮して力量をみせる。（38分）

観世会「頼政」関根祥六
（杉浦賢次氏撮影）

「呼声」　無断外出を咎められるだろう、と横着に構えて居る節のあるシテ太郎冠者・良暢、次郎冠者・茂と主・七五三が私宅を訪ねれば、そら来たとばかりに声色で居留守を使う。この対応に触発され、二人は平家節・小歌節・踊り節、とそれぞれに太郎冠者を引っぱり出そうと挑発すれば、太郎冠者もこれに呼応、遂には二人の浮きに浮いた踊り節に踊り出る始末。無邪気で憎めないところ、良暢の持ち味。（18分）

「靱猿・替装束」　福岡・東京・大阪と巡演、毎回、太郎冠者役だけを替え、今回は正邦、固定の配役はシテ大名・忠三郎、猿曳・良暢、小猿・多良みゆき。小書で大名は綾藺笠、射籠手を着ける。

形だけの一礼で相手に有無を言わせず、靱に張る猿皮を要求する大名の専横に、巻添え恐れる太郎冠者が、袖に縋り小猿の助命を哀訴する猿曳を、「ならぬ、くどい」と極め付けるところ、ひやりとする緊迫感。今はこれ迄、と悲嘆に暮れる猿曳をよそに、無心な小猿の可憐は、幼い女児だけに一層涙を誘う。一方、猿曳のクドキを立ち聴き、俄に哀れを催す大名は、鼻詰らせてクドキを反復、弓矢取り落すと、双シオリも大仰だが此処が大名の移り気、「な打つそ、と言へ」と太郎冠者に命じる。キリは猿曳が謝意に勤めさせる小猿の舞、物着に黒地金の丸の剣先烏帽子・殿中羽織を着せれば、興に乗る大名も洞烏帽子・白練・黒地丸文尽下袴（白脚絆デ括ル）の姿になるが、「キャッキャッキャ」と小猿にそばえられるところ、「シッシッ」と追い払って床几に掛った辺りから徒事ではない大名の様子。脂汗に顔面蒼白は眼光も虚ろ、舞台は滞り無く進行するが猿曳・良暢は忠三郎の息、その胸中が思われて気が気でなかった。トメのあと、周囲には切戸からの気配もあったが、それを拒み気丈に後見・耕道の肩を借り橋懸を退いて行く忠三郎、一曲を演じ果せるという役者魂に感動した。幸い脳貧血だけだったようで一両日には回復、舞台へ復帰は御同慶の至り。（35分・11月18日・忠三郎狂言会・京都観世会館）

「鎌腹」　強妻・高義に鎌で追い回され、折好く仲裁人・友彦に出会えば、時の氏神とばかりに暴力を訴えるシテ小三郎、仲裁人を介して鎌と棒を受け取るので、山仕事に行くのを納得したと思いきや、仲裁人を前に鎌で腹を切ると一芝居、女の鼻を明かそうの心算。女は、スタンドプレーで心配に及ばぬとばかり、あれよあれよという間に仲裁人を引っ立てるように連れ去る。腹癒せの鎌腹も止める人のあってこそ、様々に試してみる（写真）が恐い。男の悩みは深刻なのだが、小三郎の明朗快活な資質が、矢張り芝居なのかと思わせるのが妙なのか。（19分）

㊤　名古屋能楽堂定例公演「鎌腹」野村小三郎
㊦　「砧」左より、泉嘉夫・清沢一政
（杉浦賢次氏撮影）

「砧」　シテ嘉夫、前は面深井、ツレ一政の訪れを前、床几に掛かる。怨み辛みの、気が滅入る掛合の雰囲気を受け、シテの胸中を述べる地（邦久・正邦ら）〈げにや偽りの無き世なりせば、で面を上げ、遠くを見る佇まいには、三年の間、夫の帰国を待ち侘びる儚さが滲む。折から砧擣つ音、自らも孤愁慰めん、と物着に床几を立つと、砧ノ段は月の色、風の気色にも募る夫への思慕、心情伝える地謡の名調である。〈悲しみの声虫の音、にシオルと静かに砧の前、ツレと向き合い下居に（写真）〈ほろほろはらはらはらと、擣つシテ、物狂おしく強く打ち据えたと見たのが正に怨みの砧。中入、ツレの介添は二ノ松まで、〈終に空しく、の返シを残しシテが入り、ツレは左ウケてシオリ、返シのあと入る。

後シテは面泥眼・襟白二・白摺箔着付・浅黄大口・白綾壷折・左側頭に付け髪、杖をつく。キリ前、〈夜寒の衣うつつとも、と扇で膝を打ち、〈夢ともせめて、とワキ雅介に詰寄る物凄さに、ワキはぎょっとして思わず安座、合掌するところは、如何にも怖かった。（1時間40分・11月19日・名古屋能楽堂定例公演）

「狸腹鼓」　奥伝秘事一子相伝、曲趣は「釣狐」に似る。戻りのない夫を案じ、尼に化け（写真）尋ねる牝狸シテ又三郎、辺りに気を配り、キッと面切ルと軽やかな獣足、実に若々しい運ビの八十二翁である。「ただならぬ身で」と腹に目を遣り、孕む身を心配するが、左右足下に首を回らせ、化け果せたのを確めると、〈住み馴れし、と道行、牝狸の自信は、又三郎自身の、この曲にかける自信でもあろう。猟師・小三郎との出会いは、殺生戒の、就中、畜類が子孫にまで及ぼす祟りの恐ろしさ熱く説く立シャベリに、猟師が教化されて殺生を思い止まるところ、引き付ける。「この上は殺生を止める」との猟師の言葉に安堵の牝狸だが、別れてからのイヌの啼き声に不審を抱かれ素性が露見、腹の子に同情を誘い命乞いすれば、矢を番えた猟師も不憫に思い、許されることに。この辺り、憎めない可愛い牝狸だが、詐術の巧緻は狡智か、本性現わし慰みに打つ腹鼓で猟師の気を惹き、でんぐり返しなどすれば（又三郎の肉体の柔軟さ！）、それに惹かれて倣う猟師のその隙に、弓矢を取り上げ（写真）、逆に猟師を追い込む牝狸である。因にこの「狸腹鼓」平成十五年秋、二日間に亘る東京やるまい会20回記念公演で披ク。満を持して、と言うべきか、好漢、息小三郎との共演は円熟の舞台だった。なお、東京公演は腹鼓を大小笛で囃すが、三回目の今公演は笛のみ。（30分）

豊田市能楽堂定例公演「狸腹鼓」
㊤　野村又三郎、㊦左より、後見・井上祐一、野村又三郎、野村小三郎、藤田六郎兵衛　（杉浦賢次氏撮影）

「通小町・雨夜ノ伝」　夏安居の僧ワキ茂十郎の許へ木の実爪木を届けるツレ黒女・祥人、市原野辺に住む姥、の詞章通り面深井・襟白浅黄・露芝文白摺箔着付・無紅段唐織・手籠（木ノ葉入）、〈恥かしや、と素姓を暈し、後見座にクツログこと無く、送り笛で中入。

あとは小町の跡を弔う僧に、昔日の若い姿で現れる後ツレ小町ノ亡霊。僧に受戒を願えば、姿は見せず幕内から遮るシテ深草少将ノ怨霊・祥六、〈包めど我も、と出る。小書で出立は指貫・縷狩衣。掛合に二ノ松から〈尾花招かば、と右手で小町を招キ〈止れかし、と詰メルと、〈止るまじ、の反発する心に少将を見遣る小町は、その異形に面背けるかに直ルが、構わず歩を進める少将が〈煩悩の犬となって、と小町を背後から見据えるところ（写真）、鬼気迫る。更に小町との掛合は百夜通いの有様を喚起させ、〈徒跣足、で笠を手にすると、〈涙の雨か、と右へ遠く前方を眺めるところ、一入の感慨は立廻に雨夜の通い路をみせる。笠を両手に眼前へ翳し、とぼとぼと静かに左へ廻る辺りの見事な心象描写である。常座で笠を落し、拾い上げて安座、小書で〈あら暗の夜や、から〈辛からじ、までを省き、〈かやうに心を、となる。〈榻の数々、指折り数え（写真）、あと一夜、〈嬉しやとて、で居立ち、小町へアシラフ歓喜は、笠を掴み立つと正中・〈笠も見苦し、と投げ捨て、〈蓑をも、では脱ぎ捨てる心を上ゲ扇に表し、〈藤袴、と狩衣の上から指貫つまみ上げると、逸る心は前へ、〈すは早、と幕へ見込むところなど昂る気持ちも如実。キリはハネ扇に〈多くの罪を、跳ね飛ばす勢い、少将・小町共に僧へ合掌、〈仏道成りにけり、の返シに少将は右ウケ、勿論拍子は踏まずトメる。親子共演の好舞台は、支えるワキの重みも。（58分・11月20日・豊田市能楽堂定例公演）

豊田市能楽堂定例公演「通小町・雨夜ノ伝」
㊤左より、関根祥六・祥人
㊦関根祥六

尾張徳川家の雛まつり

徳川美術館（名古屋市東区徳川町101）は、2月5日から4月10日まで「尾張徳川家の雛つまり」を出陳。また、京都・人形の寺・宝鏡寺門跡に伝えられた皇室ゆかりの人形を特別公開している。観覧料一般一二〇〇円。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年３月～17年４月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）

３月20日	「船橋」（観世流）	杉浦元三郎ほか
３月27日	「養老」（再）（観世流）	遠藤六郎ほか
４月３日	「西行桜」（観世流）	梅若万三郎ほか
４月10日	「源氏供養」（宝生流）	小林与志郎ほか
４月17日	「頼政」（喜多流）	塩津哲生ほか
４月24日	「山姥」（再）（金春流）	高橋汎ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［３月］

28日(月)	名古屋梅若六郎の会	（有料）

［４月］

２日(土)	狂言ござる乃座公演	（番組①面）（有料）
３日(日)	声・笛～愛を奏でる	（有料）
10日(日)	名古屋・観世会定式能	（番組②面）（有料）
16日(土)	名古屋猶諷会春の大会	（番組②面）（無料）
17日(日)	狂言鳳の会第39回公演	（番組③面）（有料）
24日(日)	久田観正会春の大会	（無料）

［５月］

３日(祝)	豊水会春季大会	（無料）
４日(休)	第９回能楽・鏡座公演	（有料）
15日(日)	狂言やるまい会公演	（有料）

ふるさと狂言の世界
豊田市能楽堂
愛知万博開催記念特別公演

豊田市能楽堂では、愛知万博の幕開けを祝して、前号既報のように、３月５日、豊田市能楽堂で、能「谷行」「石橋」狂言「六地蔵」が上演されたが、愛知万博のテーマ〝自然の叡智〟に関連して、自然やふるさとに題材を得た新作と古典の狂言づくし「ふるさと狂言の世界」と題して、三月から七月まで四回にわたり、万博開催記念特別公演を開催する。

日程および演目は次のとおり。

［第一回］三月二十日（日）午後三時開演

◇新作　謡と舞でつづる狂言ミュージカル「ふるさとの四季」出演・市民参加の皆さん、小笠原匡、萬狂言一同、笛・竹市学、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・加藤洋輝

◇古典名作狂言「不須」太郎冠者・野村小三郎、主・奥津健太郎、次郎冠者・野口隆行、後見・井上靖浩

◇新作　ふるさと狂言「矢作川の主」矢作川の主（鯉）井上祐一、漁師・鹿島俊裕、主の女房・佐藤友彦、主の子供・中島知亮、米倉宏貴、地謡・井上靖浩、今枝靖雄、今枝邦雄、笛・竹市学、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、後見・鷲見政行

［第二回］四月十六日（土）午後二時開演

◇新作　狂言ミュージカル「ふるさとの四季」出演・市民参加の皆さん、野村万禄、萬狂言一同、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝

◇古典名作狂言「二人大名」大名・佐藤融、大名・鹿島俊裕、通行人・佐藤友彦、後見・井上祐一

◇新作　ふるさと狂言「徳阿弥でござる」徳阿弥（松平太郎左衛門源親氏）野村小三郎、みず（松平氏の娘）奥津健太郎、うめ（酒井氏の娘）野口隆行、松平氏（松平郷の主）松田高義、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・野村又三郎

［第三回］六月十八日（土）午前二時開演

◇新作　狂言ミュージカル「ふるさとの四季」出演・市民参加の皆さん、小笠原匡、萬狂言一同、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝

◇古典名作狂言「縄綯」太郎冠者・野村又三郎、主・松田高義、何某・野村又三郎、後見・伴野俊彦

◇新作ふるさと狂言「矢作川の主」矢作川の主（鯉）井上祐一、漁師・佐藤融、漁師・鹿島俊裕、主の女房・佐藤友彦、主の子供・中島知亮、米倉愛

地謡・井上靖浩、今枝靖雄、今枝郁雄、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・鷲見政行

［第四回］七月九日（土）午後二時開演

◇狂言ミュージカル「ふるさとの四季」出演・市民参加の皆さん、野村万禄、萬狂言一同、笛・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・加藤洋輝

◇古典名作狂言「雷」笛・井上靖浩、薬師・井上祐一、地謡・佐藤友彦、鹿島俊裕、今枝郁雄、後見・佐藤融

◇新作ふるさと狂言「徳阿弥でござる」徳阿弥（松平太郎左衛門源親氏）野村小三郎、みず（松平氏の娘）奥津健太郎、うめ（酒井氏の娘）野口隆行、松平氏（松平郷の主）松田高義、笛・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、後見・野村又三郎

［開催要項］会場／豊田市能楽堂、入場料／全席指定、各回二〇〇〇円、学生半額

チケット販売／豊田市能楽堂、チケットぴあ

主催／豊田市・豊田市教育委員会、共催／豊田市文化振興財団

問い合わせ／豊田市能楽堂（0565・35・8200）

文部科学大臣賞
浅見真州氏が受賞
平成16年度芸術選奨

文化庁は三月八日、芸術の各分野で優れた活動をした人に贈る平成十六年度芸術選奨を発表、文部科学大臣賞に演劇部門で、観世流シテ方・浅見真州氏（六二）＝本名真広が受賞した。

受賞対象の演能は、能「松垣」と「松風」

文部科学大臣賞は、演劇、映画、音楽、舞踊、美術など十部門で十九人が選ばれた。

贈呈式は三月十五日、東京・紀尾井町の赤坂プリンスホテルで挙行。

三重県文化功労賞
土谷喜八郎氏受賞
一色町・能楽保存会会長

土谷喜八郎氏

神宮の神領であった神三郡の地に四百有余年の伝統をもつ伊勢「一色能」は、平成九年に文部大臣地域文化功労者表彰を受賞しているが、この一色町能楽保存会会長・土谷喜八郎氏は、永年にわたる一色能の興隆と発展に献身的な努力が認められ、このたび「三重県文化功労賞」を受賞した。

授賞式は三月二十一日、津市羽所町アスト津アストホールで挙行される。

受賞理由は次のとおり。

氏は、約四五〇年の歴史を持つ能保存継承団体である一色町能楽保存会会長として、永年にわたり多数の会員を統率し、保存会を文部大臣により「地域文化功労者表彰」の受賞に導いたことは、氏の人望と指導力によるところが大きく、一色能の今日の興隆を導いてきた功績は多大である。

また三重県内の能楽の普及と文化の振興を図るため「保存会だより」を発行して三重県能楽連盟や伊勢能楽連盟の設立に奔走し、事務局長として県民文化祭や神宮薪能の開催に尽力した。新たに横の連携を深めるため「伊勢の能楽を継承する会」を発足させ、「伊勢の伝統の能楽まつり」を企画、開催するなど各種文化行事に意欲的に参加し、後継者育成にも力を注いでいる。

また一色能が伊勢市無形民俗文化財に、能面、能装束等が三重県の有形文化財に、一色の翁舞が国の選択無形民俗文化財に指定されたことは、氏の文化財に対する理解と調査協力等への献身的な努力によるところが大きく顕著である。

受賞の土谷喜八郎氏は「このたび図らずも文化功労賞受賞の栄に浴しました。これは私一人だけのものではなく、保存会、継承会、会員一同に対してのものであり、大変名誉なことと深く感謝しているところでございます。」と語っている。ちなみに一色の能は、神祭を正月十一日、奉納能を正月二十一日と定め、約四五〇年続いて現在に至っている。

能「西行桜」上演
大槻能楽堂４月公演

大阪

大槻能楽堂は四月定例公演を四月八日（金）上演、午後六時開演

狂言「千鳥」（茂山童司、茂山正邦、茂山あきら）

能「西行桜」（シテ泉嘉夫、ワキ中村彌三郎、笛・杉市和、小鼓・成田達志、大鼓・谷口正喜、太鼓・上田悟、地謡・大槻文蔵ほか）

また自主公演能「能の魅力を探るシリーズ」は四月十七日（日）能「安宅」勧進帳、延年之舞、貝立（シテ浅見真州、ワキ福王茂十郎、アイ・善竹忠重、善竹忠亮、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・荒木賀光、大鼓・河村総一郎、地謡大槻文蔵ほか）

入場料（いずれか一日）当日四三〇〇円、入場券取扱い＝チケットぴあ、大槻能楽堂（TEL06・6761・8055）

篠山春日能
４月９日・能２番

国の重要文化財に指定されている兵庫県・篠山春日神社能楽殿で毎年行われている「篠山春日能」はことし第三十二回を迎え、四月九日（土）開催される。

主催／篠山能実行委員会、篠山市、後援／兵庫県、午前十一時開場、午後一時半開演。

演目は次のとおり。

能（観世流）「忠度」替ノ型（シテ大槻文蔵、ワキ福王茂十郎、間・茂山茂、地謡・斎藤信隆ほか）

狂言（大蔵流）「寝音曲」（シテ茂山千之丞）

能（観世流）「百萬」法楽之舞（シテ片山九郎右衛門、ワキ福王茂十郎、間・茂山千之丞、地謡・片山清司ほか）

観覧料（自由席）一般四千円（当日四千五百円）

問い合わせ／篠山市教育委員会地域文化課（TEL079・552・5792、FAX079・552・8015（チケット受付）

狂言　ござる乃座

四月二日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

素囃子　鞨鼓
笛　竹市　学
小鼓　後藤孝一郎
大鼓　河村眞之介

狂言　清水
太郎冠者　野村　万作
主　深田　博治
後見　竹山　悠樹

狂言　法師ヶ母
二度之翔
夫　野村　萬斎
妻　石田　幸雄
後見　野村　良乍
地謡　野村　万作
野村万之介
深田　博治
高野　和憲
月崎　晴夫

狂言　骨皮
新発意　野村　萬斎
住持　野村万之介
檀家　竹山　悠樹
月崎　晴夫
高野　和憲
後見　野村　良乍

チケット料金
S席　七〇〇〇円、A席　五〇〇〇円
B席　四〇〇〇円、学生席三〇〇〇円
お求めは
チケットぴあ
TEL　0570・02・9999
0570・02・9988（演劇専用番号）
名古屋三越プレイガイド
（052・953・0777）

主催　万作の会
電話03・3997・8778

狂言特別セミナー

鳳の会「仁王について」

狂言「鳳の会」主催による「狂言を10倍楽しむための特別セミナー」は、さる三月五日(土)午後二時から名古屋能楽堂会議室で、「仁王の演出と類型」のテーマで開催され、四十名を超える愛好者、会員が参加、熱心な受講がつづけられた。

講師には、名古屋女子大学・林和利教授、狂言の実技には和泉流狂言師・井上祐一、佐藤友彦の両氏が当たり、人間が仏像に化ける「仏師」「六地蔵」「金津地蔵」などの狂言の類型を解説、熱心な質疑がかわされ、実演とともに、雲形本、虎明本、山本東本、和泉流狂言大成、狂言記などの解説で、興味と関心を高めた。

このセミナーは、毎年行われ、今回で三回目、きたる四月十七日(日)に名古屋能楽堂で鳳の会の公演で「仁王」が上演される。

ナゴヤを〝文化〟する

ANET講座開講

愛知芸術文化協会(ANET)は「元気ナゴヤを〝文化〟する」ANET講座を三月から五週にわたり開講、第一回は、笛方藤田流十一世家元・藤田六郎兵衛師により「咲きほこる伝統～世界無形文化遺産　能・狂言のすべて～」と題して行われた。

第二回以降のスケジュールは次のとおり。(時間午後二時～四時)

［第二回］四月十一日(月)
「名古屋の狂言～習事の在り方～」講師／能楽師狂言方和泉流・野村流当主・十三世野村又三郎師、狂言方和泉流・野村小三郎師

［第三回］五月十六日(月)
「シルクロードの音楽～芸能の源流を探る」藤井知昭氏

［第四回］六月二十日(月)
「琵琶の源流を探る」琵琶奏者北川鶴昇氏

［第五回］七月十一日(月)
「戦後60年、語り継ごう『この子たちの夏』」劇座主宰・天野鎮雄、女優・山田昌

会場＝長円寺会館ホール、入場料一回券千円、愛知芸術文化協会事務局＝名古屋市中区栄2－4－23、長円寺会館内、TEL・FAX052・231・7171

能楽「鏡座」公演

5月4日　名古屋能楽堂

能楽「鏡座」は、既報のように平成十六年度名古屋市民芸術祭賞を受賞したが、この受賞を記念して、来たる五月四日(休)名古屋能楽堂で、第九回能楽「鏡座」公演を行う。演能は、能「石橋」(シテ味方團、ワキ福王和幸)、狂言「金岡」(野村小三郎)、舞囃子「忠度」(辰巳満次郎)

料金S席五千円、A席四千円。三月十四日発売開始（TEL090・7671・8945）

演能記録

菊之会公演

廣田泰能師重文認定祝賀

京都

金剛流・菊之会（廣田泰三師主宰）主催により、廣田泰能師の重要無形文化財認定祝賀公演が三月十三日、京都・金剛能楽堂で開催された。

演能・番組は次のとおり。

舞囃子「乱」廣蓋之弐（シテ金剛永謹）

能「内外詣」（シテ廣田泰能、ツレ廣田幸稔、ワキ宝生欣哉、ワキツレ坂苗融、御厨誠吾、笛・杉市和、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・前川光長

後見・廣田泰三、豊嶋幸洋

地謡・松野恭憲、今井清隆、種田道一、掛川昭二、宇高竜成、今井克紀、豊嶋晃嗣、和田次夫）

名古屋観世会定式能（二回）

四月十日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

能

隅田川
味方　葵
片山慶次郎
後見　飯冨雅介　橋本　宰
地謡　筧　鉱一　後藤孝一郎　竹市　学
後見　片山伸吾　山本順之
地謡　本田　勲　須部　甫　高橋　瞭一　清沢　政一　祖父江修一　武田　邦弘　梅田　邦久　古橋　正邦

狂言

井杭
野村又三郎
松田高義　野村小三郎
後見　伴野　俊彦

仕舞

箙
善知鳥
片山伸吾　山本順之
地謡　梅田　嘉宏　武田　邦弘　小島　一英　久田　勘鷗

能

邯鄲
久田勘吉郎　梅若六郎
杉江　元　高安勝久　橋本　正樹　相元　宰
河村眞之介　柳原富司志
上田　慎也　藤田六郎兵衛
問　野村小三郎
後見　小島　一英　梅田　邦久
地謡　外山　圭一　松山　幸親　加賀　敏彦　梅田　嘉宏　片山　伸吾　久田　勘鷗　山本　順之　古橋　正邦

附祝言

（終了　四時半頃）

主催　名古屋観世会

名古屋　猶諷会春の大会

四月十六日(土)午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡

小袖曽我
母　井野　久子
五郎　水野　友子
十郎　矢田　治子
城　堀田　碩子　孔子　江間　等

仕舞

松風　松林　貞女
富士太鼓　水谷　雅代

独吟

吉野夫人　辻　以美子
熊野　加藤　昌代
班女　松崎　寛子
融　高坂　宏

素謡

鉢木
岡田　晃一　外山　聖子
梅若　修一　梅若　雅一

景清
ヒメ　立花香寿子
トモ　井戸　良祐
神谷　千津
梅若　猶義

仕舞

高砂　小林　正明
敦盛　社本千壽子
野宮　政木美貴子
邯鄲　中村　明美
天鼓　安東　迪子

能楽

井筒
河合　敦子
物着　杉江　元　筧　鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

素謡

遊行柳
細田　俊夫　梅若　善高

能楽

隅田川
安東　迪子
菊池　敏子
飯冨　雅介
椙山　正樹
河村総一郎　福井啓次郎
鹿取　希世

舞囃子

花筐　谷　節子
砧　日下すみ子
源氏供養　河合紀代美
菊慈童　安東　知代

番外舞囃子

善知鳥　梅若　猶義

筧　鉱一　後藤孝一郎
鹿取　希世
藤田六郎兵衛
河合総一郎　福井啓次郎
鹿取　希世
河村総一郎　福井啓次郎
加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
河村総一郎　松久　素子
加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
河村総一郎　福井啓次郎
加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

（終了予定　午後五時頃）

附祝言
（ご来聴歓迎）

主催　名古屋猶諷会

戦後名古屋能楽史 ⑥③

〔第十四章〕

昭和三十五年（一九六〇）

竹尾　邦太郎

（承前）

十月二十七日、文化財保護法施行十周年を記念して国家指定芸能特別鑑賞会が文化財保護委員会の主催のもと、東京歌舞伎座で昼夜二部制で行われ、能楽からは梅若六郎が舞囃子「菊慈童」を勤める。

十月三十日、泉嘉夫の主宰する名古屋壷泉会の学生能楽鑑賞会は「船弁慶」泉嘉夫。

十一月三日、文化勲章受章者、田中耕太郎(69)、岡潔(59)、吉川英治(68)、佐藤春夫(68)四氏の授与式が皇居で行われる。

十一月五日、高名な能評家坂本雪鳥をして「古今に比を見ざる狂言画なり。自ら演じて自ら描く、装束姿態に寸毫の誤りなし。無双の狂言画は、門水を以て止どめをさす」と言わしめた狂言役者にして一代の粋人数寄者、伊勢門水（安政六年二月二十五日生、昭和七年一月十五日没、一八五九－一九三二）の遺稿集『御洒落傳』が嗣子伊勢関水らの手により没後二十八年にして上梓される。菊判・三四五頁・貼り箱、限定五百部、発行者御洒落伝刊行会・代表者名古屋市中区末広町二ノ二水野宇右衛門。書名は御洒落という「オシャラク」組織の中で生まれた様々な遊興、乱痴（稚）気騒ぎの逸話を伝えるところからか。会の発端は「人間万事金の世の中、己が甲斐性の有磯海、深くも業務を勉励して働らく丈けはそれ丈けの駄賃が無くては叶はぬ世界と理に敏き西洋では、倶楽部と云へるを疾くにも設け、時々折々の曜日を定め、衆人相会して各自が好む遊技を為し、命の洗濯、睾丸の皺を延ばす事、衛生保養の緊要なりと、天下晴れての娯楽所の舶来してより、新らしがり屋の社交団体の面々、我れ遅れじものと率先して、何々倶楽部、何倶楽部と各地に流行し始めたのは明治二十年の春頃であった。

茲に我々同気同作の同類共、下地は好きなり御意はよし、我田へ水は方円の器の大小貴賤を問はず、牛は牛連れ鼻突き合せ、馬の合った連中が鼻馬となり、ヨイサ〳〵と雷同して叩く太鼓にドンドン集る其勢五十二三人、コリヤちと船人が多過ると天手古舞津の里へ引揚げ、山住の山の隣に本部を構へ、開部式を挙げたのは、其年の五月下旬であった。

当時名古屋では、倶楽部をクラクブと呼ぶ者が多かったので、其向うを張って愛知洒落部と命名した」とあるように当初は愛知洒落部、これが御洒落会に改まったのには次の経緯がある。

開部からほぼ一年の間に放蕩者の養成所などという風聞がたって、気の弱い部員が次々に脱落、半数にも激減したところ、残留の主流派は「切角のこの面白き集会を断絶させんことを惜しき事とし、余計な御苦労にも、特別の熱心者を誘起して、まず愛知洒落部の名を捨て、上に御の字を冠し、部を会として御洒落会と改めた」、という。

狂言の中の、秀句好きの主人公にもある様な伊勢門水の博学多識、ここには和泉流狂言記や新作狂言、その他オシャラク人銘々伝のような人物月旦なども収録、そこからは当時の世事全般も窺え、貴重な名古屋の芸能史・風俗史ともなってをり、得難い一書である。

門水はまた長年使い古るした禿筆を供養するため、昭和五年七十二歳、古稀自祝をとりやめ、八事大日山に筆塔を建立(写真)するが、そこには狂言綺語を弄した妄語戒からの解脱の意図もあったろうか、如何にも人柄が表われる。

なお、オシャラク人銘々伝の中、「はりまやの菊様」の稿には「本名は井上重兵衛、又の名を浮木、幼名を菊次郎といひ、先祖代々、末広町に住した仏具屋で商売が上手であったが、最う一ツ上手なものは和泉流狂言であった。明治四十五年、東京九段能楽堂の行啓能に出演の光栄もあり、名古屋の産んだ狂言家としては誇ってもよい親爺であった。晩年には多く上京して狂言三昧に遊び、独酌三合して花や月を相手に楽しんで居たが、諺にいふ嵐と村雲に襲はれ、病魔を背負込んで故郷へ帰った。

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

云々」とあり、門水は弔ひの二首「面白く浮世の舞台舞ひ納めの切幕揚げて楽屋入する」「やるまいと人は追へども逃げてゆくとらへてくれい菊次郎冠者」を手向ける。菊次郎・門水ともに和泉流狂言共同社は創立メンバー、四十一年間続いた名古屋朝日狂言会の解消あと、平成元年、改組して「お洒落名匠狂言会」と命名発足したのには、この二人が所属した、狂言の心に通じるお洒落会の在り方を顕彰する思いがあったろう。

十一月六日、名古屋淡交会は橋岡久太郎喜寿祝賀の社中会。番外に「栗焼」野村又三郎、仕舞「三笑」橋岡久太郎・久馬・久共がある。

十一月十二日、やるまい会の第二回公演。「附子」野村万作・万之丞・又三郎、「磁石」茂山千之丞・七五三・正義、「千鳥」野村又三郎・佐藤卯三郎・河村丘造、「月見座頭」茂山七五三・千之丞、トメ狂言の「千切木」は野村万之丞・茂山千之丞・野村万作らで異流共演である。

十一月十九日、当地西川流のために一中節「松風」を作詞、『祇園歌集』では夙に有名な歌人吉井勇(74)死去。歌集『玄冬』では「先達讃歌」として日本芸道の諸先達二十人を挙げ、中に世阿弥元清については「今にして世阿弥を思ふ遅しやと吾をたしなめ花伝書を読む」など六首を詠み、歌集『寒行』では「鑑賞余響」の題で金剛巌「鉢の木」(東本願寺の白砂舞台)、桜間金太郎「弱法師」(大江能楽堂)、梅若万三郎「雨月」(京都観世能楽堂)の全十九首を残す。うち幾首かを紹介する。「風さむし舞台のまへの白砂も佐野のわたりの雪とおもはむ」「見るほどに眼いつしかうるみ来ぬ金剛巌の芸のいみじさ」「寂然とただ坐りゐてもの思ふ俊徳丸はあはれなるかも」「投げ棄てし杖を手探る指さきもなほ語るなり深きかなしみ」「神さびし老びとありて秋ふかき舞台もいつか住の江となる」「皺尉の面に翁烏帽子せるひとゐて舞台いよよもの寂ぶ」　歌人は言う「日本古典の美の神髄は、芸術の上にのみありとこそ思へば、能楽も絵画も演劇も、唯おろそかには見る可からず」と。

十一月二十日、観世会第五回は素謡「井筒」鬼頭五朗、仕舞四番「龍田」杉村竹翠、「清経」殿島修二、「六浦」太田重次郎、「小督」加藤総兵衛、「朝長」梅若六郎、「采女・美奈保ノ伝」山本博之、「狐塚」井上松次郎、「阿漕」大槻十三、大鼓谷口喜代三、地謡藤井久雄の来演。「朝長」の小鼓を勤めた田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』で「梅若六郎氏の朝長は、普通の朝長で却って珍らしくシットリとしたよいお能でした」と回顧する。

十二月十一日、名古屋宝生会定式能は第四期第四回、素謡「井筒」辰巳孝、仕舞三番「大江山」辰巳孝「冨士太鼓」内藤泰二「玉ノ段」倉本雅、「玉葛」畑富次、「昆布売」野村又三郎、「融」野口禄久。

十二月十七日、前年当地観世会第二回で「桜川」のシテを勤めた吉井司郎(64)死去。

十二月十八日、この年の納めの能は能楽協会名古屋支部の世阿弥祭乱能。能「小袖曽我」河村総一郎・後藤孝一郎、舞囃子「屋島」佐藤卯三郎、狂言「末広」田鍋惣太郎・高安滋郎・鬼頭八郎、能「羽衣・和合」藤田六郎兵衛、舞囃子「山姥」鬼頭季信、狂言「不須」林愿蔵・河村鉦二・山田仁三郎、能「望月」田鍋総一郎・筧三男・筧鉱一。

十二月二十日、第十五回芸術祭賞は桜間会公演での「定家」のシテの演技で桜間道雄が受賞する。

暮も押し詰った二十六日、哲学者・文化史家の和辻哲郎が死去。昭和二十五年八月二十九日に発足の文化財保護委員会の専門審議会副会長を勤め、昭和三十年には文化勲章を受賞する。能楽との関連を言えば、その著『埋もれた日本』の中、第三部に「太田正雄君の思い出」と「野上さんのこと」がある。前者に「太田君（木下杢太郎・一八八五－一九四五）は晩年に植物図譜のような形で花の絵をかくことに凝った。逢うと花の話をよくした。その熱心に動かされて、私の庭の土佐水木や木藤の花を大学まで運んで研究室へ届けたこともある。戦争が始まってからであったと思うが、ある日曜日に水道橋の能楽堂へ太田君を誘ったことがあった。廊下のそばの広間で待っていると、太田君は風呂敷包みを片わきにかかえてやって来た。そうして桟敷にはいるとすぐにその包みをあけた。それは植物図譜の花の絵で、何百枚かあった。一々の花の絵がなかなか美しかった。能が始まる前にそれを見始めたのであるが、能が始まっても太田君は舞台の方を見ようとせず、花の絵を一枚一枚めくってくれる。その熱心さに押されて私も舞台の方を見ずに絵を見つづけた。とうとう能は見ずにしまった。能を見てからあとのことにしてもよかったはずであるが、そうできなかったところがおもしろいと思う。（昭和二十五年十一月）」とあり、後者に「野上さん（豊一郎・一八八三－一九五〇）は謡や能楽に対しては実に熱心であった。初めはただ道楽だと思っていたのがいつのまにか専門のようになってしまった。能楽の催しのある日には、出かけて行けばきっと顔が見られたのに、これからはそうでなくなると思うと、まことにさびしい。（昭和二十五年二月）」とある。また『自叙伝の試み』の中、「一高生活の思い出」で、『能の本質とその見方』昭和十五年わんや刊、『能楽三昧』昭和三十三年わんや刊、などの著書がある竹腰健造（一八八八－一九八一）に触れる次の記述がある。「健在な人では今関西の建築界の故老である竹腰健造と三年の時の秋に榛名神社から松井田の方へ抜ける山道を一緒に歩いた覚えがある。竹腰のグループとわたくしたちのグループとが偶然榛名神社のあたりで一緒になって、竹腰の指導に従って近道を歩いたのであったと思う。しかしその時まですでに知り合っていたかどうかは覚えがない」。

筆塔とその除幕式当日の門水夫妻、「御洒落伝」より転載

「御洒落伝」表紙と扉

◆歳晩から早春への舞台◆

「宝生会」と「金剛定期能」「野村家三代披露公演」「久田舜一郎還暦記念松月会能」及び「鳳の会」

竹尾邦太郎

「龍田」 龍田明神詣でに龍田川を徒渡りせんとする旅僧ワキ雅介・宰、錦織りなす流れの紅葉を乱すこと神慮に叶わぬ、と止める巫女シテ愛。問答に気負いもあって初々しいシテ、宮廻りの案内に神域を行くところ、嶺を見上げ、面伏せ川音を聴くのも素直。中入、〽我は真は、とワキに袖アシラヒ、素性明かす辺りは未だ若さの生硬。

後は龍田姫神、クセに小宮を出、クセ切に扇を幣に替えると神楽は直リで再び扇に替え中ノ舞、きび〳〵した舞ぶりが小気味よい。（1時間22分）

「胸突」 借金の取り立てに出向くアド小三郎、自宅に居る強みであれこれ言い抜け返済を渋るシテ高義を、そうはさせじと家から引っぱり出し、揉み合う内につい胸を突く事に。ここぞとばかりシテは肋骨が折れたなどと大仰に騒ぎ立て「人殺し人殺し」と連呼すれば、思わぬ展開にアドはうろたえ、和解に借状を与えてしまう破目に。シテの狡知と一概に言えないのも何方も何方だからだろうが、高義生気溌剌。（15分）

「芦刈」 貧窮から妻ツレ荘太郎と別離、簾にする芦を刈り糊口を凌ぐ日下左衛門シテ満次郎、妻への思い振り払うかのカケリの狂躁から地（正宜・輝和ら）との掛合に、我が身を顧み、〽異浦見れば夕煙、と悔しさ滲ますが（写真）風雅の心は未だ失わぬ風情がよい。妻ノ従者ワキ勝久との問答も悪怯れず、笠ノ段は〽難波女の〳〵、と数拍子、〽此方へざらり、と正先でつと膝を着き、直ぐ立ち舞継ぐと〽ざっと風の上げたる、と笠をスミへ投げクル〳〵と廻すのも鮮やか。その一部始終を見て夫と察し、芦を持って来させるツレに、挟芦の二・三本を抜いて差し出すシテが、ツレと面を合わすや、はったと取り落し、羞恥に一ノ松へ逃げて安座は少々写実に過ぎると思うが、これあって〽今は怨みも波の上、の男舞の晴れやか、喜びに溢れ力強かった。（1時間23分・11月21日・宝生会）

「花月」 シテ通成、白大口に浅黄水衣の姿も清々しい。清水寺門前ノ者アイ薫、唆すように小歌から弓ノ段へと誘ってゆくところ、シテと巧く絡む。〽いで物見せん、と勇み立つシテ、〽よっ引きひゃうと、と番えた矢を放たん、としてアイの口車に乗った迂闊に思い止どまる辺り、柔らかな身のこなしに充実ぶりを見せる。ただカッコになって腰につけた羯鼓の、ぶら〳〵していたのは頂けない。（53分）

「胸突」 掛取りに回る千作、弁舌さわやかに対応するシテ忠三郎に「久しう見ず内に口上が上ったなあ」と感心ばかりもして居られ

宝生会定式能　㊤「龍田」衣斐　愛
㊦「芦刈」辰巳満次郎　（佐藤耕司氏提供）

（④面へつづく）

鳳の会　第39回公演

四月十七日（日）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林　和利

狂言

人を馬　大名　佐藤　友彦　新参者　井上　祐一　太郎冠者　井上　靖浩

伯母ヶ酒　甥　佐藤　友彦　伯母　井上　祐一

仁王　男　井上　祐一　友人　佐藤　融　参詣人　井上　靖浩　〃　今枝　郁雄　〃　林　泰礼　大草履持ち　鹿島　俊裕　参詣人　大野　弘之　〃　今枝　靖雄　〃　村野　守　〃　鷲見　政行

☆演者と語ろう〝Q&A〟

終演後会場で、井上祐一、佐藤友彦を囲んで歓談します。お客さまの狂言に関する疑問・質問に演者が直接お答えします。

主催　鳳の会

〔入場料〕（全席指定）
A席＝五〇〇〇円、B席＝三五〇〇円
学生＝二〇〇〇円
会員A席＝四〇〇〇円、会員B席＝二五〇〇円

チケット取扱い
チケットぴあ（052・320・9999）
井上祐一宅（FAX）（052・834・8607）

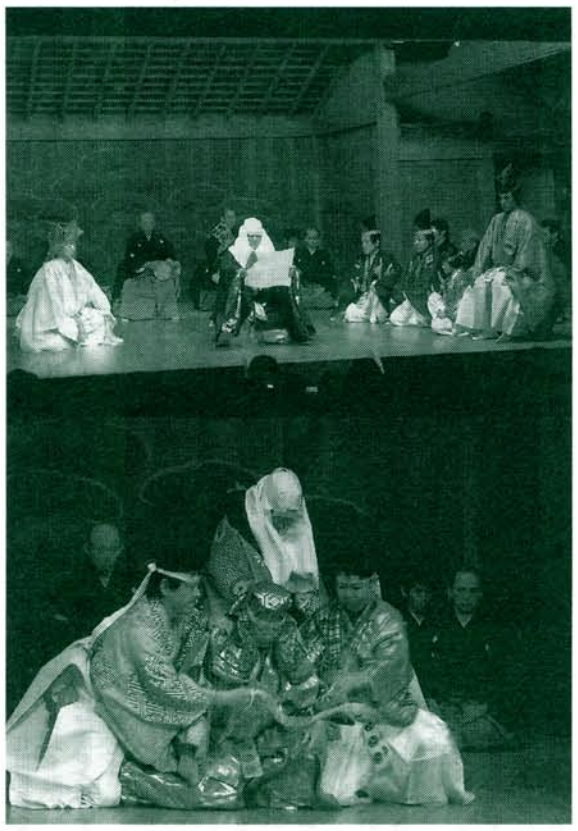
（③面よりつづき）

ず、何の彼のとの言い逃れに業を煮やし「どうあっても連れて帰るは何とぢゃ」と強く出る。されば小競り合いとなり、胸を押されこかされた忠三郎、「千作殿は人殺しぢゃ」と喚けば、「先づ待て先づ待て」と辺りを窺い狼狽する千作。挙句は、まんまとせしめた証文を引き裂き、更に握り固めて千作の前へポイと投げ捨てる勝ち誇った忠三郎、騙されたと知り「南無三宝してやられてしもうた」と慨嘆する千作、老練な両者の攻防は見事の一語。（17分）

「正尊」 観世・宝生・喜多はシテ土佐坊正尊、ワキ弁慶とするが、金剛と金春はシテ弁慶、土佐坊正尊はツレでワキは出ない。従って起請文（神掛けて己れの行為・言説に偽り無きを記した誓紙）も弁慶が読む。

識言で頼朝が義経に差し向けた刺客正尊ツレ三千春を、それと察して弁慶シテ永謹は機先を制し強引に召喚する。引き出される迄の正尊の強かな図太さに、硬骨漢の弁慶の有無を言わさぬ強腰は、屈伏させて上がる意気、へさしも剛なる土佐坊も、と己れを誇れば、正尊もへ土佐坊も、を弁慶と連吟、こちらも己れの剛を弁慶も一応は認めたか、の心、弁慶と正尊の問答は互いに気力充実、惹きつける。義経・龍謹の前に出ては正尊、上洛の真意追求されるも悪怯れることなく、「委しく聞けや武蔵坊」と牽制。真意逸かす苦し紛れの起請文へ書きつけて弁慶にこそ渡しけれ、のところは、両者互いにさりげなく肚を探る気配の無気味。起請文を読む弁慶（写真）、内容吟味するかに抑え気味に噛み締め、朗々と読みすすめるのが素晴らしい。魂胆知られたか、との疑心は、盃と静（子方重本昌之君）の舞にねぎらわれ退出する正尊、一ノ松で義経を見込めば、不審な気配探らんと脇正框へ出る弁慶、その空気を察し幕へ走り込む正尊、中入も面白い。婢アイ正美は一ノ松で立シャベリ、弁慶に正尊方の様子伝えて退くと後場。

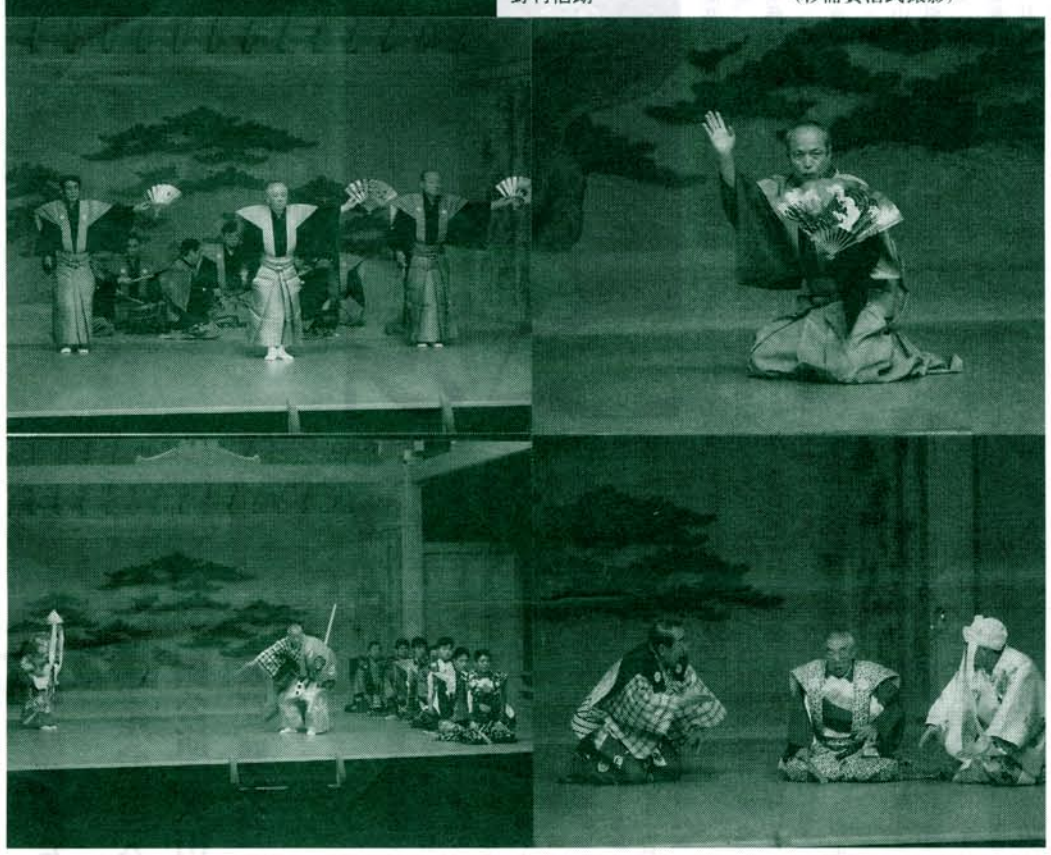
寄手は郎党の幸洋・晃嗣、姉和・洋樹、華々しい斬組は組落シ・でんぐり返り・仏倒れと多彩。キリは馬上を下りる態に三ノ松の床几を立つ正尊、弁慶との一騎打に切り結ぶこと数合、遂に組み合って投げ伏せられ捕縛（写真）される。永謹と三千春、文字通りがっぷり四つに組んだ力演は見応え十分だった。地頭・清隆、主後見・泰三、囃子は市和・正博・喜彦・光長。（1時間、12月19日・金剛定期能・金剛能楽堂）



金剛定期能「正尊」㊧より豊嶋三千春（正尊）、金剛永謹（弁慶）、重本昌也（熊井）、嶋崎暢久（江田）、重本昌之（静）、金剛龍謹（義経）、㊦「正尊」㊧より重本昌也、豊嶋三千春、嶋崎暢久、後ろ金剛永謹

（いずれも原田七寛氏撮影）

野村家三代披露公演
「靱猿」左より野村又三郎、小三郎、松田高義、野村信朗　（杉浦賢治氏撮影）



野村家三代披露公演　㊤㊨「奈須与市語」野村万作、㊤㊧ 狂言舞囃子「三人長者」左より佐藤友彦・井上祐一・大野弘之、㊦㊨「貰聟」左より茂山千五郎・千作・正邦、㊦㊧ 「千切木」左より野村又三郎・野村萬・野村与十郎

（いずれも杉浦賢治氏撮影）

「靱猿」 大名・小三郎、猿曳・又三郎に小猿・信朗は初舞台、又三郎家三代で勤めるめでたさ。開演時になり幕内から小猿の泣き声、宥めるのに時間が掛かり十数分後に始まる。いたいけな小猿は幼いほど結構だが、一旦舞台に出れば無碍の境、幼いの大胆は目付柱一杯に出ること二・三度、転落の恐怖のあろう筈もなく、祖父又三郎の心配は猿皮を剥という大名の無体と重なる。身を挺しても、の孫に寄せる愛情は、如何に頑迷な大名も勝てなかろうと思わせた。太郎冠者は高義。（33分）

「奈須与市語」 万作、手練（てだれ）の技の冴えは、「渚に向ってぞ歩ませける」と颯爽馬を乗り入れる勢い、「十二束三伏」と肩脱ギ弓引き絞る気迫。そして何よりも人物語り分ける語の緩急抑揚の巧み、素晴らしい。（14分）

「三人長者」 長者号を拝領の謂れを互いに語り合い、盃を交わす三人、目出度く連舞（写真）にするキリの部分を上演稀な狂言舞囃子にする。紋服裃姿も清々しい祝言。

「貰聟」 聟・千五郎の酒の上のDV（家庭内暴力）に耐えかねね、子を残し「とと様ござるかござりますか」と親里に逃れる妻・正邦。度々のことでうんざりの父・千作も、此の度は切実と感じ「あの益体も無い人でなしが」と娘を匿う。すると「今日は結構なお天気でござる」などと妻を呼び戻すために空々しくもしれっとして現われ、舅に追従たらたらの聟。負けじと他人行儀な応対に徹する舅、この辺りの駆け引きの機微、味わい深い。極りは「今朝から金法師が母様かか様と呼びまする」の言葉、「さぞさうで御座らう」と反応する声は、居たたまれず父の背後に飛び出す娘。制止する父も遂には金法師をダシの聟のあざとさに負け呆然（写真）。「おのれら両人来年は祭に呼ばぬぞ」の千作のトメが悲痛である。千五郎家直系三代が又三郎家三代に贈る一番。（28分）

「千切木」 口煩いので邪魔者扱いのシテ太郎・萬、連歌講で仲間外れにされて乗り込むが、当家・与十郎以下の面々に踏み付けにされる。聞いて激怒の妻・又三郎にけしかけられ、仕返しに赴く太郎だが居留守を使われ、誰も相手にしない。となれば同行の妻の手前もあり、恰好よい所を見せずばなるまい、とばかりに壮語して虚勢（写真）を張る。満面朱を濺ぐ萬に、又三郎も「お出かしやった、お出かしやった」と打つ相槌だが、ほのぼのとした夫婦愛も、互いに体面を繕う自己満足の虚構の中か……。大勢物のアンサンブルのよさは、要の萬・又三郎の好演。（36分・12月23日・野村家三代披露公演）

「道成寺・赤頭」 シテ寺沢幸祐、小鼓久田陽春子、共に披キというが両人は夫婦と聞く。社中の会で、一方が素人の場合はあり得るかも知れないが、筆者には前代未聞。それかあらぬか、緊張の度合いは見所も同じだろう。

前シテは面近江女・襟白二・浅黄地金鱗箔着付・黒地紋尽縫箔腰巻、壷折の唐織は流儀極りの赤地糸巻枝垂桜観世水文。後シテは面泥般若・赤頭・赤地金鱗箔着付・無紅地山道龍卜雲ノ丸文腰巻。眼目の乱拍子は、「ヤァーッ」と掛ける裂帛の気合に、息をひくと激しい息遣いも「ハッハッ」と聞かれ、男女の肺活量の違いもあろうが正にシテとの死闘の様相。位が進み奔騰する急ノ舞へと懸命に勤めれば、シテも鐘への一途な恨み、三昧に入るかの披キの瑞々しさは、鐘入も躍動する蛇体の化身、きれいに吸い込まれる。鐘が上がると、小書で白練を披キ蹲る後シテはとぐろ巻く蛇体を思わせる。祈りの中、腰を落す低い姿勢から伸び上がり、きり〳〵と巻いてゆく柱巻きのしなやか。キリは走り込み、幕内で飛ぶ。ホッと吐息も出ようかという小鼓陽春子、後見の大倉流宗家源次郎が身じろぎもせず見守る姿に、芸を伝える者の慈愛を見、珍しい夫婦共演の「道成寺」は無事ワキ茂十郎の大きなユウケンで爽やかに終る。（1時間39分・12月26日・久田舜一郎還暦記念松月会能・大阪能楽会館）

「夷大黒」 河内国交野の男・弘之、大黒（友彦）と夷（祐一）を勧請、注連を張り待つところ二神が降臨、それぞれ己が出自・威徳を語り、「さらば宝を」と夷はへ治まる御代のお肴に、の地（靖浩ら）の返シに立って框外に糸を垂れる。へ目出たいを釣り上げたる、れば（写真）、大黒も立って舞い、地の裡に袋と小槌を男に授ける。キリは目出度く二神の連舞、ガッシ留メの息もぴたりと初春に相応しい如何にも長閑な神物である。」（25分）

「柑子」 主・靖雄から預かる珍しい三つ成の柑子を皆食べてしまい、追及されるシテ太郎冠者・融、勿体振って鬼界島は三流人の行方に矛先を逸らし、独り残された後の寛僧都のお涙頂戴の物語にもってゆく。不覚にも貰い泣きの主が最後の一つを求めれば、すでに六波羅（平清盛）が腹の中で最期、のオチ。はぐらかされたと知る主の、遣る方の無い憤りの叱りドメ。話の展開がやゝ忙しなく、話術の旨味が薄いのは芸劫の多寡に因ろう。平板な印象。（12分）

鳳の会「夷大黒」左より佐藤友彦・大野弘之・井上祐一

（杉浦賢治氏撮影）

「寝音曲」 シテ太郎冠者・友彦、主・靖浩の膝枕での小舞謡「大原木」の名調に、起きて居て謡われさうなもの、と主の要求。座って謡えば「こりゃ声が出ませいで咳が出ます」の体たらくに、ならば立って、と求められるが声にならない。「はて合点のゆかぬ、身共を嬲るとみえた。致し様がある」と亦、膝を貸すが、酔いが進行中のシテを巧みに膝で操り、遂に座して謡わせることに成功する。気持ちよく「玉ノ段」を謡うシテは、あろうことかへ父大臣もおはすらん、で立ち上がると舞い出す始末。気分が乗って酔余は「舞入」の戯れ。主の怒声に「こりゃ忘れました。謡ひ直しませうか」と今や謡を誇示、友彦力量をみせる。（29分）

「茸」 簇生する茸に圧倒されて怯む何某・俊裕、窮状をシテ山伏・祐一に訴える。切羽詰った情況の焦りは当然あろうが、少々早口の憾み無きにしも非ず。（20分・1月8日・鳳の会）

［お詫び］ 前号「酣秋の舞台から」の③面、江口・平調返」の写真は、原田七寛氏撮影、提供でした。おわびして補正します。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成17年４月～17年５月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）

４月24日	「山姥」（再）（金春流）	高橋汎ほか
５月１日	「鵜飼」（観世流）	泉　泰孝ほか
５月８日	「八島」（宝生流）	佐野　萌ほか
５月15日	「高砂」（金春流）	金春欣三ほか
５月22日	「井筒」（再）（喜多流）	友枝昭世ほか
５月29日	「鐘の音」「水汲」（和泉流）	野村万蔵ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ

５月28日(土)　14：50～（予定）
仕舞　「高砂」　観世銕之丞
能と歌舞伎による「道成寺」　尾上菊之助ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［４月］
24日(日)　久田観正会春の大会　（無料）（番組①面）

［５月］
１日(日)　邦謡会春の会　（無料）（番組①面）
３日(火)　豊水会春季大会　（無料）（番組①面）
４日(水)　能楽「鏡座」公演　（有料）（番組②面）
８日(日)　翠謡会大会　（無料）（番組②面）
15日(日)　狂言「やるまい会」公演　（有料）（番組②面）
21日(土)　名古屋観世九皐会５月公演（有料）（番組②面）
28日(土)　青陽会定式能　（有料）

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－671－0852）

［４月］
23日(土)　萬狂言名古屋公演　（無料）
24日(日)　幸謡会大会　（無料）（番組②面）
29日(金・祝)　恵美寿会　（無料）（番組②面）
30日(土)　恵美寿会　（無料）（番組③面）

［５月］
15日(日)　下田雄諷会中部地区連合会（無料）（番組③面）
29日(日)　名古屋観衛会大会　（無料）（番組③面）

［６月］
25日(土)　青耀会・江月会記念大会　（無料）

◆豊田市能楽堂◆

（TEL 0565－35－8200）

［５月］
21日(土)　ろうそく能　（有料）

17年度は年６回開催
名古屋能楽堂定例公演

能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛による「名古屋能楽堂定例公演」平成十六年度の開催日程、番組は次のとおりである。

◎六月公演　六月十日（金）午後六時半始
能「阿漕」衣斐正宜（宝生流）
狂言「不須」野村又三郎（和泉流）

◎七月公演　七月八日（金）午後六時半始
能「賀茂」古橋正邦（観世流）
狂言「梟山伏」佐藤融（和泉流）

◎十月公演　十月十四日（金）午後六時半始
能「融・舞返」大槻文蔵（観世流）
狂言「謀生が種」松田高義（和泉流）

◎十一月公演　十一月十九日（土）午後二時始
能「実盛」梅田邦久（観世流）
狂言「泣尼」井上祐一（和泉流）

◎一月公演（正月特別公演）一月三日（火）午後二時始
能「翁」久田勘鷗（観世流）
能「巴」泉嘉夫（観世流）
狂言「二九十八」野村小三郎（和泉流）
舞囃子「絵馬」近藤幸江（観世流）

◎三月公演　三月十一日（土）午後二時始
能「百萬・舞入」長田驍（喜多流）
狂言「伊文字」佐藤友彦（和泉流）

前売り券は各公演の二ヵ月前の十五日から発売、取扱いは、名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）、市内各プレイガイド、チケットぴあ（TEL0570・02・9999）青少年文化センタープレイガイド（TEL052・265・2015）

新支部長に梅田邦久氏
能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部（福井啓次郎支部長）は、このほど総会で任期満了の役員改選を行い、新支部長に梅田邦久氏、副支部長に次の三氏を決定した。（四月一日付）

新役員次のとおり。（敬称略）

【支部長】　梅田邦久（シテ方観世流）

【副支部長】　井上祐一（狂言方和泉流）、久田勘鷗（シテ方観世流）、柳原冨司忠（小鼓方幸清流）

鵜篝能
岐阜護国神社例大祭奉納

岐阜護国神社例大祭の奉納能として毎年行われている「鵜篝能」は、ことし四月八日午後四時から岐阜護国神社神苑能舞台で挙行された。主催は岐阜護国神社、桂会、邦謡会。

能組は、独調「鞍馬天狗」に始まり、囃子「養老」同（金剛流）「小督」、「藤」「右近」「西行桜」「船弁慶」、独調、連調、一調など十五番、キリには能「羽衣・和合之舞」（シテ森崎紀子）が上演された。

なお後援として、岐阜新聞社、岐阜放送、岐阜県、岐阜市、岐阜商工会議所、岐阜青年会議所が協力している。

「能・狂言入門」
ＮＨＫ教育ＴＶ、５月放送

ＮＨＫ教育テレビは、５月の毎週土曜日、日本の伝統芸能『能・狂言鑑賞入門』を放送する。

放送時間は土曜日午後零時三十分から午後一時まで、再放送は火曜日午前五時三十分から午前六時。

◎５月７日（土）「舞台と面と装束と」出演：観世清和、山本東次郎

◎５月14日（土）「能と狂言・謡と囃子とセリフと」出演：観世清和、山本東次郎

◎５月21日（日）「演技と演出・能と狂言の主張」出演：観世清和、山本東次郎

◎５月28日（土）「七百年の伝統と展開と」出演：観世清和、山本東次郎

司会は各回とも水谷彰宏アナウンサー。

久田観正会春の大会

四月二十四日（日）午前十一時始
名古屋能楽堂

連吟　屋島　伊藤　井澤　佐藤　雅敬　隆男
仕舞　富士太鼓　仲山晶子
花月（キリ）　中里三紀子
松風　船橋里美
仕舞　田村（クセ）　水野永男
井筒　伊藤晃義
舞囃子　船弁慶（前）　小田あさ乃
吉野天人　山田和子
素謡　藤戸　前川千鶴子
前川幸子
仕舞　屋島　志賀禮子
笹之段　岡田信道
鐘之段　神谷貞子
舞囃子　定家　神谷功
遊行柳（青柳之舞）　斎藤利子
花筐　田中雅子
素謡　大原御幸（局　内侍　法皇）　仲村スミ　後藤玲子　丸山敏子
村井すみ子　田中信子
求塚　吉田勝巳　渡辺清彦　岡田信道
番外仕舞　女郎花　上田貴弘
舞囃子　邯鄲　金井美晴
船弁慶（後）　大久保由実
羽衣　坪井美紀江
仕舞　野宮　大竹富三江
玉鬘　須賀玲子
番外仕舞　七騎落　久田勘吉郎
鵺　久田勘鷗
（終了予定四時半頃）

［入場無料］

主催　久田観正会
久田勘鷗

邦謡会春の会

五月一日（日）九時二十分始
名古屋能楽堂

番外仕舞　花筐（クセ）　梅田邦久
素謡　遊行柳　佐藤英生　高橋和成　種村とし江　加藤井知子
仕舞　藤（クセ）　二木暉子
井筒　三浦百合子
素謡　西行桜　橋本恒夫　尾藤英郎　松原幸男
隅田川　高橋禧子　上田牧子
仕舞　芭蕉（クセ）　三口謙介
鵜之段　松原幸男
素謡　鸚鵡小町　武藤弘子
溝口乙子
攝侍（鶴松　鷺尾　兼房　義経）　森崎紀子　横山國枝　山下松江　野田ちづ子　遠山美津子
井上苑枝

仕舞　定家　西川喜代子
遊行柳（キリ）　野田博子
西行桜　近藤とき子
素謡　卒都婆小町　田中美子
二木暉子　三浦百合子
道成寺　堀みどり
半田智子　高野千勢子
仕舞　二人静　横山國枝
砧　森崎紀子
素謡　采女　飯島美津代
西川喜代子
恋重荷　箕浦美智代　西沢冨貴枝
野田博子
仕舞　邯鄲（アト）　高野千勢子
百萬（クセ）　井上苑枝
素謡　実盛　田中純一
竹内英雄
独調　弱法師　近藤とき子
柳原冨司忠
能　菊慈童（梅田　嘉宏）　高安勝久
河村眞之介　加藤洋輝
船戸昭弘　藤田六郎兵衛
（終了六時半頃）

［御来場歓迎］

主催　邦謡会
梅田邦久
嘉宏

豊水会春季大会

五月三日（祝日）九時半始
名古屋能楽堂

卒寿記念
素謡　神歌　藤田政信
小島英明
村井筒　鈴木信
中川庄嗣
姥山　佐藤淑子
衣田清子
清水久美子
青木美子
吉野学
舞囃子　高砂　衣田清子
雲林院　加藤洋子
敦盛　竹内千智
菊慈童　清水久美子
歌占　下尾和子
能　忠度（早川　寛）　高安勝久
河村総一郎
福井啓次郎
藤田六郎兵衛
井上祐一
秋山比登美
白井正光
高橋邦充
後見　高橋瞭一
観世喜之
卒寿記念
素謡　砧　服部紗季
堀田喜子
早川寛
川本悠三
恋重荷　今沢三和
藤田政信
観世喜正
舞囃子　巻絹　吉野学
花筐　青木美子
玄象　鈴木信
松風　佐藤淑子
鉄輪　秋山比登美
海士　中川庄嗣
仕舞　玄象　服部航汰
鶴亀　大江尚美
屋島　上井敏郎
通小町　高橋邦充
連吟　賀茂　畑中　上井　川本　山田　栄一　敏郎　悠三　高明
素謡　安達原　宮地俊彦
高木源逸　高橋邦充
附祝言

［入場無料］

主催　豊水会
高橋瞭一

名古屋市民芸術祭賞受賞記念
第9回 能楽「鏡座」公演

五月四日(休)午後一時開演
名古屋能楽堂

舞囃子 忠度　辰巳満次郎
大鼓 河村総一郎　小鼓 後藤孝一郎　笛 藤田六郎兵衛
地謡 和久荘太郎　衣斐正宜　金森秀祥　内藤飛能

狂言 金岡　巨勢金岡　野村小三郎　金岡の妻 奥津健太郎
替装束 後見 伴野俊彦　松田高義　地謡 藤波徹　野村又三郎　野口隆行

能 石橋　味方團　福王和幸
大鼓 河村眞之介　小鼓 後藤嘉津幸　太鼓 前川光範　笛 大野誠
後見 味方玄　林喜右衛門　地謡 梅田嘉宏　深野貴彦　清沢一政　祖父江修一　河村晴道　味方健　梅田邦久　河村和重
間 野村小三郎
台後見 松野浩行　宮本茂樹　河村浩太郎　河村和貴

主催 能楽「鏡座」

[料金](全席指定)
正面S席五〇〇〇円、A席四〇〇〇円
学生券三〇〇〇円
[チケット問合わせ]
能楽鏡座（TEL090・7671・8945）
チケットぴあ（TEL0570・02・9999）

翠謡会大会

五月八日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

素謡 清経　鈴村満枝　日野大順　吉田勤也
仕舞 三輪　栗田あき子
巻絹　鈴村満枝
江口　葛西和子
花筐　松井澄子
冨士太鼓　篠田恵子
素謡 班女　篠田維久子　田中幸　吉田せい子
仕舞 難波　澤田美智子
鞍馬天狗　吉田勤也
東北　中者輝治
松虫　日野大順
大江山　渡辺錠一
舞囃子 胡蝶　吉田せい子　百万　服部裕子
玄象　木村秀子
素謡 天鼓　渡辺錠一　中者輝治
附祝言

主催 翠謡会
名古屋市中区新栄三―二〇―二七―一三一五
電話（〇五二）二五一―〇七八一
生駒里翠
後援 中日文化センター
教室 名古屋(栄)・岐阜・四日市

[御来場歓迎]

第48回 狂言やるまい会名古屋公演

五月十五日(日)午後一時三十分始
名古屋能楽堂

舞囃子 頼政　久田勘鶴
笛 竹市学　小鼓 福井啓次郎　大鼓 河村総一郎
地謡 高橋瞭一　祖父江修一　上田貴弘　清沢一政

戦後名古屋能楽史 ⑥④
〔第十五章〕竹尾邦太郎
昭和三十六年（一九六一）

正月二日、非公開ではあるが幸清流小鼓方田鍋惣太郎宅での恒例の打初が五十一回目を迎える。逆算すれば明治四十三年（一九一〇）惣太郎二十六歳の時が初回になろうか。「翁」に始まる居獅子は「高砂」「田村」「羽衣」「鶴亀」「胡蝶」「石橋」と概ね固定されている。打初は楽器一つなら初鼓・初大鼓などとも言い、能を舞い新作能もある高浜虚子に「打初や葛野九郎兵衛こゝにあり」の句がある。三日はこれも非公開で恒例の能楽協会名古屋支部の新年謡初式。江戸時代、正月三日の夜、殿中または町家で行った謡初の式を松囃子と言った、と歳時記にあり、国文学者にして著名な能評家坂元雪鳥（一八七九―一九三八）は「謡初妻に鼓を打たせつつ」と詠む。

一月八日、名古屋学生能楽連盟主催による第五回学生能と狂言の会。名大・愛大・県女大・椙山女大・南山大・市短大・金城短大の外に遠来の中央大・金沢大、それに椙山女学園高校が参加。

一月十四日、福王流の野島信が死去。当地へは戦時中、観世九皐会に同道、以下のワキを勤める。昭和十六年四月十三日、観世清之三十三回忌・初代観世喜之一周忌追善能で「道成寺・中ノ段数躾・舞躾ノ崩・赤頭・替装束」観世喜之、同年十一月九日に九皐会名古屋支部主催で「俊寛・落葉ノ伝」観世銕之丞と「土蜘蛛・入違ノ伝」観世喜之。昭和十七年四月五日、九皐会名古屋支部による観世喜之三回忌追善能に「安宅・勧進帳・瀧流・貝立」観世喜之、同年十一月八日、九皐会名古屋支部（第二期第一回）で「松風・見留」「恋重荷」観世喜之（この日、喜之は「通小町・雨夜ノ伝」も勤め独演三番能だった）、舞台は全て昭和六年竣工の布池町名古屋能楽堂。以後、来名は無く、戦後はようやく昭和三十一年十月六日、前年に新設成った熱田神宮能楽殿での第二回中日五流能の「三輪・白式神神楽」観世元正のワキで十四年ぶりに姿を見せ、翌三十二年五月三日の第三十回名匠鑑賞能が当地最後の舞台となり「湯谷」喜多実、「道成寺」喜多長世、の二番を勤めた。享年六十四歳（一八九六―一九六一）。

一月十五日、名古清韻会創立四十周年記念能は午前の第一部・社中会に続き午後は第二部。催主大槻十三は番組冒頭に次の挨拶をする。清韻会能に際しましてはいつも乍ら格別の御厚情を賜りありがたく厚く御礼を申し上げます。偖而名古屋清韻会こと茲に四十周

（③面へつづく）

名古屋観世九皐会 五月公演

五月二十一日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

狂言 通円　通円の霊 野村又三郎　旅僧 井上祐一　所の者 井上靖浩　地謡 野口隆行　野村小三郎　奥津健太郎
狂言 鈍太郎　鈍太郎 茂山忠三郎　下京の妻 安東伸元　上京の妻 茂山良暢　後見 山口耕道
狂言 骨皮　新発意 野村小三郎　住侍 野村又三郎　傘借り 奥津健太郎　馬借り 野口隆行　斎の案内 松田高義　後見 伴野俊彦
入場料＝A席六五〇〇円（正面指定席・当日七五〇〇円）
B席五〇〇〇円（当日六〇〇〇円）
申込み＝野村事務所　受付専用電話090・4402・8999
電子チケットぴあ　電話0570・02・9999

知章　観世喜正
仕舞 杜若　外山圭一　地謡 高橋瞭一　中森貫太　駒瀬直也　奥川恒治
舎利　小島英明　長沼範夫

能 熊野　坂中所真太郎　宜夫　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
後見 長沼範夫　観世喜之　地謡 外山圭一　小島英明　高橋瞭一　奥川恒治　中森貫太　小林喜久　五木田三郎　観世喜正
狂言 鎌腹　井上祐一　井上靖浩　佐藤友彦　後見 鹿島俊裕
仕舞 邯鄲　高橋瞭一　小島英明　長沼範夫　観世喜正
梅枝　観世喜之　地謡 長沼範夫　観世喜正　奥川恒治
鵜之段　五木田三郎

能 鵜　駒瀬直也　高安勝久　笠鉱一　福井啓次郎　加藤洋輝　大野誠
間 佐藤融
後見 小林喜久　五木田三郎　地謡 外山圭一　坂真太郎　小島英明　奥川恒治　中森貫太　長沼範夫　観世喜正　中所宜夫

附祝言

主催 名古屋観世九皐会
名古屋事務所
名古屋市守山区八剣2―1913
電話052・798・9302

全自由席
三枚セット券　一三五〇〇円
一回券　五〇〇〇円
学生券　二〇〇〇円

熱田神宮能楽殿催能

幸謡会

四月二十四日(日)十一時始
熱田神宮能楽殿

仕舞 道明寺　柿木園子　東北キリ　石河フサ子
養老　小林俊雄
井筒　芝崎恭子　敦盛キリ　瓜生恭子
素謡 巻絹　近藤阪野幸子　大江山　三浦美由紀
熊野　瓜生恭子　湯朝美智子　村井邦子
通小町　高取良昌　石川誠司　芝崎恭子　田代妙子
舞囃子 班女　田代妙子　小林俊雄
船辨慶　吉房徳二
素謡 恋重荷　小野内喜春子　青木朋子　近藤幸江
舞囃子 玉鬘　百瀬永三子
融　鈴木寿太郎　善知鳥　近藤幸子
仕舞 老松　青木朋子　田村　酒井照子
蝉丸　小野内喜春子　百萬　高取良昌
番外仕舞 笠之段　近藤幸江　玉之段　大槻文蔵
舞囃子 杜若　宇野順子　唐船　石川晴子
自然居士　村井邦子

能 弱法師　田中米子　飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠
間 野村小三郎
後見 武富康之　大槻文蔵　地謡 宇野順子　石川晴子　加藤春枝　三村恵子　前野郁子　森寿子　近藤幸江　塩谷恵
（終了予定五時半頃）

附祝言

幸謡会
近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一―三
TEL（〇五六四）二一―二五二九

[御来場歓迎]

第十三回 恵美寿会

四月二十九日(金・祝)・四月三十日(土)
熱田神宮能楽殿
一日目（四月二十九日　午前十時始）

仕舞 難波　衣斐正宜
芭蕉キリ　金児晶子
能 清経　大島田鶴江　小坂絢子　橋本宰　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠
素謡 「千手」「安宅」「隅田川」「海人」「国栖」
仕舞 「通小町」「春日龍神」「鶴亀」「田村」
「羽衣」「嵐山」「歌占」
舞囃子 「邯鄲」「右近」「紅葉狩」「羽衣」「遊行柳」
独吟 「隅田川」
能 俊寛　平田正文　中島暉夫　竹内淳一　飯冨雅介　笠鉱一　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

年を迎えますに当り記念能を相催したく此の機会に諸先輩を差し置き時期尚早とは存じますが、殿島修二に「道成寺」を披曲させ、亦不肖幸ひに健康も回復致しましたので今一度「安宅」を演じ度何卒御高覧の程偏へに懇願申上げます。

番組は仕舞四番「嵐山」上田新太郎「花月」里井順次郎「井筒」河村鉦二「善界」久田秀雄、連吟「鐘ノ段」鬼頭五朗・増田一雄、このあと更に仕舞五番「半蔀」岡田光紘「屋島」水田博「草子洗小町」杉村竹翠「花筐」塚本秀雄「善知鳥」吉村直之、能「安宅・勧進帳・瀧流ノ伝」大槻十三・福王茂十郎、独吟「隅田川」林愿蔵、一調「杜若」鬼頭八郎・加藤良久、素謡「藤戸」観世喜之、仕舞二番「実盛」宇治正夫「山姥」柴田初太郎、舞囃子「熊坂」大槻秀夫、狂言「武悪」茂山千之丞・七五三・佐々木千吉、能「道成寺」殿島修二(61)、ワキ高安滋郎(46)、小鼓田鍋惣一郎(54)、鐘後見観世喜之(59)。

一月二十二日、宝生会定式能は第五期第一回。囃子「翁」宝生九郎・辰巳孝、仕舞三番「八島」倉本雅「東北」内藤泰二「鞍馬天狗」辰巳孝、能「西王母」畑富次、「夷昆沙門」井上松次郎、能「盛久」宝生九郎。

一月二十四日、名人と謳われた葛野流大鼓方川崎九淵死去、享年八十六歳。当地へは本名・利吉時代の大正四年（一九一五）五月二十九日・三十日の両日、田鍋惣太郎主催式能が初来演。初日に「正尊・起請文」片山九郎右衛門、「望月」野口政吉、の二番、二日目には「道成寺」観世元滋、「乱・和合」松本長・野口政吉、の二番を勤める。当時四十一歳。八年後の大正十二年四月三日・四日には能楽協会催能の初日に「湯谷」喜多六平太、二日目「井筒・物着」松本長を、十四年三月二十二日の霞会・歓声会共催能では「道成寺」桜間金太郎を勤める。昭和に入っては十二年五月、二日間に亘り行われた田鍋惣太郎の先考常照院十三回忌追善能初日の二十二日、「朝長・懺法」梅若万三郎（太鼓金春惣右衛門）を、十五年九月二十八日は庚辰会で「景清・松門音取」野口兼資を勤めている。戦後は九淵を名乗ってからの昭和二十四年十月に岐阜、翌二十五年六月には四日市への来演があるのみ、善部合せても十指に満たない来名だが、当地以外にも度々共演した田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』の中、「故人の想い出」の項で次のように述べる。

非常に研究的で、アシラヒ一つでも、謡がどうなって、どうおさまるかをよく聴きわけて、手を工夫されてみえました。京都へ行かれて、金剛の求塚が出た時、氏は金剛についてが少なかったので、懐に金剛の謡本を持って来て、その時の地頭、種田氏に、どうだどうだと委しく問いただされるので、種田氏が困って二階へ逃げるようにして行かれたようなこともありました。万三郎氏の朝長懺法の時、後シテが謡出してからの位がちがうといって、いつまでもクドクドと言って居られました。得心がゆかなかったらしいが、おそらく万三郎氏としては、懺法はもう済んで、後シテは若い公達だからと、例の朗々たる調子で謡われたのでしょう。やはり、九淵氏といえども、弟子家上りですから、家柄の人には、あまりずけずけ言えない所があり、陰でボソボソ言う所があったようでした。先代惣右衛門氏が、一度万さんに話してみる、とは言ってみえたが、この件がその後お二人の間に解決されたかどうかは存じません。ともかくも、疎開中、関西の楽師に、よい勉強の機会を与えられた点、吉見・亀井両氏を指導されたことなど、何と言っても立派な業績を残されたものです。

九淵は昭和二十一年八月、疎開先の秋田から京都へ転居するのを機に利吉を改名、二十五年九月まで京都に居住するが、息女・勝子が亡父一周忌に臨み、遺稿と折々の言葉とを編んだ小冊子『おもかげ九淵閑話』には「京都にて」の二十四句も収録、その中に如何にも大鼓方らしい次の二句がある。「悴むや荷造り悩む革の数」「調子冴えず卯の花腐し大つづみ」。

月が替り二月十二日、観世会初回は素謡「神歌」林愿蔵・高野瀬透、舞囃子「弓八幡」柴田初太郎、能「箙」観世元昭、仕舞「玉ノ段」山本博之、能「杜若」観世元正、「鶯」佐藤卯三郎、能二番「小袖曽我」山階信弘・武田太加志、「猩々」橋岡久馬。

二月二十三日、予て懸案の和泉流宗家の後援と当地狂言の育成発展を計る名古屋和泉会が発会。小舞を殊の外愛好する徳川義親を会長に戴き、栄町中区役所ホールを会場に発会式をかね狂言小舞の会を催す。会長挨拶に続き和泉流宗家保之の「狂言と小舞について」の話のあと、宗家の「奈須与市語」を挟み小舞九番がある。「貝づくし」佐藤秀雄、「番匠屋」河村丘造、「名取川」佐藤卯三郎、「鐘の音」井上松次郎、「宇治の晒」佐藤秀雄、「小原木」河村丘造、「石河藤五郎」佐藤卯三郎、「七ツ子」井上松次郎、「田植」和泉保之。会の賛助者として次の名士が名を列ねる。伊藤次郎左衛門・岡谷惣助・松坂佐一・高木市之助・西川長吉、東京から信貴英蔵・尾山和男・湯沢三千男・畠山一清・川瀬一馬。『狂言』紙の第42号に「狂言小舞と初期歌舞伎」と題する服部幸雄（演劇研究家）の論考がある。

三月十九日、第四十回名匠鑑賞能は宝生流大会。「蝉丸」野口禄久・辰巳孝、「草子洗」宝生九郎、「入間川」野村又三郎、「黒塚・白頭」宝生英雄、金沢から葛野流大鼓方飯島佐六の来演があり、宝生宗家の「草子洗」は当地初という。

三月二十一日、第三回やるまい会は野村又三郎家三百五十年祖先祭・先代又三郎信英十七回忌追善。番組は能「千手・郢曲ノ舞」観世喜之・梅若猶義、狂言二番「二千石」茂山千五郎「吃り」佐藤卯三郎、仕舞四番「敦盛」杉村竹翠「蝉丸」河村鉦二「天鼓」塚本秀雄「鞍馬天狗」殿島修二、狂言「宗論」野村又三郎・河村丘造、舞囃子「唐船」橋岡久太郎、狂言「腰祈」三宅藤九郎、連吟「鐘ノ段」鬼頭五朗・増田一雄、独吟「江口」林愿蔵、仕舞四番「清経」小島芳雄「柏崎」柴田初太郎「阿漕」橋岡久共「鵜飼」観世武雄、狂言「子盗人」茂山弥五郎、「武悪」野村万蔵・又三郎・万作、能「融・クツロギ」大槻十三と九皐会・淡交会・清韻会・梅猶会の観世流各派の出演も多彩。

三月二十六日は掬水青陽会の第四期第三回。素謡「通小町」竹内六郎、「竹生島」加藤丈太郎、仕舞三番「田村」佐藤太俊「笹ノ段」柴田収武「小鍛冶」河村鉦二、「東北」塚本秀雄、仕舞「藤戸」柴田初太郎、「酢薑」大野弘之、「鵺」観世武雄。

（次号につづく）

廣田鑑賞会能

5月8日　能「砧」上演

京都

金剛流・廣田鑑賞会能は、五月八日（日）京都・金剛能楽堂で催される。午後一時三十分始。

能組は、狂言「筑紫奥」シテ野村万蔵。

能「砧」シテ廣田幸稔、ツレ豊嶋晃嗣、ワキ宝生欣哉、間・野村万蔵。

解説／聖母女学院短期大学・藤岡道子教授。

入場料／一般券八千円、学生券三千円。

チケット販売／ローソンチケット（Lコード52680）、金剛能楽堂（075・441・7222）、廣田鑑賞会（075・722・9123）など。

椿大神社春季大祭
神事能「鈿女」

4月11日　金剛宗家ら上演

三重県鈴鹿に鎮座する椿大神社では、毎年四月十一日春季大祭に際し、神事能として金剛流により奉納されてきているが、ことしも当日御神殿で能「鈿女」（うずめ）が奉納された。

当日の出演は次のとおり。

シテ金剛永謹、ワキ原大、笛・森田光廣、小鼓・森田尚靖、大鼓・井林清一、太鼓・前川光長、間・松本薫

後援／伝統芸能懇話会、協賛／金剛流宗家

（②面　恵美寿会番組つづき）

二日目（四月三十日　午前十時始）

仕舞　八島　衣斐　愛
松風　竹内喜代香

素謡「烏帽子折」「俊成忠度」「千手」

仕舞「羽衣」「藤」「是界」「六浦」「誓願寺」「実盛」「三山」「阿漕」

舞囃子「三輪」「雲雀山」山本あけみ

能　巴　高安　勝久　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取　希世　問　井上　靖浩

仕舞「善知鳥」「藤戸」「葛城」

舞囃子「采女」「放下僧」「邯鄲」

素謡「杜若」

能　梅枝　鈴木マチコ　飯冨　雅介　杉江　元　佐藤　融　問　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

附祝言

主催　恵美寿会　衣斐正宜

〒466-0051　名古屋市昭和区御器所三―二十三―十九　御器所パークマンション八〇二　TEL・FAX　〇五二―八八二―五六〇〇

［入場無料］

下田雄諷会
中部地区連合大会

五月十五日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

小謡　竹生島　渡辺　励一

連吟　巴　小西　綾子　黒宮　一子　沢田　幸江

忠度　長谷川満二　大島　公和　鈴木　照之　不破　喜久夫　森　恒夫　加藤　寿夫　馬　康裕

小袖曽我　岩佐　和信　吉田　義治　山腰　浩一　夏原　俊之　村瀬　正光　出町　巽　黒宮　義輝　小西　武久

舞囃子　胡蝶　浅井　広子

仕舞　敦盛　徳原　良子　玉鬘　徳原　涼子　浮舟　今井　実子　夕顔　中川富美子

連吟　景清　菅野　金太郎　重山　照夫　柿本　太久治　岩島　勇雄

仕舞　桜川　武居　フミ　羽衣　村田　園　難波　村田　雄三郎　柏崎　山本ひろ恵　須磨源氏　館林　欣一郎

舞囃子　花筐　杉山　蒼生子　唐船　武川　澪子

連吟　野守　西村　八州郎　山本　嶄　大藪　三郎　杉山　且芳　竹中　宏　出町　巽　黒宮　義輝　杉山　貞夫

仕舞　隅田川　坂野　儀子　鵜之段　加藤　順子

舞囃子　清経　高田　義子　七騎落　黒宮　義輝

高砂　小西　武久

［御来場歓迎］

（担当）一宮竹石会　岐阜花諷会　下呂雄諷会　倭文之屋社中　徳山雄諷会　名古屋和諷会

連絡所　〒五一一―〇八五一　桑名市西別所一二〇〇―二九九　浅田　宏　電話（〇五九四）二一―六八四六

名古屋観衇会番組

五月二十九日（日）午前十一時半始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞　経正　林本　大　東北　前田　和子　芦刈　松浦　信夫　車僧　山下　麻乃

仕舞　玉鬘　榊原　和美　三輪　湯浅　知子　菊慈童　秦野　淳代

舞囃子　杜若　駒形賀津子　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世　中田　弘美

実盛　脇田喜美子　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世

融　中川　芳子　五段替之型　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世　中田　弘美

仕舞　通小町　稲葉　正信　天鼓　竹内美紀子　楊貴妃　可児島敬子

素謡　朝長　神野勝之助　奥村　泰広

舞囃子　弱法師　伊藤健一郎　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世

山姥　足立奈々子　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世　中田　弘美

番外仕舞　敦盛　山本　章弘　井筒　山本　順之

仕舞　羽衣　柿坂　正子　笹之段　奥村　泰広

舞囃子　龍田　川久保彰礼　移神楽　福井啓次郎　河村総一郎　中田　弘美　藤田六郎兵衛

高砂　山中　節子　八段之舞　福井啓次郎　河村総一郎　中田　弘美　藤田六郎兵衛

番外仕舞　花月　山本　博通　猩々　山本　勝一

能　半蔀　杉野　伸江　高安　勝久　井上　祐一　問　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

（終了予定四時半頃）

附祝言

主催　名古屋観衇会　指導　山本　勝一　共催　名古屋正花会　指導　山本　博通

［御来場歓迎］

◆早春の舞台から◆

「第七回・万作を観る会」「宝生会」「青陽会」と「豊田市能楽堂狂言づくしの会」

竹尾邦太郎

「末広かり」　スッパ和憲にまんまと言い包められ、未だ主・萬斎の怒り納得出来ない太郎冠者・幸雄、「でも都の人が」と不満を洩らせば、「身が内には適はぬ、出で失せう」と癇性の主、主従の心理の綾がよく出る。（35分）

「柑子」　預けた珍しい三つ成りの柑子を出せ、と主・万之介に催促されて太郎冠者・万作、既に三つとも食べてしまった中の二つは口実を設けてはぐらかすも、残りの一つを求められて語る俊寛僧都の物語。その末路も哀れげに謡掛は人と柑子を同一視する牽強付会、〽思ひは同じ涙なり、とシオルと主も貰い泣き。万作・万之介コンビにみる濃密な芸は小品ならこその味わい。（12分）

「仁王」　シテ博奕打・万之介、菅笠・括袴の旅装、肩衣の将棋盤に駒の文様が賭けごとを暗示もする。暇乞いに訪ねる何某・幸雄に授けられた起死回生策は、仁王に成り済ましてのお供えの詐取。うまく運ぶかに見えたが運の尽きは蹇・又三郎が右足治癒祈願に掛けた首の大草鞋。蹇の歩行が絶妙なら、草臥れた風体のやや前屈みの仁王も亦味。（28分・1月15日・第七回万作を観る会）

「西行桜」　シテ老桜ノ精・雅とワキ西行法師・雅介が、桜に咎の有無を問答に展開してゆくところ、ワキにアシラヒ、噛み締める様に説得するシテの慎重は、「花に浮世の咎はあらじ」に自信の語気。作物を出、ワキへ向き、〽草木国土皆成仏、はシテだけが合掌。クセ切、〽戸無瀬に落つる、と招いて出、〽瀧つ波までも、と翳シて廻り正中、〽井堰に雪やかかるらん、と舞い留める姿（写真）のよさ。序ノ舞も上品に、キリは〽花の枕の、と右膝ついて左袖披き、〽夢は、と立つと地の返シ句に六ツ拍子軽く踏むのが如何にも儚げな淡あわとした春暁の趣。（1時間20分）

「筑紫の奥」　筑紫は筑前と筑後の併称、奥は西南の隅というから肥前長崎の見当。この筑紫の奥ノ百姓アド融が唐物を、丹波ノ百姓シテ友彦が柑類を、目出度く上納、御意に叶った嬉しさに高笑いすれば、奏者・弘之に咎められ、自作の田一反につき一笑いせよの沙汰。二声のアドに、一反半のシテは当意即妙に一声半の笑い。笑いを途中で堪え、急に生真面目な顔になるのが半笑いの狙いの可笑し味。キリは、お上からお流れまで頂戴するのは奏者のお蔭、と拒む奏者擽り、ならば、と三人一度にドッと笑ヒ留メだが熱演の割には面白味少ない。（32分）

「草薙」　熱田宮が舞台の御当地能。宝生流専有曲のため上演も稀。熱田に参籠の恵心僧都ワキ元、花売の男女、シテ満次郎・ツレ飛能の素性質せば、夫婦で草薙の剣を守る神に仙女と明かし、結願の日に真の姿を見せる、と消える前場はさしたること無く、眼目は後シテ日本武尊の草薙剣の武勇譚。地の〽尊剣を抜いて、で床几を立つと〽焔も立ち退けと、四方の草を薙ぎ払う具象の型（写真）、〽燠は積って、と颯と袖披キ堆積を視覚に訴える抽象的な型、きびきび見せる。（55分・1月23日・宝生会）

「嵐山」　嵐山の桜の元は吉野、その由来をいう前場。萩箒持つシテ郁子、無しもあるが杉箒持つツレ路子、尉と姥の花守（吉野の木守・勝手両明神の化身）が花を仰ぎ慕う気色を、花の検分に来た勅使ワキ元が見咎め問答となるところ、はきはきしたシテの口調の爽やか。

後場は桜枝を持つ両明神（瞭一・甫）が来臨、桜枝を扇に替えて天女ノ舞は連舞の晴朗。雲ノ扇で招かれ、飛来の心は早笛で走り出る後シテ蔵王権現。〽山に攀ぢ登り、の合膝も喜々とした趣、〽光も輝く、と両袖巻キ上ゲ常座へ赴くところ、楽しげに見えた（写真）。（1時間23分）

「采女・美奈保ノ伝」　小書で前場の植樹の件、後場のクリ・サシ・クセに説く采女の職掌のことを省き、帝の寵愛を失った一采女の哀話に焦点。

旅僧ワキ雅介に呼掛、直ぐ猿沢池に案内、入水の采女の顛末を語り、その幽霊と明かして消える前場は中入地〽忝なや下として、と深く面伏せ、〽君を恨みし儚さは、と二・三歩出、面静かに伏せる慎しさに気品をみせる。

後場は白綾披キ一ノ松、〽教へあらば、と被衣を上げ面少し覗かせる深長は、水に浮かぶ心に立ち、被衣脱ぐとワキとの掛合から地のうちに舞台へ入り、浄土に生まれる心強さをワキへ感謝、下居合掌するが、〽さるにても忘れられぬは曲水の宴。立つと〽御土器度々巡り、と盃を勧める（写真）ところ、右へ有明の月を見、夜を徹して舞う遊楽。序ノ舞は、二ノ松へ抜けて勾欄に寄り、右袖を抱え暫し下を眺めるのは、流れ来る盃に昔を偲ぶかの風情も嫋やか。キリは〽戯れと思すなよ、と二ノ松へ、〽讃仏乗の因縁なるものを、とワキを見込んで左手を指スと、〽よく弔はせ、と小廻りに扇左に取り面隠して沈み、〽また波の、の返シ句に立ち、右ウケて留メル。あくまでも静かに、美しかった。（1時間33分）

「鐘の音」　嫡男の元服祝いに黄金造りの太刀を贈ろうとし鎌倉へ金の値を聞きに太郎冠者シテ俊裕を遣る主・友彦。鎌倉は相州物（正宗ら）で聞えるが、鎌倉五山でも知られる寺の街、粗忽にもシテは寺々の鐘の音を聞いて廻る。円覚寺は「パアン」と上調子な音（写真）。凝音の口吻、聞き入る姿、主の怒りを鎮めんと謡う小舞謡「鐘の音」、真剣味が如何にも律儀で気持ちよい。（25分）

「富士太鼓・現之楽」　太鼓の役を巡り殺された夫・富士の仇を討たんと上洛の妻シテ三津子と娘子方勘吉郎、臣下ワキ正樹から夫の形見を引き取ると、沁々眺めてクドキの愁嘆は、形見を見に着けると俄の狂乱、恨めしい因縁の太鼓に襲い掛かる勢い。止める娘に因果を含めれば、納得した娘も〽打てや打てやと攻鼓、と母に励まされ太鼓を打つ（写真）。この場面、子方とシテの掛合は場数を踏む勘吉郎の達者、母との共演は息が合い上々。「楽」は小書で二ノ松へ抜け、右袖披キ羯鼓を見込む執念は、舞台へ戻り纏わり付くように羯鼓の周りを回ると、囃子の急調に踏む足拍子も苛立たしげに、左袖返シ大小前から羯鼓へ突進、踏み留まり退ると〽持ちたる撥をば、となるまで、亢奮の「楽」に見応え。昂りはあとの型所もてきぱきと極め、トメは一ノ松、翳ス笠の下から羯鼓を見込み、右ウケて留拍子、きりっと引き締った舞台だった。（1時間10分・1月29日・青陽会）

「魚説法」　住持は留守だが施主・晴夫に請われ、一度は断るが御布施に食指が動き、碌に経も読めぬのに説法に出掛ける新発意シテ万之介。新発意にしては少々蓋が立っているのが味噌で、経には通じないが海浜育ちで魚の名に詳しいところから説法に魚の名を組み込み、それらしく節を付けてぬけぬけと説くのが如何にも世間擦れした面憎さ。万之介味を出す。（13分）

「節分」　演前上日が節分で正に旬の狂言。節分の日、蓬莱ノ鬼シテ萬斎、偶々女アド和憲の独り居る家を訪ね一目惚れ。恋情もだし難く言い寄るが峻拒され、身悶えせんばかり。ならば歓心を買おうと謡う小舞謡の数々は先ず「津の国」から「瓢箪」へ、えいやさらとこ、と首の後ろ、両肩に杖を荷げて廻る剽軽な恰好は、〽瓢箪吊いて面白やの、と肩から杖を外すと、人馴れしたつもりで「この杖の先を舐って貰へまいか」（写真）のセクハラ的振る舞い。更に〽忍ぶその夜の太刀は鍔白し云々、は隠語めく色情的な内容の意味深長、いきなり女の後ろえ抱きつく、など離れ難い思いは、振り切られて両シオリの落胆。見掛けによらない鬼の純情に付け込む女は、鬼の隠れ笠と隠れ蓑を奪う浅ましさ、「これさへ取れば心易い」と節分の豆を鬼に打ちつける。頭を庇うように両手を上げ、派出にきりきり舞をして逃げる鬼。萬斎の、直面ではあまり見られないオーバーアクション気味の闊達は感情移入する小舞謡にも艶。（33分）

「木六駄」　太郎冠者シテ万作、雪の山道を独りで十二頭の牛を追い、角樽まで担げての使いに、強く楯突くこともなく「是非に及びません。参りませうまで」とあっさり主・博治に従う柔順。されば、ひたすら牛を追う姿にその性格が写る。列を離れる牛へ「そこは崖ぢゃ」と雪を蹴立てて走り寄る運ビや、追いつきむんづと掴み掛かり引き摺り出すところ、外れた藁沓を慎重に履かせるところ、など〳〵、一所懸命の愚直は、そこに自ずから立ち現われる写実芸の巧さである。峠の茶屋・幸雄が酒を切らせたと聞く落胆の表情が、茶屋から手元の角樽に気付かされてもパッと明るくなる訳でなく、寧ろ怪訝な面持になるのも愚直ゆえ。しかし、一旦栓が抜かれれば、「も一つ飲んでも大事あるまいか」と次第に箍も弛み、あとは一気に苦役から解放された心地、酔余、茶屋の団扇で舞う肴の「鶉舞」は、〽三の矢で射て取って、のところなど、父・先代万蔵を彷彿とさせる。

キリは伯父・万之介との対面、狎れ狎れしげな応対も、酔いの上だけとは言えぬ太郎冠者の直な資質ストレートに出ただけ、軽妙洒脱な万作に万之介が重みをみせた。（47分・2月4日・豊田市能楽堂狂言づくしの会）

㊤ 宝生会「西行桜」倉本雅
㊦ 宝生会「草薙」辰巳満次郎
（佐藤耕司氏提供）

青陽会定式能
㊤㊨「嵐山」左より前野郁子、高橋瞭一、須部甫
㊦㊨「富士太鼓」久田三津子、久田勘吉郎
㊤㊧「采女」梅田邦久、㊦㊧「鐘の音」鹿島俊裕
（杉浦賢次氏撮影）

狂言づくしの会「節分」野村萬斎・高野和憲
（杉浦賢次氏撮影）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成17年5月～17年6月）

◆NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

5月22日	「井筒」（再）（喜多流）	友枝昭世ほか
5月29日	「鐘の音」「水汲」（和泉流）	野村万蔵ほか
6月5日	「杜若」（観世流）	浅見真州ほか
6月12日	「氷室」（宝生流）	前田晴啓ほか
6月19日	「小塩」（金春流）	桜間金記ほか
6月26日	「恋重荷」（再）（観世流）	観世栄夫ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［5月］
28日(土)　青陽会定式能　（有料）（番組①面）
［6月］
10日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組①面）
12日(日)　名古屋観世会定式能　（有料）（番組①面）
18日(土)　名古屋梅猶会定期能　（有料）（番組②面）
19日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組②面）
25日(土)　名古屋豊星会　（無料）

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－671－0852）

［5月］
29日(日)　名古屋観衛会大会　（無料）
［6月］
5日(日)　熱田祭奉納能　（無料）（番組①面）
25日(土)　青耀会・江月会記念大会　（無料）（番組②面）

◆岡崎城能楽堂◆

（TEL 0564－24－2204）

［5月］
29日(日)　舞と能の夕べ　（無料）（番組③面）

熱田祭奉納能

能3番・狂言1番

6月5日　熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）主催による熱田神宮大祭協賛の「熱田祭奉納能」は6月5日熱田神宮能楽殿で催される。番組は次のとおり。

熱田祭協賛　奉納能

六月五日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

東北
長田　郷
飯富　雅介
鹿島　俊裕
間

八島
能（喜多流）
舞囃子（金春流）
加藤富貴子
宇高　通成
百々　康治
後見
竹市　幸司
今枝　郁雄
杉江　正樹
梶元
間
能（金剛流）
大川　磨美
河村眞之介
船戸　昭弘
加藤　洋輝
竹市　学
地謡
山根　泰子
佃　陽子
鈴村　昌美
四ツ井つや子
熊谷眞智子
加藤かおる
伊藤　雅子
西脇　和子
地謡
河村聡一郎
後藤孝一郎
鹿取　希世
地謡
伊藤　雄二
前田　登
前田　茂穂
佐藤　俊之
広瀬　雅弘

小鍛冶
覓　鉱一
後藤嘉津幸
大野　誠

佐渡狐
能（宝生流）
狂言（和泉流）
松田　高義
後見
加藤　誠子
平塚　昭子
地謡
長谷川多美也
松井　俊介
伊藤　英毅
福田　勝
和谷　衡市
高林　呻二
長田　駿
粟谷　浩之

葵上
鬼頭　京子
衣斐　愛
間
梶本　正樹
杉江　正樹
佐藤　元
後見
竹内　澄子
玉井　祐博
地謡
河村聡一郎
福井啓次郎
鬼頭　義命
鹿取　希世
地謡
野村小三郎
野村又三郎
後見
伴野　俊彦

附祝言
［入場無料］
主催　能楽協会名古屋支部
後援　熱田神宮奉賛会

日本芸術院賞　観世喜之氏受賞

日本芸術院（三浦朱門院長）は三月二十四日、二〇〇四年度（第六十一回）日本芸術院賞の受賞者八名を発表。能楽界からは、観世流シテ方・観世喜之氏が受賞した。

授賞理由は「幼少より父二世観世喜之の膝下にて研鑽を積み、多彩な演能活動を展開。温厚篤実・誠実謙虚な人柄そのままの繊細優美にして品格のある芸風を確立した。能楽の普及・鑑賞者の育成拡大に努める一方、後進養成にも意を注ぎ、全国各地で門弟の指導にもあたっている」としている。なお授賞式は六月二十日、東京・上野の日本芸術院会館で行われる。

［観世喜之氏略歴］

昭和十年六月二日東京に生まれる。観世喜之家四代目。父・先代二世喜之に師事、昭和十六年仕舞で初舞台、同年武雄と改名、同十七年「菊慈童」で初シテ。昭和五十六年観世喜之を襲名。平成十四年度芸術祭優秀賞受賞、観世九皐会理事長、日本能楽会会員。

能「安宅」上演

7月2日　藤田・龍吟の会

藤田・龍吟の会（藤田六郎兵衛主宰）は、七月二日（土）名古屋能楽堂で、能「安宅」瀧流を上演する。

出演は、シテ弁慶・観世銕之丞、ワキ富樫・福王茂十郎。一管・秘曲「津嶋」（藤田六郎兵衛）を上演。

入場料＝A席一万二千円、B席一万円。取扱い＝チケットぴあ、藤田六郎兵衛事務所（電話052・571・6341）

きのくに仮面の世界

和歌山県立博物館

和歌山県立博物館では「きのくに　仮面の世界」の表題で〝高野山周辺の芸能と紀伊徳川家の能〟の特別展を六月五日（日）まで開催中である。和歌山県内には数多くの古い仮面が残されていることが知られているが、高野山周辺では、仏教的な儀礼で使用された面、神社の祭礼で使われた猿楽面などが残されている。また紀伊徳川家ゆかりの能面、徳川家康をまつる紀州東照宮の祭礼・和歌山祭行列のうち百面（面掛）で使用される仮面群も中世の仮面が多数含まれている。仮面展の出展は百三十六点。中世の芸能を知らせてくれる貴重な新発見が注目されている。開館9時30分～午後5時（休館日は月曜日）。入館料一般五百円、大学生三百円、なお5月29日には講演会が行われる。

和歌山県立博物館＝和歌山市吹上1－4－14。TEL073・436・8670

名古屋能楽堂演能

青陽会定式能

五月二十八日（土）午前十一時始
名古屋能楽堂

弱法師
能
仕舞　屋島　今沢　美和
蝉丸　久田三津子
地謡　星野　路子
前野　郁子
近藤　幸江
生駒　里翠
間
祖父江修一
飯富　雅介
佐藤　友彦
後見
久田三津子
武田　邦弘
地謡
三村　恵子
今沢　美和
黒田　博
八神　孝充
須部　嘉宏
梅田　甫
古橋　正邦
加賀　敏彦
覓　鉱一
後藤嘉津幸
大野　誠

野守
能
梅田　嘉宏
杉江　元
鹿島　俊裕
間
河村眞之介
船戸　昭弘
加藤　洋輝
鹿取　希世
後見
前野　郁子
久田　勘鬼
地謡
今沢　美和
近藤　幸江
八神　孝充
須部　甫
祖父江修一
清沢　一政
松山　幸親
高橋　暸一

宗八
狂言
佐藤　融
井上　靖浩
今枝　靖雄
後見
井上　祐一

熊野
能
清沢　一政
久田　勘鬼
高安　勝久
梶元　正樹
村雨留
読次之伝
墨次之伝
河村聡一郎
柳原冨司忠
大野　誠
後見
三村　恵子
梅田　邦久
地謡
星野　路子
黒田　郁子
松山　幸親
前野　博
武田　邦弘
加賀　敏彦
高橋　暸一
古橋　正邦
仕舞
志賀　古橋　正邦
西行桜　高橋　暸一
山姥　松山　幸親
地謡
黒田　博
梅田　嘉宏
八神　孝充
梅田　邦久

附祝言
主催　青陽会
問い合わせ
名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鬼方
電話　〇五二・七〇五・一五八四
［有料］当日券三〇〇〇円
学生券一〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ、各出演者宅

名古屋能楽堂定例公演

六月十日（金）午後六時三十分始
名古屋能楽堂

阿漕
能（宝生流）
衣斐　正宜
間
飯富　雅介
松田　高義
後見
竹内　澄子
玉井　博祐
地謡
村上　茂
青木　堯
柴田　賢治
久野　幸三
稲川　寿一
寺井　良雄
東川　光夫
佐藤　耕司
覓　鉱一
後藤孝一郎
井上　敬介
鹿取　希世

不須
狂言（和泉流）
太郎冠者　野村又三郎
主次郎冠者　野村小三郎
後見　松田　高義
伴野　俊彦

（午後八時半終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・財名古屋振興協会
財名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

入場料　前売一般　三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生前売　二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（0570・02・9999）
市内プレイガイド

名古屋観世会定式能（三回）

六月十二日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

熊野
能
梅田　嘉宏
野村　四郎
村雨留
植田隆之亮
山本　順三
後見
久田　勘鬼
観世　喜正
地謡
河村聡一郎
福井啓次郎
八神　孝充
本田　勲
須部　祖父江修一
清沢　甫　梅田　邦久
一政　武田　志房
武田　邦弘
藤田六郎兵衛

鏡男
狂言
井上　靖浩
佐藤　友彦
今枝　郁雄
後見　鹿島　俊裕

賀茂采女
仕舞
観世　喜正
武田　志房
梅田　邦久
地謡
加賀　敏彦
古橋　正邦
久田　勘鬼
梅田　嘉宏

鵜之段
能
観世　喜之
高安　勝久
杉江　元
梶本　正樹
河村眞之介
久田舜一郎
助川　治
藤田六郎兵衛

西行桜
能
観世　喜之
飯富　雅介
高安　勝久
杉江　元
梶本　正樹
問
鹿島　俊裕
後見
小島　一英
梅田　邦久
地謡
外山　圭一
松山　幸親
高橋　暸一
梅田　嘉宏
古橋　正邦
武田　邦弘
観世　喜正
久田　勘鬼
（終了　五時頃）

附祝言
主催　名古屋観世会
［有料］当日券八千円（自由席）枚数制限あり

名古屋梅猶会定期能

六月十八日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

能 **雲林院**
小松 勝憲
飯冨 雅介
梶元 正樹
佐々木千吉
後見 梅若 猶義
岡田 晃一
地謡 河村聡一郎
福井啓次郎
谷口 澄夫
立花香寿子
井戸 良祐
梅若 雅一
上田 悟
鹿取 希世
梅若 基徳
梅若 善高
梅若吉之丞
池内幸三郎

狂言 **寝音曲**
茂山千之丞　佐々木千吉
後見 井口 竜也

舞囃子 **源氏供養** 熊澤恵美子
地謡 小川 晴子
梅若 雅一
河村聡一郎
福井啓次郎
鹿取 希世
梅若 善久
井戸 和男
池内光之助

仕舞 **芭蕉クセ**
梅若吉之丞
地謡 立花香寿子
池内幸三郎
梅若 善高
梅若 基徳

野守
梅若 修一

名古屋宝生会定式能（第249期第2回）

六月十九日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

能 **千手**
衣斐 正宜
衣斐 愛
飯冨 雅介
後見 竹内 澄子
玉井 博祐
地謡 河村聡一郎
後藤孝一郎
鹿取 希世
竹内 良伯
竹内 淳一
浦野 馬繰
久野 正二 稲川 寿一
辰巳富四夫
幸三 和久荘太郎 満次郎

能 **海士**
子方 梅若雄一郎
前シテ 梅若 猶義
後シテ 岡田 晃一
懐中之舞
高安 勝久
杉江 元
後見 松本 薫
地謡 河村聡一郎
後藤孝一郎
上田 悟
藤田六郎兵衛
小川 晴子
小松 勝憲
熊澤恵美子
井戸 和男
梅若 善久
梅若 修一
池内光之助

附祝言
後見 梅若 基徳
梅若吉之丞
地謡 熊澤恵美子
井戸 和男
梅若 善久
池内光之助

（終了予定 五時二十分頃）

主催 名古屋梅猶会

［有料］会員券五〇〇〇円（全自由席）
申込み先 能楽堂・梅猶会事務所
熊澤恵美子方（電話 〇五二・七八二・六九七三）

狂言 **犬山伏**
大野 弘之
佐藤 友彦
今枝 靖雄
今枝 郁雄
後見 佐藤 融

仕舞 **鵜ノ段**
佐藤 耕司
倉本 雅
地謡 稲川 寿一
馬繰 富四夫
石黒 孝
辰巳大二郎

弱法師

能 **国栖**
天女 内藤 飛能
老翁 和久荘太郎
天武天皇 阪口 貴仁
佐野 萌
白頭 高安 勝久
橋本 相元 正樹
井上 靖浩
鹿島 俊裕
後見 倉本 雅
玉井 博祐
地謡 村上 茂
外山 通夫
大森 尚人
玉井 道夫
佐藤 耕司
辰巳満次郎
石黒 孝
辰巳大二郎
覓 鉱一
後藤嘉津幸
鬼頭 義命
大野 誠

（五時終了予定）

主催 名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
佐藤 耕司 方
電話FAX 〇五二―八〇三―七三七二
携帯TEL 〇九〇―一七四一―六二三四

［有料］
当日券一万円（2枚綴り）

戦後名古屋能楽史 ⑥⑤
〔第十五章〕昭和三十六年（一九六一）

竹尾 邦太郎

（承前）

四月二日、愛知文化講堂特設舞台で第六回中日五流能。第一部は「鵜飼・真如ノ月」観世喜之、舞囃子「嵯峨之雨」片山博通、新作狂言「雪まろげ」野村万作・茂山七五三・千之丞・万代峯子、「羽衣・床几ノ物着」金剛巌、小舞「細雪」茂山千五郎、仕舞二番「玉ノ段」辰己孝「歌占」喜多節世、一管独謡「班女」杉市太郎・林愿蔵、「奥の細道」本田秀男。

此の一部の番組立については「能や狂言をいろいろな角度からみて、どなたにも親しみやすく、興味深くみていただくように選らび、また近ごろの新らしい動向を織り込んであります。ことに虚子の作、能・奥の細道などは、従来の能よりも別な境地をひらいたもので、俳界はもとより、ひろく国文学、演劇愛好家の方にもこの機会を逃さずみていただきたいと考えています」とあり、舞囃子「嵯峨之雨」のシテ片山博通は「能による（侘び）の表現」と題し次のように演出意図を述べる。

「嵯峨之雨」はもともと吉井勇先生が、芭蕉の「嵯峨日記」に取材して、井上流京舞のために書かれたもので、富崎春昇作曲、井上八千代振付で上演された。

その作詞を拝見した時から是非能にして見たいと思い、長年その機会を求めていたところ、幸いこの秋「離見会」で舞囃子の形式で初演することが出来た。その折はシテ芭蕉、夢の中に出てくる弟子の杜国をツレとして型を付けた。つづいて冬に、「NHK歳末たすけあい能と狂言の夕」で再演した時は、能にかえて見た。といってもシテ一人で、ワキもツレも出ないこんどの再演では再び舞囃子にもどし、シテ一人でやってみるつもりである。なんとか従来の能、舞囃子といった形式にとらわれず、しかも能の技術で芭蕉の「侘び」と嵯峨の白雨といった感じを出したいと思っている。

小舞「細雪」は谷崎潤一郎の作。京都在住の折、贔屓にしていた茂山千五郎（三世千作）に贈ったもの。息千之丞の節付に型付けしたもので初演は昭和二十七年六月七日の「狂言と京舞の会」という。「私どもの家では非常に大事にしておりまして、その後もちょいちょい、なにかの折には舞っております」と淡交社昭和五十九年四月刊『狂言85年・茂山千作』の中で述べている。

「雪まろげ」は昭和三十四年『鼓師』で直木賞を受賞した平岩弓枝（当時27歳）の作。初演は同じ年の十二月十二日、京都での新作発表会。三宅藤九郎（一九〇一―一九九〇）門下、社中の新泉会で舞台に立ったこともある（昭和三十四年十月十三日・大曲観世会館）という。今回「再演への期待」と題して次の稿を寄せる。

狂言「雪まろげ」は今までの私の仕事の中で、非常に愛着の深いものである。

狂言という形式では勿論、およそ脚本というものを書いたのはこれが初めてであった。小説の場合はどんなに苦労しても作者の生んだ子は作者が創った眼鼻立ちの子でしかない。脚本だと作者が生みっぱなしにした子が舞台に出てくるまでに、どんな成長をしたか、どんな育てられ方をしたかと人手に渡した子をいとおしむ気持と期待とがプラスされる。我が子の晴れ姿を見る親の気持を「雪まろげ」は私にしみじみ味わせてくれたものだ。

再演の今日、今度はどんな成長ぶりを見る事か、一年余日で対面する我が子の顔をあれこれ想像し、育てあげて下すった演者の方々、及び関係者の方々の御好意に心からお礼を申し上げたいと思う。

第二部は「満仲」宝生英雄・野口禄久、「木六駄」野村万蔵、仕舞二番「巴」柴田初太郎「蝉丸」山田仁三郎、「隅田川・彩色」梅若六郎、仕舞「善知鳥」金春信高、「白是界」後藤得三。当地以外の三役の来演は江崎直質・江崎欽次朗・宝生弥一、森田光春・杉市太郎・一噌幸政、曽和博朗・大倉六蔵・北村一郎、山本敬一郎・谷口勝三・吉見嘉樹・安福春雄、金春惣右衛門、三宅藤九郎らがある。

四月九日、中部金剛会定式能は舞囃子「安宅」伊藤鉄之進、「熊野」大塚一二、仕舞五番「籠」重本昌三、「笠之段」渡辺寿、「杜若」谷口正義、「小鍛冶」片野東四郎、「弱法師」今井幾三郎、「ぬけがら」井上松次郎、「藤戸」豊嶋弥左衛門。

四月十五日、昭和三十五年度芸術院賞を第三部芸能部門で橋岡久

（③面へつづく）

中日五流能

使用の面は鈴木慶雲作　銘「芭蕉」

熱田神宮能楽殿演能
名古屋青耀会二十周年 江月会一周年 記念大会

六月二十五日(土)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

番外連調 **養老**
長山 耕三
山中 迂晶
上田 慎也
上田 悟

西王母
岩田 宏子
寺澤ふみ子

葛城
板倉 元子

胡蝶
細井みどり

羽衣
和合之舞

独鼓 **鵜之段**
武富 康之
村田美智子

船弁慶
今村 一夫
簇 慶子

玉鬘
古橋 正邦
永井 町子

三輪
横江美貴子

竹生島
笠田 昭雄

阿漕
久田 勘鶴

神楽
守家 由訓
上田 敦史
市川くみ子
大野 誠

能 **杜若**
梅田 邦久
恋之舞
福王 和幸
河村眞之介
久田陽春子
岩田 時代
鹿取 希世

一調 **高砂**
笠田 昭雄
吉田 忠弘

龍田
山本 博通
山中 彌

遊行柳
野田 博子

邯鄲
高野千勢子

独鼓 **枕之段**
久田 勘鶴
小林 源之

笠之段
藤谷 音彌
佐伯 裕子

玉之段
梅田 邦久
目黒美保子

融
酌之舞
山本 章弘
守家 由訓
上田 敦史
佐藤 秀子
鹿取 希世

枕慈童
山本 博通
守家 由訓
久田陽春子
菊川 郁子
大野 誠

一調 **小塩**
山本 章弘
松浦 季子

巻絹
寺澤 幸祐
入口美喜代

玄象
クツロギ
古橋 正邦
守家 由訓
上田 敦史
永井 町子
大野 誠

砧
梓之出
梅田 邦久
河村眞之介
久田陽春子
平出 京子
鹿取 希世

番外連調 **菊慈童**
藤谷 音彌
久田 勘鶴
三島 卓
三島元太郎

能 **猩々乱**
梅田 嘉宏
福王 和幸
守家 由訓
上田 敦史
目黒美保子
大野 誠

（終了五時頃）

［御来場歓迎］

主催 青耀会
後援 邦春江月会
謡耀会

（②面よりつづき）

太郎（75）が当該年度の「菊慈童」「羽衣」及び業績に対して受賞する。

四月十六日は名古屋観世会第二回。番組は素謡「葵上」尾関健太郎、仕舞三番「経正」竹内六郎「桜川」石谷初蔵「鵜飼」塚本秀雄、「善知鳥」柴田初太郎、「班女・笹之伝」杉浦義朗、「痩松」河村丘造、仕舞二番「笠之段」武田小兵衛「笹之段」藤井久雄、「鞍馬天狗・白頭」梅若万三郎・久田徹二（牛若）、大鼓に谷口喜代三が来演。

四月二十九日、幸友会は九世福井五郎七回忌追善能、二部制で第一部は宝生流がメーンで他に金春・金剛流が加わる。舞囃子「海人」大塚一二、「橋弁慶」辰己孝で替間「弦師」野村又三郎・佐藤秀雄が珍しい。舞囃子「熊野」本田秀男、仕舞四番「女郎花」馬縅富四夫「敦盛」内藤泰二「花月」倉本雅「山姥」畑富次、「止動方角」河村丘造、「杜若・沢辺之舞」宝生九郎。第二部は観世流梅若家がメーンで舞囃子「小袖曽我」佐藤太俊・河村鉦二、連吟「網之段」加藤良久・芥川秀子・飯田新子・有賀滋子、一調「鵜飼」野崎太郎・林愿蔵、舞囃子「邯鄲」柴田初太郎、「望月」梅若六郎、「名取川」野村又三郎、「葵上・梓之出」梅若泰之。東京から寺井政数、幸円次郎・幸義太郎、亀井俊雄、観世元信の来演。

同日、京都東本願寺では宗祖親鸞聖人の七百回大遠忌の法楽として古儀に則る式能が催され、当地から高安流宗家高安滋郎（44）幸清流田鍋惣太郎（77）が出勤する。番組は「翁」金剛巌・茂山正義（千歳）、茂山千五郎（三番三）、「松竹風流」大蔵弥太郎（松ノ精）、茂山倖一（風流千歳）、茂山忠一郎（竹ノ精）、「高砂・真ノ型」豊嶋弥左衛門・高安滋郎（開口）、「三本柱」茂山七五三、一調一声「三井寺」近藤乾三・大倉六蔵、新作能「親鸞」喜多実、「住吉詣」金剛巌、仕舞「笹之段」桜間龍馬、「靱猿」茂山千五郎、「猩々乱・置壷・双之舞」片山博通・片山博太郎。当日の舞台進行過程を『金剛』誌第16巻第2号（昭和36年5月20日刊）より参考のため記す。

〔お能はじめの式〕　午前九時の開演五分前、白書院正面所定の席に、法王・裏方・新門はじめ宗務役員・関係者が出坐すると、大紋素袍・烏帽子姿のお能奉行がその前に平伏、お能はじめの命を受け、静かに前庭に降り立って奉行梯子から舞台へ上って行く。奉行後見として広田泰三師が裃姿で、開口文を懐中してこれに従う。奉行はひとり舞台から橋掛り一の松へ入り揚幕に向って下居すると、幕をかかげ、翁太夫の金剛宗家が鏡の間に平伏する。奉行は右手を指し出して「お能始めませい」と指図をし、幕は一旦おろして、改めて愈々「翁」の出となる。奉行は舞台をおりて、奉行控所の床几にかかる。

〔床几御免〕　「翁」の小鼓頭取、脇鼓は御前掛りで床几を許されないから下に居て囃す。「翁」が終って大夫が退場すると、囃子の翁がえり演奏中に奉行が再び舞台へ上り、千歳の前に正面をかけて坐り、翁太夫の幕に入るのを見はからって囃子方に向い、右手を指して「床几御免」と声を掛ける。頭取は平伏してこれを受け、三鼓打ち止めて床几に掛る。

〔松竹風流〕　狂言方の式能の習事である。風流千歳が最初から翁太夫の次に登場し、常の千歳の下座に坐る。「翁」が終ると、囃子のアシライで、竹ノ精、松ノ精が橋掛りに登場し、一セイを謡う。風流千歳が出て、これと応対し、やがて両精は舞台に入って左右にならび、風流千歳はその後方に立つ。松、竹のめでたい謂れなどの説明があって、両精の合舞になる。地は太鼓入りの大ノリ謡で、地謡はあらかじめ橋掛りに居流れている十名が謡う。終って三者退場、地謡退場すると、三番三の揉みの段になる。

〔開口之式〕　開口文は式能の都度、主催者である本山で作り、奉書紙にしたためて奉行から当日脇能のワキ方に手交される。ワキはこれを受けて三読し、懐中して出る。小鼓、笛による開口置鼓で、脇能「高砂」のワキはワキツレを従えて登場し、舞台正中に立つ。ワキツレ二人は橋掛に下居して平伏する。ワキは達拝して狩衣の両袖の露をとり、衣紋をつくろって、正先へ進み、露をおとして、小鼓に合せて四足返拝して後退し、置鼓打ち止めて開口文を唱える。文はサシ調の謡で、位をとって重々しく謡い、最後の「めでたがりける時とかや」で扇を開いてシトメの型をする。終って改めて名宣り、次第の囃子となって、ワキツレ舞台に入り、常の通り向き合って次第三遍返しを謡い、引き続き道行となる。

「開口」のこと、補足すれば、同誌で栗林貞一は次のように言う。「ワキ方の宗家に限られたもので、まず開口文を作って催主に内見してもらい、その上で節付けしたのを当日うたうのが古くからのならわしになっている。徳川時代、将軍さんの目出たい催しの能で、開口の文句をトチって、遠島申付けられたワキ方もあったという。そうしたことから新作開口はワキ方にとって最も重い、緊張を要するものとなっている」と。

（次号につづく）

◆仲春の舞台から◆

「観世会」「九皐会」と「茂山狂言会名古屋公演」「豊田市能楽堂特別公演」「名古屋能楽堂定例公演」「大槻能楽堂自主公演能」

竹尾邦太郎

「遊行柳・青柳ノ舞」

シテ九郎右衛門。前は初同（清司・邦久ら）〽風のみ渡る気色かな、と風に吹き押されるかにたらく〳〵退り、左に持つ杖を右へ寄せ胸杖、風の音を聴く風情に秋風落莫の景を活写。後は老柳ノ精、クセ中、〽（暮に）数ある杏の音、と右足軽く拍子一ツ、爪先上げて蹴鞠の心をみせ、〽手飼の虎、は一・二足退り左袖右へ寄せるだけなのが宥めて静かに曳く印象。クセ留は〽弱弱と、退ると〽立ち舞ふも、と左手に作物の柱を掴み、ワキへアシラフのが如何にも頼りなげ。小書で舞は極く短かく、老いの萎靡の象徴と思え、それはキリで〽よろ〳〵弱々と、たじたじと退って〽倒れ伏し安座、枕ノ扇の姿に色濃く現われた。トメは作物へ入っての朽木留、小書の表記はないが、「青柳ノ舞」と一対が効果的、寂（さび）の舞台に九郎右衛門の真骨頂。（1時間50分）

「素袍落」

主・弘之の伯父・友彦を伊勢参宮に誘う使いに遣らされた太郎冠者シテ祐一、用件を伝え忽々に立ち戻るところ、呼び止められ、門出の祝とて「やい〳〵一つ飲うでゆかぬか」と勧められれば固より好きな酒、飲む程にくどくなってゆくところ、嫌味にならないのが祐一の持ち味。持て余し、「さあさあはやう飲んでしまへやい」と聊か癇にも障り神経質になっている友彦、両者好調。（28分）

「小鍛冶・黒頭」

シテ清和、小書で前は喝食髪・面喝食・段厚板着付・黄地縫箔腰巻の姿は稲荷明神の化身、稲穂を持つ。稲荷は稲を司る神・倉稲魂（うかのみたま）を祀り、稲穂を持つはその象徴。犯し難い気品は呼掛も爽やかに、居グセは張る力感じさせ、〽尊は剣を抜いて、の地（元治・芳宏ら）で立つと草薙剣の霊験颯爽とみせて胸が空く。中入は一ノ松で宗近ワキ勝久へ振り返って詰メ、〽御力をつけ申す、と左で指シ確約、助走つけるかに一旦退って走り三ノ松で踏み止まるのは約束を反芻する心、〽行方も知らず、の返シ句で走り込むのは「よし、やって遣ろう」の勢いに思える。

後はワキの〽謹上再拝、に下半身を半幕に現わすシテ、〽いかにや宗近、の地で一旦下ろす幕へ屹と見込み注連結一畳台を下りるワキ。緊迫する空気に早笛で走り出るシテが、一ノ松で勾欄に左足を掛け舞台を見込むところ、舞台に入っては舞働のトメに飛び上がりざま台上安座のところ、疾風迅雷の況も鮮やか。〽天の叢雲ともこれなれや、と鍛え上げた刀身を見詰めるシテとワキ（写真）両者の力演は一幅の名画。（56分・2月13日・観世会）

「朝長」

シテ瞭一、前は自刃の朝長を看取った美濃国青墓ノ長者、朝長所縁の旅僧ワキ元・宰と出遇い、求められ朝長の最期を伝える語、落ち着いて淡々と語る中に哀感が滲み中々だが、「朝長息の下より」とワキにアシラヒ、後半謡になると感情移入が過ぎる嫌いも。〽かくて夕陽影うつる、は面伏せるだけで、己が影に朝長の亡魂を重ねて眺める趣が妙。後は朝長亡霊、自刃止むなしの因となる〽膝の口を篭深に射させて、のところ、左膝に扇突き立て、暴れる馬の〽跳ね上れば、と右足強々と拍子二ツ踏む型も結構。（1時間42分）

「酢薑」

薑は生姜、梅酢に漬ける紅生姜は乙な酒肴で、元来、酢と薑は相性。シテ酢売・友彦、アド薑売・祐一、酸っぱいと辛いの秀句（洒落）の応酬は、互いの機知を認め共感、笑ヒ留にするまでテンポ快調。（17分）

「雷電」

讒言により左遷され、失意のうちに没した菅原道真の復讐譚。前場、深更、内裏を襲うが関与無用を請う

（④面へつづく）

名古屋観世会定式能㊤「遊行柳」片山九郎右衛門、高安勝久、㊥「小鍛冶」黒頭・観世清和、㊦「素袍落」井上祐一、佐藤友彦　（杉浦賢次氏撮影）

岡崎城二の丸能楽堂演能

舞と能の夕べ（第13回）

五月二十九日（日）午後二時始
会場　岡崎城二の丸能楽堂
電話（家康館）〇五六四・二四・二二〇四

番組（会員発表）

連吟　吉野天人　岡田 弘子　川瀬 弘道　織田 敏男　鈴木 明雄　近藤冨士雄　金原 孝典　神谷 鐐一　宮崎 陸夫　山口 耕造

仕舞　鶴亀　神谷 鐐一
田村クセ　近藤冨士雄
熊野　宮崎 陸夫

素謡　羽衣　手嶋なみ江　金原 孝典

仕舞　高砂　織田 敏男
頼政　金原 孝典
杜若クセ　山口 耕造
水無月祓　小林美和子

独調　鐘之段　清沢 一政　手嶋なみ江

素謡　賀茂　鬼頭みゆき　伊藤礼子　榊山きよ子　金井 邦夫

仕舞　敦盛クセ　金井 邦夫

舞囃子　龍田　鬼頭みゆき　河村真之介　加藤 洋輝　後藤孝一郎　大野 誠

〔能の装束と楽器の説明〕〔舞の実演〕

〔楽器〕
笛　大野 誠
小鼓　後藤孝一郎
大鼓　河村真之介
太鼓　加藤 洋輝

〔装束〕
解説と装束の着付　祖父江修一　高橋 瞭一　今沢 美和

能　杜　清沢 一政
若　飯冨 雅介　河村真之介　加藤 洋輝　後藤孝一郎　大野 誠

地謡　松山 幸親　須部 甫　祖父江修一　高橋 瞭一　本田 勲

附祝言

主催　清謡会
清沢一政
TEL　〇五六四・五二・六九〇九
後援　中日新聞

［入場無料］
［御来場歓迎］
※雨天でも実施

（③面よりつづき）

ため師僧法性坊ワキ勝久を訪ねる菅丞相ノ霊シテ喜正（白々とした怪士系の面が如何にも幽界から出現した無気味）、家内で咎める気配に〽重ねて扉を、とシテ柱を左手で抱くようにして右手の扇で敲くのが、柴の門柱を握って門扉を敲く写実。圧巻は正中下居（写真）でワキとの問答・掛合からクセ。先づ師恩を謝して置いて実は、と再び問答に本題へ入るも妥協点を見つけられず、俄に本性現して猛るまで、沈着なワキと徐々に昂ぶるシテ、両者熱演である。シテは仏前の柘榴を〽おっ取って、と颯と正先へ、膝つき掬い取る敏速は〽噛み砕き、と数拍子、〽くわっと吐き掛け、の体に目付柱へ撥ネ扇も鮮やか。

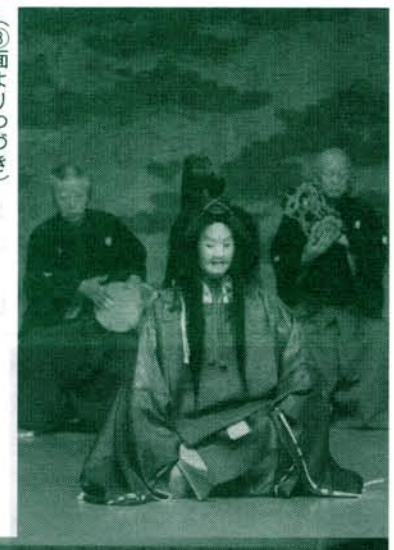
後場、金色沙門帽子・白練着付・白大口・紫水衣・掛絡に威儀を正し、菅丞相ノ化身シテ雷神を待ち受けるワキ。紺無地熨斗目を被くシテは一ノ松で被衣脱ぎ捨てると、〽思ひ知らせん、と拍子二ツ強々と踏み、返シ句に舞台へ入る。内裏の殿舎に擬した二つの一畳台を巡る追走劇（写真）は少々騒々しいが迫力。キリはシテに諡号下賜と贈官であっさり円満解決、三ノ松で〽黒雲に、乗込拍子のトメ、呆気ない結末だが面白かった。（52分・2月20日・九皐会）

「財宝」　当世、子宝という言葉とんと聞かぬが、これは孫宝にも恵まれた名も財宝を名乗る果報な祖父の話。財宝の名を千作と置き替えれば実話となろう。

三人の孫、茂・逸平・童司（は千之丞の孫だが）の元服に烏帽子名を付け祝儀を与えるのが話の筋。千作の直面が実に嬉しそうなのも然もありなん、元服は一人前の男としての証、実生活でも祖父の跡を追い活躍の三人である。さて、祖父を訪ね、お持たせの樽を開き祝宴となるところ、三人が肴の小舞、小舞謡は祖父譲りの達者。一度は袖屏風に面を隠し羞恥をみせた祖父シテ千作も、盃を干し、杖に縋って立つと床几に掛かり、「宇治の晒」を孫達に謡わせ舞うのが至妙なら、孫達の手車で囃しながら入るキリの、千作の表情が、また、現実の喜悦に溢れ素晴らしい。（32分）

「素袍落」　シテ太郎冠者あきら、主・正邦の使いで主の叔父・千之丞の許へ赴く。叔父の表記は一般に伯父で、当代千作の『千五郎狂言咄』、千之丞の『狂言じや狂言じや』、千五郎家本に拠る『古典文学全集・狂言集』全て伯父、舞台では叔父と甥の対話は無いが現関係を番組に記した底に何かあるのだろうか（単なる誤植？）。一方、あきらと千之丞は実の親子、馴れは熟れで両者の応対は間然する所が無くリズミカル。酔態は大盞を重ね当然だが、くどくなるのがまた尋常でないシテあきら、聊かオーバーワーク。（41分）

「釣狐」　甥の猟師・七五三が狐を釣るのを止めさせるため、伯父の伯蔵主に化けて出向くシテ千五郎。途次、犬の遠吠えに怯え「吃驚と致いた」と胸抱え込む胴震いに恐怖醒めやらず、門口で「案内申」と掛ける声も上擦り、絶叫気味。「エイ、伯蔵主様でござるか」と迎えられても怖じ気が先に立ち、袖屏風に面隠して小刻みに震える体では「かう通らせられい」と勧められても「いや〳〵」と身悶えして拒むばかり。和泉流は中へ通って床几に掛かり、玉藻前の故事を語るが、大蔵流は中へ通らず立シャベリで、何時でも逃げ出せる態勢。それだけに猟師に圧力を感じているのだが、一旦、話に熱中すれば、「下野の国那須の原に逃げて行く」と橋懸へ行くところなどは、怖さを忘れ、猟師を説得せずには置かない意気込み。一方、何となく不審を感じていた猟師は細部を見落さず、このとき橋懸へ行く伯蔵主の足元を注視、大凡状況を察したことだろう。ここから先はお定まりの展開、千五郎・七五三、兄弟の緊迫感ある舞台は、就中、前場が惹きつけた。千五郎還暦の好記念。（1時間・3月4日・茂山狂言会名古屋公演）



名古屋観世九皐会「雷電」
㊤観世喜正、㊦観世喜正、高安勝久
（杉浦賢次氏撮影）

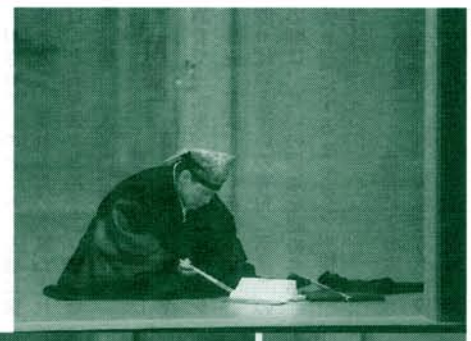
豊田市能楽堂特別公演「谷行」　㊨㊤左より高安勝久、原陸（子方）、松野恭憲、後列廣田泰三（後見）、前川光長、河村総一郎、柳原冨司忠、藤田六郎兵衛、㊨㊦左より原陸（子方）、飯冨雅介、㊧㊤左より飯冨雅介、高安勝久（膝に子方）、㊧㊦左より松野恭憲、原陸、金剛永謹　（杉浦賢次氏撮影）

「谷行」　ワキ方の極く重い習物で稀曲、高安流総力を挙げての今公演は宗家勝久の披キでもある。

前場、母子家庭の幼い弟子松若（子方・原陸君、健気）宅を峯入の暇乞いに訪ねる帥阿闍梨（ワキ勝久）（写真）、難行ゆえ同行させずと母（シテ恭憲）に告げれば、松若は阿闍梨に直談判、母が不心得を諭すも、病弱の母を案じる松若、病平癒祈念にたってお供を、の願い適える。母と子の心情率直に出、ならば、と折れる阿闍梨、三者に生まれる連帯感にぬくもり。松若家の下人（アイ吉次郎）が峯入の経緯を聊か重々しく立シャベリ、手筈整えるよう触レて退くと後場。

一行打ち揃い大峯へ向かう道行は、「安宅」のシテ方と同じ意気軒昂の連吟の雄々しさ。途上、松若風邪心地を訴え倒れると、同行を許した帥阿闍梨に、修験道の掟「谷行」の断行を迫る小先達（ワキツレ雅介）。二人を取り囲む配下の山伏（大・元・宰・正樹・努・喜代次・淳）が無言の圧力を加える緊迫した雰囲気の中、帥阿闍梨と小先達の問答（写真）が熱気迸り出色。抗する術無く松若に因果を含める帥阿闍梨と、母の悲しみや同行の面々との尽きぬ名残を惜しむ松若、この辺り帥阿闍梨も感情移入し、松若との別離の愁嘆場も中々。生きながら谷へ突き落される松若（写真）に責任上己れにも掟を、と悲嘆にくれる帥阿闍梨に、苦慮する一同は、これ迄の修行の実を示すは此の時、と衆議一決、憂色晴れた帥阿闍梨と共に不動明王、役行者（ツレ永謹）に伎楽鬼神（後シテ恭憲）の来援を請えば、錫杖を突き悠揚迫らぬ態度で先づ役行者が威容を現わし、救助を確約。床几に掛かり待つうち、早笛で飛来の鬼神は斧を持ち、役行者始め一同見守るうち、台上飛び上って麓立木を切り倒し、松若を救出（写真）。

キリは無事蘇生の松若を帥阿闍梨に托し、〽虚空を渡って、と二ノ松で拍子は踏まずトメ。全員の一所懸命ひし〳〵と伝わり、就中、勝久・雅介の熱演。僅かの出番だがツレ永謹が貫禄をみせて舞台を締め、前後のシテ恭憲は短い前場に母の情愛沁々感じさせた。地謡は通成・道一ら、主後見泰三、ワキ後見宗二郎。（1時間30分・3月5日・豊田市能楽堂特別公演）



名古屋能楽堂定例公演㊤「呂蓮」野村又三郎、㊦「藤戸」左より豊嶋三千春、高安勝久
（杉浦賢次氏撮影）

「呂蓮」　止宿の僧シテ又三郎に感化されて俄に僧に憧れ、身内の許しもあると偽り、独断で剃髪を願い望みを叶える宿主アド小三郎、その軽はずみな言動活き〳〵とみせ、更に蓮の一字を採った僧名まで求めれば、苦し紛れのシテは法帖仕立のいろはの手習帖を取り出し、鹿爪らしく捲り出す（写真）。慎重らしくみせて次々と当てずっぽうに僧名を並べ立ててゆくシテと、一々に反応するアド、その遣り取りが醸す可笑しみの和気も、飯の支度を知らせる妻・高義が夫の僧体を見て激怒するや、一転、険悪化。保身のためにはあっさりシテに責任転化のアドの節操のなさ。僧と妻、双方に絡む小三郎の軽佻浮薄ぶりが堂に入る。（20分）

「藤戸」　お上の非情な仕打ちを告訴の決意に、逸る心は自ずから足より先に腰が出る風のや、前傾の姿勢、大小アシラヒで出るシテ三千春は如何にも海辺の老女らしい外輪の運ビに怒りをこめ、眦を決する覚悟あり〳〵とみせ先づ惹き付ける。盛綱ワキ勝久と対決しては、殺されたのは〽まさしき我が子にて候ものを、と背筋キッと伸ばしワキを直視するシテの凄さ、思わず怯みかかるのを〽ああ音高し、と強く遮ぎるワキの興奮に、今や詮無しのワキへの恨み辛み、〽せめては弔はせ、と腰を浮かす縋る思いも、〽給へや、でがっくり腰を落すのは、最早無駄との思い、返シ句のシオリに心象の機微端的にみせる。その間の消息を諄々と説き聞かせるうち、惻隱の情を滲ませるワキの語がよい。クセは独り残された母の苦衷、〽海士の（此の世を）、と立ち、〽今は何にか命の露を、で目付柱へ二・三歩出ると、〽かけてまし、と双シオリ、〽とても（憂身）、でシオリ解くと、激情に後先考えずワキに掴み掛かるところは、右手キッと指シ、ワキへ突進するや小刀奪わんばかりの凄まじい勢い（写真）が鮮烈。盛綱ノ下人アイ高義の介添でシテ中入のあと、アイの立シャベリは老女への同情も一入の沈痛、主の行動止むを得ぬ仕儀なれどそこを、の哀訴の趣はアヒ・ワキ問答。憐愍の情催すワキは老女の伜を管弦講を以て弔う由、アヒに触レさせ後場。

後シテは漁師ノ亡霊、面痩男・黒頭・紺無地熨斗目着付・白縷水衣・紺白染分腰蓑・杖、の姿で出端（希世・冨司忠・総一郎・義命）の出、一ノ松からは水上を滑るように運ぶ。眼目は殺戮現場の再現。〽胸の辺を、と肘を張り、杖を刀に左脇下サッと〽刺し通し、そのまま抜かず二刀目、〽刺し通さるれば、と更に深く刺すのが心臓抉られるかに思われ、屍が〽岩の狭間に流れ、かかる処は橋懸へ抜け、岩に引っ掛かる心にシテ柱へ凭れ、水底を一ノ松の下に覗くなど、写実の技の冴え。キリは御弔いに気分が変り成仏得脱、両手に杖の両端持って捨てると合掌するが、杖持つ手の合掌で杖が自然に手を離れるのと比べ、易々彼岸に到った〻の印象も強く思えた。写実芸の巧緻、三千春の充実の舞台。地頭見嗣、主後見訓三。（1時間18分・3月13日・名古屋能楽堂定例公演）

「正尊・起請文・翔入」　頼朝の放つ刺客正尊シテ銕之丞の上洛を知り、機先を制し招喚に赴く弁慶ワキ茂十郎の気勢に張り合う正尊の意気地、固唾を呑むばかりの問答が実に見事。是非を言わせぬ弁慶に、止むなく義経ツレ拓司の前に出頭する正尊、上洛の真意追求されるも悪怯れた様子も見せず、逆に弁慶を窘め、起請文を認め、読み上げようの大胆不敵。銕之丞、大小（孝・建作）の合方、就中、大鼓に鼓舞されるかに音吐朗々と読み上げ、力量をみせる。一段落のあと、静（子方・赤松裕一君、達者）の舞と酒の供応を受けて帰るさ、一ノ松で佇立、すっと勾欄に寄ると舞台を見込み、安堵の心にすら〳〵中入する。未だ疑心暗鬼の弁慶は、婢アヒ忠三郎を偵察に遣り、不穏の気を知ると、夜襲に備え待ち受ける。

後場は小書で斬組のカケリは舞台と橋懸入り乱れ、でんぐり返しに仏倒れと目まぐるしく派手な闘争。劣勢とみて幕際床几の正尊、一ノ松で〽馬より下り、立つ体から舞台へ入ると、弁慶と互いに長刀をふるい一騎打ちは勝負つかぬとみて組み討ちへ。恰幅のいい両者の、龍虎相打つ趣の格闘、面白かった。キリは遂に捕縛され、江田と熊井（幸祐・康之）に引っ立てられ、常座へ出た義経のトメ。（1時間・3月19日・大槻能楽堂自主公演能）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成17年6月～17年7月）

◆NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

6月26日	「恋重荷」（再）（観世流）・	観世栄夫ほか
7月3日	「藤戸」（観世流）	木月孚行ほか
7月10日	「実盛」（喜多流）	粟谷菊生ほか
7月17日	「松山天狗」（金剛流）	宇高通成ほか
7月24日	「錦木」（再）（宝生流）	今井泰男ほか
7月31日	「伊文字」（大蔵流）	大蔵吉次郎ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［6月］
19日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）
25日(土)　名古屋豊星会　（無料）

［7月］
2日(土)　藤田・龍吟の会　（有料）（番組①面）
3日(日)　名古屋橋岡会　（有料）（番組①面）
7日(木)　夏の同好会　（無料）
8日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組②面）
10日(日)　第6回御洒落名匠狂言会　（有料）（番組②面）
（四世井上菊次郎襲名記念）
16日(土)　第6回伝統芸能上演会　（無料）（番組②面）
17日(日)　名古屋観世会定式能　（有料）（番組②面）
18日(月)　野村又三郎斯道80周年記念　（無料）（番組③面）
也留舞会・信謡会合同発表会

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－671－0852）

［6月］
25日(土)　青耀会・江月会記念大会　（無料）

シテ方 泉嘉夫氏 小鼓方 福井啓次郎氏 春の褒章 旭日双光章受章

春の褒賞受章者が四月二十九日「みどりの日」に発表され、能楽界では、シテ方観世流・泉嘉夫氏、小鼓方幸清流・福井啓次郎氏がそれぞれ旭日双光章を受章した。

泉嘉夫は一九二六年生まれ、一九七七年能「野宮」で大阪文化祭賞受賞、海外公演にも参加、新作能「女と影」「半獣神の午後」の作能、上演に努力。重要無形文化財総合指定。壺泉会主宰。能楽協会理事・名古屋支部長を歴任。

福井啓次郎氏は一九三〇年生まれ。小鼓方幸清流職分、尾張徳川家抱小鼓方福井家十一世として活躍。幸友会・涛華能主宰。日本能楽会会員、愛知県芸術文化選奨受賞、海外公演にはブラジル、アメリカ、ヨーロッパの公演に八回にわたり参加。能楽協会理事・名古屋支部長を歴任。

2005年愛知万博 記念能楽大会

9月1日　笹島サテライト

出演参加者を募集

能楽協会名古屋支部

愛知万博2005（愛・地球博）は全国各地から連日十万人を越える来場で話題を高めているが、能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）では、万博を記念して九月一日、笹島サテライト会場（特設舞台）で、一般の出演による「記念能楽大会」を催すことになり、広く出演者を募集している。参加要項は下欄のとおりで、募集締切りは六月末日となっている。

なお当日午後6時からの鑑賞能に出演の「子方」を左記の要領で募集している。

能楽大会出演の「子方」募集

能楽協会名古屋支部では、2005年　愛・地球博記念能に出演の子方を募集している。

日時　平成17年9月1日(木)午後6時始め

場所　笹島サテライト会場ステージ

曲目　能「鞍馬天狗」花見の稚児10名（小学3年生から5年生まで）狂言「茸」茸の精5名（小・中学生）

稽古　当日午後4時から会場にて実施する。

応募方法　往復葉書に住所・氏名・学年・保護者氏名を記入。

申込み宛先＝名古屋市昭和区台町2－16－5　能楽協会名古屋支部・支部長梅田邦久宛、6月30日までに提出。

採用決定　7月中旬に返信はがきにて決定。

［9月1日(木)の予定］

午前10時～午後3時　応募者による能楽大会

午後3時半～午後5時半　「さわってみよう能の世界」及び子方稽古

午後6時から鑑賞能

能「橋弁慶」　狂言「茸」

能「鞍馬天狗」

和泉流 井上祐一改め 四世井上菊次郎襲名 御洒落名匠狂言会

7月10日 東西からも来演

狂言共同社代表・和泉流井上祐一氏はこのたび四世井上菊次郎を襲名することになり、その記念の会として、「第6回御洒落名匠狂言会」が七月十日(日)名古屋能楽堂で開催される。（番組②面掲載）

当日は大蔵流宗家・大蔵彌太郎師と弟の吉次郎師、関西から善竹忠一郎、和泉流人間国宝・野村萬師を中心とした万蔵一門、ならびに長老・野村又三郎、実力者三宅右近、人気の野村萬斎の諸師が出演、狂言共同社総出演で最高水準の芸が披露される。

2005年「愛・地球博記念能楽大会」参加募集のお知らせ

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）は、「愛・地球博」（愛知万博）を記念して、笹島サテライト会場（特設舞台）において、9月1日(木)「2005年愛・地球博記念能楽大会」を開催することになり、愛好者の出演を広く募集している。募集要項は次のとおりで、協会名古屋支部では、多くの方々に参加して頂きたいと要望しています。

能楽協会名古屋支部

◆募集要項◆

①出演日　平成17年9月1日（木）午前10時～午後3時まで

②参加グループ名または会名（　　）

③演目種類と曲目・出演者氏名　指導の先生名（　　）

（例…仕舞　熊野　名古屋太郎）

④参加単位（1単位20分、参加費1単位5000円）

※1グループ3単位までとさせて頂きます。

⑤参加グループまたは会の責任者、住所・氏名・電話番号

以上明記のうえ、封書にて左記宛に送付して下さい。

〒460－0033　名古屋市昭和区台町2－16－5　梅田邦久方「2005年愛・地球博記念能楽大会」係り。

⑥締切りは、平成17年6月末日

また能楽協会名古屋支部の先生を通じて提出していただいても結構です。

番組は、7月中旬頃作成し、各出演グループへお知らせする予定。

☆ただし、参加費以外の経費については、ご出演者の負担とさせていただきます。

詳細お問い合わせは、TEL052・832・1031、能楽協会副支部長柳原冨司忠まで。

なお万博記念能楽大会・鑑賞能に出演の「子方」の募集も行っています。（詳細上掲の記事参照）

藤田・龍吟の会

七月二日(土)開場午後一時半
開演午後二時
名古屋能楽堂

能組

一管　秘曲　津嶋　藤田六郎兵衛

お話　南山大学教授　安田　文吉

能　安宅　瀧流
片山　清司　観世銕之丞
福王茂十郎　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
間　井上　靖浩　佐藤　融

主催　藤田六郎兵衛
藤田・龍吟の会
共催　中日新聞社
中部日本放送

［入場料］（全席指定）
A席一二、〇〇〇円
B席一〇、〇〇〇円
［チケット取扱い］
チケットぴあ（0570・02・9999）
藤田六郎兵衛事務所（052・571・6341）
お問合せ・お申込み＝藤田六郎兵衛事務所

橋岡久馬一周忌追善 名古屋橋岡会

七月三日(日)午後二時始
名古屋能楽堂

仕舞　通小町　岡田　晃一
楊貴妃　梅田　邦久
船弁慶　梅若　雅一
独吟　当麻　梅若　修一
舞囃子　融　観世銕之丞
狂言　魚説法　野村　萬斎

能　道成寺　橋岡久太郎
安田　登　河村総一郎　後藤嘉津幸　徳田　宗久　藤田　次郎
間　野村　萬斎
後見　浅井　文義　吉田　重雄　清沢　一政
観世銕之丞　小出　年彦　久田　勘鬼
西村　高夫　地謡　宮下　功　梅田　邦久
荒木　亮　祖父江修一
鐘後見　梅若　修一　梅若　雅一　坪内芚路之
岡田　晃一　梅若　基徳

主催　名古屋橋岡会

［有料］
S席一五、〇〇〇円　A席一二、〇〇〇円
B席一〇、〇〇〇円　学生席五、〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ、ローソンチケット
橋岡会（TEL043・462・7720）

世界劇場会議名古屋　ITCN文化賞　岩田はるみ氏受賞

特定非営利活動法人世界劇場会議名古屋では、5月14日定期総会を開催、2005年度事業計画、新役員を決定したが、同会議は恒例の「ITCN文化賞」の受賞者として、岩田はるみ氏（名古屋能楽堂・豊田市能楽堂企画運営委員、中日文化センター講師）を決定、授賞式が行われた。［写真］

なお当日、中日劇場照明課長・内藤収啓氏も受賞した。

ITCN文化賞は、地域の劇場文化を支えることに貢献した人を表彰することにより、その業績に敬意を表するとともに、広く社会に対してそうした人々の存在と価値の周知を図ることを目的とし、舞台芸術の制作、劇場技術など舞台芸術の基盤を支える領域で活動する人々を対象に選考されており、今回で第9回になる。

［岩田はるみ氏の受賞理由］

名古屋で様々な流派の公演がみられるようにと、名古屋能楽鑑賞会を主催、能楽の普及につとめた。また名古屋市生涯学習センター、安城市、豊田市、江南市の能楽講座を企画、能楽イヤホンガイド名古屋を主宰、長年にわたって能楽の愛好者を増やしつづけ、能楽の普及につとめてきた熱意と実績は目覚ましい。

名古屋能楽堂定例公演　市民能楽セミナー

七月八日（金）午後六時半開演　名古屋能楽堂

（和泉）狂言　梟山伏　山伏　佐藤　融　兄　佐藤　友彦　病人　今枝　郁雄　後見　井上　祐一　前ツレ　梅田　嘉宏　後ツレ　高橋　暸一　古橋　正邦

（観世）能　賀茂　高安　勝久　杉江　元　椙元　正樹　井上　靖浩　間　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤　洋輝　鹿取　希世　後見　今沢　美和　梅田　邦久　地謡　外山　圭一　本田　勲　須部　甫　松山　幸親　加賀　敏彦　祖父江修一　久田　勘鬼　清沢　一政

（終了予定午後九時頃）

［入場料］前売一般二千五百円、学生千五百円（当日一般三千円　学生二千円）

［取扱所］名古屋能楽堂（052・231・0088）チケットぴあ（0570・02・9999）市内各プレイガイド

主催　能楽普及事業実行委員会　名古屋市・(財)名古屋城振興協会　(財)名古屋市文化振興事業団

協賛　能楽協会名古屋支部

井上祐一改め　4世井上菊次郎襲名記念　第6回　御酒落名匠狂言会

七月十日（日）午後一時半開演　名古屋能楽堂

（素囃子）獅子　大鼓　河村総一郎　小鼓　福井啓次郎　太鼓　助川　治　笛　藤田六郎兵衛

狂言　組

（和泉流）二人袴　親　野村　萬　太郎冠者　小笠原　匡　聟　野村　万蔵　野村太一郎　（後見　野村　扇丞）

（和泉流）清水座頭　座頭　井上祐一改め菊次郎　替女　佐藤　友彦　（後見　大野　弘之）

（語り）奈須与市語　三宅　右近

（狂言小舞）鮒　野村　萬斎　地謡　井上　靖浩　井上菊次郎　佐藤　融

（狂言小舞）海道下り　野村又三郎　地謡　松田　高義　野村小三郎　佐藤　野口　隆行

（大蔵流）悪太郎　悪太郎　大蔵彌太郎　伯父　善竹忠一郎　出家　大蔵吉次郎　（後見　大蔵千太郎）

（和泉流）千切木　太郎　佐藤　友彦　当屋　井上菊次郎　太郎冠者　佐藤　融　講の者　大野　弘之　今枝　靖雄　今枝　郁雄　鷲見　政行　鹿島　俊裕　女　井上　靖浩　（後見　野口　隆行）

［有料］（前売・全席指定）S席七五〇〇円　A席五五〇〇円　B席三五〇〇円　当日券はいずれも全席五〇〇円高

チケット取扱い　チケットぴあ（0570・02・9999）（Pコード360・963）

狂言共同社（052・834・6112）佐藤友彦方（052・911・8784）

主催　狂言共同社　後援　愛知県・名古屋市　名古屋市文化振興事業団　中日新聞社

第6回　伝統芸能上演会

――伝統芸能を次世代につなげるために――

七月十六日（土）開場十一時半　舞台経験＝一時～二時、上演会＝二時半始　名古屋能楽堂

舞台経験（一時～二時）能面をつけて橋がかり舞台を歩く。和楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓・尺八・胡弓・箏）などに触れていただく。

おけいこ発表　はるがすみ　うたい　筧　純太朗（五歳）　あしらい　筧　明香里（小3）

番組（二時半始）

狂言　柑子　太郎冠者　佐藤　友彦　主人　佐藤　融

半能　天鼓　シテ　長田　驍　ワキ　飯冨　雅介　笛　筧　鉱一　鬼頭　義命　後藤嘉津幸　大野　誠　小出　甚吉　長田　驍　後見　加藤　誠子　平塚　昭子　地謡　森　健　和谷　衡市　二井栄太朗　中村　正

平曲　那須与一　今井　勉

明暗本曲　鈴慕　布袋軒　岩田　律園

琵琶　珠取海女　北川鶴昇作曲　振付・立方　西川眞乃女　琵琶　北川　鶴昇　箏　久米　雅子

箏曲　千鳥の曲　胡弓　唄・箏　澤田　孝子　今井　勉

（終了四時半頃）

主催　東海能楽研究会

問い合わせ＝名古屋市中村区下米野三ノ二九　筧　鉱一方　TEL052・451・9797

後援　名古屋市教育委員会　愛知県教育委員会

［入場無料］ご来場歓迎（先着六三〇名）満員の節は会議室テレビでご覧頂けます。

名古屋観世会定式能（四回）普及能

七月十七日（日）十二時半開演　名古屋能楽堂

能　班　久田　勘鬼　女　笹之伝　飯冨　雅介　橋本　宰　間　野村又三郎　野村小三郎　後見　武田　邦弘　梅田　邦久　地謡　八神　孝允　松山　幸親　小島　清　加賀　敏彦　上田　貴弘　梅田　嘉宏　古橋　一政　一英　正邦

狂言　太刀奪　太郎冠者　松田　高義　主　野村小三郎　スッパ　野村又三郎　後見　伴野　俊彦

能　野守　仕舞　女郎花　宮　武田　志房　上田　貴弘　地謡　松山　幸親　小島　一英　梅田　邦久　高橋　暸一

祖父江修一　高安　勝久　間　佐藤　融　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　鹿取　希世　後見　梅田　嘉宏　武田　志房　地謡　外山　圭一　本田　勲　須部　甫　高橋　暸一　清沢　一政　久田　勘鬼　武田　邦弘　古橋　正邦　（終了四時半頃）

附祝言

※当日券五〇〇〇円

主催　名古屋観世会

戦後名古屋能楽史　66

〔第十五章〕　昭和三十六年（一九六一）　竹尾　邦太郎

（承前）

脇方高安流宗家高安滋郎の開口文。「それ出離生死の教さまざまにありとはいえど、末代の凡夫、無明の闇にまどひし時、祖師聖人、現はれまして、ただ弥陀仏の他力の悲願に帰依しまつれと、示し給ひし法の水、遠く流れて百歳を、七度かへり、念仏は、大和島根にあふれつつ、大海原波路はるけき、外国までも及ぶなり、げにもこの春は、いよいよさかゆく法の道、めでたかりける時とかや」

因に五十年前の六百五十回遠忌能のときは、脇宝生流宗家宝生新の開口、開口文は次の通り。「夫れ明きらけく治まれる、御代の御恵にいや栄え行く法の場、二の御堂三の門高く築きて、百年を六たび十年をかへり過ぎし昔を、大君のおほし召されて、賢くも大御しるしの菊の花匂ううつわの白銀に、黄金の花をとりそへて下し給へる、喜びの声に合せて、御仏の御名を唱うる諸人の、ゆすり満ちたるこの春は、幾久しさの限りなく、目出たかりける時とかや」

この盛儀に招請された田鍋惣太郎は当日、九世福井五郎七回忌追善能で辰己孝の「橋弁慶」を済ませてからの京都行き、片山博通・博太郎父子の「猩々乱・置壷・双之舞」を勤めたが、この式能のパンフレットに寄せた文章は『金剛』誌第16巻第2号に転載される。以下それを紹介する。

五十年前を偲んで　御宗祖親鸞聖人七百年御遠忌能が愈々花の四月にくりひろげられることとなりましたことは、二度のお勤めのできる私として、こんな感激はございません。過ぐる六百五十年のお能の節は、私はまだ若輩でしたが、お世話をしていられた金剛謹之輔さんや、先代茂山千五郎さんのおはからいで、初日先代梅若万三郎さんの「鉢木」、二日目桜間伴馬さんの「自然居士」の小鼓に奉仕させていただきました。初日の「鉢木」を済ませて宿へ帰って休み、翌朝まだき、眼をさますと、今済んだところだ、と切能の喜多さん御一行が宿へ帰ってこられました。未明から未明へ、一日のお能が一昼夜にわたって行われた程、この時の御遠忌能は大へんなものだったことを覚えています。

数少ない二度のお勤めのできる者の中の一人として、ながらえてきた年月を思い、五十年前をふりかえって感無量です。

また、同じく片山博通は次のように言う。

大遠忌能記録　明治四十四年五月一・三の両日、東本願寺大師堂で催された、宗祖六百五十回忌の法楽式能は、能楽史上でも稀に見る大能であった。その舞台をつとめた人で、現存するのは喜多六平太・茂山千五郎・茂山弥五郎・田鍋惣太郎・杉市太郎の各氏等十名あまりに過ぎない。

当時の記録を見ると――　一日は真影へ奉奠の事とて、午前八時に至り、真影の扉を開き法主をはじめ、出演の諸楽師一同に至るまで焼香をし、能奉行たる石原家従は大紋素袍の扮装にて霊前に進み、式能の報告をなせり、此間舞台に到るまでの間は一人の観覧者をも座せしめず、右終りて楽師一同は楽屋へ入る。石原家従は次いで白洲の三段を上り、橋掛まで来り、「始めませい」と云えば、声に応じて幕は上り、当年五十八歳の御能御用掛金剛謹之輔翁、翁装束にて半白の頭を垂れ恭しく一礼をなす。翁の得意思うべし。（以下略）

この大能二日間、全部が終ったのは、四日の午前三時であったということである。

更に田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』の中で本願寺能について次のように言う。「能楽協会報五号に幸祥光氏が明治四十四年の東本願寺六百五十年遠忌能の番組を紹介されていますが、茂山忠三郎氏の松竹風流のにこにこした笑顔も忘れられないものでありました。昭和三十六年四月二十九日に七百年の遠忌能がありまして、私も片山博通・博太郎両氏の乱置壷双ノ舞をお相手致しました。この時は茂山千作（現）氏が世話人となられていました。その時のお話で、両会に無事出演しているものは十人ありません、と。そこに居合せた喜多実氏が、僕は前の時来てるよ、と。番組によると初日のトメ船弁慶に六平太氏のシテに子方でしたね。そういえば私どもが勤めを了えて宿で一睡したところへ喜多さんたちが帰って来られたのですから、暁近かったようです。何しろ翁と祝言岩船の間に能八番、狂言七番、一調・囃子各一番という大番組だったのですから」

『狂言』紙四十五号も歌村彦四郎のコラム「狂言人語」で次のように取り上げる。本願寺御遠忌能

五十年に一回の式能　本年は名古屋より田鍋惣太郎・高安滋郎の二氏が参加され、ワキ方の高安氏はこうした式能しか行はれない「開口」と云ふものを演ぜられました。

五十年前には故宝生新氏の開口でした。当時は当地より亡父井上菊次郎と伊勢門水氏、亡兄鉄次郎

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

・新三郎の二人。私は若年のため後見でしたが、思へばそれから五十年生きた訳であり、感無量であります。

ついでながら茂山弥五郎氏よりの所信の一節を御披露いたします。「去る四月二十九日京都東本願寺御年忌能楽に参勤して二回目の出頭記録を致しました、過去現在に於て感慨極りなく、今日に於て眼裡に蔵するは故井上菊次郎大人翁様の末広がりを拝見した御芸事で御座りました。今アノ国宝末広がりは月の都へ持って登られました。当時東西を通じ和泉流での御芸事は菊次郎翁様の右に出る人がないと実に感激し、得難い教訓を得た生涯の歓喜を持っております。

アノ御芸事の御人様が浮世に似た人もないとは……。今若い人は気の毒です、本格の狂言を見ておらぬから知らぬ訳で、書物で覚え舞台へ出れば狂言に成っていると思うので、結構な芸事が表現する事は望み難いのです。

注視せらるる目は恐ろしく、良き狂言を舞台へ顕はさねばなりません」

なお現・能楽協会名古屋支部所属の能楽師の中で七百年御遠忌能に出勤したのは「猩々乱・置壷・双ノ舞」の地謡に連なった梅田邦久(29)と喜多流「親鸞」のツレ長田驥(25)がある。「親鸞」は土岐善麿の新作能、これにつき作者は『新作能縁起』昭和五十一年六月八日・光風社書店刊の中で次のように述べている。

この一曲は、昭和三十六年四月二十九日、親鸞聖人七百回大遠忌の法楽として、京都東本願寺の舞台に喜多実氏初演のものであるが、しかし、もともとは、こうした事情のために特に新しく作ったものではなく、すでに十年余以前に、この構想をまとめて、詞章は昭和二十五年二月発行の「喜多」新春号誌上に全文を掲出し、『摂取の能面』（昭和三十年六月刊）に収めておいた。当時、上演の予定があったわけではなく、いわば作者の私案試作として公けにしたものである。その理由は、戦時中、本山からの委嘱をうけた「顕如」が上演され、また戦後、二十三年四月二十四日に、交響曲「蓮如」が清水脩氏の作曲により、「宗教音楽の合唱と管弦楽演奏会」で日比谷公会堂に発表されたことがあったため、わたくしとしては、宗祖親鸞に関する題材のものを任意にまとめておいたのである。

こうした事情と相前後して、喜多氏からは、新作能として、「大海の舞」ともいうべきものをやってみたいという希望が出たため、ただちに「実朝」を書いて、これは同年中に初演が催されるにいたった。そして「親鸞」の初演は大遠忌に際会して実現し、わたくしの素懐も遂げられた。実演にあたり、詞章に改修を加えたことは、いうまでもない。

後日、中部日本新聞五月一日夕刊に西田三好は「みごとな熱演ぶり」と「親鸞」観能記を寄せる。

「前場は稲田の里の田植えどきである。小面の面を掛け笠をつけ唐織片袖脱いだ姿の三人の早乙女が手に籠を持って登場、田植えの舞を舞う。そこへ曲見の面に水衣、笠をつけた中年の気品優れた女（シテ）が出てくるが、越後の配所から関東へ赴く恵信尼である。ワキの旅僧に下妻の夢想を語って中入り。間は七五三・千之丞の二人、蓮の花笠（自作）をかぶり田楽法師の風体で、田植えの小舞を面白く、うたって舞い、聖人の御遺徳を語り、更に念仏を唱えて舞いながら去る。

後場ではシテの親鸞聖人が述懐を伝えて、喜んで舞うのである。前は早乙女に田楽法師、と盛り沢山な田植え風景。何れも捨て難いが簡素化されるべきであろう。眼目は〈述懐〉である。謡言葉では無く素の言葉で、後シテの出に幕内で語るのであるが、マイクを使って聞かせていたから気分がピンとこなかった。工夫の余地あるところだ。勇躍歓喜の舞は五段の寸法であって初段以後笛がバンシキ調となり二段で扇を懐中して合掌の型で舞うのが創意である。幕際までいって、囃子の流しで舞台へ帰るなど、舞そのものに新味を盛っていくのが、この人達の新作技法だ。ここでは大五郎の笛の力強さ、春雄の大鼓の荘厳な掛け声、惣右衛門の太鼓の爽やかさなど囃子方の努力は極めて大きい。喜多の新作ではシテ・地・囃子がいつも一丸となって、取り組んでいるが、こんどもその効果が気持ちよく出ていた」　なお右のマイクを使った件、『金剛』誌のコラムには「喜多流の〈親鸞〉はこの日の呼びもので、全員東京勢でかため、水も洩らさぬ布陣であった。曲中で、鏡之間からマイクによって〈陰の声〉を聞かせるなどの新機軸も行われ、京洛ファンを驚かせた」とある。曲の特異性からか名古屋での上演は無い。平成二十三年（二〇一一）は七百五十年大遠忌、法楽能はどうなるだろうか、気になるところである。

五月五日・子供の日、第三回朝日狂言会は子供の日にも相応しい番組と言えようか。「鼻取相撲」山本光次郎、「文荷」茂山幸四郎・圭五郎・弥五郎、「井杭」石田喜樹、素囃子「羯鼓」篤三男・田鍋惣一郎・西尾孫太郎、「釣狐」大蔵弥太郎・茂山喜三、「棒しばり」河村丘造・野村又三郎、「髭櫓」和泉保之・井上松次郎。大蔵・和泉両流宗家と名人弥五郎の一門が来演の豪華版で、案内リーフレットも三ツ折の此の頃では珍しい瀟洒なもの（写真）である。

――以下次号――

◆春から初夏への舞台◆

「第廿七回邦謡会」「第八回ござる乃座」「観世会」「第卅九回鳳の会」と「第九回鏡座」「第四十八回やるまい会」

竹尾邦太郎

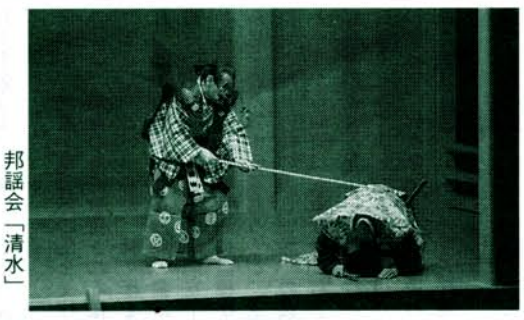
「鉢木」　名門職分家の嫡子はいざ知らず観世流職分推挙の例は希有。流儀への積年の功績認められ、晴れて職分昇格成る梅田邦久、自祝に勤める「鉢木」に面目を施し（写真）意気揚々たるシテ佐野源左衛門常世の姿をみせる。

雪中の運ビ慎重に一ノ松、「あ

邦謡会能㊤「鉢木」、㊦「猩々乱」（杉浦賢次氏撮影）

あ降ったる雪かな」と眺める嘆声は、面白からずの雪の日の道の難儀、降り積った雪の時間の経過を己が道の苦節の歳月に重ね合わせ象徴的だった。（1時間40分）

「清水」　主・高義に茶の湯の水を汲みに遣らされる太郎冠者・又三郎、たかが水汲みに、と日頃の鬱憤が爆発、鬼が出て手桶を投げつけ逃げ帰った、の口実。しかし、主には秘蔵の手桶が大事、探し出すと強硬な態度にそうはさせじと太郎冠者、鬼に化け（写真）主を脅す。一度は成功するも図に乗り喋々する裡、鬼の声色に気付かれ企みは露見。晴らす鬱憤が鬼を怖がる主の反応に、待遇改善要求も調子づき、からかい半分になる辺り、又三郎流石老練。（19分）



邦謡会「清水」

「猩々乱」　邦久の芸事嫡養子・嘉宏の披キ。眼目の乱レ足（写真）美しく、流し足では小刻みに速度を上げ流れてゆくところなども鮮やか。膝を高く上げ跳び上がる様な乱レ足には酔いの昂り、若さの躍動をみた。将来、綺麗なだけの小器用に陥らないように望みたい。（42分・3月20日・第27回邦謡会能）

「清水」　それが茶の湯の水であろうと、水汲み如きの雑用「エーイ」と命じるだけ命じ返事も聞かぬ主・博治。まともな御用なら「ハァー」と受ける太郎冠者・万作も癇に障り「アァ」と反発する。同じ和泉流も又三郎派と異なり三宅派の太郎冠者は情強。されば手桶に固執する主を鬼に化け懲らしめるところ、玩弄するというより挑戦的な印象。（25分）

「法師ヶ母」　法師はかな法師、即ち男児。酒乱の夫シテ萬斎、酔いの勢いは手切れのしるしに着ている熨斗目一枚で妻・幸雄を叩き出す理不尽。当今の所謂DV（家庭内暴力）の一景だが、妻が引き離された吾子を気遣う一方で、夫は酔いが醒めれば吾子そっち退けに恋しきは法師ヶ母。捜し求めさ迷う態の二度のカケリも、第三者が見れば子も捨てて逃げた妻を尋ねる図式。己が不都合を棚に上げ、耳目を驚かすかのあざとい夫の軽薄さ、萬斎活き活きとみせる。地頭・万作、囃子は学・孝一郎・眞之介。（31分）

「骨皮」　檀那に物を貸し損料を取れば吝嗇、となれば対面保持には貸さぬに如くはない、が信条らしい住持・万之介。それが檀那あしらいの要諦なのだが寺を継がせた新発意シテ萬斎、馬鹿正直にも俄雨に結構な傘を貸与、檀那あしらいの大事実践を喜々として報告に及べば、傘は荒天で骨は骨、紙は紙、と吹き散らされ無益と断れ、と小言食う始末。二人目が馬を借りにくると、今度こそはと先の「骨は骨」を鵜呑みの応対。呆れ退散の檀那にこちらも呆れる住持は、馬は駄狂いで役に立たぬ、の口実を伝授する

（④面へつづく）

十二世・野村又三郎　斯道八十周年記念

狂言 也留舞会
謡曲 信謡会　合同発表会

七月十八日（祝・海の日）十時三十分開演
名古屋能楽堂

末広　果報者　伊藤　悦子　太郎冠者　伊藤　泰　スッパ　伊藤　琢史
痺柿　山伏　畑中　春華（小学六年生）　太郎冠者　小林　昌義　主人　奥津　健太郎
山伏　柿主　三浦　思季（小学六年生）
呂不須　旅僧　松本千賀子　太郎冠者　磯村　美和　次郎冠者　水原　みわ
蓮須　男ノ妻　野村小三郎　野口　隆行
狂言小謡　貝尽し　主人　藤波　徹　中日文化センター　狂言教室
竹生島参　太郎冠者　大矢梨沙子（小学六年生）　主人　松田　高義
独吟　高砂　キリ　柴田　鏡子
飛越　新発意　加藤志津子　何某　野村又三郎
狂言小謡　七つになる子　如月会
口真似　太郎冠者　田端　奏衛（小学五年生）　主人　三浦　思季（小学六年生）　客　水原　みわ
独吟　草子洗小町　ロンギ
祐善　祐善ノ霊　吉村由紀子　旅僧　松田　高義　所ノ者　伊達　義子　三宅　千生
狂言語　那須語　伴野　俊彦
昆布売　昆布売　杉澤麻里子　何某　柴田　聖子
独吟　三輪　クセ　平山みよ子
蝸牛　山伏　山内　理至　主人　服部　和洋　太郎冠者　原　有作
仕舞　蝉丸　道行　東松由美子
重喜　住持　伊達　義子　重喜　伊達　義也（小学二年生）
独吟　菊慈童　キリ　田中　芳子
萩大名　大名　庄司　武　太郎冠者　吉村由紀子　庭ノ亭主　野村小三郎
佐渡狐　佐渡ノ百姓　東松　舞　越後ノ百姓　安保　育子　奏者　野村又三郎
貰聟　男（聟）　田嶌　晴雄　男　中山　芳文　おなあ　東　信彰
（祝言）福之神　福之神　徳田　文三　参謡人　服部　和洋　参謡人　原　有作
御来場歓迎（入場無料）　（終演予定　午後五時三十分頃）

主催　和泉流　観世流
特別参加　熊本　也留舞会　信謡会　みのる会　如月会
中日文化センター
指導　十二世　野村又三郎　四世　野村小三郎　師範格　野村事務所
問い合わせ先　名古屋市中区平和一丁目二〇―四　電話（052）350―7971

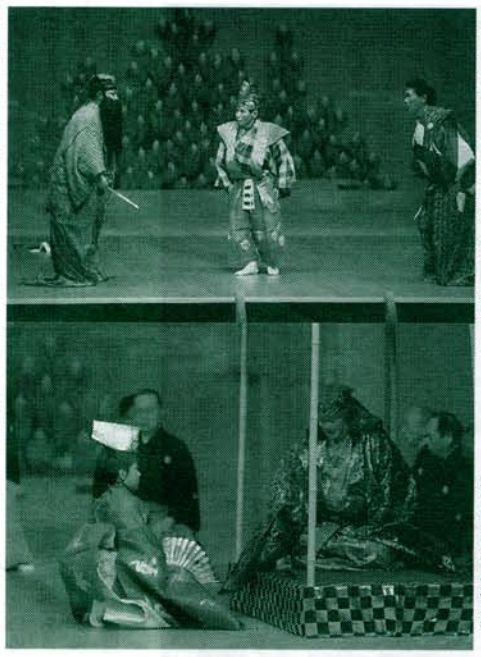
（③面よりつづき）

が、三人目の檀那が住持を斎に招けば駄狂いを口実に断ってしまう。「駄狂ひ」とは牡馬が牝馬に発情してかかること、激怒する住持に下世話には通ずるらしい新発意、俄然反発していちやとの情事を暴露する。白小袖着流シの万之介、如何にも気障で色好みの隠居住持の姿をみせれば、才走っている様で先走る粗忽な萬斎が旨く絡み生気溌剌。（25分・4月3日・第8回ござる乃座）

「隅田川」　シテ慶次郎。感情過多になりがちな人物像が抑制された演出で、嘗て此の国の女人に普遍的であった辛苦悲哀を耐え忍ぶ勁さが的確に表現され、却って哀切の思い深くする。理智的端正な芸風（と思う）は、船中を挟み前後の心象を鮮やかに描き出す。

吾子を尋ねる前途の不安、カケリから渡しに着くまでの独りぼっちの焦燥は、乗船して心悸は鎮まるも、ワキ語（雅介）を聞くうち身体は硬直の相。ワキとの問答に一縷の望みも断たれ、気力阻喪するが上陸あと、塚に対面してシオリこそすれ覚悟は取り乱すこと無く〳〵草茫々、と静かに塚をさすり下ろすだけ。シテの胸中、芥川龍之介の短篇「手巾」に登場する西山憲一郎の母なる人を思い出した。子方は味方葵君、初めから塚の中に居たと思ふと辛抱強さに可憐さも一入だった。（1時間26分）

名古屋観世会「隅田川」片岡慶次郎師（杉浦賢次氏撮影）



㊤「井杭」、㊦「邯鄲」名古屋観世会（杉浦賢次氏撮影）

「井杭」　親愛の情だろうが頭を叩かれるのは不快、と清水の観音に祈願して隠れ頭巾を授かる井杭シテ又三郎、子方が演ると無邪気で可愛いく憎めないが、小柄とはいえ又三郎は老練、達者過ぎて小狡く立ち回る印象否めない。失せものを占う算置・小三郎は陽気過ぎて占い師のカリスマ性は稀薄。（22分）

「邯鄲・藁屋」　小書で引立大宮に替わる大藁屋は如何にも邯の旅籠、そこに投宿する豪華な装束をまとう盧生シテ六郎、栄華の夢の金殿玉楼の中と、夢醒めてからの藁屋の中との余りの落差の大きさに、人生を直視させられ、羊飛山の高僧に教えを乞うまでも無い、と悟り得る。

夢中、舞童・勘吉郎の酌を受け（写真）、舞童の舞に触発される様に「よし」という心か、軽く床を打つ態から立つと舞う台上の楽は柔らかく伸びやかに大きい。空下りは浮かれて巫山戯け心に高楼から足を踏み外す仕草だろうか。空は天と地との間の虚しい処、の義というから如何にも象徴的。右手に柱を掴み、左足下ろし、床（地）に着くとみて颯と引き上げる辺りの無邪気、何か微笑ましい。いわゆる飛込みは、〳〵ありつる（邯鄲の）、と二ノ松から走り出ると、拍子を踏まず台に上がりころりと横臥、文字通り拍子抜けする程の穏やかさで外連味毫も無く美事だった。（1時間17分・4月10日・観世会）

「人を馬」　新参者を召し抱える大名物の一。新参者の芸は人を馬にする、という曲名からして人を喰ったもの、上演は少ないが平成五年やるまい会（耕介・良介・史高）、十二年壷泉会（又三郎・高義・小三郎）がある。今回は友彦・靖浩・祐一のトリオ。大名友彦の命で否応なく実験台にさせられ、もしも、を思い不安に怯える太郎冠者靖浩と新参者祐一との間に連帯感が生まれ、相談づくで事が運ばれる。「ヒヒーン」と嘶かせておき（写真）、早く馬にと急かせる大名に「腹中は馬になりましたが五体がなりませぬ」と焦らすところなど、祐一食わせ者の面目躍如。所詮は不可能事で、「嬉しや嬉しや馬にならなんだ、ハーハハハハ」と喜ぶ晴れやかな顔が此のナンセンス劇を吹き飛ばす。蛇足だが、馬になりかかる靖浩の丸顔に、黒沢明監督「椿三十郎」での伊藤雄之助の科白「乗った人より馬は丸顔」を思い出した。（39分）

「伯母ヶ酒」　酒造業営む超しわい伯母祐一から何としても酒を呑まずは措かぬ、の挑戦の気魄十分の甥シテ友彦。取り付く島も無く、余所〳〵しく、素っ気ない伯母は、温容なだけに薄情が際立つ。一方、阿諛追従も歓心を買うに至らず、と臍を固め、鬼に化け脅しても初志貫徹の執念は、痩身細面の甥に凄み。前場が佳。（29分）

「仁王」　常の演出は首尾よくお供え物を手にした偽仁王が、独りで大草鞋を寄進にきた蹙に患部に相当する足を撫でられ、擽ったさに化けの皮が剥がれるというものだが、今回の共同社蔵の台本・雲形本に拠る演出は、蹙・俊裕が切戸へ退くと、阿形だった仁王・祐一は吽形に変身、金剛杵もつ印相も替えれば、別の参詣人達を連れて先回も同行した先達・靖浩が不審し、皆で擽り（写真）偽仁王が露見する。登場人物十一名、名古屋和泉流狂言共同社の充実ぶりを発揮する。（34分・4月17日・第39回鳳の会）

「金岡・替装束」　上臈に惚れて心こゝに在らず彷徨う絵師金岡シテ小三郎、小書で素袍袴の上は、脱ギ掛ケでなく唐織壷折。髪乱すイメージの黒垂に赤い病鉢巻を締める程に病は膏肓。報われない恋の歌を謡い歩き、独り感傷に浸る金岡、「思ふに耐へない浮世ぢやなあ」とへたり込み、大筆ひしと抱え込んでシオル仰々しさが哀れにも可笑しい。

女は化粧次第、と妻・健太郎に求められ、己が腕でひょっとして美人に、の亢奮をカケリの囃子に乗せ妻のスッピン（素面）に彩管を揮う金岡、出来栄え子細らしく離れて眺め唖然とするところ、細君蔑視を突き抜けた現実直視。（21分）

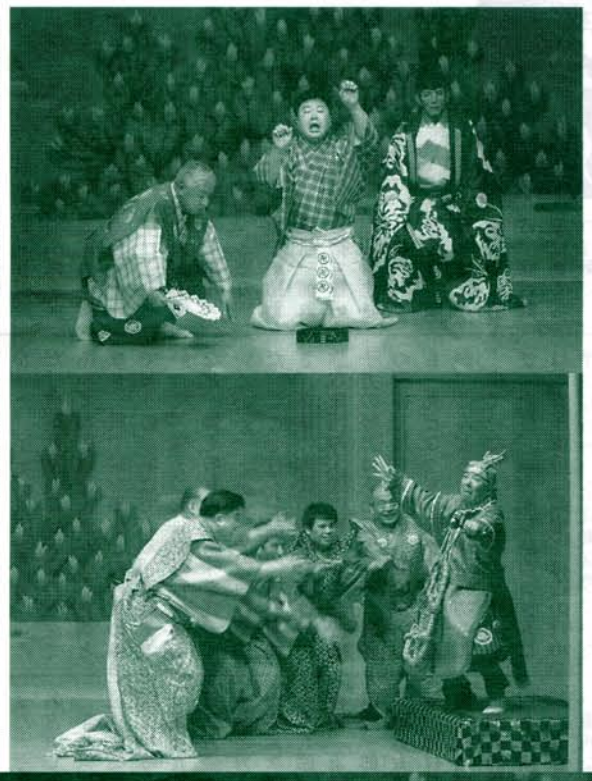
「石橋」　シテ團、ワキ和幸、アイ小三郎、白・赤の獅子が出る半能がむしろ一般的になっているが、間狂言を挟み前後の通し。前シテは童子、ワキ寂昭法師との出会いに石橋の謂れ、奇観を説くクセ、姿は〳〵弓を引ける形、渡橋には要〳〵神変仏力、とワキへぐっとアシラフところ説得力をみせ、対岸にやがて影向あらんと静寂境の中を消えると、唐帽子（?）面鼻引（か）小格子着付・黒絽水衣・金地袷法被（袖折込）の装束も珍しいアイ仙人が出る。登場楽なく、幕から「あーら奇特の折柄やな」と大声を出して運び、常座へ出れば「あーら有難の時節やな」の喜悦。幽谷は獅子が出る物凄まじい霊気に打たれて舞うと、〳〵勇みをなして帰りけり、と常座で拍子二ツ踏み、深閑とした中を退いて行くのが弥が上にも獅子出現の期待を高める。

紅白牡丹立木一畳台各一を正先に、後シテ獅子が乱序の囃子（誠・嘉津幸・眞之介・光範）で下半身半幕で見せて一旦姿を消すと、小鼓と太鼓の露ノ拍子に鎮まるが、再び大鼓と笛が加わり、獅子は疾駆して一ノ松、軽快に飛び跳ね、退って加速を付けると舞台へ入る。獅子の舞は、牡丹に戯れ欣喜雀躍、伸び伸びと力強く舞い、萬歳千秋と〳〵舞ひ納め、で飛び上がりざま台上に組落シも鮮やか。地頭・邦久、主後見・喜右衛門。鏡座同人各役の意欲が充分発揮され、珍しい独り獅子にアイ仙人の出る演出、面白かった。（1時間10分・5月4日・第9回鏡座）

「通円」　旅僧ワキ祐一、通円という茶坊主が宇治橋供養の折、大勢の人々の茶の接待に当たり、遂に点て死にしたことを所ノ者アイ靖浩から知り、跡弔っていると通円ノ霊シテ又三郎が出現、最期の有様を仕方と舞に見せる。正中、床几の語は能「頼政」のパロディ、茶筌の穂先を揃えてここを最期と点て掛けるところ（写真）、〳〵流石名を得し通円が、から団扇で舞うカケリ、キリに橋懸へ抜け〳〵茶ち隠れ失せにけり、と一ノ松から舞台へ団扇見事に投げ捨てて留拍子踏むまで、又三郎柔らかな身のこなしは齢を感じさせない若々しさ。舞狂言の中でも好んで舞うのが此の曲というが、円熟の境。地頭小三郎。（29分）

「鈍太郎」　鈍太郎シテ忠三郎、妻アド伸元、妾アド良暢。無音を重ね、久々に帰洛するも妻妾二人ともから屈強の男と再婚したことを聞かされ、玄関払いを食う鈍太郎、無常を感じ剃髪する。それを知り、私達のために世捨人にさせるのはお気の毒、可哀相の女心に訴え、まんまと二人を籠絡する手並みの巧妙。満面に笑みを浮かべ、為て遣ったりと女二人の手車に乗ってゆく得意、嫌味になりようもないおおどかな忠三郎の個性の勝利。（44分）

「骨皮」　新発意シテ小三郎、借りものに来る檀那との応対は、住持・又三郎の助言が一人づつずれて頓珍漢。とどのつまりは折角の斎の馳走の誘いを「駄狂ひ」理由に無にされて怒る住持が、新発意にいちやとの情事暴露される藪蛇、小三郎の天真爛漫ぶりが楽しい。（26分・5月15日・第48回やるまい会）



鳳の会㊤「人を馬」佐藤友彦、井上祐一、井上靖浩、㊦「仁王」井上祐一、佐藤融ほか（杉浦賢次氏撮影）

やるまい会公演　㊨「通円」野村又三郎、㊧「鈍太郎」安東伸元、茂山忠三郎、茂山良暢（杉浦賢次氏撮影）

協会名古屋支部 下半期の演能

能楽協会名古屋支部主催の本年後期の演能の日程は、本紙1月号既報のとおりであるが、演目は次の予定である。

◎**名古屋薪能**　八月六日（土）熱田神宮境内特設舞台、午後五時三十分始　能（観世流）「経正」（シテ前野郁子）▽能（宝生流）「羽衣」（シテ佐藤耕司）▽能（観世流）「殺生石」（シテ梅田嘉宏）▽狂言　未定　ほか仕舞

◎**豊田中学生能楽鑑賞教室**　八月二、三、四日、能「羽衣」狂言一番▽八月二十三、二十四日喜多流能▽八月二十五、二十六日宝生流能

◎**「愛・地球博」記念能**　九月一日、ささしまサテライト会場　午後六時　半能「橋弁慶」（衣斐正宜）▽能「鞍馬天狗」（久田勘鷗）▽狂言「茸」

◎**初秋能**　九月四日（日）第一部十時始　能（宝生流）「巴」（竹内澄子）能（観世流）「藤戸」（高橋瞭一）▽第二部二時始　能（観世流）「屋島」（梅田邦久）能「船弁慶」（前・今沢美和、後・清沢一政）

◎**小牧市薪能**　九月十七日（土）午後六時　半能（観世流）「小督」（祖父江修一、ツレ本田勲、トモ松山幸親）▽能（観世流）「土蜘蛛」（シテ梅田嘉宏、胡蝶・星野路子、トモ須部甫）

◎**歳末助け合い協賛能**　十二月四日（日）名古屋能楽堂　能（喜多流）「巻絹」（長田驍）▽能（観世流）「隅田川」（泉嘉夫）▽能（宝生流）「女郎花」（玉井博祐、ツレ衣斐愛）

支部相談役に 後藤孝一郎氏

能楽協会名古屋支部は、六月五日（日）熱田神宮能楽殿で平成十七年度総会を開催、新支部長に就任した梅田邦久氏から、「能楽の発展、協会支部の活動に微力を尽くして努力するとともに、支部皆さんのご支援、ご協力を賜りたい」と就任のあいさつを述べた。また春の褒章で旭日双光章を受章したシテ方泉嘉夫、小鼓方福井啓次郎の両氏に支部から祝意を表した。

また新たに相談役として小鼓方後藤孝一郎師が推せんされ、決定した。

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成17年7月～17年8月）

◆NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

7月24日	「錦木」（再）（宝生流）	今井泰男ほか
7月31日	「伊文字」（大蔵流）	大蔵吉次郎ほか
8月7日	「橋弁慶」（再）（金剛流）	豊嶋訓三ほか
8月14日	「船弁慶」（再）（観世流）	角寛次朗ほか
8月21日	「素謡集」（喜多流）	友枝喜久夫ほか
8月28日	「安宅」（再）（観世流）	八世観世銕之丞ほか

◆NHK教育テレビ　（21:00～24:15）
8月28日　半能「石橋～師資十二段之式」
シテ　関根祥六

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（能楽関係公演のみ）
（TEL 052－231－0088）

［8月］

9日㈫	第1回名古屋青雲会	（無料）（番組②面）
20日㈯	青陽会	（有料）（番組②面）
21日㈰	七彩会	（無料）
28日㈰	衣斐正宜後援会能	（有料）
31日㈬	名古屋学生能楽連盟例会	（無料）

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－671－0852　文化殿）
8月6日㈯　名古屋薪能
（神楽殿前）（番組②面）

第4回 名駅薪能
7月24日 観世宗家来演

JR名古屋駅・タワーズガーデンで、観世流宗家・観世清和師が来演して、7月24日（日）「第4回名古屋・名駅薪能」が開催される。午後6時開演。

この名駅薪能は平成14年財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会の主催で始めて催され、今回で4回目。

〝真夏の夜の祭典〟として、千人を越える観客の鑑賞で定着してきている。

入場無料、ただし要整理券（600人抽選）、自由席（含立見席）600人。

名駅薪能の開催に当たって、東海旅客鉄道・葛西敬之会長は次のようにあいさつしている。

名古屋玄関口、JR名古屋駅タワーズガーデンにおいて、ことしも観世流宗家観世清和師を招き夏の風物詩「第4回名古屋名駅薪能」が開催される運びとなりましたことは誠に喜ばしい限りであります。

この伝統芸術を名古屋駅前から世界に発信できることは、中部国際空港が開港し、開催中の日本国際博覧会とあわせて、名古屋にとって大変意義深いものと考える次第であります。ここに開催を祝し、あわせてこの薪能が名古屋の夏の代表的な行事になることを期待します。

能組は次のとおり

観世流能「安宅」勧進帳、瀧流之伝

シテ（弁慶）観世清和、子方（源義経）久田勘吉郎、ワキ（富樫某）福王茂十郎

ツレ（義経の郎等）大西礼久、梅田嘉宏、上田拓司、藤谷音彌、笠田昭雄、上田公威、吉井基晴、古橋正邦、観世芳伸、間狂言（強力）野村小三郎（富樫の太刀持）松田高義

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・山本哲也

後見・橋岡慈観、梅田邦久、上田貴弘

地謡・岡久広、笠田稔、下川宜長、武田邦弘、祖父江修一、上田大介、松山幸親、林宗一郎

和泉流狂言「因幡堂」

野村又三郎、野村小三郎、後見・伴野俊彦

観世流能「土蜘蛛」

シテ・久田勘鷗、ツレ（源頼光）山田義高、ツレ（胡蝶）久田三津子、トモ（太刀持）清沢一政、ワキ（独武者）福王茂十郎、間狂言・井上靖浩、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・山本哲也、太鼓・加藤洋輝

後見・下川宜長、上田大介

地謡・上田貴弘、古橋正邦、吉井基晴、藤谷音彌、大西礼久、角幸二郎、清水義也、梅田嘉宏

名古屋薪能
8月6日 熱田神宮

第40回「名古屋薪能」はきたる八月6日（土）午後5時30分から熱田神宮神楽殿前の特設会場で催される。

観世流能「経正」（シテ前野郁子）宝生流能「羽衣」（シテ佐藤耕司）観世流能「殺生石」（シテ梅田嘉宏）和泉流狂言「茶壺」（佐藤友彦）仕舞金春流、観世流、喜多流、金剛流4番上演。

火入式は熱田神宮・副野禰宜によって行われる。

前売り二五〇〇円（当日三〇〇〇円）　取り扱い＝チケットぴあ、市内プレイガイド、各出演者（番組②面）

問い合わせは、岐阜市市民参画部（058・265・4141）または、岐阜青年会議所事務局（TEL058・264・8090）

長良川薪能
8月5日 長良川特設舞台

〝伝統文化の夕べ〟として毎年話題をよぶ「長良川薪能」は、ことし第19回を迎え、きたる8月5日（金）長良川特設舞台（岐阜グランドホテル前河原）で行われる。演目は次のとおり。

能「絵馬」（シテ観世喜正）

狂言「瓜盗人」（シテ井上菊次郎）

舞囃子「花月」（シテ観世喜之）

主催・岐阜市、主管・岐阜青年会議所、午後五時開場・午後六時開演、入場無料、雨天又は増水時には、岐阜市民会館（岐阜市美江寺町）で開催される。

福井啓次郎氏 受章を祝う会
7月31日 名古屋観光ホテル

能楽小鼓方幸清流職分・日本能楽会会員・福井啓次郎氏（本名・林啓次郎）は、永年にわたり能楽の発展・文化財保護に貢献された功績により、ことし春の叙勲で旭日雙光章を受章された。この叙勲受章を祝う会がきたる7月31日（日）午後6時から名古屋観光ホテルで催される。

祝賀会は、第76代内閣総理大臣海部俊樹氏、鈴木礼治前愛知県知事、藤井知昭愛知県芸術文化協会理事長、笛方藤田流藤田六郎兵衛家元、観世流職分・能楽協会名古屋支部長・梅田邦久氏らが呼掛け人として発起している。

宝生流「青雲会」
全国5カ所で催能

社団法人宝生会、青雲会では、二十数年来にわたって東京だけで行ってきた宝生流若手による「宝生流勉強会」を拡大し、東京・名古屋・金沢・大阪・福岡の五ヵ所で催すことになった。これにより各地若手の活躍・研鑽・交流の場として、全国規模の若手勉強会が発足したのを機に、その名も「青雲会」と改称した。斯道精進に青雲の志を持ち、また流儀文様の「五雲」にもあやかった会名として名づけられた。

「青雲会」実行委員会名古屋代表・衣斐正宜氏は「各地での若手養成事業として青雲会は東京では従来どおり年間3回、その他の各地は年間1回の開催、入場無料で公開、多数の来場を期待しており、地元の能楽師養成のためにも、ぜひご協賛、ご後援をお願い申し上げる」とあいさつしている。

第1回名古屋青雲会は、きたる8月9日名古屋能楽堂で催される。

伺御中暑

名古屋　観世会

暑中御見舞申し上げます

観世清和

幽謳会
片山九郎右衛門
清司

銕仙会
観世銕之丞
観世栄夫

梅猶会
猶颯会
梅若吉之丞

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005
大阪市中央区上町A番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

山本勝一

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603－8123
京都市北区小山下花ノ木町二一
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
高橋瞭一
外山圭一

井上嘉介
井上裕久
〒603－8175
京都市北区紫野下鳥田町六

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306
電話（〇五二）八三二－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）㉓二四五八

観世芳宏門人会
観世芳宏
観芳会
観世芳伸

第40回名古屋薪能

八月六日(土)午後五時半開演
熱田神宮神楽殿前

番組

金春流仕舞　竹生島　廣瀬雅弘　地謡　佐久間祥夫　鬼頭尚久　前田登

観世流仕舞　屋島　武田邦弘　地謡　須部祖父江修一　古橋正邦　松山幸親　伊藤英毅　長田驍郷　小出甚吉　大川磨雅　伊藤雅子　鈴村昌美　羽田野良子　熊谷眞知子

観世流能　経正　前野郁子　椙元正樹　笹之段　武田邦弘　地謡　近藤幸江

喜多流仕舞　鳥追船　和谷衡市　地謡　長田驍郷　伊藤英毅　久田勘鬼　清沢政一　長田一郎　小出甚吉　大川磨雅　伊藤雅子　鈴村昌美　羽田野良子　熊谷眞知子

金剛流仕舞　鵺　加藤かおる　地謡　古橋正邦　松山幸親　伊藤英毅　長田驍郷　小出甚吉　大川磨雅　伊藤雅子　鈴村昌美　羽田野良子　熊谷眞知子

観世流能　経正　替之型　前野郁子　椙元正樹　笠之段　武田邦弘　地謡　近藤幸江

後見　久田三津子　泉嘉夫　地謡　今沢美和　外山圭一　八神孝充　本田勲　船戸鉱一　昭弘　大野誠

火入式　熱田神宮禰宜　副野均

宝生流能　羽衣　佐藤耕司　杉江元　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　柴田勲　石森智幸　外山通夫　加賀山憲治　鬼頭義命　和久荘太郎　衣斐正宜　稲川壽一　久野幸三

後見　玉井博　衣斐愛　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　柴田勲　石森智幸　外山通夫　加賀山憲治　和久荘太郎　衣斐正宜　稲川壽一　久野幸三

和泉流狂言　茶壷　佐藤友彦　佐藤融　井上菊次郎　後見　井上靖浩

観世流能　殺生石　梅田嘉宏　高安勝久　能力　野村小三郎　間　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学　加藤洋輝

後見　加藤春枝　梅田邦久　地謡　星野路子　近藤幸江　黒田博　須部甫　武田邦弘　祖父江修一　高橋暸一　古橋正邦

（午後八時半終了予定）

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市・熱田神宮
名古屋市文化振興事業団

前売二五〇〇円（当日三〇〇〇円）
学生一五〇〇円
雨天順延＝六日雨天のときは七日(日)
七日(日)雨天のときは八日熱田能楽殿
取り扱い＝チケットぴあ（052）320－9999
市内プレイガイド・各出演者

第一回名古屋青雲会

八月九日(火)午後二時始
名古屋能楽堂

舞囃子　高砂　和久荘太郎　地謡　河村眞之介　福井聡介　平田正文　東川尚史　宝生和英　加藤洋輝　竹市学　小倉健太郎　野月聡

俊成忠度　内藤飛能　地謡　佐野玄宜　東川尚史　河村総一郎　後藤嘉津幸　小林晋也　水上優　竹市学　高橋憲正

融　小倉健太郎　地謡　佐野玄宜　東川尚史　河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市学　小林晋也　水上優　和久荘太郎　加藤洋輝

仕舞　春日龍神　佐久間祥夫　鬼頭尚久　前田登

三藤山　キリ　小林晋也　宝生和英　地謡　佐野玄宜　和久荘太郎　水上優　高橋憲正　内藤飛能

能　黒塚　衣斐愛　椙元正樹　飯冨雅介　今枝郁雄　間　河村眞之介　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

後見　衣斐正宜　宝生和英　鬼頭京子　地謡　内藤飛能　佐野玄宜　東川尚史　小倉健太郎　高橋憲正　水上優　和久荘太郎

［入場無料］

主催　財団法人宝生会
名古屋青雲会
協賛　名古屋宝生会
職分・師範一同

問い合わせ先
名古屋市昭和区御器所3－23－19
御器所パークマンション802
電話052－820－5600
衣斐正宜方

青陽会定式能（第49期第3回）

八月二十日(土)十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞　自然居士　前野郁子　地謡　生駒里琴　今沢美和　近藤幸江　久田三津子

能　盛久　清沢一政　杉江橋本元宰　椙元正樹　杉江淳　井上靖浩　間　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市学

後見　今沢美和　武田邦弘　地謡　前野郁子　八神孝充　須部甫　松山幸親　加賀田勘鬼　古橋正邦　梅田邦久　久田勘鬼　武田邦弘　八神孝充　加賀敏彦

仕舞　敦盛　クセ　黒田博　籠太鼓　加賀敏彦　地謡

能　杜若　星野路子　高安勝久　後見　前野郁子　久田勘鬼　地謡　覓鉱一　福井啓次郎　久田三津子　近藤幸江　黒田博　松山幸親　高橋暸一　梅田嘉宏　加賀敏彦　加藤洋輝　大野誠

狂言　膏薬練　今枝靖雄　今枝郁雄　後見　佐藤友彦

能　鵜飼　八神孝充　飯冨雅介　橋本宰　鹿島俊裕　間　河村総一郎　船戸昭弘　鬼頭義命　鹿取希世

後見　近藤幸江　武田邦弘　地謡　星野路子　今沢美和　黒田博　須部甫　梅田嘉宏　祖父江修一　高橋暸一　清沢政一

附祝言

主催　青陽会

［有料］
当日券三〇〇〇円
学生一〇〇〇円

○お問合せ　名古屋市名東区一社三の一六二　久田勘鬼方　電話〇五二－七〇五－一五八五

大西智久

藤井徳三

邦謡会　梅田邦久　清沢一政　須部甫　本田勲　今沢美和　梅田嘉宏
〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五　電話〈〇五二〉八四一－四六三三番

大垣浦声会　稽古場　大垣市伝馬町大垣別院　電話〈〇五八四〉七三－三三六二
浦田保利　浦田保浩　浦田保親
〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町五八　電話〈〇七五〉七八一－七〇三〇

久田観正会　大倉流小鼓　松月会　久田舜一郎　郁諷会　前野郁子　松諷会　松山幸親　星野路子
〒465－0093　名古屋市名東区一社3－162　電話〈〇五二〉七〇五－一五八五

名古屋修諷会　梅若修一

松音会　泉泰孝
〒168－0081　東京都杉並区宮前四－一九－四　電話〈〇三〉三三三二－八二八〇番
泉雅一郎
〒201－0002　東京都狛江市東野川四－六－八　電話〈〇三〉三四八八－二四八五番

財団法人鎌倉能舞台　中森晶三　中森貫太

下田雄三　豊中市曽根東町四－一－一二

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会　一宮竹石諷会　岐阜花諷会　下呂雄諷会　倭文之屋社中

春鶯会　梅若善高
〒560－0084　豊中市新千里南町三丁目18－12　電話〈〇六〉六八三一－七八五四
〒166－0003　東京都杉並区高円寺南4－27－7－903　電話〈〇三〉三三一二－〇五七〇

武田謡楽会　武田欣司　武田邦弘

名古屋正花会　山本博通

名古屋淡交会　橋岡慈観

三交会　久田三津子
〒465－0093　名古屋市名東区一社3－162　電話〈〇五二〉七〇五－一五八五

初陽会　武田宗和　稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル　電話〇五二（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人観正会　TEL〇七八－六九一－五四四九
上田観正会　上田貴弘　拓司　公威　大介

梅春会　井戸和男　良祐
〒545－0004　大阪市阿倍野区文の里3－16－17　電話〇六－六六二一－二二一九

笙月会　中川雅章
〒526－0036　長浜市地福寺町八ノ二九　電話〈〇七四九〉62〇六三〇番

賀水会　桑名賀水会　名鉄百貨店友の会　加賀敏彦
〒463－0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九　電話〈〇五二〉七七一－八九四五番

松盛会　小松勝憲
松舞台
〒511－0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX〈〇五九四〉二三－四五八二

ザ・ベスト・オブ能・狂言2005
愛知2会場で開催

文化庁による2005年度芸術団体重要支援事業として、「ザ・ベスト・オブ能・狂言2005」が本年は愛知地区、福島地区で開催される。主催・能楽協会、社団法人日本能楽会。

愛知公演は、9月13日(火)、14日(水)の2日間、演目は能「土蜘蛛」(金剛永謹、豊嶋三千春ほか)、狂言「千鳥」(茂山千之丞ほか)、解説・武蔵野大学名誉教授・増田正造氏。

会場　9月13日(火)　アイプラザ豊橋（豊橋勤労福祉会館）
開場午後6時、開演午後6時30分
9月14日(水)　扶桑文化会館、開場午後6時、開演午後6時30分

入場料（全席指定）S席3000円、A席2500円
なお福島地区では、11月22日(火)、23日(水)、24日(木)の3日間公演。能「葵上」(寺井良雄ほか)、狂言「千鳥」(三宅右近ほか)で上演される。

金剛家能面能装束展観
7月23・24日金剛能楽堂

京都

金剛流宗家・金剛永謹、財団法人金剛能楽堂財団主催による「金剛家能面・能装束展観」は7月23日、24日の2日間、金剛能楽堂で催される。入場料千円、開館は午前9時～午後5時。2日間とも11時と3時に解説が行われる。

片山家能楽京舞保存財団
能装束・能面展
7月29～31日　3日間

京都

財団法人片山家能楽・京舞保存財団（片山博太郎理事長）は、きたる七月二十九日(金)～三十日(土)、三十一日(日)の三日間、京都の京都文化博物館で「能装束・能面展」を開催する。とくに今回は〝能にみる平家物語〟のテーマで開催、特別企画として三十一日には、大手前大学教授・切畑健氏が研究者の立場から能装束についての講演が行われる。

この催しは、平成9年から催され、今年は9回目。入場者は毎回千人を越え、好評を博している。なお京舞井上流の衣装や小物なども一部展示される。

入場無料、京都文化博物館は京都市中京区三条高倉、TEL075・222・0888。開館時間午前10時～午後6時（31日は午後5時まで）問い合わせは片山家能楽・京舞保存財団（TEL075・551・6535）後援・京都文化博物館、NHK京都放送局、京都新聞社。

大文字送り火能
金剛流「船弁慶」

金剛能楽堂財団主催の《大文字送り火能・蛾燭能》は8月16日午後5時から金剛能楽堂で上演される。

演目は、金剛永謹宗家による「船弁慶・白波之伝」。一般4500円。申込み＝金剛能楽堂（TEL075・441・7222）

名古屋能楽堂演能案内

七彩会

八月二十一日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

能　「巴」「西王母」
舞囃子　「三笑」「橋弁慶」「須磨源氏」「羽衣」「雲雀山」「富士太鼓」「七騎落」「養老」「八島」「春日龍神」
素謡　「感陽宮」「邯鄲」
ほか仕舞

主催　七彩会
竹内澄子

名古屋淡交会90周年記念大会
久田三津子準職分祝能

九月三日(土)十二時開演
名古屋能楽堂

能　**菊慈童**　久田三津子
遊舞之楽　高安勝久
後見　橋岡慈観　藤谷音彌　久田勘鷗
地謡　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世　林宗一郎　坂口貴信　加賀敏彦　梅田嘉宏
仕舞　舎利　久田勘吉郎　久田勘鷗
地謡　寺澤幸祐　上田貴弘　上田観世芳伸　梅田嘉宏　上田公威　上田貴弘　寺澤幸祐

舞囃子　松浦佐用姫　観世清和　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世
仕舞　笠之段　観世芳伸
野宮　橋岡慈観
鵜之段　野村四郎
地謡　林宗一郎　坂口貴信　梅田嘉宏　上田公威　野村四郎　久田勘鷗　上野朝義　藤井完治　藤谷音彌

能　**姨捨**　瀬戸勝治
野口敦弘　野口能弘　野口琢弘　河村総一郎　久田舜一郎　観世元伯　一増仙幸
間　野村又三郎
後見　観世芳伸　橋岡慈観　野村四郎
地謡　加賀敏彦　寺澤幸祐　音彌清和　上田貴弘　藤井完治　藤谷観世　公威上野朝義
〈四時頃〉

主催　名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子

［入場無料］（入場整理券が必要です。）
※ご来場をご希望の方は、葉書又はFAXにて七月末日までに住所・氏名・電話番号・人数をご記入の上「入場希望」とお書き添えの上、左記へお申し込み下さい。
尚、お申し込み一件につき二名様までにお願い致します。
ご希望多数の場合は抽選にさせて頂きます。当選の方には席番（これも抽選）を記入し、入場整理券をお送りします。
※お申し込み・お問い合わせ先
〒四六五－〇〇九三
名古屋市名東区一社三丁目一六二番地
久田事務所
TEL　〇五二－七〇五－一五八四
FAX　〇五二－七〇五－一五八五

暑中御見舞申し上げます

洗心会　奥村富久子　〒606-8433　京都市左京区永観堂西町二〇　電話〇七五(七七一)〇七六七番

観修会　祖父江修一　〒507-0848　多治見市日ノ出町2の2　電話(〇五七二)二二－三六五六

猶恵会　熊沢恵美子　〒465-0097　名古屋市名東区平和ヶ丘3－76　日車マンション四〇四

幸謡会　近藤幸江　〒444-2122　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話(〇五六四)㉑二五二九

千早会　八神孝充　〒464-0062　名古屋市千種区向陽町2－16　電話(〇五二)七六二－二一〇一

恵謡会　三村恵子　〒445-0851　西尾市住吉町三－一二　電話〇五六三(五七)二五九四番

桜月会　加藤春枝　〒509-0236　可児市皐ヶ丘3－113　電話(〇五七四)六四－二三〇六

宝生英照

近藤乾之助　〒170-0002　東京都豊島区巣鴨五－二三－八　電話〇三(三九一五)一三七六番

佐野由於　〒150-0011　東京都渋谷区東2－14－21　〒921-8034　金沢市泉野町4－15－18－108

名古屋巽会　辰巳孝　辰巳満次郎

倉本雅　〒658-0081　神戸市東灘区田中町1－13－22－809　電話(〇七八)四四一－五四六五番

惠美寿会　衣斐正宜　衣斐正宜後援会　〒466-0051　名古屋市昭和区御器所3－23－19　御器所パークマンション802号　電話(〇五二)八八二－五六〇〇番

宝生流　嘉宝会　鬼頭嘉男　〒466-0855　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会　佐藤耕司　〒468-0066　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅二十三〇　電話(八〇三)七三七二

金剛永謹

廣田鑑賞会　廣田陛一　廣田幸稔

豊嶋能の会　豊春会　豊嶋三千春

菊之会　菊扇会　廣田泰三　廣田泰能

松野恭憲能の会　松野恭憲　〒616-8241　京都市右京区鳴滝泉殿町一八－三　TEL〇七五(四六二)二一四八番　FAX〇七五(四六一)六〇九八番

宇高通成　竜成　徳成　〒606-8313　京都市左京区吉田中大路町19－1　〒791-8013　松山市山越4丁目11－38　松山景雲会

金剛流　名古屋周星会　岐阜周星会　吉川周子　〒464-0825　名古屋市千種区西崎町三－六　電話(〇五二)七六一－一二五七

金春信高　金春安明　〒167-0052　東京都杉並区南荻窪3－17－16　電話〇三(三三三一)二五七一番

本田光洋　〒164-0002　東京都中野区上高田二ノ二五ノ二　電話〇三(三三八六)二六四一番

春敲会　名古屋春栄会　金春穂高　廣瀬瑞弘　廣瀬雅弘

戦後名古屋能楽史 ⑰

〔第十五章〕昭和三十六年（一九六一）

竹尾　邦太郎

（承前）

五月十一日・十二日は能の歴史と共にあるといって過言ではない南都春日・興福寺古儀の薪御能。薪能といえば唯一無二のこの薪御能、その沿革は平安時代の宗教行事の一、興福寺西金堂で行われた修二会（寺院で、陰暦二月初めに国家の隆昌を祈る法会。修二月会）に始まるという。手元の昭和三十七年の番組には「薪能のあらすじ」として次の説明がある。

近頃あちらこちらで、薪能が野外能として催されているが、薪能というのは、春日大社にゆかりの深い興福寺の神事能の固有名詞で、千年の歴史をもった日本の重要な古儀中の古儀である。

この薪能の起源については、炬火して行なったところからとか、山城の薪郷に起ったからとか種々の説があるが、平安時代に興福寺の西金堂で行われた修二会にはじまったといわれている。興福寺の諸堂伽藍記によると、「嵯峨天皇の弘仁十二年（八二一）、東金、西金両堂の庭に薪をたき法相擁護の相権実之諸神を勧請す（中略）其後、貞観十二年（八七〇）両堂の庭で大唐非人腰に蕃皮をあて、薪を昼夜焼く」とある。鎌倉時代から興福寺の南大門の般若の芝で行なわれるようになったもので、能楽が盛んになった室町時代には、この薪能も隆盛をきわめ、春日若宮おん祭の「松の下の能」と共に、能役者の登龍門とも呼ばれ、この薪能に参勤することが能役者の最高の名誉とされ、幕府もその保護につとめた。会期も八日間で金春・金剛・観世・宝生の順で盛大に行われた。

明治維新後は断続的に行なわれ、明治の中期に一度中絶されたが、昭和十八年（一九四三）興福会が組織され、薪能を復興、昭和二十年度は中止、二十一年に「呪師走り」と「御社上り」の儀が再興、昭和二十七年から我が国の重要な無形文化財として、隆盛をきわめた昔日の古儀に則り、毎年三月十四・十五日（陰暦二月五日・六日）の両日に年中行事として、県・市の主催で行なわれてきたが、昭和三十六年からは薪能保存会が結成され、五月十一・十二日の両日におこなうことになった。

この日程変更には、薪御能が県と市の共催となってから、興福寺の主管ではなくなり、伝統行事の一環としての日時を踏襲してはきたが、春浅い三月半ばの寒いとき、観客も少ないこともあって薪能保存会の発足を機に、気候のよい行楽期の五月、観光客増を期待する事情もあったろう。このために季語「薪能」は今や各地で薪能を名乗る篝火能が続出するに及び、春から夏の季になるという季節感の拠り所としての歳時記には珍しいことになる。蕪村に学んだ高井几董（一七四一―一七八九）の一句「熊坂に春の夜しらむ薪かな」の風趣味わうべくもなく、ただワキ僧の夢の中。

呪師走りの儀
「翁・十二月往来・父尉延命冠者」
春日大社舞殿　（筆者撮影）

五月二十日、梅猶会は名古屋公演三周年記念能。「屋島・大事・那須之語」梅若万三郎・河村丘造、仕舞二番「笹之段」柴田初太郎「賀茂」大槻文蔵、舞囃子「天鼓」大槻秀夫、「砧」梅若猶義、「不見不聞」野村又三郎、独吟「鐘之段」林愿蔵、一調「笠之段」幸円次郎・梅若万三郎、仕舞「野守」梅若猶義、「猩々乱・双之舞」梅若盛義・梅若万紀夫、主宰の梅若猶義は能一番・能二番の地頭・仕舞一番の大奮闘、大鼓に斎田喜兵衛の来演。

五月二十八日、雄諷会は下田雄三先生別会能。社中会で素謡九番、連吟六番、独吟六番、独調一番、仕舞十三番、舞囃子九番があり、番外として仕舞「西王母」橋岡久太郎、能「安達原」下田雄三がある。

月が替わり六月三日、名古屋宝生会は昭和三十六年度・定式婦人能。素謡「草子洗」浜村園子、能「小鍛冶」須崎真子、仕舞四番「氷室」桐谷イク子「八島」榎本千鶴子「胡蝶」宮下英子「花月」堀靖子、能「半蔀」倉本雅、狂言「因幡堂」河村丘造、仕舞四番「巻絹」小川芳子「羽衣」竹本久枝「網之段」照屋悦子「天鼓」三上藤、素謡「隅田川」宝生九郎、能「紅葉狩」宝生公恵。

六月四日、喜多流観賞会。仕舞四番「放下僧」新熊弘憲「網之段」中尾栄一「松虫」岡村保道「葵上」和谷亀二郎、独吟「弱法師」二井栄逸、舞囃子「芦刈」長田驍、「井筒」喜多実、仕舞二番「班女」粟谷菊生「花筐」喜多節世、「寝音曲」野村又三郎、「紅葉狩」和島富太郎。翌五日は恒例の熱田神宮大祭の奉納能。舞囃子五番「加茂」高安滋郎「邯鄲」大塚一二「班女」内藤泰二「玄象」林愿蔵「紅葉狩」柴田初太郎、狂言「瓜盗人」井上松次郎。

増田一雄師（号・曲水）が画く「砧」

六月十一日、掬水青陽会第五期第一回。素謡「富士太鼓」加藤丈太郎、「高砂」河村鉦二、仕舞四番「鶴亀」竹内六郎「清経」石谷初蔵「玉鬘」塚本秀雄「女郎花」久田秀雄、「羽衣・和合之舞」観世元昭、「魚説法」佐藤秀雄、仕舞二番「遊行柳」柴田初太郎「歌占」片山博太郎、「鵜飼」柴田収武。

六月十五日、観世流増田一雄の名匠を聴く会。仕舞三番「玉鬘」有賀滋子「経正」塚本秀雄「野守」小島芳雄、素謡「通小町」観世銕之丞・静夫・梅若六郎、仕舞三番「加茂」山本勝一「大江山」観世武雄「熊坂」観世静夫、素謡「松風」観世喜之・武雄・観世銕之丞、仕舞三番「玉之段」梅若六郎「笠之段」観世喜之「笹之段」観世銕之丞、素謡「玄象」梅若六郎・山本勝一・観世喜之・観世静夫、仕舞三・素謡一を三度繰返す番組も小粋なものなら、顔触れも名匠の名に恥じない好企画。因に増田一雄は曲水と号し余技の域を越えた能画を能くする。図版は先代観世喜之（一八八四―一九四〇）の舞台を偲ぶ「砧」。

六月十八日は名古屋観世会定式能第三回。素謡「経正」林甲子夫、仕舞三番「通小町」殿島修二「半蔀」久田秀雄「鉄輪」杉村竹翠、「七騎落」武田太加志、「西行桜」大槻十三、「千鳥」井上松次郎、「融」観世喜之、地謡に藤井久雄・武田小兵衛、ワキ方福王茂十郎、囃子方に杉市太郎、亀井俊雄、観世元信の来演。

六月二十五日、名古屋宝生会定式能第五期第二回。素謡「三山」倉本雅、仕舞二番「歌占」内藤泰二「千手」畑富次、「桜川」辰巳孝、「伯陽」河村丘造、「熊坂」宝生英雄。

七月十六日、名古屋財界の一翼を担い、能楽界にも多大の貢献があった岡谷正男氏が、昭和三十三年八月十二日の航空機事故で不慮の死を遂げて以来満三年に当り、社団法人名古屋能楽会と能楽協会名古屋支部は、所属するシテ方五流及び三役挙げて追善能を催す。番組は舞囃子「海人」内藤泰二（宝）独吟「松虫」前田昌広（春）連吟三番「鵜之段」加藤良久・芥川秀子・飯田新子・有賀滋子「清経キリ」加藤総兵衛・太田重次郎「杜若キリ」加藤丈太郎・真柄米次・丹下三義（観）狂言「宗論」河村丘造・佐藤卯三郎・歌村彦四郎、舞囃子「胡蝶」山田仁三郎（剛）連吟「実盛」西村弘敬・欽也、独吟「玉之段」二井栄逸（喜）連吟二番「天鼓」殿島修二・杉村竹翠「当麻」尾関健太郎・飯田賢・増田十草（観）舞囃子「藤戸」本田秀男（春）狂言小舞「芦刈」井上松次郎、舞囃子「山姥」柴田初太郎（観）能「経正」観世喜之、師匠筋からは本田秀夫・観世喜之の他に観世武雄の来演がある。

盛夏、八月六日の大衆普及能は能楽協会名古屋支部結成十五周年記念と銘打ち昨年の発会に続く第二回。普及能を催すにつき支部長田鍋惣太郎は次のように挨拶する。「戦後中央に於いて能楽協会が設立されるにあたり、名古屋にもこの支部が結成されて十五年になります。この間能楽の発展は実に目ざましいものがありまして、当支部としても極力これに力をつくして参ったのであります。今回之を記念して普及能を催すことになりました。左記の通り平易にして内容のある番組を選曲致しました。能に関心のうすいお方もこの際、是非お誘い合されまして御鑑賞の程をお願いいたします」　会場は冷房完備の愛知文化講堂。番組は舞囃子「加茂」辰巳孝、「邯鄲」大塚一二、独吟「鐘之段」前田昌広、仕舞三番「鉄輪」長田驍「唐船」加藤良久「小袖曽我」小島芳雄・観世武

（⑤面へつづく）

暑中御見舞申し上げます

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516―0076 伊勢市八日市場町5―16
電話〇五九六㉕五二九八

長田驍後援会
〒514―2221 津市高野尾町三三五一―四六
電話〈〇五九二〉㉚〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516―0067 伊勢市中島二丁目26―12
電話〈五九〇〉㉕〇一五九番

福王茂十郎

高安勝久

宝生閑
欣哉
〒176―0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話　〇三（三九七二）七二三〇
電話　〇三（三九五五）四七九五

㈱大阪能楽会館
〒530―0015 大阪市北区中崎西2―3―17

植田和光会
植田隆之亮
〒673―0862 明石市松ケ丘4の3　A6―301
電話・FAX〇七八―九一―三七四

谷田宗二朗
〒603―8372 京都市北区衣笠街道町31―7
電話〇七五（四六三）四八七五番

清水利宣
〒569―0817 高槻市桜ヶ丘北町11―25
電話〇七二六（九四）五〇一七

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

藤田舞台
藤田六郎兵衛
〒451―0041 名古屋市西区幅下2―10―9（ロクサンヨイ）
TEL&FAX　〇五二―五七一―六三四一

楽諷庵舞台
ご連絡は　名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話（八三二）三四九一番

（④面よりつづき）

雄、「班女」内藤泰二、舞囃子「玄象」観世喜之、仕舞「玉之段」宝生九郎、「瓜盗人」井上松次郎、仕舞二番「阿漕」本田秀男「土蜘蛛」廣田陞一・泰三の来演があり大能。

八月十三日、大槻清韻会袴能。盛夏、装束を納めてからは素謡会や袴能が専らであるが、能三番、本格的な番組は珍しい。袴能「熊野・村雨留」泉嘉夫、独吟三番「弓之段」岡田光紘「鼓之段」鬼頭五郎「松風」小林次郎、仕舞二番「歌占」大槻秀夫「弱法師」田村勇、舞囃子「盛久」加藤良久、袴能「恋重荷」大槻十三、狂言「膏薬煉」茂山七五三・千之丞、舞囃子「通小町」杉村竹翠、袴能「葵上」大槻文蔵、当地三役の外に福王茂十郎、野口伝之輔、山本敬一郎が来演。

九月三日、三年振りの世阿弥祭乱能。能「竹生島」鬼頭八郎、狂言「萩大名」藤田六郎兵衛、舞囃子「唐船」鬼頭季信、独調「龍田」加藤良久・藤田六郎兵衛（謡）、舞囃子「桜川」後藤孝一郎、能「乱」田鍋惣太郎、舞囃子「船弁慶」井上松次郎、狂言「くさびら」杉村竹翠、能「融・クツロギ」福井啓次郎、眼目は「乱」か。ワキ田鍋惣一郎、囃子は和泉保之・橋岡久馬・高安滋郎・辰巳孝、地頭西村弘敬、後見藤田六郎兵衛の豪華布陣。

――以下次号――

◆初夏から仲夏への舞台◆

「名古屋九皐会」「金剛定期能」「青陽会定式能」と「名古屋能楽堂定例公演」「第三十回・能にしたしむ会」

竹尾邦太郎

㊤㊨九皐会「熊野」中所宣夫、㊤㊧「鵺」駒瀬直也
（杉浦賢次氏撮影）

「熊野」　病篤い母の許へ一刻も早くの思い、宗盛ワキ雅介に冷たく一蹴され、花見の伴おおせ付けられる熊野シテ宜夫、反射的に居立ちへ御言葉を返せば恐れなれども、の強い語気に無情を憤る哀しみの深さ。東へ清水寺に向かう花見車の中は、その遙か彼方には母が、の思いへせめて其方の懐しや、とシオルところ、また、花見客の晴れ着の群れ羨ましく右へ眺め、へ咲く九重の花盛り、とゆっくり直ルところ、気持ちの整理つけようとして付け兼ねる風情に熊野の心根、人物像を確と見せ佳。小書は無いが「村雨留」、散る花に母の命を重ねる哀傷は、唐織の御所車・枝垂桜・鳳凰文様が象徴する華やかな世界であればこそ、一入だった。（1時間29分）

「鎌腹」　強妻・靖浩に山へ追い立てられる樵夫シテ祐一、仲裁人・友彦を恃み、妻と舌戦展開するが、妻は先刻承知の夫の性根、強引に仲裁人を引っ立てて行ってしまえば、見せしめの割腹騒ぎも、止める第三者あってこその強がり。祐一この辺りの機微旨くみせるが、鎌で腹を切るところは目を瞑り走り掛かる型があるだけ、少々物足りないのもへあたら命を捨つるより、とあっさり諦める薄志弱行のゆえか。（21分）

「鵺」　刳舟に幽閉されて流される異形の舟人シテ直也、不審する旅僧ワキ勝久に、頼政に射取られた妖怪鵺の亡霊と明かし、回向を願い、自らその時の有様をクセに見せる前場。頼政の活躍は禁中を不安に陥れる黒雲、へきっと、右に見上げ、下居からすっと腰を伸しへ矢取ってうち番ひ、の上ゲ端、目付柱へ狙う迅速は、へよっぴきひゃう、と矢を放つところ、力強く型の美しさ（写真）。

後場は経に惹かれ現れる鵺、赤頭・赤地半切・紺地袷法被・面猿飛出の怪異。頼政のへ矢先に当り、と腹に扇を突き立て、どっと安座のところ、また、キリ中、打杖の両端握り淀川をへ淀みつ流れつ、と流し足に二ノ松へ、へ流れ留って、と膝をつくと打杖置き扇に替え、舞台へ戻ってくる辺りも鮮やかだった。（1時間17分・5月21日・九皐会）

「藤」　歌枕にある藤の名所は多祐の浦、旅僧ワキ勝久が思わず口ずさむ古歌は藤が「咲きて散るかな」のマイナス・イメージ。それが意に染まない里女シテ永謹、古歌の中にも、波さえ藤の「色に出でぬる」のようなプラス思考の歌があり、その他にもと。その知識を怪しむ僧に、藤ノ精と明かして消える前場、静かだが凛乎とした姿に気品。

後場は僧の夢枕に現われる藤ノ精、面小面・藤ノ天冠・緋大口・下り藤文紫長絹の優美。クセ切へ月に翻す舞の袖紫匂ふ袂かな、と翳シてスミから廻る美しさは、太鼓序ノ舞へ。自適の境に遊ぶかのゆったりと軽やかで大きな舞（写真）に、偉丈夫の宗家の面目遺憾なく発揮する。（1時間30分）

「因幡堂」　里帰りをよいことに離縁状を送りつけ、己れは因幡薬師に籠り、大酒呑みでない妻を、と祈願の男シテ忠三郎、悪夢を得てハッと目覚めるところ、満面の笑みは思い叶った嬉しさの無邪気。この無邪気が男の純情、いざ女に逢うとなれば羞恥が先立つ。漸く盃事になって女が被衣で顔を見せぬこともあり、言葉も滑らかになるが、生真面目な応対に却って可笑しみ、忠三郎の、のほほんとした持ち味は抜群。被衣の下から大盃を一息に干す女は、離縁したつもりの先の妻・千五郎、あれよあれよと言う間に盃を重ねる様は、踏み躙られた妻の座奪還とばかりの挑戦的な自棄酒、千五郎に迫力。（23分）

「芦刈」　貧困ゆえ已むなく別離の妻ツレ幸洋も今は順境、従者ワキ利宣ら伴い夫の日下左衛門シテ三千春を尋ね下り、里人アイやすしに問うも不明、慰みにはと勧められ道化て芦を売る男（実は夫）を待つ。

シテ常座に出ると、三ノ松に芦ノ屋を据えるのが珍しい。シテは己が顔見忘れる程の零落に、焦りを隠せないかのカケリの狂躁をみせるが、立ち交わる市の中にこそへ隠れ所はあるものを、と笠に手をやり、いかにも陋屋と分る傾いだ芦ノ屋を見込むところ、拠り所のある救いをみせ妙。ワキとの葦か芦かの問答から掛合は、ワキに苛立つ風に芦を召されよと正先へ、へ難波の芦を、と芦刈る型も小気味よい。笠ノ段はなどかなからん、から笠で舞うところ、笠持つ手はしなやかな手首の返しの美しさ、へ風の上げたる、と投げた笠も目付柱に綺麗に止まる。その一部始終を見て芦を求めるツレへ、妻とは知らず芦を持参、顔を上げるか上げぬに妻と気付き、さっと芦ノ屋へ逃げて籠るシテ（写真）。「あらめで

（⑥面へつづく）

金剛定期能㊤㊨「藤」金剛永謹、㊤㊧「芦刈」豊嶋三千春、㊦「芦刈」左より豊嶋三千春、清水利宣、豊嶋幸洋
（原田七寛氏撮影）

暑中御見舞申し上げます

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良治
柳原冨司忠

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
船戸昭弘
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703 電話〈八三二〉一〇三一番

小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内（丸善前）

叶石会
河村総一郎
河村眞之介
〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話〈〇五二〉七六一―四八八二

河村大
〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九―一 電話〈〇七五〉四六二―四一一五

亀井俊一
忠雄
保雄
実

飯島大輔
〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17 電話〈〇七六〉二六一―四三四〇

呉竹会
筧鉱一

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

谷口有辞
〒520-0221 大津市緑町二四―二〇

前川光長
名古屋稽古場 〒616-8095 京都市右京区御室芝橋町一の六 名古屋市東区葵二―13―3 ツインクルガーデン801前野舞台 電話九三二―八八〇六番

長生会
鬼頭義命
愛知県中島郡平和町城西 電話〈〇五六七〉㊊一九六〇番

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-1153 和泉市青葉台2-17-25 電話〈〇七二五〉(56)八五二一
名古屋稽古場 名古屋市千種区今池4-15-3 浅井能舞台 電話〈〇五二〉(七三二)三七三六

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎
正邦
茂宗
逸彦
平

（⑤面よりつづき）

たや」と追おうとするワキを制し、恥をかかせてはと独り行くツレも間近に寄らず、離れて一ノ松からのシテとの掛合。互いに明かす心のうちは、再会も和歌が媒、芦ノ屋を出ると物着に改まる。クセに歌の徳を讃え、更に地との掛合に〽露の盃〽とりどりに、とツレに酌（写真）、ワキの勧めに〽匂ひも深き袂かな、で露取ると達拝掛男舞三段は喜悦の舞爽快だった。（1時間28分・5月22日・金剛定期能・金剛能楽堂）

「弱法師」　俊徳丸シテ修一、盲目の運ビ慎重は当然ながら確か。〽仏法最初の、と舞台へ入り、〽石の鳥居、は仕手柱に向いて杖の先を柱の根方に軽く当て、〽此処なれや、と安堵の心。利かん気は通俊ワキ雅介に己を見直させる問答に。施行受けかけて花の香に心奪われるシテが、落花を受けるも亦施しの一つとワキに悟らせるところ、両者の呼吸もぴたり。クセは上ゲ端あと、〽五濁の人間を導きて、で杖取り立つと、〽済度の船、と杖を両手に水棹の様に持ち、面伏せ鐘の音を聴く姿がよい。日想観の時刻、〽東門を拝み、と常座で膝つき仕手柱へ合掌すれば、それは西門、と異を立てるワキを説得するところもよい。澄みきった気持ちは足の赴くまゝの心にイロエ、満目青山は〽心にあり、と扇を胸に当てるところ（写真）は扇の具合が晴れやかさを欠く嫌い無きにしもあらず。〽貴賤の人に、のところは、〽北は何処、と笛柱へ見、〽難波なる、と小廻りから〽長柄の橋の、と目付柱へ、人に突き当る態に退り安座、杖探って立つと〽げにも真の弱法師とて、と四ツ拍子踏むのが失態を悔しと踏む地団太と思え面白い。親子対面は、〽こは夢か、と居立ち、膝打つと杖探って立つところ、驚きが一転羞恥に変わる心情素直にみえてよかった。（1時間10分）

「熊野・読継ノ伝・村雨留・墨継ノ伝」　熊野シテ勘鷗に在所の母の病状知らせる朝顔ツレ一政、「これに御文の」といそいそといった感じに近寄るのが場の雰囲気巧まず伝える。小書で「さらば諸共に」と床几を立つ宗盛ワキ勝久、先ずワキが読み、〽同じ世にだに、からシテが読み継ぐ（写真）。淡々と読むワキに、同情誘う様にしんみり読むシテ、その心情無視して花見を強行せんとするワキに、〽お言葉を返せば、と暇の許しを乞うシテ、緊迫する。ワキの翻意得られず乗る花見車、〽東路とても、と左手柱に掴まり左へ東の方眺める風情に、懐郷の思い強くみせるが、以後は左右きょろ〳〵する印象無きにしも（心落ちつかず、気を紛らすかも）。車下りてからは華やぐ四辺の空気と裏腹のシテの思い、ワキへ酌に立てば、舞の所望に〽深き情を人や知る、と込み上げる涙のシオリ隠すように二ノ松へ逃げて行くところ惹きつける。舞は「村雨留」で一ノ松で中断、〽降るは涙か、とカザシて廻り、落花受ける態から母を案ずるシオリ。下居するとイロエの囃子に気を鎮めるか、扇畳むと短冊の段は小書で墨を継ぎ、一首短冊に認めると扇面に載せワキへ。一首に托した思いにシオルと、流石にワキも催す哀れ、〽なに（お暇と候や）、とシオリ解きワキへアシラフ喜びのシテは、御意の変らぬうちにと橋懸へ、〽明け行く後の山、と月ノ扇、その解放感にも一抹の愁いは三ノ松で踏む軽いトメ拍子に。（1時間13分）

「宗八」　僧が還俗して料理人宗八（融）に、料理人は脱俗して僧（靖浩）に、互いに未知の二人が一つ屋根の下に雇われ、ハプニングを起こす。雇い主（靖雄）が二人に課した仕事は二人が得手の元の仕事、思案に暮れるうち、互いの存在に気付いて仕事を取り替えれば昔執った杵柄。立板に水と経を読む料理人に鮮やかな手付きで魚を料る僧（写真）、得意になっている処へ戻った雇い主に周章狼狽、僧は大事な経巻も「スパスパスッパリ」と切りかけるなど、ドタバタに墜ちる手前で辛うじて踏み留まり得たか。（37分・5月28日・青陽会）

「不須」　近寄るな、と言われゝば近寄りたくなるのが人の常、人一倍好奇心旺盛な太郎冠者（又三郎）なら尚更、不須という猛毒見極めんと次郎冠者（小三郎）を語らい働き掛けるところ、主（俊彦）に騙されたと知る仕返しのえげつなさ、食えない人物像を又三郎活写。（22分）

「阿漕」　シテ正宜、前は漁翁。禁漁区に網を引き、戒を犯して迄の業をシテ語から居グセに阿漕の心境淡々と展開、クセ留〽責一人に度重なるぞ悲しき、とシオルに至り俄に寂寥濃くする。〽立ち添ふ方や、と釣竿取って立ち、〽海辺も晴るる、で幕へ眺め、〽すはや、で釣糸解くと、〽繰り返し繰り返し、と釣糸サッと釣竿に繰り絡め繰り戻す手練に、天候の急変象徴的にみせる。面使ヒ目付から左へ大きく廻り込み正中、〽こはそも如何に、と竿を捨て両手耳に寄せ、〽波に聞えしばかりの、叫び声が〽跡はかもなく、消えて行くのを聞きすと、狂おしく執心の漁をみせるカケリ。静かに橋懸へ、一ノ松勾欄に寄って頭ヲトリ網を見込むと、舞台に入り、魚を追い込む心に左手右手と出し、小廻りに網へ寄ると柄を踏まえ、綱を両手に漁獲の得意も耳には法の声を聞き、心は殺生に執心の二律背反、更に綱を手繰れば思わぬ熱さ。網を後ろへ投げ捨て、たじたじと退り両手で面を掩うのは焦熱地獄の責め苦の前兆である。キリの、〽立居に隙も無き、と膝で進む合膝（ガッシ）に、地獄の恐怖に萎えた足が思われ、〽済け給へや、とワキ雅介へ指シてゆくのも痛切。（1時間25分・6月10日・名古屋能楽堂定例公演）

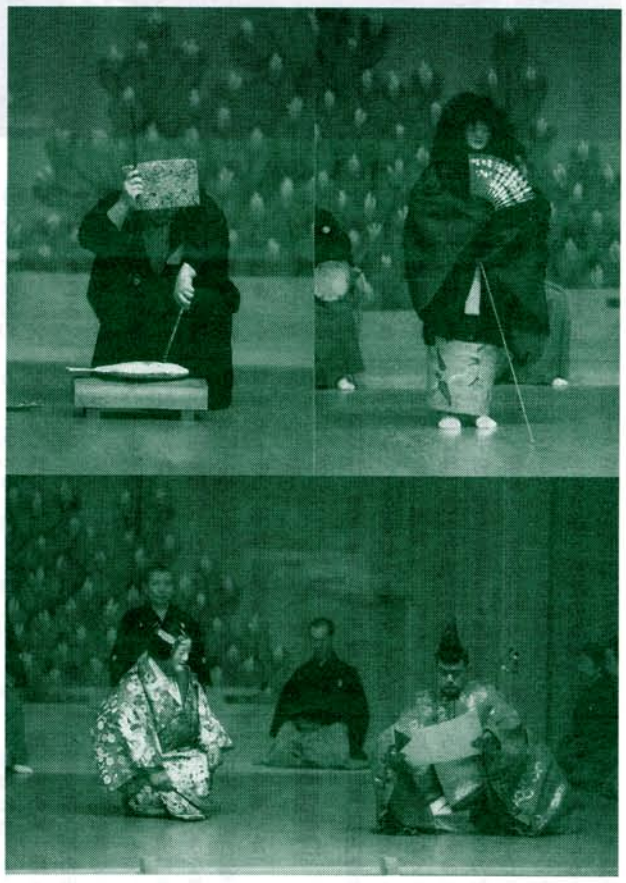
「遊行柳・青柳ノ舞」　宗祖一遍上人の教え普及に行脚の遊行僧ワキ欣哉の一行、白河の関すぎて一老翁シテ慶次郎と出遇い、先年の遊行僧達も案内したと名木朽木の柳へ誘われる。荒寥とした野、秋風索漠の景は〽風のみ渡る、と胸杖に薄く左へ見る老翁、返シ句に左手放し、三・四歩たらたらと退るのが風に吹き煽られるかである。寂びれた街道の塚の朽木、ワキとの問答は西行法師の故事、「昔の人の申し置きしは」と口跡確かも、袖が幽かに震えるのは、水無月半ばに非ず秋冷の川岸、また、十念を授かる身の引き締まる緊張か。〽かくて老人、と下居にワキへアシラヒ合掌すると、ワキも共に合掌、直ッて杖取り立ち、右へ廻り〽寄るかと見えて、と塚の横、〽（失せに）けり、と杖手放すと返シ句一杯に塚へ入るところ、余情。

後シテは老柳ノ精、面石王尉・白垂・柳寂風折烏帽子・萌黄大口・茶単狩衣。不審するワキに、道案内したあの老人、とアシラヒ、塚を出ると、〽上品上生に、とワキへ合掌、成仏を喜ぶところ、拳措端正で美しい。柳の徳をいうサシからクセ、〽（暮に）数ある、と右足拍子一ツ、爪先上げる蹴鞠の型も美しく、上ゲ端あと、〽手飼の虎の引綱、は左から右へ両手で曳く。〽気力なうして弱々と、と退り、〽立ち舞ふも、と左袖で塚の柱抱える様に見せて左手で柱を掴むところは如何にも老柳ノ精である。青柳ノ舞は報謝の心、左に杖をついて初段オロシ過ぎまで舞い、キリは〽弱々と、塚の横へ、〽倒れ伏し、と右膝つくと静かに安座、枕ノ扇。〽一夜の契り、と居立ってワキへアシラヒ、立つと〽上人の御法、と詰メルところ、名残り惜しむ心。説得力のある演出の集中力、精根を使い果たして橋懸を退いて行くシテに、疲労濃くみえた。ワキツレ寛・誠吾、アヒ七五三、地頭九郎右衛門、主後見欣司、囃子六郎兵衛・源次郎・総一郎・佐七。（1時間41分）

「石神」　妻・千三郎、働きのない夫の太郎・七五三が不満で離縁を申し出るが許されず家出。太郎が仲人やすしに相談すると、仲人は石神に成り済まして妻を欺き元の鞘に納まるよう知恵をつける。また、離縁を報告にきた妻には石神の神託に従うように勧める。

石神は石が神体で、良縁・安産・子育てなどに霊験があるという土俗信仰の一で、石が持ち上がるか上がらないかで可否を占う。勝負は歴然、お世話を掛けた、と石神に神楽をあげる妻に、浮かれだす太郎、息の合った兄弟の熱演だが、太郎と仲人の男同士の連帯感はいただけない。この話、現代にも家裁の調停にありそうな。（39分・6月11日・能にしたしむ会・京都観世会館）

◇……◇



㊤㊨青陽会「弱法師」祖父江修一、㊤㊧「宗八」井上靖浩、㊦「熊野」左より久田勘鷗、高安勝久　（杉浦賢次氏撮影）

留めようとする姿に、シテ自身も消えて行くのを暗示する。

後は阿漕ノ霊、面痩男・黒頭・襟浅黄・紺染分腰蓑、四手網を担ぐ。人影無きを見極め、スミ横に網を下ろ

暑中御見舞申し上げます

大蔵会
大藏狂言会
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒177-0045 練馬区石神井台5-22-41-406
電話〇三-三九二〇-六七一七番

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五(七〇一)二〇一一番
FAX〇七五(七〇一)二二三二

名古屋狂言共同社
井上菊次郎
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝靖雄
今枝郁雄
鹿島俊裕
鷲見政行
名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3E 井上方
電話052・834・6112

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田髙義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区平和一-二〇-四 野村事務所 気付
電話 052(350)7971
FAX052(350)7972

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル(旭市役所南)
電話 〇五六一五③二三四六番
能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

鳳の会
林和利
井上菊次郎
佐藤友彦

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之
〒602-8381 京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六二-一三四一
FAX(〇七五)四六一-五七七二

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-六-四
電話(一六二)一一八三番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二-八〇二-二
電話(〇五二)八〇五-三三〇一
連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40-9
電話(〇五二)六二一-四二三八

能楽の友社

〔おことわり〕暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年８月～17年９月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）
８月28日　「安宅」（再）（観世流）　八世観世銕之丞ほか
９月４日　「遊行柳」(1)（宝生流）　今井泰男ほか
９月11日　「遊行柳」(2)（宝生流）　今井泰男ほか
９月18日　「小督」（観世流）　吉井順一ほか
９月25日　「松虫」（金剛流）　豊嶋三千春ほか
◆ＮＨＫ教育テレビ
８月28日　（21:00～）
半能「石橋～師資十二段之式」　シテ　関根祥六
９月17日　（14:50～16:50）
能「小原御幸」　シテ友枝昭世

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（能楽関係公演のみ）（TEL 052－231－0088）

［８月］
28日(日)　衣斐正宜後援会能　（有料）（番組①面）
31日(水)　名古屋学生能楽連盟例会　（無料）
［９月］
３日(土)　名古屋淡交会90周年記念大会（無料）（番組①面）
４日(日)　初秋能　（有料）（番組②面）
11日(日)　狂言三の会第４回公演　（有料）（番組②面）
17日(土)　名古屋観世九皐会能　（有料）（番組②面）
18日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組④面）
19日(月)　名古屋観世会定式能　（有料）（番組④面）
20日(火)　ローマｋｙｏｇｅｎ一座来日公演　（有料）
25日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

◆万博・ささしまサテライト会場◆

［９月］
１日(木)　愛・地球博記念能楽大会（無料）（番組①・②面）

源平シリーズ　初秋能
９月４日　名古屋能楽堂

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）主催の「初秋能」は、ことし第五回を迎え、きたる九月四日(日)名古屋能楽堂で〝源平シリーズ〟として、第一部、第二部の二部制で開催される。

後援／愛知県・名古屋市・名古屋市文化振興事業団。

演能は、第一部（午前十時半開演）宝生流能「巴」（シテ竹内澄子）狂言「文蔵」（井上菊次郎）観世流「藤戸」（高橋暸一）ほか仕舞

第二部（午後二時始）観世流能「屋島」（梅田邦久）狂言「柑子」（野村又三郎）観世流能「船弁慶」前後之替（前・今沢美和　後・清沢一政）

前売二五〇〇円（当日三〇〇〇円）取り扱い／チケットぴあ、市内プレイガイド（番組②面掲載）

小牧市制50周年記念　名月薪能
９月17日　小牧山公園

小牧市制50周年の記念事業として、信長の館跡とされる史跡公園で、九月十七日（土）小牧山薪能が催される。主催小牧市、小牧市制50周年記念事業・薪能実行委員会、共催小牧謡曲連盟、後援能楽協会名古屋支部。四時半始、入場無料。

小牧市制50周年記念　名月薪能

小牧山公園特設舞台

午後四時半より小牧謡曲同好会出演

五時三十分　市長あいさつ、火入れ式

半能「小督」シテ祖父江修一、トモ松山幸親、ツレ本田　勲

狂言「萩大名」井上菊次郎、井上靖浩、佐藤友彦

能「土蜘蛛」シテ梅田嘉宏、胡蝶・星野路子、トモ須部甫、頼光・梅田邦久、ワキ高安勝久

※雨天の場合は小牧市市民会館

愛・地球博記念　能楽大会
９月１日　サテライト会場

能楽協会名古屋支部では、２００５愛・地球博記念能楽大会を九月一日（木）万博ささしまサテライト会場内・ステージ広場で開催する。

午前十一時半から午後二時半まで、能楽愛好家による仕舞・狂言の発表会（番組②面）

午後四時から、「さわってみよう能の世界」のタイトルで、小・中学生対象に能の楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓）の体験学習会

午後六時から２００５万博記念能楽大会・鑑賞能の部

能「橋弁慶」（シテ衣斐正宜）

狂言「茸山伏」（山伏・野村小三郎）

能「鞍馬天狗」（シテ久田勘鷗）

入場無料（番組①面掲載）

能「隅田川」上演
10月２日　幸謡会能

観世流・近藤幸江師主宰による幸謡会能は、きたる十月二日(日)熱田神宮能楽殿で開催、能「隅田川」はじめ、舞囃子「三輪」ほか女流能楽師による仕舞五番を公演する。

開演午後二時　全自由席。（番組②面掲載）

名張薪能
８月27日　復曲能「赤目瀧」

〝観阿弥創座の地〟として名張由緒ある名張で、復曲能「赤目瀧」（あかめだき）が金剛流宗家・金剛永謹師、廣田泰能師が来演して８月27日（土）名張市朝日公園特設舞台で催される。

能「赤目瀧」は文久初年（１８６１）に名張藤堂家の家老、儒学者・鎌田梁洲により作曲され、野村三次郎（現金剛家の祖）が節付して完成、その後上演の機がなかったが、名張金剛会80周年に当たり完全復曲（演能）に向けて取り組みが始まり、平成16年夏完全復曲を果たし、今回地元の名張で初公演される。

能組は「仏師」大蔵流・茂山良暢ほか。

復曲能「赤目瀧」金剛永謹、廣田泰能、清水利宣ほか。午後６時30分開演、入場無料。

主催　名張市、名張市教育委員会。問い合わせ先／名張市教育委員会文化振興室　電話０５９５・６３・７８９７

第21回　衣斐正宜後援会能

八月二十八日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂

―講　演―
中世における仇討ちの倫理について
詩人　村瀬　和子

―番　組―

能　**班女**
衣斐　愛
杉江　元
椙元　正樹
河村総一郎
福井啓次郎
大野　誠
間　井上　靖浩
後見　寺井　良雄
武田　孝史
地謡　村上　茂
青木　堯
平田　正文
柴田　腎治
水上　輝優
東川　光夫
内藤　飛能

仕舞　**鉄輪**
近藤乾之助
地謡　亀井　保雄
寺井　良雄
佐野　登

狂言　**蟹山伏**
山伏　井上菊次郎
強力　佐藤　融
蟹　鹿島　俊裕
後見　今枝　郁雄
ツレ　和久荘太郎
子方　佐野　幹
衣斐　正宜

能　**望月**
間　飯冨　雅介
佐藤　友彦
河村眞之介
後藤嘉津幸
助川　治
藤田六郎兵衛
後見　宝生　英照
佐野　登
内藤　飛能
地謡　竹内　良伯
竹内　淳一
浦野　正二
久野　幸三
亀井　保雄
近藤乾之助
寺井　良雄
武田　孝史

（終演　午後五時頃）

附祝言

主催　衣斐正宜後援会
事務所　名古屋市昭和区御器所３－23－19－802
TEL・FAX　052－882－5600

［会員制］
一般入場料五〇〇〇円（限定）
学生入場料二〇〇〇円（限定）

さわってみよう能の世界
2005　愛地球博記念　能楽大会

ささしまサテライト会場　ステージ広場
九月一日(木)

◎午前11時30分～午後２時30分
能楽愛好家発表会（番組②面）
能楽愛好家の方々による仕舞・狂言発表会

◎午後４時から
能の楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓）の体験学習会
中学生対象、当日会場で受付
鑑賞能「鞍馬天狗」狂言「茸山伏」に出演の小・中学生のけいこ見学

鑑賞能の部（午後６時始）

宝生流半能　**橋弁慶**
牛若丸　阪口　貴仁
弁慶　衣斐　正宜
後見　竹内　澄子
衣斐　愛
地謡　竹内　良伯
竹内　淳一
浦野　正二
久野　幸三
佐藤　耕司
内藤　飛能
和久荘太郎
稲川　壽一
佐久間祥夫
佐久瀬　雅弘
広瀬　尚久

金春流仕舞　**八島**
前田　茂穂
地謡　笠間　鉱一
船戸　昭弘
大野　誠

和泉流狂言　**茸山伏**
山伏　野村小三郎
子方　一般公募の小・中学生数名
牛若丸　久田勘吉郎
前シテ山伏　現シテ大天狗　久田　勘鷗
何某　松田　高義
茸　今枝　靖雄
茸　佐藤　融
茸　鹿島　俊裕
茸　今枝　郁雄
茸　一般公募の小・中学生数名
紅茸　大矢　晃義
鬼茸　野村又三郎
後見　伴野　俊彦

観世流能　**鞍馬天狗**
白頭　高安　勝久
能力　井上　靖浩
木葉天狗　井上　菊次郎
小天狗　鹿島　俊裕
小天狗　今枝　郁雄
後見　久田三津子
泉　嘉夫
祖父江修一
地謡　八神　孝充
松山　幸親
高橋　暸一
梅田　嘉宏
清沢　一政
武田　邦弘
梅田　邦久
古橋　正邦
後見　久田三津子
地謡　河村眞之介
後藤嘉津幸
加藤　洋輝
竹市　学

附祝言

［入場無料］

主催　能楽協会名古屋支部
問合せ　TEL・FAX　052－832－1031（柳原方）

名古屋淡交会90周年記念大会
久田三津子準職分祝能

九月三日(土)十二時開演
名古屋能楽堂

能　**菊慈童**
久田三津子
遊舞之楽　高安　勝久
後見　藤谷　音彌
橋岡　慈観
久田　勘鷗
地謡　河村眞之介
柳原冨司忠
林　宗一郎
坂口　貴信
加賀　敏彦
梅田　嘉宏
寺澤　幸祐
上田　貴弘
観世　芳伸
上田　公威
加藤　洋輝
鹿取　希世

仕舞　**舎利**
久田勘吉郎
久田　勘鷗

舞囃子　**松浦佐用姫**
観世　清和
河村眞之介
柳原冨司忠
鹿取　希世

仕舞　**笠之段**
観世　芳伸
野宮
橋岡　慈観
鵜之段
野村　四郎

能　**姨捨**
瀬戸　勝治
野口　敦弘
野口　能弘
野口　琢弘
河村総一郎
久田舜一郎
観世　元伯
一増　仙幸
間　野村又三郎
加賀　敏彦
寺澤　幸祐
藤谷　音彌
上田　公威
上田　貴弘
藤井　完治
観世　清和
上野　朝義
後見　観世　芳伸
橋岡　慈観
野村　四郎
地謡　寺澤　幸祐
藤谷　音彌
上田　公威
上田　貴弘
藤井　完治
観世　清和
上野　朝義

（終了四時頃）

主催　名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子

［入場無料］（入場整理券が必要です。）
お問い合わせ先　〒四六五－〇〇九三
名古屋市名東区一社三丁目一六二番地
久田事務所
TEL　〇五二－七〇五－一五八四

福井啓次郎師叙勲
盛大に受章祝賀会
7月31日 名古屋観光ホテルで

能楽小鼓方幸清流職分、日本能楽会会員・福井啓次郎氏（本名・林啓次郎）は、永年にわたり能楽の発展、文化財保護に貢献した功績により本年春の叙勲で旭日雙光章を受章、この叙勲受章を祝う会が七月三十一日午後六時から名古屋観光ホテルで盛大に催された。

催しは、第76代内閣総理大臣海部俊樹氏、鈴木礼治前愛知県知事、藤井知昭愛知県芸術文化協会理事長、笛方藤田流家元藤田六郎兵衛氏、能楽協会名古屋支部・梅田邦久支部長らが呼掛人として発起して催された。

祝賀会は囃子「三番雙・揉之段」（笛・大野誠、小鼓頭取・柳原冨司忠、脇鼓・後藤嘉津幸、船戸昭弘、大鼓・河村大）で始まり、福井良治氏の開会の言葉ののち来賓、呼掛け人を紹介、国民学校時代から同級の海部俊樹元総理のエピソードをまじえた祝辞、さらに小鼓幸清流十五世家元・幸清次郎氏、知泉会加納病院理事長・加納泉氏の祝辞について、謝辞に代えて、小鼓一調「笠之段」が謡・衣斐正宜師、小鼓・福井啓次郎師により演じられた。

祝宴は、大鼓石井流職分・河村総一郎氏の発声で乾杯して開宴、能楽界はじめ経済、文化関係の幅広い祝福をうけて歓談がつづき、重要無形民俗文化財・尾張万歳の「御殿万歳」などの清興のうちに、小鼓幸清流職分・後藤孝一郎氏の発声による小謡「猩々」で中締めが行われおひらきになった。

福井啓次郎氏は昭和30年十一世福井啓次郎の名で福井家の芸事を継承、名古屋・岐阜・津・四日市・新城ほか社中幸友会を指導。平成2年愛知県芸術文化選奨文化賞（個人賞）受賞、平成13年能楽協会理事、名古屋支部長（2期）海外公演11回、18ヵ国で上演。

［祝辞を述べる海部俊樹元内閣総理大臣］

幸謡会能

十月二日（日）午後二時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　三輪　大槻文蔵　河村総一郎　福井啓次郎　加藤洋樹　鹿取希世　八神孝充　武富康之　斉藤信隆　須部甫　地謡
仕舞　定家　泉嘉夫　地謡　吉澤旭　山本正人　赤松禎英　祖父江修一
能　隅田川　子方　赤松祐一　近藤幸江　中村彌三郎　森本幸治　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　後見　武富康之　泉嘉夫　地謡　吉沢孝充　八神信隆　須部文蔵　祖父江修一　山本正人　斉藤正規　大槻昭　赤松禎英
仕舞　巻絹　三村恵子　今沢美和　前野郁子　生駒里翠　加藤春枝
仕舞　屋島　松風　共地
仕舞　葵上　邯鄲

附祝言

［有料］自由席　五千円

主催　幸謡会
岡崎市鴨田本町11－3
電話（〇五六四）二一－二五二九

愛・地球博　記念能楽大会
能楽愛好家発表の部

九月一日（木）午前十一時半始
万博ささしまサテライト会場
ステージ広場

番組

昭和謡曲の会
仕舞　高砂　大岩昭子
三輪　山本道子
蟬丸　飯田美緒
地謡　西川嘉子　浅見かず子　森幹子　成田延子　平松美代子

天白能の集い
仕舞　敦盛　朝日和子　三浦百合子　松井真里子
蟬丸　地謡　大岩昭子　山本道子　飯田美緒

千早会
仕舞　邯鄲　内藤ひとみ
二人静　橘進
歌占　不破麻佑子
地謡　吉沢旭　八神孝充　黒田博

中日文化センター
仕舞　吉野天人　佐伯裕子
杜若　森田葛子
地謡　板倉元子　横江美貴子　岩田時代　味岡マキ子

南・能を楽しむ会
仕舞　高砂　西川嘉子
田村　平松美代子
葛城　成田延子
羽衣　浅見かず子
天鼓　森幹子
地謡　松井真里子　三浦百合子　朝日和子

一宮中日文化センター謡曲教室
仕舞　胡蝶　浅野文子
班女　岩田宏子
蟬丸　平泉和子
地謡　板倉正規　林昭　兼松三欣　古崎嵐久　塚越啓陽

中日文化センター
仕舞　蟬丸　板倉元子
敦盛　横江美貴子
姥盛　岩田時代
地謡　石田弘　長谷川雅彦　加藤有毅　三輪庄司

也留舞会
狂言　不須　太郎冠者　次郎冠者　磯村美和　水原みわ　主人　吉村由紀子
狂言　口真似　太郎冠者　田端奏衛　主人　三浦思季　客　畑中春華

主催　能楽協会名古屋支部
問合せ＝TEL・FAX　052（832）1031（柳原方）

源平シリーズ
初秋能

九月四日（日）
名古屋能楽堂

第一部（午前十時半始）

宝生流　能　巴　竹内澄子　杉江元　松田高義　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学　間　後見　玉井浩　衣斐祐　愛　地謡　村上茂　石森智幸　外山衣斐正宜　久野通夫　稲川壽一　幸三　和久荘太郎

金剛流仕舞　玉之段　鈴村昌美　地謡　熊谷眞知子　伊藤雅子　加藤かおる　羽多野良子

喜多流仕舞　通小町　長田郷　地謡　小出甚吉　和谷衡市　長田暁　伊藤英毅

金春流仕舞　山姥　前田登　地謡　廣瀬雅弘　鬼頭尚久　伊藤雄二

和泉流狂言　文蔵　井上菊次郎　佐藤融　後見　今枝靖雄

観世流　能　藤戸　高橋暁一　橋本宰　椙元正樹　野村小三郎　間　後見　今沢美和　武田邦弘　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　外山圭一　本田勲　梅田嘉宏　加賀敏彦　嘉宏　清沢一政　久田勘鹿　泉嘉夫　祖父江修一

附祝言

第二部（午後二時始）

観世流　能　屋島　八神孝充　梅田邦久　杉江元　飯冨雅介　椙元正樹　奈須之語　弓流　間　井上靖浩　後見　前野郁子　泉嘉夫　地謡　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野誠　黒田博　本田勲　梅田嘉宏　須部甫　久田勘鹿　松山幸親　祖父江修一

和泉流狂言　柑子　野村又三郎　野村小三郎　後見　松田高義

観世流仕舞　井筒　前野郁子　地謡　星野路子　三村恵子　久田三津子　加藤春枝

観世流　能　船弁慶　前今沢美和　後清沢一政　久田勘吉郎　前後之替　高安勝久　橋本宰　間　鹿島俊裕　後見　近藤幸江　梅田邦久　地謡　後藤孝一郎　竹市義命　外山圭一　黒田博　須部甫　松山幸親　高橋暁一　古橋正邦　武田邦弘　加賀敏彦　鬼頭学

附祝言

［有料］前売二五〇〇円、当日三〇〇〇円
学生一五〇〇円
取扱い＝チケットぴあ、市内プレイガイド
各出演者

主催　能楽協会名古屋支部

第四回　狂言三の会

九月十一日（日）午後三時開演
名古屋能楽堂

番組

狂言舞囃子　三番叟　野村又三郎

新作狂言　徳阿弥でござる　野村小三郎　奥津健太郎　野口隆行　松田高義

狂言　靱猿　野村又三郎　松田高義　野村小三郎　野村信朗

主催　狂言三の会
事務局　春日井市如意申町6－3－10

［有料］
一般自由席　五〇〇〇円
※会員二〇〇〇円（指定席）
お申込み・問い合わせ　電話　〇五六八・三五・三二〇一
FAX　〇五六八・三五・三三七一

名古屋観世九皐会能

九月十七日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞　天鼓　通盛　中所宜夫　観世喜正　地謡　小島英明　中森貫太　長沼範夫　高橋暁一

能　松虫　遠藤喜久　古川充　外山圭一　高安勝久　河村眞之介　福井啓次郎　大野誠　間　松田高義　後見　五木田三郎　観世喜之　地謡　坂眞太郎　小島英明　高橋暁一　中森貫太　中所宜夫　観世喜正　駒瀬直也　長沼範夫

狂言　千鳥　野村小三郎　伴野俊彦　野村又三郎　後見　松田高義

仕舞　白楽天　高橋暁一
筐潛　五木田三郎
碇潛　駒瀬直也
地謡　坂眞太郎　遠藤喜久　観世喜正　古川充

能　菊慈童　観世喜之　遊舞之楽　飯冨雅介　杉江元　椙元正樹　後見　長沼範夫　観世喜正　地謡　河村聡一郎　後藤嘉津幸　鬼頭義命　藤田六郎兵衛　坂眞太郎　小島英明　古川充　遠藤喜久　中森貫太　駒瀬直也　五木田三郎　中所宜夫

主催　名古屋観世九皐会
名古屋事務所
名古屋市守山区八剣2－1913
外山圭一方
電話052・798・9302

全自由席
一回券　五〇〇〇円
学生券　二〇〇〇円

戦後名古屋能楽史 ㊽

〔第十五章〕昭和三十六年（一九六一）

竹尾　邦太郎

（承前）

九月十日、名古屋梅若会は芸術院会員故梅若實（明治十一年四月二十八日―昭和三十四年八月十六日）の三回忌追善能。番組は「通小町」梅若雅俊・泰之、独吟「誓願寺」林愿蔵、仕舞三番「松風」山崎英太郎「実盛」柴田初太郎「野守」梅若景英、「江口」梅若六郎、「縄綯」野村又三郎、「土蜘」梅若六郎、大鼓に佐伯実を帯同。梅若實は五十四世六郎、昭和二十三年十月、二世實を名乗ると共に長男六之丞に六郎を継がせる。この度の追善能には長男五十五世六郎、次男雅俊、三男泰之、孫景英が顔を揃える。泉下の二世實も以て瞑すべしであろう。

記録に残る二世實の当地初演は、六郎時代の明治四十二年十月二十三日の呉服町能楽倶楽部舞台披キで「翁」と「望月」。当時三十八歳。以後の来演は大正四年九月二十八日、名古屋能楽会主催能で「小袖曽我」のツレ（シテは梅若万三郎）、「山姥・白頭」。大正六年九月二十三日の名古屋能楽倶楽部別会能で「松虫」と「葵上」の能二番と素謡「井筒」のワキ（シテは梅若万三郎）。昭和六年十月五日、名古屋市公会堂での名古屋梅若会で「葵上」と「夜討曽我」の能二番。昭和二十三年十月二十四日、名古屋宝塚劇場での秋の芸能祭典能楽の会・昼の部で「松風・見留」と一調「勧進帳」（小鼓・田鍋物太郎）、夜の部では「葵上・梓之出」。実になってからは昭和三十年六月二十五日、二十四世観世左近十七回忌追善能・第一部で「隅田川・鉦之音」子方は孫善政で当代五十六世六郎、当時七歳、舞台は御園座の特設舞台。昭和三十三年十一月二十日、愛知文化講堂特設舞台での先代（初世）梅若實五十年祭記念能で「蝉丸・替装束」梅若實・六郎、これが当地での最後の演能となる。主催者は中村オリエンタル百貨店。

九月十七日、観世会第四回は素謡会。連吟「融」芥川秀子・飯田新子、仕舞三番「花月」福井道子「放下僧」加藤良久「松虫」有賀滋子、素謡四番「忠度」林喜右衛門ワキ藤波順三郎「俊寛」林愿蔵ワキ林喜右衛門「当麻」藤波順三郎ワキ林喜右衛門「殺生石」藤波重和ワキ柴田初太郎。

月が替り十月一日、観世流太鼓方の長生会を主宰する鬼頭八郎の還暦を祝賀する社中会。番組の冒頭に次の挨拶がある。

能楽界太鼓方の鬼頭八郎師は、明治四十四年呉服町の舞台で初能「熊坂」に出たのが十歳の時でありました。今年還暦を迎えられた師はあだかも舞台生活五十年にも当ります。

祖父八郎師は尾張藩御納戸役として、財政方面にも功あり、当時観世宗家につき太鼓の道に入られました。この人を初代として二代父君の為太郎師は観世元規師につきその途を極められたといいます。

現八郎師ははじめ父に教へられ、三代目をつぎ、尾張における観世太鼓の大宗となられた。現宗家の元信師も、親しく中島郡の邸宅に往来し、互に父祖以来の求道の交流をしているのであります。

鬼頭家は、更に令息喜太郎師令孫好信さんと、すでに世襲の四代目五代目が予定されているのも芽出度い限りであります。

われ〳〵はこゝに八郎氏の永い舞台生活に傾倒し、還暦を欣祝する意味で十月一日の吉日を卜して熱田神宮能楽殿に記念のそこばくの番組相披くこと、となりました。大方の御清鑑を乞う次第で御座います。

朝八時に始まる番組、番外に仕舞三番「知章」大槻文蔵「花月キリ」橋岡久共「船橋」観世武雄、舞囃子二番「石橋」柴田初太郎「老松」大槻秀夫、仕舞三番「西王母」橋岡久太郎「実盛キリ」大槻十三「白楽天」山本博之、大槻清韻会・淡交会・九皐会・山本観御会と東西から観世流の重鎮が集う。

十月八日、梅猶会を主宰する梅若猶義の社中で作る名古屋猶諷会が発足、初回の記念会。番外に仕舞二番「松虫」観世静夫「天鼓」梅若盛義、舞囃子「歌占」梅若猶義がある。

十月十五日は「掬水青陽会第五期第二回。素謡「菊慈童」佐藤太俊、舞囃子「吉野天人」竹内六郎、「通小町」加藤丈太郎・河村鉦二、仕舞二番「采女」石谷初蔵「邯鄲」柴田収武、「千手」久田秀雄・塚本秀雄、「蛸」佐藤秀雄、「鉄輪」上田照也、舞狂言の「蛸」が珍しい。

十月二十二日、第四十一回の名匠鑑賞能は名古屋市芸術祭参加。「蝉丸」梅若六郎・橋岡久馬、仕舞三番「花筐」観世武雄、「殺生石」大江又三郎、「玉之段」金春信高、「雲林院」観世喜之、「文蔵」和泉保之、「熊坂」本田秀男、三役に福王茂十郎と山本敬一郎が来演。「蝉丸」の異色の配役が評判になる。

十月二十八日、林潤水会五十周年記念・林愿蔵先生古稀祝賀の素謡会。発会は明治四十四年（一九一一）弱冠二十歳の時か。謡に徹した林愿蔵に相応しい会。素謡「神歌」林愿蔵・林甲子夫、連吟四番「竹生島」石谷初蔵・竹内六郎「盛久」増田十草・六車真三「班女」福井道子・有賀滋子「松虫」殿島修二・杉村竹翠、素謡「屋島」岡久雄ワキ藤波順三郎、連吟二番「蝉丸」丹下三義・真柄米次「女郎花」加藤総兵衛・太田重次郎、素謡「井筒」観世元昭ワキ武田太加志、連吟二番「葵上」飯田新子・加藤良久「老松」久田秀雄・塚本秀雄、素謡「砧」藤波順三郎ワキ岡久雄、独吟「美人揃」林愿蔵、素謡「道成寺」武田太加志ワキ観世元昭、仕舞四番「菊慈童」柴田初太郎「土車」岡久雄「弱法師」武田太加志「山姥」観世元昭、素謡「岩船」河村鉦二ワキ佐藤太俊。

十月二十九日、名古屋宝生会第五期第三回は宗家宝生九郎還暦祝賀・創立五周年記念能。「羽衣・盤渉」辰巳孝、「鷺」宝生九郎、「素袍落」河村丘造、仕舞二番「網之段」宝生公恵「籠」倉本雅、「正尊」宝生英雄・高安滋郎。

十一月六日、笹野堅（明治三四年―昭和三六）死去。能楽研究家西野春雄は言う。「狂言研究の先駆者として狂言諸家の秘書を博捜・調査し、学界に紹介した功績は大きく、現在『天正狂言本』と呼んでいる最古の狂言本の発見をはじめ、大蔵虎明伝書を影印した『古本能狂言集』五冊（一九四三―四四）、『能狂言』三冊（岩波文庫、一九四二―四五）ほか有益な資料の公刊は狂言研究の基礎を築いた。――中略――研究に着手すると、費を惜しまず労をいとわず、最善本の入手に努力し、研鑽を重ね精緻を期し、稿成るや理想的な組み・印刷・料紙・装釘に配慮し、そのためには私費を投ずることも辞さなかったという。狂言研究の大先達の死に対し当時の斯界は無関心であった」平凡社刊『能・狂言事典』。岩波文庫『能狂言』三冊本のあと、死後の一九六二年（昭和三十七年）、既に稿は成っていたが同文庫から大蔵虎明著・笹野堅校訂の『わらんべ草』が上梓される。巻頭の「例言」の中で笹野は言う。「一、本書の目次は、底本には無いが、便宜上校訂者の私見に依り内容に応じて標目を掲げたものである。一、巻末に索引を附し、固有名詞、事項及び注目すべき語句等を集めて表音仮名遣により五十音順に排列した。昭和十八年十月五日」　得てして尊大な御託を並べ立てたがる研究者の分野、さらりと「私見」によるところも奥床しければ、厖大な量の索引の作成は気の遠くなるような作業であろうが、笹野堅の言葉は淡々とさりげない。享年六十歳、ただ〳〵残念である。

十一月十五日、つい半月程前に古稀を祝ったばかりの林愿蔵が死去する。

――以下次号――

昭和三十七年八月十六日　第一刷発行　©　わらんべ草　定価★★★★★
校訂者　笹野堅
発行者　東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎
印刷者　東京都青梅市根ケ布三八五番地　山田一雄
発行所　東京都千代田区神田一ツ橋三ノ三　株式会社　岩波書店
落丁本・乱丁本はお取替いたします
精興社印刷・桂川製本

◆仲夏の舞台から◆

「観世会」「名古屋梅猶会」「宝生会」と「橋岡久馬一周忌追善・名古屋橋岡会」

竹尾邦太郎

「熊野・村雨留」　病母を気遣う熊野シテ四郎の、胸中の思いにも頓着せず「この春ばかりの花見の友」と花見を強行する宗盛ワキ隆之亮の、いかにも重々しく権高な風姿が憎げなら、打ち拉がれて心ならずも花見車の人となる熊野の、可憐な容姿と好対照。〈東路とても東山、と面クモラセ懐郷の情に浸ると（写真④面）静かに扇持つ右手でシオルところ切ない。小書で舞の途中、〈なう〳〵、と俄の村雨に花の散るを惜しみ、〈あら心なの村雨やな、と心は慌しく一ノ松から舞台へ入ってくるところ、母の命と重ねる心情もまた切なく、四郎繊細。（1時間27分）

「鏡男」　国許の妻（友彦）の土産に夫（靖浩）は珍しい鏡という物を求める。銅鏡は古墳から出土の三角縁神獣鏡が有名だが固より庶民のものではなく、祭器や権威の象徴。時代が下がり、柄が付けられて市へも出回る様になったのは室町時代からという。此の妻ならずとも細工が施されている方が表と思いがちだが、光の反射を利用、被写体を映す磨かれた方がとうぜん表。得意気に鏡を差し出す夫、妻はそこに映る女の顔を都で懇ろになった女に違いない、と早合点して激怒（写真④面）。年増の妻に若い夫の配役が利く。（21分）

「西行桜」　先の「熊野・村雨留」との番組立は旬を外れるが桜尽し。西行ワキ勝久と、作物の中からの老桜ノ精シテ喜之との、桜に咎の有無を質す問答は、「これは夢中の翁なるが」とシテが名乗るところ、亦、「さて桜の咎は」とワキに問い掛けるところ、更には「花に浮世の咎はあらじ」とワキを窘めるかのところ、何れも面だけワキにアシラフ悠揚迫らぬ態度は、作物を出てはワキに対面し〈草木国土皆成仏の御法、と互いに合掌するところも、シテは立ったままの拘泥りのなさ。花の名所を挙げる舞グセから序ノ舞を舞上げると、飄々とした空気の中の孤愁は〈待て暫し、の招き扇。〈白むは花の影、と作物上の花を眺め、〈外は未だ、と未明の四辺を指廻に見せると、〈花の枕の、と袖を巻き手枕の型に安座（写真④面）、夢覚めて立ち、踏む数拍子には寂寞の余韻、柴大口に淡灰色の単狩衣は白く枝垂桜の文様、薄墨桜を思わせた。（1時間19分・6月12日・観世会）

「雲林院」　幼少より伊勢物語に親しむ芦屋公光ワキ雅介、業平と二条ノ后が伊勢物語の草子を持ち洛北雲林院の花の蔭に佇む、という霊夢を受け、訪ねて行き老翁シテ勝憲と出遇う前場。

ワキの手折る桜の枝を見咎めるシテ、ワキとの問答にその是非を古歌の応酬で戦わせるところ、面終始クモリがちのシテに意気込みの強さ余り感じられず、中入に素姓仄めかし消える辺りも、何か影が薄く見える（のが中入に相応しいか）。

後場、霊夢の因、已れの秘事をワキにみせるため現われる後シテ業平、面中将・初冠（老懸・巻纓）・白地縫箔着付・浅黄指貫・檜垣地花入花ノ丸文朽葉色単狩衣の渋い出立、太刀を佩く。二条ノ后を誘い御所からの逃避を云うクセ、〈萎るる裾を、と扇開き、〈狩衣の袂を冠の巾子に打被き、と左袖被キ面を扇で隠す型に、忍ぶ恋路は〈降るは春雨か、と扇翳シて上を、〈落るは涙か、と下を見るところ、哀感一入の地（吉之丞・善高ら）の名調に応え得るには少々線が細い。序ノ舞は、一転、殿上人時代の夜の舞楽の華やぎの回想。舞の前、後見が面を直していたが、どうしてもクモリがち。そのせいか舞は何となく不安げで、明るさから遠く何かうら悲しい業平に思えた。（1時間22分）

「寝音曲」　主・千吉に謡を聞かれたとあって躍起になり否定する太郎冠者も、幼少より召使う汝の声を聞き違う事はない、と言われれば観念の臍固めざるを得ない。「確と聞かせられましたか、ハハハハハハ」と笑い飛ばす腹に、瞬時、策を講ずる抜かりのなさ、千之丞鮮やかに立ち回れば、謡をせっつきはするが節々の態度鷹揚な千吉の主がよい。先の小舞謡「小原木」が短いとて此の度は「放下僧」の小謡、主の膝枕で謡う小細工も調子に乗りすぎ、立って舞い出す始末。千之丞の巧さに「声もやう出て舞も面白かった」は主ならずとも。逃げ出す千之丞に「苦しうない、先づ待て〳〵」と追うトメ、ほのぼのと温い空気は主・千吉のもの。（17分）

「海士・懐中ノ舞」　前場、亡母追善に讃州へ下向の房前大臣（子方・梅若雄一郎）の粋狂は、水底に映る月を見るに邪魔な藻を刈らせること。これが海女（実は房前ノ母ノ霊）シテ猶義との出遇い、房前ノ従者ワキ勝久との問答は珠取りの故事に及び、更に房前が出生の秘を明かし（雄一郎君の謡立派）、委細が明るみに出るうち、海女は波に消える。

佗しい境遇吐露する一声から直ぐワキとの問答になる。シテは面深井・襟浅黄・撫子文白摺箔着付・白地観世水貝水草文縫箔腰巻・濃萌黄水衣。母子の愁嘆場となるを

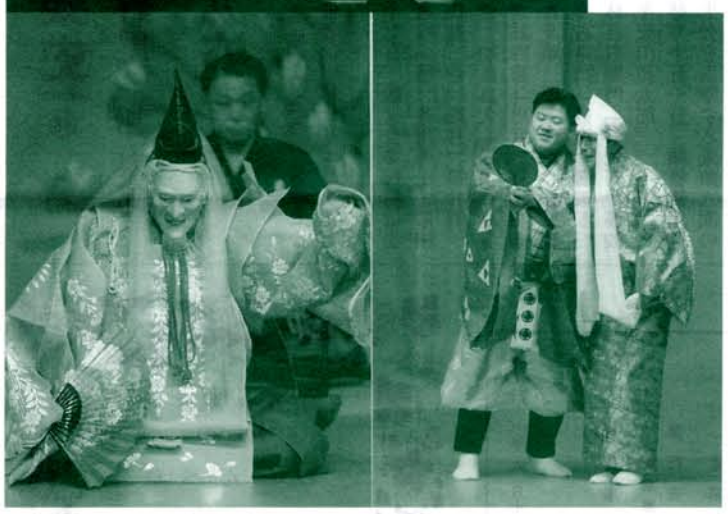
（④面へつづく）

（③面よりつづき）

逸らすかにワキが珠取りの再現をシテに勧める眼目の珠ノ段は、水衣脱ぎ裳着胴、鎌で舞う。大きく掻き分ける型に一ノ松へ〳〵分け入りて、勾欄に寄り下を見、珠を〳〵取り得ん事は不定なり、と打合てシオリ、無力を歎く心、また、二ノ松では〳〵あの波の彼方、と惹かれるように出て幕の左遠く見る風情、更に、〳〵大悲の利剣を、と龍宮へ飛び入る覚悟に橋懸からスミへ走り出るところ、など猶義充実ぶりを発揮、クドキの哀調も中々。中入は証の手跡（扇に擬す）を子方に渡し、ひっそりシオリ一ノ松、其処でシオリ解き、勾欄に寄って子方を見込む中入の感じもよかった。アイは浦人・千之丞、珠にまつわる謂れ少々重々しく語り精彩。

後シテは晃一、追善を受け成仏、龍女となり報謝の早舞を舞う。面泥眼・黒垂・龍戴・襟白浅黄・鱗箔着付・濃浅黄大口・赤地牡丹立湧文舞衣壷折。常座で子方を見てシオリ、喜びに満ち足りた嬉し涙（金剛・喜多で泣キ掛り）から早舞になる。小書で経巻を懐中して舞い、位進み舞上げに子方へ渡す。晴れやかな品のよい舞だった。（1時間22分・6月18日・名古屋梅猶会）

㊧「熊野」野村四郎、梅田嘉宏



㊤㊨「鏡男」井上靖浩・佐藤友彦、㊤㊧「西行桜」観世喜之
（杉浦賢次氏撮影）

「千手」

虜囚の平重衡ツレ正宜、慰めに遣わされる千手シテ愛と、雨の一夜を狩野介宗茂ワキ雅介の取持ちで宴を張るが、予ての出家の願い叶わず、都へ召喚の勅が下る。

正宜・愛の親子共演は、役が逆なら此の曲は成り立たないところ、ここらが女流の限界か。シテの線の細いのは否めないが、役に嵌り、花の都人に〳〵恥かしながら見みえん、の伏目がちな楚々とした風情随処にみられ、ツレに同情する愁いを含む問答などは女流ならこそ。イロエ・舞グセ・中ノ舞と慎ましく、琵琶と琴を〳〵合はせて聞けば、のところ、二つの音色に〳〵峯の松風、も心を通わせるかと、居立って目付柱上を眺める辺りも心持ちをみせて佳。キリは、扇開くとツレの跡を指シ、〳〵後朝に引き離るる、ツレは、その横を袖触れ合うこともなく淡々と去って行くのが哀れ深く思えた。（1時間21分）

「犬山伏」

茶屋・靖雄に憩う僧・友彦、後より山伏シテ弘之が来り、茶が熱いのぬるいのと文句たら〳〵に、茶屋の肩を持てば口達者が仇、山伏と衝突する。逃げ出そうとするが「そなたを去なせばそれがしが迷惑致す」と茶屋に引き留められ、騒ぎの収拾は人喰と称する茶屋の飼犬を手懐けた方が、相手に要求を飲ませることになる。茶屋が猛犬（郁雄）を連れて来る迄の不穏な空気、山伏と僧との無言劇が面白い。犬が登場、名はトラと予め茶屋から入れ知恵された僧が、「南無喝囉怛那とらやあや」と唱えれば、犬は寝転んで喜び、山伏の「ぼろおん〳〵」には噛みつかんばかり。小賢しい友彦と頭が高い弘之が好対照。（28分）

「国栖・白頭」

壬申の乱の、吉野を舞台とする一奇聞。都を追われ吉野へ遁れる天武（ここでは清見原）天皇（子方・阪口貴仁）、川漁師老夫婦（シテ萌・ツレ荘太郎）から鮎の供御を受け、残りが官人（ワキ勝久）を通じ下賜されるが、その焼いた鮎、生きている様だとシテ。〳〵岩切る水に放せば、と颯と扇を繰り出す型から鮎を目で追う面使ヒの敏捷、鮎ノ段の鮮やか。追手（アイ靖浩・俊裕）が掛かれば、沈着且つ果敢な応対は、「何その舟を捜さうとや」とキッと居立つところも迫力。夜更け、帝の辛苦慰めんとシテとツレが退くと後場。天女（ツレ飛能）が出て一ノ松で露取り舞台へ入ると達拝掛天女ノ舞。柄を生かして大きく舞上げ、脇正から〳〵御前、と幕へ招くと、吉野を護る後シテ蔵王権現が一旦半幕で姿を見せ、〳〵即ち姿を現し、の返シ句にスタ〳〵といった感じで出る。白頭・泥大飛出・白地半切・淡萌黄狩衣（衣紋ニ着ル）の威風、豪快なキリだった。（1時間7分・6月19日・名古屋宝生会）

「魚説法」

親の追善、及びその供養に法話も願おうと寺を訪ねる施主アド幸雄、住持が留守なら代りに、と新発意シテ萬斎を依頼。一度は断る殊勝なシテも御布施の魅力には敵わず、出向くと床几に掛かり、嘗て海浜に親しみ覚えた魚の名を、法話らしく勿体ぶって読み連ねる（写真）うち、流石にアドも気付。今や已れの着想に図に乗り、興がる風もみせる萬斎の小癪は、アドとの応酬に秀句の連発、「生蛸〳〵（なまんだなまんだ）」と退いて行くところなど、蛙の面に水、才気煥発の萬斎の今をみる。（16分）

「道成寺」

鬼才を謳われた橋岡久馬一周忌追善。古格を重んじた故人を彷彿するかの拘泥りは、囃子方（次郎・嘉津幸・総一郎・宗久）、後見（銕之丞ら）、地謡（邦久・勘鹿ら）、鐘後見（修一・晃一ら）の全員が長袴着用、近頃珍しい。

シテ後嗣九世久太郎、面近江女・襟白赤・白地金鱗箔着付・黒地紋尽縫箔腰巻・麻ノ葉地紋枝垂桜ニ短冊散シ文紅入唐織壷折の姿、三ノ松につつと出て暫時佇立、そこから道成寺の石段一つ一つ登る心に、一足毎に爪先上げて踏みしめるように運ぶ。寺にやって来た女の気配に立つ能力（アイ萬斎）、「これなる女性は」と咎めんとしてまじ〳〵見詰める微妙な間（ま）、女の魅力と女人禁制の住僧（ワキ登）の言葉、能力の頭のなかを慌しく交差する風も、女には科（とが）を受けるかどうかの不安、両者の心のうちもみえて面白い。能力の心得で、鐘供養に舞を、の願い許された女が、両肩をそばだて「あらぁぁぁ嬉しや」と詠唱風の歓声上げるところ、先代久馬を彷彿とする。物着あと一ノ松から見込む執心の鐘、昂奮掻き立てる鋭い大鼓の一調で舞台に入る女は、〳〵花の外には、と左手水平に出すと褄を取り乱拍子（写真）。八段で中ノ段、ワカを刻み込み十一段を粘っこく踏む。近頃にない長い乱拍子から急ノ舞へ。舞の中、笛の胸掻き毟る様なヒシギと同時にきっと見上げる鐘への執心は、憂き人への滾（たぎ）る情念。舞上げ、〳〵霜雪天に、と仰ぎ、〳〵人々眠れば、と住僧の前、眠りを確めるかに面使うと、鐘に〳〵狙ひ寄りて、烏帽子刎ね（写真）、〳〵龍頭に手を掛け、拍子踏むや綺麗に鐘の中へ消える（見所から拍手が起るが感心しない）。能力が落ちた鐘に驚き、鐘に触るところは二人同時に触るので、二人の間の問答は割に淡白。住僧の語も然程感情を露わにせず、従僧に説き聞かせるといった印象。

後場は、〳〵程なく鐘楼に引き上げたり、と鐘を上げるが、シテ蛇体が安座で双手挙げている姿は、自身で鐘を持ち上げて現われたとも。唐織を腰に巻き、打杖持ち立つと祈り。鱗落シの蛇体を三ノ松まで追う住僧、逆襲する蛇体はシテ柱へ左手を掛け、ちらりと鐘に目を遣ると住僧を睨め付け、悶える様にきりきりと巻いてゆく。柱巻の苦悶の表情はいっそ切ない。祈り伏せられてなお、〳〵鐘に向って、迫る合膝、合膝返シに鐘を見込む執念の凄まじさは先代も斯くやのアクセントの付け方。キリは幕へ走り込み、幕内で飛んだ。（1時間44分・7月3日・名古屋橋岡会）

㊤㊨「魚説法」野村萬斎、㊤㊧「道成寺」橋岡久太郎、㊧「道成寺」（乱拍子）橋岡久太郎、囃子方㊧より徳田宗久、河村総一郎、後藤嘉津幸、藤田次郎（杉浦賢次氏撮影）

名古屋宝生会定式能（第49期 第3回）

九月十八日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能 **草紙洗**
立衆 辰巳大二郎
立衆 内藤 飛能
立衆 辰巳 孝弥
貴之 和久荘太郎
玉井 田口 将成
博祐
間 飯冨 雅介　河村眞之介
鹿島 俊裕　柳原冨司忠　鹿取 希世
後見 辰巳満次郎　藤田 光子
石黒 孝　地謡 松浦 祥子　衣斐 愛
芳賀カズ子　倉本 雅
足立 知子　竹内 澄子
鬼頭 京子

狂言 **隠狸**
井上菊次郎　井上 靖浩
後見 佐藤 融
稲川 寿一
馬繰 富四夫
石黒 孝弥

能 **乱**
佐藤 耕司
高安 勝久　笛 鉱一
福井啓次郎　鬼頭 義命
大野 誠
後見 馬繰富四夫
石黒 孝　地謡 平田 正文　稲川 寿一
柴田 勲　衣斐 正宜
寺部 一威　辰巳満次郎
久野 幸三　和久荘太郎
（五時終了予定）

仕舞 **笹ノ段**
衣斐 正宜
鳥追
辰巳満次郎　地謡

主催 名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
佐藤 耕司方
電話FAX 〇五二―八〇三―七三七二

［有料］
当日券一万円（二枚綴）
学生券二千円

名古屋観世会定式能（5回）

九月十九日（祝・敬老の日）十二時半開演
名古屋能楽堂

能 **清経**
上田 拓司
観世 芳伸
替之型
杉江 元　笛 鉱一
後藤孝一郎　竹市 学
後見 小島 一英　本田 勲
梅田 邦久　須部 甫　祖父江修一
武田 邦弘
梅田 嘉宏
清沢 一政　片山 清司
古橋 正邦
地謡

狂言 **蝸牛**
野村小三郎　野村又三郎
松田 高義
後見 伴野 俊彦
加賀 敏彦
武田 邦弘
梅田 邦久
久田 勘鹿

仕舞 **定家**
片山九郎右衛門
阿漕
大槻 文蔵　地謡

能 **一角仙人**
龍神 上田 顕崇
〃 観世 淳夫
片山 清司
観世銕之丞
高安 勝久
相元 正樹
橋本 宰
後見 梅田 嘉宏　地謡 外山 圭一　河村総一郎　加藤 洋樹
片山九郎右衛門　八神 孝充　松山 幸親　大槻 文蔵　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
上田 拓司　高橋 暸一　久田 勘鹿
（終演四時頃）

附祝言

主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市昭和区台町2―16―5
梅田 邦久方
電話・FAX〇五二―八四一―四六三二

［有料］
当日券八〇〇〇円（自由席）
※枚数に制限があり、売り切れになることがあります。
※当日11時より先着順に座席指定をさせて頂きます。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年9月～17年10月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

9月25日	「松虫」（金剛流）	豊嶋三千春ほか
10月2日	「三輪」（観世流）	梅若六郎ほか
10月9日	「熊坂」（宝生流）	田崎隆三ほか
10月16日	「楊貴妃」（金春流）	本多光洋ほか
10月23日	「俊寛」（再）（観世流）	関根祥六ほか
10月30日	「入間川」（和泉流）	三宅右近ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（能楽関係公演のみ）（TEL 052－231－0088）

［9月］
25日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

［10月］
1日(土)　久田勘鷗の会　（番組①面）（有料）
2日(日)　第40回記念公演「鳳の会」　（番組①面）（有料）
10日(月)　名古屋幽花会秋季大会　（番組①面）（無料）
14日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（番組②面）（有料）
15日(土)　名古屋皐楽会　（番組②面）（有料）
16日(日)　邦謡会大会　（無料）
23日(日)　三交会大会　（番組④面）（無料）
30日(日)　武田謡楽会　（無料）

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－682－1751）

［10月］
10日(月)　鳳鳴会大会　（番組②面）（無料）

久田勘鷗の会特別公演
能「烏帽子折」上演
10月1日 観世宗家来演

観世流「久田勘鷗の会」は、来たる10月1日、名古屋能楽堂で催主久田勘鷗師の亡父・秀雄師の二十三回忌追善の特別公演として催される。特に今回の公演は父君の追善とともに、勘鷗師の子息・勘吉郎君が能「烏帽子折」の子方として出勤。久田家三代をつなぐゆかりある演能とともに、当名古屋の能楽界では100年ぶりとされる能「烏帽子折」の上演はきわめて注目される。

故秀雄氏、催主勘鷗氏はともに流儀では内弟子として修業、勘鷗氏は、今回老女物「卒都婆小町」の所演。この公演には宗家観世清和師が来演して「烏帽子折」のシテを演ずる。また勘鷗師夫人三津子師が舞囃子「野宮」、勘鷗師の実兄・小鼓方久田舜一郎師、同じく息女・小鼓方久田陽春子師の出演など久田家一門をあげて幽玄の舞台を繰り広げる。（番組①面）

愛知万博会場で
能・狂言上演

能楽協会、中日新聞社など主催による「世界無形遺産　能・狂言のすべて　咲きほこる伝統」が9月12日、愛・地球博（愛知万博）の長久手会場ＥＸＰＯドームで開催された。

宝生流半能「高砂」（佐野萌）、金春流「田村」（金春安明）、喜多流「羽衣」（友枝昭世）、大蔵流狂言「靭猿」（茂山千作）、観世流能「船弁慶」（観世清和）、和泉流狂言「髭櫓」（野村万作）、金剛流能「土蜘蛛」（金剛永謹）の上演で、連日二万人余の来場を数える万博会場で約四千人が幽玄の美を鑑賞した。

京都
廣田鑑賞会記念能開催
10月2日 金剛能楽堂

金剛流廣田鑑賞会主催「第五回廣田鑑賞会記念能」は十月二日(日)金剛能楽堂で開催される。平成17年度文化庁芸術祭参加。東京から笛の一噌隆之氏、大鼓の柿原弘和氏が来演、宗家金剛永謹師は舞囃子「井筒」を上演する。午後一時三十分始曲。

番組は次のとおり

狂言「鬼瓦」茂山千三郎、松本薫
舞囃子「井筒」古比之舞　金剛永謹
ごあんない　演劇評論家　權藤　芳一

能「葛城」神楽　広田幸稔、ワキ福王和幸、笛・一噌隆之、小鼓・成田達志、大鼓・柿原弘和、太鼓・前川光範、後見金剛永謹、廣田泰三、廣田泰能　地謡・今井清隆、宇高通成ほか

一般八〇〇〇円、学生三〇〇〇円、チケット取扱い＝ローソンチケット（Lコード52681）、金剛能楽堂（075・441・7222）廣田鑑賞会（075・722・9123）など。

伊勢の伝統の能楽まつり

伊勢の伝統の能楽を継承する会では、〝うましくに出会いを求めて〟第11回みえ県民文化祭「第八回伊勢の伝統の能楽まつり」を十月二十二日、伊勢市生涯学習センターで開催する。正午始。

能組は次のとおり。（④面関連）

半能（通り能）「洞猩々」
仕舞（一色能）「枕慈童」「経政」「項羽」、連吟（一色能）「太郎花」、舞囃子（通り能）「松風」
狂言（馬瀬狂言）「柿山伏」、仕舞（通り能）「鶴亀」「西王母」、仕舞（一色能）「砧」「井筒」「阿漕」、狂言（馬瀬狂言）「朝比奈」、連吟（一色能）「三井寺」、仕舞（一色能）「半蔀」「松風」、仕舞（通り能）「紅葉狩」「船弁慶」、独吟（一色能）「成陽宮」、狂言（馬瀬狂言）「文荷」、半能（一色能）「熊坂」

事務局＝伊勢市一色町一六七七番地、（〇五九六）二二－一七二〇

大阪
能「恋重荷」上演
10月22日　大槻能楽堂

大槻能楽堂では、自主公演能として毎月定例公演を開催しているが、十月公演は七日狂言「因幡堂」（善竹忠一郎）、能「井筒」（シテ上田拓司）を上演。また特別公演として十月二十二日（土）能「恋重荷」（シテ観世清和）、狂言「鬼瓦」（茂山千作）を上演する。大槻能楽堂＝大阪市中央区上町A番7号。☎06・6761・8055。

名古屋能楽堂演能案内
〝能〟久田勘鷗の会特別公演
故久田秀雄師二十三回忌追善

十月一日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

番組

能　卒都婆小町　久田勘鷗
一度之次第　福王茂十郎　福王知登　河村総一郎　久田舜一郎　藤田六郎兵衛
後見　泉嘉夫　浦田保利　笠田昭雄　地謡　松山幸親　藤谷音彌　上田貴弘　上田公威　上田拓司　下川宜長　観世清和　笠田稔

仕舞　隅田川　浦田保利　藤戸　上田貴弘　地謡　角幸二郎　大西礼久　武田邦弘　清水義也

舞囃子　野宮　合掌留　久田三津子　筧鉱一　久田陽春子　鹿取希世

狂言　飛越　野村又三郎　井上菊次郎　後見　松田高義　子方　久田勘吉郎　前ツレ　上田拓司　立衆　笠田昭雄　藤谷音彌　清水義也　大西礼久　坂口貴信　祖父江修一　清沢一政　上田公威　若者　観世清和

能　烏帽子折　高安勝久　飯富雅介　筧鉱一　福井啓次郎　加藤洋輝　竹市学
間狂言　鹿島俊裕　井上靖浩　佐藤友彦　野村小三郎　佐藤融
後見　橋田慈観　下川宜長　久田勘鷗　地謡　八神孝充　松山幸親　高橋暸一　加賀敏彦　武田邦弘　笠田貴弘　上田稔　山田義高

主催　〝能〟久田勘鷗の会
事務所＝☎052・705・1584
FAX052・705・1585

［入場料］
正面（指定席）S席前売一五〇〇〇円（当日一六〇〇〇円）
一般（自由席）前売　一二〇〇〇円（当日一三〇〇〇円）
学生（自由席）前売　五〇〇〇円（当日六〇〇〇円）
前売券取扱所＝TEL0570・02・9999（Pコード：363－036）
チケットぴあスポット、ファミリーマート、サンクス、セブンイレブン、市内プレイガイド、久田勘鷗事務所

鳳の会第40回記念公演

十月二日(日)午後一時三十分始
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林　和利

狂言　雁大名　大名　井上菊次郎　太郎冠者　雁屋　大野弘之　佐藤友彦
花子　何某　佐藤融　太郎冠者　妻　井上靖浩　鹿島俊裕

能　石橋　赤獅子　白獅子　久田勘吉郎　久田勘鷗　高安勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　上田慎也　大野誠
間　井上菊次郎　佐藤友彦　今枝郁雄
後見　祖父江修一　上田貴弘　松山幸親　地謡　外山圭一　本田清沢　山田義高　高橋暸一　下川宜長　藤谷音彌　笠田昭雄

主催　鳳の会

［有料］
A席5000円
B席3500円
学生2000円

［問い合わせ］
井上菊次郎方（052・834・6112）
佐藤友彦方（052・911・8784）
名古屋女子大学林研究室（052・801・4035）

名古屋幽花会秋季大会

十月十日(祝)午前十時開演
名古屋能楽堂

素謡　神歌　松枝寅太郎　片山伸吾
羽衣　倉澤寛　宮崎晃吉
雨月　冨田フク　野村満子　藤原美哉子
通小町　長艸敏明　徳岡孝二　石川輝夫
梅　富田まさ子　岩瀬多美子
独吟　實盛　キリ　東山清和
舞囃子　熊野　村雨留　比江嶋孝子　河村眞之介　曽和尚靖　杉市和
唐船　バンシキ　村木玲子　河村眞之介　曽和尚靖　前川光長　杉市和
素謡　花筐　高木寛敬　宮崎晃吉　岡本耕蔵　倉澤寛

（②面へつづく）

〝狂言で遊ぼう〟

狂言共同社 EXPOささしま会場でイベント

名古屋狂言共同社では、さる八月十七日(水)愛・地球博ささしまサテライト会場で、狂言共同社主催の「狂言の世界で遊ぼう」のテーマで、小中学生らが参加して狂言イベントを開催。関心と話題をよんだ。

写真㊤子供たちとのワークショップ、㊦夜の部の公演

第3回 新作能面展

中部能面研究社

中部能面研究社（代表磯部峯雲氏）は、第三回新作能面展を九月二十八日(水)より十月二日(日)まで名古屋市博物館三階第五室ギャラリーで開催、初心者の作品から十数年の作歴をもつ者などあわせて四十名程の作品が展示される。

事務局は名古屋市瑞穂区船原町4－10－10－102号、☎052・882・4310

［訂正］本紙6月号①面、泉嘉夫、福井啓次郎両氏の受章で春の褒章とあるのは「春の叙勲」の誤りにつき訂正します。また福井啓次郎氏の海外公演8回とあるのは、全部で11回、18カ国の公演に参加。お詫びして訂正します。

［おことわり］「戦後名古屋能楽史」は今号休載させて頂きます。

鳳鳴会大会

十月十日(月・祝)十二時半始
熱田神宮能楽殿

素謡 朝長　松井 弘　武田 文志　佐川 勝貴　武田 友志　武田 志房　武田 宗典　地謡

半蔀　兵藤 善茂　祖父江修一　三村 惠子　武田 友志　武田 志房　佐川 勝貴　地謡

舞囃子 班女　山崎佐東子　佃 良太郎　後藤嘉津幸　竹市 学　三村 惠子　武田 友志　武田 志房　武田 宗典　地謡

源氏供養　浅井 一元　佃 良太郎　後藤嘉津幸　竹市 学　佐川 勝貴　岡 久広　武田 志房　武田 文志　地謡

素謡 安宅　冨田 哲史　笹山 忠　武田 友志　武田 宗典　岡 久広　武田 志房　祖父江修一　地謡

西行桜　浅井 一元　武田 文志　武田 宗典　武田 友志　武田 志房　祖父江修一　地謡

仕舞 花月キリ　木本 仁之　箙　矢野 義章

素謡 恋重荷　武田 宗典　山崎 哲生　山崎佐東子　佐川 勝貴　岡 久広　武田 志房　武田 友志　地謡

三井寺　冨田 尚史　矢野 義章　楳木 映夫　佐川 勝貴　地謡　三村 惠子　武田 友志　岡 久広　武田 文志

鞍馬天狗　冨田 哲史　奥田 昌人　武田 友志　佐川 勝貴　武田 文志　武田 志房　祖父江修一　地謡

番外仕舞 玉之段　武田 友志
采女キリ　武田 志房
善知鳥　武田 文志

（終了予定午後五時）

附祝言

主催 鳳鳴会
武田志房
幹事 笹山忠
愛知県瀬戸市山手町一一七－一
TEL〇五六一（八二）〇八七四
FAX

◎入場無料
◎御来場歓迎

（①面名古屋幽花会番組よりつづき）

番外仕舞 玉鬘　片山九郎右衛門

独吟 笠之段　奥村 昭男

能 隅田川　子方 分林寛奈子　村木 寛茂　植田隆之亮　山本 順三　河村総一郎　曽和 尚靖　杉 市和

独吟 恋重荷　松枝寅太郎

舞囃子 雲林院　懸 瑛子　河村眞之介　曽和 尚靖　前川 光長　杉 市和

砧　後 松久 祐子　河村総一郎　曽和 尚靖　前川 光長　杉 市和

素謡 鉢木　村木 玲子　村川喜久子　伊藤やす子

連吟 融　ロンギ　浅井 剛　奥田 英山　黒川 勇　増田 育三　野瀬兼治郎　西野 宏　寺田 豊

仕舞 道明寺　木村 厚

網之段　小田 和季

三輪　小泉いく子

柏崎　石原 雅子

浮舟　中島 佳子

番外舞囃子 猩々　片山慶次郎　河村眞之介　曽和 尚靖　前川 光長　杉 市和

（五時三十分頃終了予定）

［御来場歓迎］

主催 名古屋幽花会
片山慶次郎

名古屋能楽堂定例公演

十月十四日(金)午後六時三十分始
名古屋能楽堂

狂言 謀生ヶ種　松西 高義　野村又三郎　後見 伴野 俊彦

能 融　大槻 文蔵　高安 勝久　河村眞之介　福井啓次郎　井上 敬介　藤田六郎兵衛　舞返 間 野村小三郎　後見 梅田 嘉宏　泉 嘉夫　地謡 須部 甫　松山 幸親　高橋 瞭一　清沢 一政　祖父江修一　久田 勘鶴　梅田 邦久　古橋 正邦

（午後八時半頃終了予定）

主催 能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団
協賛 能楽協会名古屋支部

入場料 前売一般 三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生前売 二〇〇〇円（当日二五〇〇円）

取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（0570・02・9999）
市内プレイガイド

名古屋皐楽会秋季大会

十月十五日(土)正午始
名古屋能楽堂

番外仕舞 番組

柏崎道行　佐久間二郎
殺生石　桑田 貴志

仕舞 羽衣キリ　筒井 俊貴

素謡 経正　山田 貞子　中野 理恵

能 三輪　深見 しげ　高安 勝久　河村総一郎　福井啓次郎　助川 治　藤田六郎兵衛　間 井上菊次郎　後見 佐久間二郎　観世 喜之　長沼 範夫　地謡 外山 圭一　桑田 貴志　中所 宜夫　中森 貫太　駒瀬 直也　五木田三郎　観世 喜正　小林 喜久

連吟 屋島　後藤登久雄
海士　山田 延恒

舞囃子 卒塔婆小町　水田 純子　筧 鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

番囃子 道成寺　奈倉 早苗　観世 喜正　佐久間二郎　野村又三郎　河村総一郎　福井啓次郎　助川 治　藤田六郎兵衛　地謡 高橋 瞭一　小林 喜久　観世 喜之　五木田三郎　駒瀬 直也

仕舞 松風　竹村 武

舞囃子 融　五段・クツロギ　替ノ形　若山弥栄子　筧 鉱一　後藤孝一郎　助川 治　鹿取 希世

素謡 千手　竹村 武　林 政興　観世 喜正

能 頼政　諸隈 良吉　高安 勝久　筧 鉱一　後藤孝一郎　鹿取 希世　間 佐藤 融　高橋 瞭一　桑田 貴志　駒瀬 直也　中森 貫太　後見 長沼 範夫　五木田三郎　小林 喜久　地謡 佐久間二郎　中所 宜夫　観世 喜之　観世 喜正

（終了五時頃）

番外仕舞 鳥追船　観世 喜之
白楽天　観世 喜正

（素謡省略個所有）

［御来場歓迎］

主催 名古屋皐楽会
補導 観世喜之
名古屋喜謡会

高浜虚子作「実朝」観能雑記

竹尾邦太郎

「實朝」は大正八年（一九一九）、高浜虚子（四十五歳）の作。平成八年（一九九八）十月二十六日、俳誌『ホトトギス』創刊百年記念行事の一環として稲畑汀子の補綴、堂本正樹の台本・演出、野村四郎の節付・作舞、そのほか三役の協力によって鎌倉芸術館小ホールで初演され、平成十年二月二十七日、シテ野村四郎、旅僧ワキ宝生欣哉、銀杏ノ精アイ野村良介、囃子藤田六郎兵衛・大倉源次郎・柿原崇志・金春国和、主後見大槻文蔵、地頭浅井文義の配役で大槻清韻会能楽堂で上演。

この度は七年ぶりの大阪公演である。シテ大槻文蔵、ワキ福王和幸、アイ茂山七五三、囃子野口伝之輔・曽和正博・白坂保行・中田弘美、主後見泉泰孝、地頭阿部信之。

因に喜多流現行曲の「實朝」は同名異曲。昭和二十五年（一九五〇）春、土岐善麿の作で同年秋、素謡を鶴岡八幡宮の拝殿で奉納、翌年十一月十一日、喜多実が染井能楽堂で初演する。

さて、地謡・囃子方座就くと大銀杏を表わす山の作物（小宮の骨組に黄葉を敷きつめ、萌黄引廻シ。先回は榊葉を置いた上に黄葉を敷き、紺引廻し）を笛座前、角掛ケて据える。名宣笛で出る旅僧、道行・着詞から鶴岡八幡宮の大銀杏を認めると、實朝の一首「宮柱ふとしきたててよろづよに今ぞ栄えむ鎌倉の里」を口ずさみ、源氏の夢の跡を偲び、正中（先回は脇正）に下居合掌、實朝の菩提を弔いワキ座に就くと、散り敷く黄葉を歩を運びつつ左、右と掃き清める庭掃キ男のシテ、僧に気付き問答となると先の一首の真意は、〽歎きわび世を背くべきかた知らず吉野の奥も住みうしといへり、の一首である、と沈痛な面持ちに實朝の心を代弁する。嫋々たる笛のアシラヒが憂いを一層深くするが、一方では巨船建造して渡唐の雄図、この覇気が、また實朝の歌に雄渾な古調をもたらすことをクセに言う。実朝の歌の姿は、〽天に駆ける龍のごと、と正先で双手を拡げる姿が象徴的である。

クセ切は塒に帰る群鴉や童の喚声も融け込む〽夕間暮、萩箒を手放すと膝をつき、祢宜達の影も定かでない寂寞たる境内に、込み上げる思いに笛のアシラヒでひっそりとシオルと、濃くなる宵闇は〽ものすごの景色や、とロンギに。シオリ解くと、刻限も同じ古の物凄の景色が立ち現われるか。〽今は何をか包むべき、と僧に實朝の幽霊と素姓明かし、往古の歓を〽目のあたり、に見参せん、とシテ。中入は〽社殿の方へ、と右に廻り〽風打ち騒ぐ、と撥ネ扇にキリキリ鋭く小廻り、黄葉を巻き上げる旋風の心に〽そのまま見えず、と作物へ入る様が面白い（先回は数拍子踏み、招キ扇に正先へ出てから作物へ）。

アイ銀杏ノ精は實朝の事跡から生々流転の哲理に及ぶ処世観を力の籠った立シャベリに語り、黄葉の空に舞う有様を小舞に、〽黄金の木の葉の舞ひ落つる、と左袖被キ膝をつき面を隠すトメの型に、實朝の命運を巧みに抽象する。

後場は實朝の跡を弔う僧の夢の中に立ち現われる實朝、曲のテーマとなる〽大海の磯もとどろによする波、と上の句を作物内で謡うと、地が下の句を受け、〽われてくだけてさけて散るかも、で、予め大銀杏の前面に組込まれていた緞子包舟（「国栖」に同じ）の舳先部分だけが割れて前に倒れ、横たえられると即ち巨船となり、引廻シは波浪になる。残る屋根に黄葉を敷きつめた小宮の部分は屋形になる趣向で、その工夫はいつみても素晴しい。

屋形の床几に掛かるシテは面今若・黒垂・初冠（垂纓）・八ツ藤文白地指貫・金霞文紺地単狩衣（エモン）・太刀、威儀を正す笏を持つ衣冠束帯の正装に自ずからなる右大臣の気品（先回は新作面大童子・黒頭・初冠・白地紋大口・鈍青色単狩衣・飾太刀）。〽今は嬉しや、と床几を立ち、船出ままならぬ面目失墜の風評も払拭、舳先に出る實朝が晴れの船出に思い出すのは甥の公暁の凶刃に仆れた昔、船から出てクセでその禍事を客観視して述べる。虫の知らせで秦公民に髪一筋を〽形見と、で左手に髪（黒垂）を取り笏を差し出すところ、社殿に登壇する前、供奉の人々を〽楼門の外に、と笏で幕を指し制止するところ、〽参拝、で前へ進み膝つくと笏を押し戴き叩頭するところ、などピンと張り詰めた雰囲気が、立つと一転、〽時しもあれ、と一ノ松へ抜けざま右肩脱ぐや公暁と変じ、太刀抜き放ち、左手シテ柱に大銀杏に潜む態から〽白刃電光を（走らせて）、と舞台へ躍り出ると、目にもとまらぬ激しい太刀捌きに公暁の兇行の狂騒躁をみせると、うつつに返り、これも何れ色褪せた噂話になってしまうだろう、のクセ留。心は〽大海の磯もとどろに寄する波、で達拝掛の早舞、は船出する大海原の上か。爽快のびやかな舞ぶりは柵（しがらみ）からの解放感、舞の半ば過ぎ、三ノ松へ抜けてキリリと左右に小廻り、三鼓の流シでスルスルと戻って作物に入り、舳先に立つと袖返シ指分に〽大海の、とワカになるところなど如何にも晴れやかである（先回は、早舞・楽・早舞と直り、「唐船」「邯鄲」の楽に通じる喜悦を感じたが）。

〽割れて砕けて、と地が下の句を受けるとイロエ、舞台を大きく廻って二ノ松へ抜けると、此の間に後見は作物を元の大銀杏の「山」に直す。シテは左袖巻上げ暫時佇立、ゆっくり袖を下ろすと直ッて舞台へ。

切地は指廻から〽（月の夜は）はや明けぬ、と左へ有明の空を見る心は僧との別れの刻限、〽我を尋ぬる人もあらば、と僧に近付き指込開キ、銀杏の木蔭で見たなどと〽語るな御僧、と念を押すかに左袖返シ見込むと、〽かき消すやうに、と橋懸へ。〽失せにけり、の返シ句一杯に幕へ入り、僧が立って行き下居、合掌留。私闘とも言える醜い政争を厭い、渡唐の夢を巨船に托そうとした歌人宰相實朝、作物の中の昏冥へ戻らぬところに夢は続くのであろう。兇刃一閃のクセの冷気がアクセントとなり、秋懐も一入の文蔵の好舞台だった。

因に野村四郎の初演以来、梅若六郎・浅見真州・浦田保利・杉浦元三郎らも勤めているという。

（1時間15分・7月9日・能の魅力を探るシリーズの一、新作能・大槻能楽堂自主公演能）

◆盛夏の舞台から◆

「第六回御洒落名匠狂言会・四世井上菊次郎襲名記念」「第六回伝統芸能上演会」「観世会」「第四回名古屋名駅薪能」

竹尾邦太郎

「二人袴」　聟・太一郎、父親・萬、舅・万蔵、太郎冠者・匡。聟入とて父に言われ袴着用で身嗜み整える聟、なにぶん初めてとあって先ず右足高々と上げ、袴へ入れるというよりは突込むと、袴の紐を胸高に締めて一安心の表情が如何にも初々しく、それをまた嬉しそうに直す父親の表情に、実生活では孫であり、昨年六月に急逝した愛息五世万之丞（謚号八世万蔵）の嫡子である太一郎十五歳への溢れんばかりの慈愛が感じられる。二つに裂いた長袴を前に当てただけで聟が舅に舞を所望されては、目配せして注意を喚起する外はないが、以心伝心は芸の上だけではない祖父と孫との信頼関係の深さを思い、胸が熱くなった。（38分）

「清水座頭」　三年前、眼病が因で盲目となった瞽女アド友彦、門付けらしく羯鼓を携行、清水観音に申し夫を祈願すれば、今度は右手の杖を小刻みに突き、左手泳がせてシテ柱へ突き当るかに焦せる気持ちは申し妻をしに罷り出る座頭シテ菊次郎（祐一、改め四世を襲名）。夥しい参詣客の中での出合いは互いが盲目。蹴つまずけば「なぶりおるな」と瞽女、否定し弁明する座頭。痞高い性急な瞽女の声調と、物静かなゆったりした座頭のそれとが巧みに人物像から状況までも活写、改めて五十有余年の名コンビの充実ぶりをみせる。和解してささやかな酒宴に、慰みの肴は座頭の平家のもじり、合戦で斬られた頗が別人の斬られた踵に付けられ其処から髭が生える、などと諧謔味に座頭の浮かれ気分があれば、瞽女は羯鼓を打ち〽秋の暮秋の暮我が行先は見えもせで、と狂言謡は感傷に耽り、男女の対照的な心の機微である。夜更けて微睡む異床同夢に、授かるお告げはそれぞれ西門に連れ合いの現われるとのこと。杖を頼りに探るうち、互いに触れ合う杖の先、ビビッとくる感触に互いを理解、手を携え静かに退いてゆくキリ（写真）の沁々とした幸わせの余情、盟友の友彦を得、菊次郎襲名に相応しい好舞台であった。（50分）

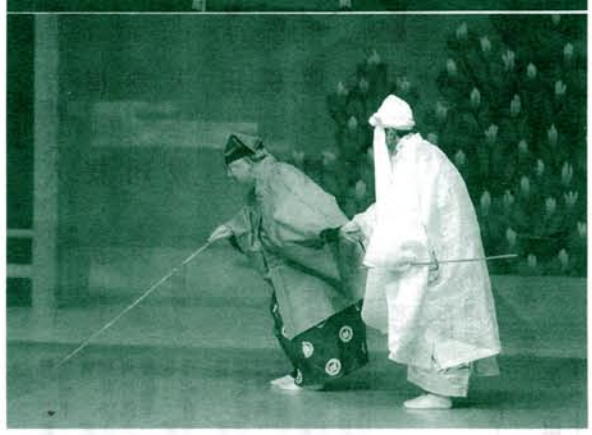
「奈須与市語」　シテ右近。恐懼の余り辞退する与市に、「この義経が（命を）」と左中指を己れの面前に指シ怒気荒く安座するところ。命を承知「我身軽げに」手綱左に取って渚はワキ柱へ、どん〳〵膝行してゆくところ。「潮を結び手水とし」と合掌、神々に祈念して目を開けば、奮い立ち「小兵と云ふ条」と左袖脱ぐや「十二束三伏」と弓を構え「扇の要」とつつつと膝行のところ（写真）など、躍動的な力漲る近頃の「奈須」。当地久しぶりに見る若々しい右近の雄姿。（15分）

「悪太郎」　父・忠一郎に禁酒を誓うが、「今生の暇乞」だからと単刀直入に酒をねだる甥の悪太郎シテ弥太郎。「それは尤もぢゃ」と鷹揚に応対する伯父に関西の善竹家がもつ温もりの柔らかさ、従兄弟とは云え東京の大蔵家には宗家筋の凛乎とした剛さ。盃を重ね、「それならば半盞注いでやらう」と五杯目を干し、伯父の案じたとおり帰途に酔臥。酔夢中、脳髄に摩り付けられたのは先を気遣う伯父が改心を願い吹き込んだ南無阿弥陀仏の名。此処で、伯父は悪太郎の厚板を脱がせ、羽織を差し掛け、笠と数珠を置くだけで剃髪をせず大髭も落さない。目覚めれば、折から六字の名号を唱えて来かかる念仏僧・吉次郎に、我が名を呼ばれたと返事をするもと悪太郎こと南無阿弥陀仏。薄気味悪く思う僧も徐々に様子が分かれば、からかい半分は自ずから踊り念仏（写真）へとエスカレート。「やあ〳〵〳〵」と生真面目に反応するシテのとぼけた味に、大蔵家の力強い骨太の楷書の芸が醸す可笑しみ。（45分）

「千切木」　何かにつけ小煩いので連歌の構中から敬遠される太郎シテ友彦、招かれざる客で講中の饗饗を買い、打擲され踏み付けられれば、聞きつけて棒を持ち馳せ参じる猛妻・靖浩。叱咤されて仇討ちを煽り立てられ、尻込みする太郎の萎縮ぶりもさもありなんと思わせるが、猛妻の勢いにいざ仇討ちとなれば、「そなたばかりでは心許ない」と猛妻も同道。おっかなびっくりの太郎も猛妻を後ろ楯に、敵

（④面へつづく）

［写真］上から「奈須与市語」三宅右近
㊥「悪太郎」（左より）大蔵弥太郎、大蔵吉次郎
㊦「千切本」（左より）井上靖浩、佐藤友彦、（後列）佐藤融、鷲見政行、今枝靖雄、今枝郁雄、大野弘之、井上菊次郎
（杉浦賢次氏撮影）



［写真］
㊤第6回お洒落名匠狂言会「二人袴」（左より）野村太一郎、野村萬、小笠原匡、野村万蔵
㊦「清水座頭」（左より）井上菊次郎、佐藤友彦
（杉浦賢次氏撮影）

第6回伝統芸能上演会「天鼓」長田驍、鬼頭義命（太鼓）、筧鉱一（大鼓）（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

に居留守を使われれば俄に虚勢を張り、猛妻の目の前で棒を使い（写真）、壮語して恰好をつけるいじましさは友彦の味。（25分・7月10日・第6回御洒落名匠狂言会）

「柑子」　もてなしを受け、デザートに出た氷菓子が偶々三つ成りの柑子、珍しいと土産にするため太郎冠者・友彦に持たせておいた主・融、出すよう命ずれば二つは食べてしまったと口実。残った一つには憐れな物語がある、と聞きたくない主を遮り、独り鬼界島に取り残された俊寛僧都に擬えての物語。喋々と語る太郎冠者の調子のよさに、つい貰い泣きの主、はっと気付くと、ばつの悪さもあって声を荒げるが、太郎冠者はぬけ〳〵と「六波羅（腹）に納めてござる」の横着。まんまと引っ掛けられた手前、主の追込みには手加減もありそうな。（13分）

半能**「天鼓」**　帝に名器の鼓を奪われた上、呂水に沈められた天鼓、余人には鳴らぬ鼓も前シテ天鼓の父の王伯が打つと、亡き天鼓に感応して鳴る不思議。悔悟の帝が管弦講を手向け跡を弔えば、後シテ天鼓ノ霊が現われ、喜びに舞を舞う。

半能で後シテの場だけ。喜多流は羯鼓台を目付柱際に、一畳台をそれに付け脇正の框に沿って縦に出す（写真）。シテ驍、ワキ勅使・雅介。〈夕月輝やく、と袖被キ正れ、以下キリの型所きび〳〵と鮮やかに極め、〈また打ち寄りて、と台に寄ると、台には上がらず、右膝だけ台につけ打つのが鼓に寄り添うようで、鼓への愛着ぶりをまざ〳〵と見せる。返シ句に常座へ行きトメ、拍子は踏まない。（38分・7月16日・第6回伝統芸能上演会）

「班女・笹ノ伝」　互いに忘れられぬシテ遊女花子（勘鷗）とワキ吉田少将（雅介）、交わし合った扇を拠り所に、頑なに接客を拒否するシテに業を煮やすアイ野上ノ宿ノ長（又三郎）、呼び出して放逐を言い渡す冒頭、「えーい、早う歩きやいなう」は呆れ果ててもう構うのも厭ぢやの雰囲気。扇を奪い捨てるのもあまり激しくは感じられない。シテは面若女・襟浅黄赤・撫子文白摺箔着付・垣ニ菊文紅白段唐織。

後場、東国から都へ戻るワキ、野上ノ宿でワキツレ従者（宰）に花子の消息を尋ねさせるところ、大方はワキツレが尋ねた心で花子不明のことを伝えるが、それをアイ所ノ者（小三郎）と問答の上で伝えるのが珍しい。所ノ者が切戸へ退き、ワキが床几に掛かると都は紅の森。後シテ笹を持ち出る。着付を小葵文白摺箔に、唐織（脱下）は金地菊文に、鬘帯まで檜垣文から松皮菱文に替える（事情が放逐された少将を恋う急な漂泊の旅、そこまでの着替え必要あろうかと思われるが、能の美学ゆえか）。途上、〈謹上再拝、と幣のように笹を打ち祓い、目の高さに戴いて神頼み。怨慕を吐露するクセの半ば、〈欄干に立ちつくして、と一ノ松先の柱に笹を抱き締め佇むところ、女心の切なさに滲み出る官能的な色気をみる。小書でクセから中ノ舞すべて笹で舞い、舞い上げて扇に替える。ワキが扇を見咎め、ワキツレを介して見せるよう求めると、〈人に見することあらじ、と扇を懐中すると両手で抱くようにしたところなど、哀惜の情も一入だった。（1時間25分）

名古屋観世会㊤㊨「班女・笹ノ伝」久田勘鷗、㊤㊧「野守」祖父江修一、㊦「太刀奪」左より野村小三郎・野村又三郎・松田高義　（杉浦賢次氏撮影）

「太刀奪」　主（小三郎）におもねて通りすがりの使いの者（又三郎）の太刀を奪おうと小才を弄するシテ太郎冠者（高義）、丸腰では恐いので主の小サ刀を借用、使いの者に近付くと「怪我・粗相）で触った」と当今の当たり屋の手口で因縁をつけるが、逆に小サ刀を取られる。この間抜けぶりは、帰途を主と待ち構え、二人掛かりで彼の使いの者を捕まえたはよいが、縄を掛ける段になって縄を綯い出したり、掛けようとして蹴転ばされたり（写真）の体たらく。結局、虻蜂取らずだが曲柄が卑しい。独り小賢しく立ち廻る太郎冠者の頓珍漢ぶりが救いか。（14分）

「野守」　春日野の由ありげな水を巡るシテ野守ノ翁（祖父江修一）とワキ山伏（勝久）の、問答から古歌に詠まれた箸鷹の野守の鏡についてのシテ語へと、水底や樹上に在る鷹を見るシテの仕方に惹かれ、聞くにつけ弥増す鬼神の鏡への興味は、ワキの熱心にシテが含みを持たせ、消える前場、呼吸の合ったきび〳〵した展開に互いの好調ぶりをみせる。

後場、右膝つき背筋を伸ばしたワキが頭上で数珠を揉むと、後シテ鬼神が塚の中で謡い出し、〈野守の鏡は（現れたり）、と塚を出る（写真）。手綺麗な鏡の扱い、豪快な舞働、キリに飛返り袖被キ、すっくと立ってトメルまで歯切れのよい、すかっとした舞台だった。（1時間10分・7月17日・観世会）

「安宅・勧進帳・瀧流ノ伝」　仮設舞台であるが豪華版の薪能。近年、音響機器の性能が格段によくなり、マイクの使用にもあまり抵抗は感じなくなっている。

シテ弁慶（清和）が朗々と読み上げる勧進帳を、ワキ富樫（茂十郎）が瞥見しようと近寄るところ、さりげなく向きを替え、ワキが退けば一呼吸あって更に力強く読み継ぐ辺り、大小アシラヒ（哲也・嘉津幸）にも励まされるかで気合い十分、素晴しい。義経（子方・勘吉郎、気位あり臆せずシテとの問答も立派）が素姓疑われ、すわやと色めきたちワキへ殺到する同山を、金剛杖で押し止めるところも、粒揃いの同山との連係の動きの美しさである。小書で、男舞は〈面白や山水に、と扇をスミへ投げると数珠で舞い、橋懸は幕近くへ抜け、瀧を見上げる心に舞台へ受ケルと、流れる盃を追う態に勾欄下を流れとみて舞台に戻り扇を拾い上げるところ、一首は詠まないが曲水の宴の雅、颯爽と舞い上げる益荒男の格調は宗家清和の品格。辺りを払う堂々の風格のワキと好一対。（1時間4分）

「因幡堂」　大酒飲みの妻（小三郎）の里帰りをよいことに離縁状を送りつけ、因幡薬師に申し妻をするシテ夫（又三郎）、妻に知られたとは露知らず参籠するが、薬師に成り代わりお告げを授ける妻。指定場所へ急ぐ男の心のうちは未だ見ぬ女への期待と柄にもない恥しさ。目尻を下げたシテの好色ぶりが巧い。待ち受ける被衣の下は女の怨の怖さ、ブラック・ユーモアである。（16分）

「土蜘蛛」　何かに取り憑かれ呻吟する頼光（義高）の臥所を、様子窺うかに現われる妖僧に変身のシテ勘鷗、構える頼光に颯と糸を投げ懸けるが、立ち向かう頼光に斬られて退くところ、舞台から橋懸勾欄を跳び越して一回転の荒技の見事。〈失せにけり、で早鼓の出の独武者（茂十郎）と行き逢う際には、小書に無かったが「入違ノ伝」で糸を投げ懸ける。後場は大小前の塚の引廻シ取ると、巣を張り廻らせた中に奇怪な後シテ土蜘蛛ノ精が安座で居る。巣を斬り破って出ると、独武者以下の面々と激しく渡り合い、繰り出す糸も数知れず、キリで仏倒レに両手から背後に糸を投げ捨てるのが鮮やかな大技、勘鷗存分に派手なワザを披露して大奮闘。（46分・7月24日・第4回名駅薪能・名古屋駅タワーズガーデン特設会場）

伊勢の伝統の能楽まつり

十月二十二日（日）正午始
伊勢市生涯学習センター

能　組（狂言・能のみ掲載）

半能（通り能）

洞猩々（シテ）　八田英巳（ワキ）　南川徹也（大鼓）　猪瀬孝（小鼓）　太鼓　大形いく子　阿部毅笛　菊川満子

柿山伏　狂言（馬瀬狂言）　山伏　中谷洋明　畑主　中北久寿生　後見　中林慶三

朝比奈　狂言（馬瀬狂言）　朝比奈　中川雅司　閻魔王　河原良治　後見　中林慶三　林喜久郎

文荷　狂言（馬瀬狂言）　太郎冠者　中北完治　次郎冠者　中北喜久生　主人　林孝久　後見　林喜久郎　中北幸利

三交会大会

十月二十三日（日）九時半始
名古屋能楽堂

半能（一色能）

熊坂（シテ）　石原進（ワキ）　濱口富三（大鼓）　石原隆明（小鼓）　村瀬恒史　太鼓　大形いく子　笛　菊川満子

（終了予定十六時十分頃）

附祝言

後援　三重県教育委員会　三重県教育委員会　伊勢市　伊勢市教育委員会　ほか

番外仕舞　高砂　久田三津子

仕舞　清経（キリ）　増永悦子　桜川（クセ）　岩埼光子　羽衣（クセ）　市川美保子　猩々　武藤明美

仕舞　紅葉狩　山内弘司　羽衣（キリ）　坂井田セツ子　井筒　立松美貴子　自然居士　渡辺幹子

素謡　**蝉丸**　藤井圓隆　藤井一美　山内弘司

井筒　杉本昭夫　藤谷音彌

能　**半蔀**　村瀬登美子　飯冨雅介　河村眞之介　後藤孝一郎　大野誠　間　松田高義

素謡　**隅田川**　後藤阿紀　山内満智子　小森祐子

能　**野宮**　光松見知子　高安勝久　筧鉱一　福井啓次郎　鹿取希世　間　松田高義

素謡　**求塚**　早川功一　林賢一　後藤弘次郎

能　**富士太鼓**　森田早紀　原田千恵子　杉江元　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学　間　藤波徹

舞囃子　**吉野夫人**　小森祐子　後藤孝一郎　筧鉱一　鹿取希世　鬼頭義命

梅枝　後藤阿紀　筧鉱一　福井啓次郎　鹿取希世

巻絹　藤井一美　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市学　鬼頭義命

天鼓　山内満智子　筧鉱一　福井啓次郎　竹市学

舞囃子　**田村**　早川功一　筧鉱一　柳原冨司忠　大野誠

松風　松島久代　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学

龍田　藤井圓隆　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭義命　鹿取希世

熊野　後藤弘次郎　筧鉱一　柳原冨司忠　大野誠

仕舞　**蝉丸**　伊藤和美　**花筐**（狂）　秋田恵美子　**遊行柳**（クセ）　戸松花枝　**猩々**　杉本昭夫

[御来場歓迎]

（終了予定六時過頃）

主催　三交会　三津子　久田

TEL七〇五－一五八四

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成17年10月～17年11月）

◆NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

10月30日	「入間川」（和泉流）	三宅右近ほか
11月6日	「野宮」（観世流）	山本順之ほか
11月13日	「紅葉狩」（宝生流）	寺井良雄ほか
11月20日	「夕顔」（金剛流）	種田道雄ほか
11月27日	「竹生島」（再）（喜多流）	佐々木宗生ほか

◆NHK教育テレビ

11月12日(土)　午後2時50分～午後4時50分
観世流「定家」　浅見真州ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（能楽関係公演のみ）（TEL 052－231－0088）

[10月]			
30日(日)	武田謡楽会	（番組①面）	（無料）
[11月]			
3日(祝)	恵謡会	（番組①面）	（無料）
5日(土)	名古屋金春流友会		（無料）
	名古屋金春会	（番組①面）	（有料）
6日(日)	郁諷会大会	（番組②面）	（無料）
13日(日)	名古屋観世会定式能	（番組②面）	（有料）
19日(土)	名古屋能楽堂定例公演	（番組②面）	（有料）
20日(日)	名古屋宝生会定式能	（番組②面）	（有料）
27日(日)	久田観正会秋の大会		（無料）
28日(月)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演		（有料）
29日(火)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演		（有料）
30日(水)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演		（有料）

文化庁芸術祭第60回記念　名古屋公演
「鐘巻」と「道成寺」
11月28～30日　名古屋能楽堂

文化庁芸術祭第六十回記念として、きたる十一月二十八日(月)から三十日まで三日間、名古屋能楽堂で、記念講演、復曲能「鐘巻」、能「道成寺」の公演が行われる。

主催…文化庁芸術祭執行委員会
後援…愛知県、名古屋市
制作…財団法人大槻能楽堂
協力…社団法人能楽協会

▽十一月二十八日(月)　午後六時半開演
記念講演［第一部］「清姫の心」お話・河合隼雄（文化庁長官）［第二部］「女が鬼になるとき」お話／馬場あき子、レクチャー実演…大槻文蔵、藤田六郎兵衛、大倉源次郎ほか

▽十一月二十九日(火)　午後六時半開演
復曲能「鐘巻」（道成寺原曲）
シテ大槻文蔵、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王和幸、同福王知登、アイ茂山千之丞、茂山あきら
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・山本哲也、太鼓・三島元太郎・後見・泉嘉夫ほか
鐘後見・梅若六郎、梅若晋矢ほか、地謡・片山清司、上田拓司、山本博通、浦田保親ほか

▽十一月三十日(水)　午後六時半開演
能「道成寺」
シテ・梅若六郎、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉、則久英志、アイ野村又三郎、野村小三郎
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸・大鼓・亀井忠雄、太鼓・観世元伯、後見・梅田邦久ほか
鐘後見・梅若晋也、山崎正道ほか、地謡・大槻文蔵、片山清司、上田拓司、山本博通ほか

【入場料】十一月二十八日＝全自由席千円▽十一月二十九日、三十日＝全指定席、S席八千円、A席五千円

入場券発売所…大槻能楽堂＝TEL06・6761・8055、FAX06・6761・3399
藤田六郎兵衛事務所＝TEL・FAX052・571・6341
電子チケットぴあTEL0570・02・9999、ローソンチケットTEL0570・06・3004

初の名古屋公演
響の会　12月11日（名古屋能楽堂）

観世流シテ方・銕仙会所属の清水寛二、西村高夫両氏により一九九一年（平成三年）に結成された「響の会」は、これまで本公演十六回、研究会公演は二十五回という公演実績を関しているが、結成十五年を迎え、きたる十二月十一日(日)初の「響の会名古屋公演」が名古屋能楽堂で催される。

能組は、能「船弁慶」重前後之替（前シテ西村高夫、後シテ清水寛二）、狂言「茶壺」（シテ野村又三郎）、能「葛城」大和舞（シテ観世銕之丞）仕舞三番。

午後一時開演、入場料S席一万円、A席八千円、B席五千円、D席四千円。（番組③面掲載）

電話予約03・3401・2285（響の会・平日10時～5時）

秋の名曲づくし
能　井筒　狂言　萩大名
豊田市能楽堂特別公演

豊田市能楽堂では〝秋の名曲づくし〟として、十一月十二日(土)「特別公演」を開催する。午後二時始。（番組③面掲載）

能組は、宝生流能「井筒」（シテ高橋章）、狂言「萩大名」（シテ茂山千五郎）

入場料　正面席六千円、脇・中正面席四千円。

主催　豊田市・豊田市教育委員会、共催・豊田市文化振興財団

問い合わせは、豊田市能楽堂（電話0565・35・8200）。

小鼓幸清流
船戸昭弘氏職分披露能
12月3日　岐阜市民会館

小鼓幸清流・船戸昭弘氏は、今春、幸清流宗家より職分を許され、このたび十二月三日(土)岐阜市民会館で職分披露能を開催する。主催＝富耀会／柳原冨司忠・船戸昭宏、後援＝岐阜市

船戸昭宏氏は、昭和五十六年岐阜県各務原市生れ、平成四年小鼓・幸清流入門、平成五年「小袖曽我」にて初舞台、平成十一年初能「菊慈童」、平成十七年幸清流職分となり、能楽協会名古屋支部入会。（番組④面掲載）

武田謡楽会秋季大会

十月三十日(日)午前九時半始
名古屋能楽堂

半能　養老　小瀬古勝己　小瀬古喜代子　水波之伝　高安勝久
素謡　井筒　河村総一郎　福井啓次郎　前川光範　藤田六郎兵衛
楊貴妃　河竹登代子　渥美す江子
松風　冨田さだ子　永田慶子　岡崎千代
藤戸　小畑喜代治　橋本正康
卒都婆小町　松岡満寿子　長谷川邦彦　辻岡勝洋
山姥　坂富美子　前山鎮男　藤岡義晴

舞囃子「難波」（斉藤忠佳）「安宅」（加藤愛郎）
「融」（下里紀子）「歌占」（井田順子）
「采女」（田中葛子）「砧」（渡辺一彦）
「鉄輪」（辻岡勝洋）「葛城」（奥田えつこ）
ほか仕舞、独吟、独調

主催　武田謡楽会　武田邦弘

［御来場歓迎］

恵謡会大会

十一月三日(祝)午前九時二十分始
名古屋能楽堂

素謡　鶴亀　小浜敬子　沖田奈々美
井筒　古井ミサ子　鵜沢久
野宮　浅野充子　祖父江修一
松風　三村恵子　森順子　坂井音雅
花筐　河西暁子　葛谷信子　松木千俊　佐川勝貴
仕舞　田村クセ　沖田奈々美　笠之段　黒柳信次　笹之段　石田啓介
舞囃子　紅葉狩　小浜敬子　高砂　田口芳子　天鼓　都築弘子
能　西王母　鵜沢光　横田多津子　杉江元　飯冨雅介　覓鉱一　橋本宰　福井啓次郎　鹿取希世　観世元伯
素謡　弱法師　井上菊次郎　村瀬慶衣子　武田友志
舞囃子　融　板倉峰尾　巻絹　椰野晴美
素謡　定家　杉山悠紀子　武田志房
舞囃子　松風　岩崎喜久子　船弁慶　沢田房枝
素謡　俊寛　成経　佐川勝貴　康頼　武田宗典　板倉峰尾　武田宗和
能　菊慈童　鳥山迪永　橋本宰　飯冨雅介　河村総一郎　杉江元　柳原冨司忠　竹市学
素謡　山姥　近藤幸江　久納智子　武田文志

［御来場歓迎］

名古屋金春流友会

十一月五日(土)九時三十分始
名古屋能楽堂

舞囃子「里塚」（旅一史）「舟弁慶」遊女ノ舞（松本武）
ほか仕舞、独吟、連吟三十番

［入場無料］
名古屋秀麗会・名古屋春敲会
名古屋春栄会・トヨタ車体謡曲部
デンソー能楽部

名古屋金春会能

十一月五日(土)午後一時開演
名古屋能楽堂

実盛　吉場廣明
江口　高橋忍
天鼓　金春憲和
笠ノ段　辻井八郎
仕舞
地謡　佐藤俊之　金春安明　金春穂高　前田登

能　加茂　後ツレ本田芳樹　前ツレ本田布由樹　シテ鬼頭尚久　相元　高安勝久　杉江正樹　松田淳　高義　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭義命　大野誠
間　後見　本田光洋　林泰礼　地謡　旅前田一史　井上登　佐藤俊之　加藤隆敬　吉場廣明　高橋忍　辻井八郎

狂言　引括　野村又三郎　野村小三郎

能　吉野静　金春穂高　飯冨雅介　河村眞之介　福井啓次郎　後見　松田高義　鹿取希世
間　野村小三郎　伴野俊彦　後見　横山紳一　本田芳樹　地謡　甲村健一　伊藤雄二　広瀬雅弘　金春憲和　高橋忍　金春安明　佐藤俊之　福井哲也
能　弱法師　本田光洋　杉江元　覓鉱一　柳原冨司忠　大野誠　豊田均　加藤剛
間　後見　金春穂高　鬼頭尚久　地謡　永田孝司　小島芳樹　高橋八郎　武馬正和　吉場汎　林功　本田布由樹　辻井　（五時三十分頃終了）

付祝言

主催　名古屋秀麗会　名古屋春栄会
後援　㈳金春円満井会

番外仕舞　歌占キリ　武田友志　善界　武田文志　野宮　武田志房
素謡　頼政　石田啓介　黒柳信次　松虫　都築良平　平野和由　三村恵子
番外仕舞　巴

（終了予定　六時三十分頃）

主催　恵謡会　三村恵子
補佐　武田志房

［御来場歓迎］

［入場券］五千円（正面指定席）
四千円（中正面脇正面指定席）
学生席三千円
お問合せ・お申込み＝事務局
名古屋市昭和区松風町2－15－2（フシハラ内）
TEL052・842・7931
FAX052・842・7932

金春流能

第26回名古屋金春会
11月5日名古屋能楽堂

第26回「名古屋金春会能」は、11月5日(土)名古屋能楽堂で、能3番、狂言1番で公演される。

能組は、能「加茂」(シテ鬼頭尚久)

狂言「引括」(シテ野村又三郎)

能「吉野静」(シテ金春穂高)

能「弱法師」(シテ本田光洋)

ほか仕舞四番。午後一時開演。

主催　名古屋秀麗会、名古屋春栄会、後援金春円満井会。

入場券＝正面指定席五〇〇〇円、中正面自由席、脇正面自由席四〇〇〇円、学生席三〇〇〇円。

問い合わせ・申込みは名古屋金春会事務局＝名古屋市昭和区松風町2－15－2、フシハラ内、電話052・842・7931（番組①面掲載）

能「阿漕」上演
四日市能・12月9日

四日市市文化振興事業団、能と狂言に親しむ会四日市研究会主催による「四日市能」は、十二月九日(金)四日市市文化会館で催される。開場午後六時、開演午後六時三十分。

能組は　和泉流狂言「千鳥」(太郎冠者・井上菊次郎、酒屋・佐藤友彦、主人・佐藤融)、観世流能「阿漕」梅田邦久、ワキ福王和幸、間・井上靖浩、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・河村眞之介、太鼓・上田慎也、後見・青木道喜、片山伸吾、地謡・片山清司、武田邦弘、古橋正邦、味方玄ほか

入場料(全席指定)S席四千円、A席三千円

前売り所＝四日市市文化会館(TEL0593・54・4501)、チケットぴあ(TEL0570・02・9999)

「能狂言講座」
豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、十月二十九から四回にわたり「能狂言をもっと面白くする講座」を開講する。

講師には、能狂言等に造詣の深い四氏を迎え、様々な角度から能狂言の楽しみ方の解説が行われる。

四セッションは次のとおり。

〔第1回〕10月29日(土)
「伊勢物語と能」
～永遠の愛の教科書～
講師　高橋　睦郎氏(詩人)
朗読　加賀美幸子氏
(元NHKアナウンサー)

〔第2回〕12月17日(土)
「能装束の裏側」
～作る人　着る人～
講師　山口　巌氏(能装束製作)
ゲスト　大江又三郎氏(観世流シテ方)

〔第3回〕平成18年1月21日(土)
「東海能楽散歩」
～伊勢・鈴鹿を行く～
講師　長田　驍氏(喜多流シテ方)、ゲスト　矢野　憲一氏(伊勢神宮元神職)

〔第4回〕平成18年2月18日(土)
「能の音楽の秘密」
～秀吉の謡は京都弁？～
講師　高桑いづみ氏(東京文化財研究所)、ゲスト　井上　裕久氏(観世流シテ方)

▽司会　柳沢新治氏(豊田市能楽堂企画運営委員)

会場　豊田市能楽堂

開場・午後一時三十分

開演　午後二時

参加費　1回券　1000円
4枚綴　2800円
友の会会員は1割引

豊田市能楽堂／電0565・35・8200

主催　豊田市・豊田市教育委員会、共催　豊田市文化振興財団、豊田市コンサートホール・能楽堂友の会

能　船弁慶　上演
12月23日　花朋会敷舞台

金剛流・五色の会では、きたる十二月二十三日(金・祝)、岡崎の花朋会敷舞台(岡崎市大西町奥長入四七)で「第七回能を観る」催しを開催する。午後二時開演。

能組は「船弁慶」(シテ波多野良子、子方・義経・高橋舞、ワキ高安勝久、アイ野村小三郎、後見広田幸稔ほか、地謡宇高通成、宇高竜成、竹市幸司ほか)

狂言「重喜」(シテ野村小三郎)

仕舞「砧」(シテ宇高通成)

主催＝花朋会敷舞台、朋の会、補佐＝宇高通成、後援＝岡崎市教育委員会

入場料前売五千円(当日五千五百円)、問い合わせ／朋の会事務局＝岡崎市中町5－2－15、電話・FAX0564・23・4364(波多野方)

11月23日に船弁慶の解説
朋の会

なお朋の会では、十一月二十三日(水・祝)午後一時から、花朋会敷舞台で、十二月に上演される能「船弁慶」について、シテ方金剛流波多野良子師によりわかり易く解説が行われる。参加入場料千円。問い合わせは、電話・FAX0564・23・4364、波多野宅

郁諷会大会

十一月六日(日)十時半始
名古屋能楽堂

連吟　竹生島
兼平
名古屋大学観世会
名古屋大学観世会

素謡　経正
班女
松坂　俊典
佐治　光幸
志津　明子
有滝　文江
片山　明美

舞囃子　屋島
吉野天人
野崎　和恵
河崎喜代子
覓　鉱一
後藤孝一郎
河村眞之介
福井啓次郎
加藤　洋輝
竹市　学
赤尾　正
覓　鉱一
後藤孝一郎
大野　誠

素謡　弱法師
仕舞　敦盛
通小町
百日之舞
松坂　俊典
中野　裕子

素謡　熊野
森　寿子
門脇　千鶴
上田　貴弘

舞囃子　忠度
三輪
自然居士
渡辺　郁子
佐治　光幸
水野　臣子
河村眞之介
福井啓次郎
覓　鉱一
後藤孝一郎
河村眞之介
福井啓次郎
大野　誠
加藤　洋輝
竹市　学
大野　誠

仕舞　江口
藤戸
伊藤　明美
門脇　千鶴

素謡　隅田川
吉田富喜子
渡辺　郁子
水野　臣子

舞囃子　菊慈童
二人静
須磨源氏
志津　明子
覓　鉱一
後藤孝一郎
有滝　文江
片山　明美
河村眞之介
福井啓次郎
覓　鉱一
後藤孝一郎
熊谷　晃子
加藤　洋輝
竹市　学
加藤　洋輝
大野　誠

素謡　頼政
番外仕舞　富士太鼓
融
濱田　國松
赤尾　正
前野　郁子
久田　勘鬼

附祝言　（終了予定五時頃）

主催　郁諷会　前野郁子

［御来場歓迎］

名古屋観世会定式能

十一月十三日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

能　玄象
後ツレ　清沢　一政
前ツレ　梅若　猶義
ツレ　武田　邦弘
梅若吉之丞
クツロギ　杉江　元
間　高安　勝久
椙元　正樹
鹿島　俊裕
河村総一郎
福井啓次郎
鬼頭　義命
鹿取　希世
後見　小島　一英
関根　祥人
地謡　八神　孝充
本田　勲
須部　甫
梅田　久
梅田　勘鬼
梅田　嘉宏
古橋　邦久
古橋　正邦
祖父江修一

狂言　咲嘩
佐藤　友彦
佐藤　融
井上菊次郎

仕舞　柏崎
関根　祥人
車僧
古橋　正邦
後見　今枝　靖雄

能　殺生石
上田　貴弘
白頭
間　飯富　雅介
覓　鉱一
後藤嘉津幸
加藤　洋輝
大野　誠
井上　靖浩
後見　梅田　嘉宏
梅田　邦久
地謡　外山　圭一
松山　幸親
加賀　敏彦
高橋　瞭一
古橋　正邦
小島　一英
関根　祥人
久田　勘鬼

付祝言　（終演　四時過頃）

主催　名古屋観世会

［要会員券］
当日券　八千円

名古屋市民芸術祭2005協賛
名古屋能楽堂定例公演

十一月十九日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

（和泉流）狂言　泣尼
僧　井上菊次郎
尼　佐藤　友彦
施主　佐藤　融
後見　大野　弘之
今枝　郁雄

（観世流）能　實盛
梅田　邦久
高安　勝久
杉江　元
椙元　正樹
間　井上　靖浩
後見　梅田　嘉宏
祖父江修一
地謡　覓　鉱一
後藤嘉津幸
加藤　洋輝
竹市　学
黒田　博
八神　孝充
本田　勲
高橋　瞭一
久田　勘鬼
古橋　正邦
清沢　一政

（終了午後四時四十分頃）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団

入場料（全自由席）
前売一般　三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生前売　二〇〇〇円（当日二五〇〇円）

協賛　能楽協会名古屋支部

名古屋宝生会定式能（第49期第4回）

十一月二十日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　楊貴妃
竹内　澄子
間　杉江　元
覓　鉱一
福井　良治
大野　誠
野村又三郎
後見　倉本　雅
玉井　博祐
鬼頭　京子
地謡　村上　茂
石森　智幸
加賀山憲治
柴田　賢治
稲川　寿一
馬縅富四夫
辰巳満次郎
和久荘太郎

狂言　竹生島参り
野村又三郎
松田　高義
後見　伴野　俊彦

仕舞　岩船
内藤　飛能
兼平
和久荘太郎
三輪
衣斐　愛
地謡　佐藤　耕司
馬縅富四夫
石黒　孝
辰巳大二郎

能　飛雲
衣斐　正宜
高安　勝久
椙元　正樹
松田　高義
間　河村総一郎
後藤孝一郎
加藤　洋輝
竹市　学
後見　玉井　博祐
衣斐　愛
地謡　平田　正文
竹内　淳一
浦野　正二
久野　幸三
佐藤　耕司
石黒　孝
内藤　飛能

（五時終了予定）

付祝言

主催　名古屋宝生会
名古屋市天白区島田2－301
島田橋住宅2－1310
佐藤耕司方
電話・FAX　052・803・7372

［要会員券］
当日券　一万円（2枚綴）
学生当日券　二千円

久田観正会秋の大会

十一月二十七日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

能　遊行柳

能　猩々

［御来場歓迎］

主催　久田観正会
TEL　052・705・1584
FAX　052・705・1585

戦後名古屋能楽史 ⑱

〔第十五章〕昭和三十六年（一九六一）

竹尾　邦太郎

（承前）

十一月十五日、当地観世流の重鎮・林愿蔵死去。明治二十四年（一八九一）一月十五日生、享年七十一歳。六十五歳のとき、主宰する林潤水会が創立四十五周年を迎え、能謡生活を回顧する談話を発表したが（本紙平成十四年十月号に収録）、型と謡が両立しそうにないことを悟り、謡一本に絞って精進を重ね斯道を極める。

師は武田宗治郎（一八七七―一九四二）・観世左近（一八九五―一九三九）、初舞台は満七歳「海士」「雲雀山」の子方という。盟友柴田初太郎は自著『帰童閑談』で次のように言う。「昭和十二年二月二十一日、私と林愿蔵君の準職分披露能会を布池町の能楽堂で開催したとき、私は道成寺を披きました。当時の新聞（名古屋毎日）によりますと、名古屋人で道成寺の披きは、柴田殼彦（よしひこ）師（木下敬賢師の弟子で観世流職分、京町二丁目七間町から二、三軒目の家に居住。裏に県立第一中学校の運動場がありました）以来私が四十四年振りということでした。林君は素謡「鸚鵡小町」を披きましたが、これは名古屋では嚆矢ということでありました」と。林愿蔵もこの時、師の武田宗治郎がワキを務めてくれたのが能謡生活の中で一番嬉しかったと言う。この二人が主催する能で観世左近は「大原御幸」シテで華を添えるが、その左近も二年後に急逝する。

故林愿蔵氏

さて、盟友林愿蔵の死に接し柴田初太郎は『狂言』紙第四十九号に次の追悼文を寄せる。

林君の死を悼む　歌古の文句に命は水上の泡、風に随って経廻るが如し、魂は籠中の鳥の開くを待って去るに同じ、とあります。誠に此世は仮の宿でありますが、此様な事は毎日の仕事で忘れ勝であります。而し乍ら林君の死を目前に見まして、今更乍ら人の世の儚なさを沁みじみ心に感じました。そして哀惜の念を禁じ得なかったのであります。思えば林君とは大正の初めの人力車の時代より今の原子力時代迄四十有余年、芸の友、酒の友として又、旅行も百回以上に及んで居ます。最後の旅行、八月七日出発の新潟佐渡行が思い出多き最後の旅行に相成るとは夢にも考えませんでした。

誠に悲しみの極みです。又、林君は私の粗忽と引換え頭の綿密な人で、名古屋観世会の世話を殆ど一人で引受け、命終る迄続けて呉れました。感謝して居ます。此後は観世会発足当時に戻り私の仕事と相成ります。各位の御協力を得て及ばず乍ら観世会の仕事と、私の常に念願して居ます第二世の育成に、余生を送る考えであります。是が林君を弔う道にも叶う事と存じます。

私も筆不調法、それ故下手で誰に頼まれても御断りし、已むを得ぬ時は専門の人に作って貰う事にして何十年も暮して来ましたが、林君の追憶の言葉を歌村（彦四郎）君より依頼を受け、是計りは人に頼む心とも相成らず、拙文を顧みず私の心持の一端を記し追悼の辞に代える次第です。私の座右銘を序に、知親第一友、知運第一富　与病第一利　涅槃第一楽（是が一番むつかしい奥習の許です）

十一月十八日、予て懸案であった名古屋和泉会が第一回の公演を催す。これについて『狂言』紙第四十六号で主筆の歌村彦四郎は「徳川義親氏を会長として諸名士の賛助を得て、狂言和泉流の宗家泉保之氏の後援と名古屋に由緒ある狂言の育成を計る目的で結成中のところ、愈々来る十一月十八日第一回の公演を開くことになりました。どうぞ一員として御入会をたのみます」と述べ、第四十八号は「和泉会特輯号」として「名古屋の狂言の今昔」と題する次の文章を載せる。

明治の中期から末期にかけて名古屋の狂言界は多士斉々でありました。亡父初代井上菊次郎は晩年東京に移住して活躍、天覧の光栄に浴し、当時の歌舞伎の名優尾上松助と対照されてその枯淡、洒脱の芸風は東京評論界に絶賛を博しました。

当時名古屋には現河村丘造氏亡父河村鍵三郎氏、伊勢門水氏等が厳として存在して、一線現役として河村保之助・井上鉄次郎・井上新三郎に現在の共同社の連中が五番立ての能に狂言四番乃至三番を上演、稽古も充分にして至極のんびりと楽しんで来たものであります。

さて戦後に至り、能・謡は思はぬ発展を見、各流・各派にてそれぞれ大きな催しが出来るようになったのは誠に喜ばしい次第であります。この世智辛い、気忙しい世の中に一つの静寂を求める反映かも知れません。

但し狂言を振り返ってみますと誠に寒心に堪えないものがあります。狂言は相手がいる加減か、言葉遣いが難しいのか、志望する人が無く、現在限られた人によって演じられております。いろいろの原因があること、私共の熱意が足らないことも認めます。が何とかして折角伝って来た名古屋の狂言を後生へも伝へたいものであります。その一端として、今回の名古屋和泉会を結成して同好の方々の御後援を願う次第であります。

また、宗家和泉保之も一面冒頭に挨拶を寄せる。

御挨拶　名古屋和泉会も地元諸氏の御努力に依って結成され、第一回公演を迎へるに至り、伝統の強さというものを痛切に感じ、慶びも亦一入であります。

伝統に対する認識……演出に於ても特に今日、特異個性というものを要求され、次第に各々のプレー、考へにのみ捕らわれた形が多く、実際に各界に此の傾向が見られる中で、伝統芸術の価値が稀薄になってきたと考へられ、狂言もまた時代と共に進化して参りましたものの、今日的に物事を処理する人達の間には伝統というものの考へ方には随分と異った解釈がなされ、これからの伝統芸術を維持していくことに非常な難しさが感じられます。

その中にあって名古屋和泉会も伝統芸術の維持と発展とに、今後大いに尽し、中京に於ての伝統芸術の花として咲き誇るべく皆様の御支援を仰ぐ次第であります。

当地の能評家野村広二も「この会の趣旨は、青年家元和泉保之君を後援し、和泉流が実に永い間その技芸と盛名を代々の家元と共に伝承し、今も立派な郷土の古典芸能となっている姿を一段と輝かしくしようというのである。大きく、ゆかしい理想である」（抜粋）と期待を寄せる。番組は徳川義親名古屋和泉会々長の挨拶のあと「蝸牛」和泉保之「牛盗人」井上松次郎・佐藤卯三郎「鈍太郎」三宅藤九郎・和泉保之・三宅右近、小舞四番「小山伏」石田喜樹「柳の下」井上義次「山崎通ひ」井上祐一「宇治の晒し」山本光次郎、「隠狸」河村丘造・野村又三郎「業平餅」和泉保之・井上松次郎ほか。この会は時宜もあって第十四回公演（昭和四十九年）まで当該年度の名古屋市民芸術祭に参加する。

十一月十九日は名古屋観世会第五回（納会）素謡「弱法師」増田一雄、仕舞三番「盛久」太田重次郎「蟬丸」加藤総兵衛「小鍛冶」岩田与司、「高野物狂」山本博之、「葛城・大和舞」梅若六郎、「清水座頭」和泉保之・井上松次郎、「玄象」片山博通、当地三役の他に高木敏郎（小）、斎田喜兵衛（大）が来演。

十一月二十七日、田鍋惣太郎は今上天皇陛下還暦祝賀能に招かれ上京。喜多實シテの「高砂」を勤めるが、在京の田中一次・安福春雄・金春惣右衛門の面々が「田鍋さんがせっかくみえたから五段でしましょう」という事になり、「とうとう五段の神舞で大変でした」と自著『小鼓芸話』の中で述懐する。

師走三日、名古屋宝生会定式能は、第五期第四回、「忠度」内藤泰二、素謡「唐船」辰巳孝、「仏師」佐藤卯三郎、仕舞三番「源氏供養」倉本雅「三井寺」畑富次「岩船」馬繰富四夫、「鉄輪」野口禄久。

師走十日、大方は非公開であるが、自宅を拠点に戦前から謡の普及に献身的な努力を続け、当地能楽界に寄与する藤門会主宰の加藤良久（らく）は、戦後、早くも第一回（通算一二六回）を昭和二十二年五月二十五日に催すが、以後、回を重ねて通算三百回になるこの日、自宅から熱田神宮能楽殿に舞台を移し、師の大槻十三のもと記念の社中会を催す。番組は素謡六・連吟二・独吟二・独調二・仕舞二十四・舞囃子十・能三、狂言一番。うち番外の仕舞「東北」大槻十三「老松」橋岡久太郎、狂言「墨塗」佐藤卯三郎、が華を添える。

響の会 第一回 名古屋公演

十二月十一日（日）午後一時開演
名古屋能楽堂

能
船弁慶
子方　小早川康充
後シテ　清水　寛二
前シテ　西村　高夫
重前後之替　宝生　閑　殿田　謙吉　則久　英志
間　野村小三郎
河村眞之介　観世新九郎　小寺　佐七　竹市　学
後見　梅田　邦久　浅見　真州
地謡　安藤　貴康　馬野　正基　浅見　慈一　泉　雅一郎　小早川　修　山本　順之　観世　榮夫　浅井　文義

能
葛城
観世銕之丞
大和舞　殿田　謙吉　則久　英志
間　松田　高義
後見　浅見　慈一　野村　四郎
地謡　柿原　崇志　柳原冨司忠　三島元太郎　一噌　仙幸　谷本　健吾　長山　桂三　馬野　正基　柴田　稔　岡田　麗史　清水　寛二　若松　健史　西村　高夫

狂言
茶壺
スッパ　野村又三郎
中国の者　野村小三郎
目代　松田　高義
難波　梅田　邦久
観世　栄夫
仕舞　楊貴妃　天鼓
地謡　谷本　健吾　柴田　稔　岡田　麗史　長山　桂三

主催　響の会
清水寛二
西村高夫
東京都港区南青山4―21―29（銕仙会内）
電話　03・3401・2285
FAX　03・3401・2313

［入場料］全席指定
S席（正面）一万円／A席（正面）八千円
B席（脇正面）六千円／C席（中正面）四千円
学生席　三千円
電話予約　03・3401・2285（平日10時～17時）
インターネット予約　www.hibikinokai.com

ナディア狂言

11月6日　三楽座で

若手狂言師たちによる公演「ナディア狂言」は、十一月六日（日）名古屋市中村区則武二丁目の「三楽座」で催される。午後二時開演。

演目は狂言「附子」（太郎冠者・佐藤融、次郎冠者・林泰礼、主人・井上靖浩）、「墨塗」（大名・鹿島俊裕、太郎冠者・井上靖浩、女・今枝郁雄）解説／名古屋女子大学文学部教授・林和利氏。

入場料（全自由席）前売一般二五〇〇円、学生一五〇〇円。（当日は五〇〇円増）。問い合わせ／ナディア狂言運営委員会、TEL 090・7031・8722

シテ方宝生流

辰巳孝氏逝去

シテ方宝生流・辰巳孝氏（日本能楽会元理事）は十月十八日午後十時十分、肺炎のため大阪府寝屋川市の病院で逝去、享年九十歳。

葬儀は二十二日正午から寝屋川市末広町11の8の自宅で執行。喪主は長男孝門氏。

豊田市能楽堂特別公演

十一月十二日（土）午後二時開演
豊田市能楽堂

番組
解説　羽田　昶（武蔵野大学教授）

狂言（大蔵流）
萩大名
茂山千三郎
太郎冠者　茂山　茂
庭の亭主　茂山　正邦
後見　島田　洋海

能（宝生流）
井筒
高橋　章
宝生　閑
河村総一郎　住駒　幸英　一噌　隆之
間　茂山千三郎
後見　武田　孝史　東川　光夫
地謡　和久荘太郎　小倉伸二郎　水上　輝和　佐野　萌　水上　優　大坪喜美雄　大友　順　衣斐　正宜

主催　豊田市
豊田市教育委員会
共催　豊田市文化振興財団

入場料　正面席　六千円
脇・中正面席　四千円
（脇・正面席学生は半額）
チケット販売／豊田市能楽堂（0565・35・8200）
チケットぴあ（TEL　0570・02・9999）

◆晩夏から初秋の舞台◆

「青陽会」「第二十一回衣斐正宜後援会能」と「大槻能楽堂自主公演能定例公演」「梅猶会定期能」

竹尾邦太郎

「盛久」 シテ一政、ワキ土屋三郎（元）に見守られ従容と死地に赴くところ（写真）、観音に帰依する勁さはワキとの問答にも気力充実の落着き、覚悟の程をみせるが、観音を拝した後の道行は橋懸、清水寺の方を望見する心に〽帰る春なき、と直り、〽名残かな、でクモル惜別の情も亦、盛久の心の裡を鮮やかに描写。断罪の前、御経の読誦も気合が入るが、物着あと辺りから緊張が途切れたか、地をなぞるかの唇の微かな動きは直面だけに気になる。一考察しよう。（1時間10分）

「杜若」 シテ路子、面若女に襟白二・小柄で可憐な印象なので小面に襟白赤の方が、と思わぬでもない。挙措控え目で前は三河の里女、物着あとは色も輝く金地花菱文長絹も艶やかに、クセから舞へ、匂いは薄いが如何にも慎ましい舞ぶり。（1時間16分）

「膏薬煉」 鎌倉方郁雄は馬吸膏を、シテ都方靖雄は石吸膏を以て効力比べに挑む。互いに途方も無い薬種の成分を調子に乗って言い募るところ、息もよく合い、引き付け合いになるところも軽快（写真）でリズミカル。（24分）

「鵜飼」 前場、鵜使いの川漁翁シテ孝充、旅僧ワキ雅介・宰と出遇い先の鵜使いの死を語るところ、正中に下居、松明の先端を押しつけて火を消す態から注意深く傍に置く辺りの慎重、また鵜ノ段に〽小鮎さばしる、と松明を掲げてスミへ鮎を敏捷に追う（写真）面使ヒの確か、中々。後場、閻魔王には重みあまり感じられなかった。（1時間10分・8月20日・青陽会）

「班女」 遊女花子（シテ愛）を呼びつける宿ノ長（アイ靖浩）、「さてもさてもぬるいことかな」と苛立ちスミへ走ると、ようよう正中へ出て下居のシテに、立て膝で追放を申し渡し、面ヲ切って睨め付け、シテに寄ると扇取り上げて捨てる剣幕の凄じさ。アイとシテの居場所の関係が観世流などと違うのが面白い。シテは女流ゆえの声の重さ、重苦しい沈痛な感情表現には不利だが、居グセの姿は鄙に稀な美形の遊女の品。〽さるにても、と立つと、当てにならぬ男の心を模索するように一ノ松へさ迷い、欄干に立ち尽す辺り、秋思一入。（1時間23分）

「蟹山伏」 供の強力（融）に世間の評判を問わせ、「それがしの行力を誰しもが褒めると言ふか」と追従を真に受ける山伏（シテ菊次郎）、異形の者（蟹ノ精・俊裕）の出現に俄に臆病風に吹かれ、強力を先に遣ろうとするが、怖いは強力も同じ。それぞれが相手の立場を言い立て、押し問答となるところ、強力がよく食い下がる。（16分）

「望月」 シテ正宜、旧主の妻子（ツレ荘太郎・子方佐野幹くん）と目敏く察し己れの身分を明かす辺りの謹直。奇しくも仇の望月秋長（ワキ雅介）が同宿となったこと妻子に告げ、その対策をいう問答の冷静。物着あと、曽我兄弟仇討譚はクセの留、「いざ討たう」に気色ばむワキに動じることもなく「暫く」と抑える呼吸の気迫。眼目の獅子舞の勇壮は、獅子頭と大鱗文厚板を脱ぐと、厚板を被って踞りワキの様子を窺う慎重。〽さる程に、と被衣ハネルや子方とワキへ詰め寄りワキを拘束する敏速。折り目切り目はきく〳〵した展開に正宜充実ぶりをみせ、笠を身代りにワキが早々に退くことなく、「そも〳〵己は何者ぞ」と不意を衝かれて子方・シテとの問答があって、刺される前までワキが残るのも緊迫感。本望遂げてシテが扇でなく小サ刀で勝関あげるふうも面白かった。（1時間17分・8月28日・第21回衣斐正宜後援会能）

「瓜盗人」 盗みは不得心と言い条、身過のためには、と勝手な理屈のシテ忠重、喜々として畑を転げ回り瓜を採るうち気付く人影。平身低頭の詫びも受け容られぬ沈黙の無気味も、相手が案山子と分って畑を散々に荒して立ち去る狼藉だが、鬱憤を晴らす対象の案山子を壊さなかったのは不思議。採った瓜、さる方に進上するが、あまりの美味に「自宅に押し掛け鱈腹食いたい」との言。押し掛けられては迷惑の表情ありありと、「仮初な事は致さぬことで御座る」の述懐も、再度盗みに出ざるを得ない仕儀。キリの祇園会の出し物の鬼もだが、痩身長躯、飄々とした忠重の雰囲気に捨て難い持ち味。アド畑主は忠亮。（30分）

「融・思立ノ出・今向返・曲水ノ舞」 前場、小書でワキ茂十郎は〽思ひ立つ心ぞ、と謡いながら出る。シテ昭世、汐汲みの尉が手繰り持つ釣縄を手放し、無造作に田子を置く辺りの手綺麗さは、框一杯に出て左右の田子に汐を一度に汲むところ、中入前の〽夜の老人と（見えつるが）、で音も立てず田子を置くと後ろへ天秤棒を投げ出すところ、鮮やか。

後場、融ノ大臣は面中将・黒垂・初冠・紫指貫・白単狩衣（金霞文）の気品。〽受けたり受けたり、と正先一杯に出ると、盃を掬った心に開いた扇は右手に、左手は狩衣右袖の露を取り幕際へ行くと、直ぐ戻り、大小前で露取り左膝つくと、達拝から早舞は流麗しのもの、切の型もてきぱき極め、キリは地のうちに一ノ松へ、扇は笏を持つ型で入りワキ留、格調高い舞台だった。（1時間22分・9月2日・大槻能楽堂自主公演定例公演）

「清経・替ノ型」 シテ善高、病後と聞くが慎重に手堅く演じ、そこに秋思も。面中将・黒垂・梨子打・襟浅黄・赤地金霞丸ニ橘文縫箔着付・濃茄子紺大口・濃緑長絹・太刀。〽いかに古人、と一ノ松から語気や、強くツレに呼び掛けるシテ。舞台に入っては、〽怨みをさへに言ひ添へて、とツレとの思いの齟齬に拍子二ツ強く踏む心の裡は〽思ふも濡らす袂かな、とシオルところ、〽（思ふ）も、に心持は心理描写に妙。古の事どもはツレの愚痴となるところを省き、直ぐ〽そも〳〵宇佐八幡に、となり、小書でクセは橋懸で舞い、上ゲ端まえに戻ると〽あぢきなや、の諦念。しかし、入水前の胸中、よそ目には専ら〽狂人と人や見るらん、と二ツ、更に三ツ踏む足拍子には無念遺る方の無い思いも。シテの心象風景は、更にキリの〽無明も法性も、の四ツ拍子、〽西海四海の因果を、の合膝返シにも鮮やかに、善高薄幸の貴公子像入念にみせた。（1時間2分）

「無布施経」 シテ僧・千之丞、「これは小庵を取り結ぶ貧僧でござる」とは言い条、態度は大きく、檀家（やすし）で取次を乞う声も投げ捨てるようなら、仏壇前もポンと無造作に扇を捨てて座に就くといった按配。人を喰ったような、滑らか過ぎるほどに爽やかな教化の口舌は、出ない布施を出させる苦渋の努力からは遠く、檀家を呑んで掛かる勢いにも思え、少々あくどい。（30分）

「葛城・大和舞」 シテ和男、雪の岨道に難渋する山伏（ワキ和幸ら）を庵に案内のところ、〽笠は重し呉山の雪……、とシテ・ワキ連吟は、さらりと詩境を謡って通い合う互いの心。ワキをもてなし慰める舞グセの慎ましさは、今や心を許して明かす素姓、掛合に苦しみを吐露のところはワキの同情に、〽霜に責められ……、と此の度の連吟も呼吸が合い上々、ワキに加持を願って雪山へ粛然と中入するのも良い。

後は面増・葛ノ天冠・襟白二・白地撫子文摺箔着付・緋大口・白地舞衣壷折、四手白木綿付榊枝で神楽を舞う。正先で右膝つき、榊枝を戴くと左右に祓い、再度戴いて立つと位進み、〽高天の原の、と地になる。キリは地を残して幕に入りワキ留。堅実な舞台だが柔らかさも欲しいところ。（1時間14分）

「鐘馗」 稀曲。筆者初見。シテ香寿子、官吏登用試験落第の失意に自ら頭打ちつけ自裁の鐘馗、骸に官服賜わる手厚い葬送に感じ入り、君恩に報いんと悪鬼亡ぼし国土守護を誓い、霊は里人（前シテ）に化身して通りかかる旅人（ワキ知登）に、君公が善政ならば参内して奇瑞をみせることの奏聞を托し、己れの無常観も披瀝、真の姿を現わそうと消える前場。蓬髪に紛う黒頭に深刻苦渋の相は面怪士、襟紺・紺無地熨斗目・濃緑水衣は脂びかりの垢衣ともみえて、装束付の妙は形振り構わぬ学問一途の所謂蒼白きインテリ像。香寿子、その内面性にも迫り、無常観は居グセ、〽楽しみすでに去って悲しみ早く来れり、とワキにアシラフところ、亦、一刻も早くの焦慮か、中入地に踏む数拍子荒々しく、〽火焔を放して、の撥ネ扇の勢い、諦観と苛立ち上手にみせる。

後場は参内して悪鬼退治の後ジテ鐘馗、面小癋見・赤頭・唐冠・襟紺・厚板着付・赤地半切・紺袷狩衣に剣。〽或は玉殿、と一ノ松後ろ勾欄へ、廻廊下の階は〽剣を潜めて忍び、と袖被キ正中へ、悪鬼出現すれば、六ツ拍子に〽ずだく〳〵に、剣を振るい、〽治まる国土、をキリく〳〵と小廻りに象徴、きびきびと大活躍で爽やかに舞い上げる。切れよく器用さ目立つが貧乏に堕ち入らんことを。好舞台、立派。（40分・9月3日・梅猶会定期能・大阪能楽会館）

青陽会　㊤「杜若」星野路子、㊦「盛久」左より杉江元、椙元正樹、杉江淳、清沢一政
（杉浦賢次氏撮影）

青陽会　㊤「鵜飼」八神孝充、㊦「膏薬煉」左より今枝靖雄、今枝郁雄
（杉浦賢次氏撮影）

船戸昭弘職分披露能

十二月三日（土）午前十一時開演
岐阜市民会館

翁
梅田　邦久　面箱　松田　高義
三番叟　野村小三郎
千歳　梅田　嘉宏

養老
後ツレ　祖父江修一
前ツレ　藤谷　音彌
久田　勘鬼
水波之伝　飯冨　雅介　杉江　元
椙元　正樹　柳原冨司忠　河村　大
福井　聡介　加藤　洋輝
後藤嘉津幸　竹市　学

末広
翁・養老後見　井上菊次郎
片山　伸吾　井上　靖浩
泉　嘉夫　佐藤　友彦
地謡　外山　圭一　高橋　瞭一
八神　孝充　古橋　正邦
松山　幸親　武田　邦弘
須部　甫　清沢　一政
三番叟後見　野村又三郎
末広後見　佐藤　融　佐藤　融

舞囃子　**小袖曽我**　三村　恵子　久田三津子　筧　鉱一　福井　憲介　大野　誠
地謡　星野　路子　加藤　春江　前野　郁子　近藤　幸江　今沢　美和

一調　**駒之段**　辰巳満次郎　福井　良治

羽衣
片山慶次郎　橋本　宰
彩色之伝　高安　勝久　河村総一郎　助川　治
杉江　淳　福井啓次郎　鹿取　希世
後見　祖父江修一　外山　圭一　清沢　一政
武田　邦弘　黒田　博　古橋　正邦
地謡　本田　勲　梅田　邦久
加賀　敏彦　梅田　嘉宏

一調　**放下僧**　泉　嘉夫　後藤孝一郎

舞囃子　**紘上**　玉井　博祐　筧　鉱一　鬼頭　義命
福井　聡介　大野　誠
地謡　稲川　寿一　辰巳満次郎　佐藤　耕司

一調　**笠之段**　長田　驍　幸　正昭

石橋
前シテ　古橋　正邦
後シテ　片山　伸吾　武田　邦弘　高安　勝久　河村眞之介　助川　治
大獅子　船戸　昭弘　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎
後見　梅田　嘉宏　八神　孝充　清沢　一政
梅田　邦久　松山　幸親　祖父江修一
地謡　須部　甫　久田　勘鬼　音彌
高橋　瞭一　藤谷　音彌
（終了　五時頃）

主催　冨会
柳原冨司忠
船戸昭弘

[会員券]
一階（指定席）八千円
一階（自由席）五千円
二階（自由席）三千円
会員券取扱い
TEL・FAX　052・832・1031（柳原方）
TEL・FAX　0583・70・2237（船戸方）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成17年11月～17年12月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

11月27日	「竹生島」（再）（喜多流）	佐々木宗生ほか
12月4日	「葛城」（観世流）	野村四郎ほか
12月11日	「竹雪」（宝生流）	近藤乾之助ほか
12月18日	「巻絹」（金春流）	桜間右陣ほか
12月25日	「融」（再）（観世流）	武田志房ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（能楽関係公演のみ）（TEL 052－231－0088）

［11月］

27日(日)	久田観正会秋の大会	（番組①面）（無料）
28日(月)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演	（有料）
29日(火)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演	（有料）
30日(水)	文化庁芸術祭第60回記念名古屋公演	（有料）

［12月］

4日(日)	歳末助け合い運動協賛能	（番組①面）（有料）
10日(土)	名古屋大学観世会第9回定期自演会	（無料）
11日(日)	響の会第1回公演	（番組②面）（有料）
17日(土)	秋の清謡会	（番組②面）（無料）

◆豊田市能楽堂◆

（TEL 0565－35－8200）

［12月］

3日(土)	狂言づくしの会	（番組②面）（有料）

歳末助け合い運動　協賛能

能「巻絹」「隅田川」「女郎花」　12月4日　名古屋能楽堂

中部能楽師会主催、能楽協会名古屋支部共催による、「歳末助け合い運動・協賛能」は、毎年十二月に開催、能楽協会名古屋支部所属の各流能楽師による演能で、愛好者の協力を得て催されているが、ことしは十二月四日（日）名古屋能楽堂で、能三番、狂言一番はじめ舞囃子、仕舞で行われる。今回第三十七回。

能組は、喜多流能「巻絹」（シテ長田驍）、観世流能「隅田川」（シテ泉嘉夫）、宝生流能「女郎花」（シテ玉井博祐）の三番。狂言は狂泉流「昆布売」（シテ野村小三郎）、舞囃子・金剛流「通小町」（シテ竹市幸司）、仕舞・金春流「六浦」、観世流「鵺」。

午前十時半始め。入場券は前売二五〇〇円（当日券三〇〇〇円）学生券一五〇〇円。取扱いは、市内プレイガイド、チケットぴあ、（TEL 0570・02・999 99、Pコード：365－337）各出演者。（番組①面）

なお昨年は、義援金として、愛知県、名古屋市へそれぞれ三十万円、合計六十万円が寄付されている。

笛方　藤田大五郎氏　文化功労者受章

政府は十一月二十八日、今年度の文化勲章受章者と文化功労者を発表した。能楽関係では、文化功労者として、笛方一噌流・藤田大五郎氏が受章した。

藤田大五郎氏は八十九歳、日本芸術院会員、重要無形文化財保持者（人間国宝）、昭和六十一年芸術院会員。東京都出身。

シテ方　紫綬褒章受章　浅見真州氏

政府は十一月二日付で二〇〇五年秋の褒章受章者を発表した。

能楽界では　芸術文化部門として、観世流シテ方・浅見真州氏（本名浅見真広）が紫綬褒章を受章した。

浅見真州氏は昭和十六年浅見真健氏の五男として東京に生まれる。父および観世寿夫、八世観世銕之丞に師事。復曲、新作能などの上演にも積極的に参加、観世寿夫記念法政大学能楽賞（平成十一年度）受賞。日本能楽会会員、日本能楽会及び銕仙会の理事、国立能楽堂養成科講師など歴任。

「鳳の会」新春公演　1月7日　名古屋能楽堂

和泉流狂言師井上松次郎、佐藤友彦両師を同人として定例公演を行う「鳳の会」は、新春一月七日（土）名古屋市能楽堂で第四十一回公演を開催する。

年3回の定例公演のうち、新年最初となる今回は、素囃子の「神舞」をはじめ、「松楪」（まつゆずりは）、「縄綯」（なわない）、「金岡」（かなおか）を上演、名古屋女子大学・林和利教授が解説する。

終演後会場で、井上菊次郎、佐藤友彦の両師を囲んで、観客の狂言に関する疑問、質問に直接答える「演者と語ろう〝Q&A〟」が催される。（番組③面掲載）

狂言鑑賞会

東京　武蔵野大学資料センター

武蔵野大学能楽資料センター主催の「狂言鑑賞会」は十二月十五日（木）武蔵野大学雪頂講堂（西東京市新町1－1－20）で開催される。入場無料。申込みは往復はがきで、氏名・住所・電話明記のうえ、武蔵野市関町3－40－10、武蔵野大学能楽資料センター、狂言鑑賞係宛に申込む。先着二五〇名で締切り。

解説／三浦裕子
狂言「萩大名」（山本則直）
狂言「箕被」（山本東次郎）
舞囃子「早舞」
狂言「鬮罪人」（山本則重ほか）
お話　山本東次郎
武蔵野大学能楽資料センター
（TEL0422・52・6618）

久田観正会秋の大会

十一月二十七日（日）午前十時始　名古屋能楽堂

素謡　天鼓　吉田勝巳　内田永男
仕舞　清経（キリ）　坪井美記江
　　頼政　内田永男
　　隅田川　志賀禮子
　　放下僧（小歌）　橋本桂

素謡　望月　前川幸子（子方）　前川千鶴子（ツレ）　田中信子　上田拓司
　　星野路子（子方）　大久保由美（ツレ）
　　木賊　小池房子　上田貴弘

能　遊行柳　岡田信道　椙元正樹　飯冨雅介　橋本宰　河村総一郎　久田舜一郎　加藤洋輝　竹市学

素謡　卒都婆小町　丸山敏子　久田勘鵬　橋本清

舞囃子　松虫　大竹富三江　筧鉱一　久田舜一郎　竹市学
　　野宮（合掌留）　後藤玲子　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠
　　玄象　小田あさ乃　河村総一郎　久田舜一郎　加藤洋輝　竹市学

素謡　正尊　静　久田勘吉郎　姉和　久田三津子　義経　松山幸親　志賀禮子　渡辺清彦

能　猩々　杉山範彦　杉江元　筧鉱一　福井啓次郎　加藤洋輝　大野誠

（終了予定四時過）

［入場無料］

主催　久田観正会
鷗華会
名古屋市名東区一社三－一六二
久田勘鵬
TEL（〇五二）七〇五－一五八四

文化庁芸術祭　第60回記念名古屋公演

会場　名古屋能楽堂

◎11月28日（月）午後6時半開演
記念講演　第一部「清姫の心」
お話：河合隼雄（文化庁長官）
第二部「女が鬼になるとき」
～実演を交えたレクチャー講演
お話：馬場あき子（歌人）
出演：大槻文蔵、藤田六郎兵衛、大倉源次郎ほか

◎11月29日（火）午後6時半開演
復曲能「鐘巻」（道成寺原曲）
出演：大槻文蔵、福王茂十郎、茂山千之丞、藤田六郎兵衛、大倉源次郎、山本哲也、三島元太郎、後見・泉嘉夫ほか、鐘後見・梅若六郎ほか、地謡・片山清司ほか

◎11月30日（水）午後6時半開演
能「道成寺」
出演：梅若六郎、宝生閑、野村又三郎、藤田六郎兵衛、後藤嘉津幸、亀井忠雄、観世元伯、後見・梅田邦久ほか、鐘後見・梅若晋也ほか、地謡・大槻文蔵ほか

［入場料］11月28日全席自由席千円▽11月29・30日＝全指定席S席八千円、A席五千円
取扱い＝大槻能楽堂TEL06・6761・8055
藤田六郎兵衛事務所TEL052・571・6341
電子チケットピア［Pコード364・539］
TEL0570・02・9999

歳末助け合い運動　協賛能（第三十七回）

十二月四日（日）午前十時半始　名古屋能楽堂

喜多流能　巻絹　長田大島驍　衣恵　飯冨雅介　今枝郁雄　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　大野誠
　　間　後見　加藤誠子　平塚昭子　地謡　長谷川多美也　伊藤秀穀　森田克彦　福田勝　和谷衡市　松井彬　金子匡一　長田郷

金春流仕舞　六浦（キリ）　伊藤雄二　地謡　佐久間祥夫　広瀬雅弘　前田登

観世流仕舞　鵺　久田三津子　地謡　星野路子　前野郁子　近藤幸江　今沢美和

観世流能　隅田川　泉嘉夫　高安勝久　椙元正樹　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
　　間　後見　加藤春枝　梅田邦久　地謡　黒田博　八神孝充　須部甫　松山幸親　梅田嘉宏　古橋正邦　久田勘鵬　清沢一政

和泉流狂言　昆布売　野村小三郎　松田高義　後見　野村又三郎　鹿取希世

金剛流舞囃子　通小町　竹市幸司　河村眞之介　柳原冨司忠　地謡　鹿取希世　鬼頭義命　鹿取希世

宝生流能　女郎花　玉井博祐　衣斐愛　杉江元　筧鉱一　後藤孝一郎
　　間　後見　竹内澄子　鬼頭京子　地謡　玉井道夫　大森尚久　久野幸三　和久荘太郎　稲川壽一　衣斐正宜　辰巳満次郎　佐藤耕司

（終了午後四時半頃予定）

附祝言

〈入場券〉
前売券　二、五〇〇円
当日券　三、〇〇〇円
学生券　一、五〇〇円

〈前売り場所〉
市内プレイガイド
チケットピア
TEL〇五七〇－〇二－九九九九
（Pコード：三六五－三三七）
各出演者
問い合わせ
〇五二－八四一－四六三二　梅田方

主催　中部能楽師会
共催　能楽協会名古屋支部

「響の会」の第一回名古屋公演について

梢山女学園大学助教授　飯塚恵理人氏

観世流シテ方・清水寛二、西村高夫両師が主宰する「響の会」は、前号既報のようにきたる十二月十一日(日)名古屋能楽堂で第一回名古屋公演を催す。初の名古屋開催は同会の結成十五年目に当たり記念すべき公演として注目されている。

梢山女学園大学助教授・飯塚恵理人氏は、東海能楽研究会のメンバーとして、同研究会の活動に尽力されているが、今回「響の会」の名古屋初公演に当たり、次のように紹介とともに案内を寄せ、鑑賞をよびかけている。

西村高夫氏

清水寛二氏

「響の会」は、観世流銕仙会の清水寛二師・西村高夫師を同人とし平成三年に結成された。現在までに東京において本公演17回、研究公演二十七回を行い、精力的に活動している演能グループである。両師はともに早稲田大学在学中に山本順之師指導の能楽サークルで能に出会い、卒業後、銕仙会に内弟子として入門した。卒業年次は清水寛二師が一年早いが、ほぼ同年代と言ってよい。二人が入門した昭和五十年・五十一年は観世寿夫の最晩年であり、清水師・西村師ともに観世寿夫のほとんど最後の直弟子となる。二人は寿夫の死後八世銕之丞静雪(静夫)の薫陶を受け、現在は九世銕之丞を中心とする銕仙会の中堅として活躍を続けている。とにかく二人とも能が好きで非常な勉強家である。

私事になるが、西村高夫師は、私が筑波大学在学中に所属した筑波能狂言研究会の先生だった。非常に指導熱心な先生で、教え方も上手だった。名古屋でも平成五年に栄能舞台に稽古場を開かれ、もう十二年になる。私も最初の頃は通っていたのだが、長男が誕生して忙しくなり、遠ざかってしまった。

名古屋で「響の会」が催されるということで、久しぶりにお目にかかったのだが、番組が「船弁慶」と「葛城」という、初心者にも分かりやすい曲で嬉しかった。また、出演者の顔ぶれを見ても、現在の銕仙会の魅力がよくわかる催しである。当日は私も学生を連れて伺う予定で、イヤホンガイドも担当させていただくのだが、出演者の質も高く、曲の内容も分かりやすいので、ぜひ能は初めてと言う人に観ていただきたいと思う。

狂言づくしの会

十二月三日(土)午後二時開演
豊田市能楽堂

番組

狂言のお話　小笠原匡

舟渡聟　シテ 船頭 野村萬　アド 聟 野村扇丞　小アド 姑 野村万禄

しびり　シテ 太郎冠者 野村拳之介　アド 主 野村万蔵

米市　シテ 太郎 野村万蔵　アド 有徳人 野村萬　立衆 小笠原匡　野村扇丞　山下浩一郎　吉住講　中本義幸

主催　豊田市教育委員会

[入場料]　正面 六〇〇〇円　脇・中正面席 四〇〇〇円
お問い合わせ＝豊田市能楽堂（電話〇五六五・三五・八二〇〇）

戦後名古屋能楽史 ⑦⓪

〔第十六章〕

竹尾邦太郎

昭和三十七年（一九六二）

昭和三十七年、年頭に当たり『狂言』紙・一月号（通算第四十九号）は和泉流宗家保之の所感を一面に掲載する。

昨年は名古屋和泉会が同好者の支持に依って発会し、春、秋に朝日狂言会、和泉会の二つの公演を持ち、狂言の価値を充分に発揮する機会に恵まれてきた事を大きな慶びとする処です。

東京に於ても、昨年初めて文部省主催の芸術際の公演が『狂言づくしの会』として、二日、三部に分けて行われ関西方面からも多数参加され好評の様で、重ねて明年も期待し得る成果であった事などを顧みて、狂言のファンも年々多少とも殖えて来ている事を強く感じます。

見せる芸術として古典の中にあって、比較的親しみ易い此狂言を通して、正しい能楽への紹介も充分なし得る事を確信します。特に若い年代の層にアッピールする要素を持っている事は何よりの特典でしょう。

古典というものを正しく紹介するうえに於ては、従来、先人の歩んできた点を重視する事も大切で、我々に課せられた責任でもありましょう。リバイバルという流行語も一般に使われる様になり、現に巷にその傾向がみられるとするならば、能楽界もよき意味に於てリバイバルブームに浸る事もよいと思われます。

新しい試みも結構、しかし内側から能楽の形体を誤解している傾向があるとするならば、将来は全く不安なものです。

狂言がみとめられてきた—これはあく迄も狂言の価値がみとめられてきたという事であって、ある一方には、みとめられてきた—という事が狂言の独立性をもってきたものである、という様に考える人の出てきた事は、余りにも能楽の形体を忘れてしまっている、と云われても過言ではないと思います。

能と狂言のつながり—能楽というものの形体—我々ももっと此点の普及に勤める必要に迫られてきていると思い、新年に当り大いに自覚せねばならぬ事と思います。

新春二日、田鍋惣太郎宅の打ち初め、三日、能楽協会名古屋支部新年会は非公開だが、恒例。

七日、学生能と狂言の会は自演の部のあと鑑賞の部は舞囃子「養老」内藤泰二、独吟「鉢木」前田昌広、仕舞「玉ノ段」大塚一二、狂言「鬼瓦」佐藤卯三郎、能「猩々」柴田収武。

十四日、金剛流豊嶋弥左衛門の門下、片岡道子が独立して春星会を主宰、その創立記念能が行われる。番組は舞囃子「高砂」山田仁三郎、「田村・長床几」豊嶋弥左衛門、仕舞三番「山姥」伊藤鉄之進「放下僧」片野東四郎「枕慈

（③面へつづく）

名古屋大学観世会 第9回定期自演会

十二月十日（土）午前十一時三十分始
名古屋能楽堂

能　巴、狂言　清水、舞囃子ほか

響の会 第一回 名古屋公演

十二月十一日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂

能　船弁慶　子方 小早川康充　後シテ 清水寛二　前シテ 西村高夫　重前後之替 宝生閑　殿田謙吉　則久英志　野村小三郎　間 河村眞之介　観世新九郎　小寺佐七　竹市学　後見 梅田邦久　浅見真州　地謡 安藤貴康　馬野正基　浅見慈一　泉雅一郎　小早川修　山本順之　観世榮夫　浅井文義

仕舞　難波 梅田邦久　楊貴妃 観世栄夫　天鼓 野村四郎　地謡 谷本健吾　柴田稔　岡田麗史　長山桂三

狂言　茶壺　スッパ 野村又三郎　中国の者 野村小三郎　目代 松田高義

能　葛城　観世銕之丞　大和舞 殿田謙吉　則久英志　松田高義　間 柿原崇志　柳原冨司忠　三島元太郎　一噌仙幸　後見 浅見慈一　野村四郎　地謡 谷本健吾　長山桂三　馬野正基　柴田稔　岡田麗史　清水寛二　若松健史　西村高夫

主催　響の会　清水寛二　西村高夫
東京都港区南青山4—21—29（銕仙会内）
電話 03・3401・2285　FAX 03・3401・2313

[入場料]　全席指定
S席（正面）一万円／A席（正面）八千円
B席（脇正面）六千円／C席（中正面）四千円
学生席　三千円
電話予約　03・3401・2285（平日10時～17時）
インターネット予約　www.hibikinokai.com

秋の清謡会（第二十八回）

十二月十七日(土)午前九時半始
名古屋能楽堂

番組

番外仕舞　天鼓　清沢一政

素謡　吉野夫人　近藤冨士雄　川瀬弘道　地謡 本多和子　神谷鐐一　金井邦夫　宮崎陸夫

鶴亀　樋口あけみ　服部ふじ　地謡 久松直代　高島順子　高見かね子　日原典子　山内志げ　小栗知津子　奥村小浪

連吟　巴　吉田貨子　矢根敬子　青木眞佐子　小島恵子　古澤ひさ子　小林知子

仕舞　鶴亀 宮崎陸夫　敦盛 川瀬弘道　巻絹 近藤冨士雄　紅葉狩 神谷鐐一

連吟　松虫　伊佐次修治　清水慶蔵　平松宗顕

仕舞　田村 青木眞佐子　邯鄲 小林知子　船橋 古澤ひさ子

連吟　江口　小林美和子　不破峰子　西野志保

仕舞　難波 冨田芳子　蝉丸 堀尾智子　敦盛 金井邦夫

素謡　通小町　久松直代　小栗知津子　地謡 山内志げ　服部ふじ　日原典子　樋口あけみ　高島順子　奥村小浪　高見かね子

連吟　三輪　安藤房子　石川華子　堀尾智子　冨田芳子　丹羽佳世子

舞囃子　高砂 織田敏男　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　竹市学

采女 奥村小浪　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学

松虫 五段 磯部三枝子　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学

素謡　鉢木　伊藤礼子　榊山きよ子　金井邦夫

舞囃子　忠度　鬼頭みゆき　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

童」今井幾三郎、舞囃子「岩船」大塚一二、「雪・雪踏拍子」金剛巌「素袍落」井上松次郎、「望月」片岡道子（披キ）の大能。

同日、清韻会を率い当地名古屋でもお馴染みの大槻十三が京都観世会初回の「田村」演能中に仆れる不慮の出来事が起る。三老女完演の斯道の耆宿を悼み『観世』誌は後に三月号で追悼特集を組む。享年七十二歳。記録に拠れば当地初演は大正三年（一九一四）九月十三日、呉服町能楽倶楽部舞台での名古屋能楽会「千手・郢曲ノ舞」のツレ（シテは観世元滋）。最初のシテは大正五年五月二十八日、同舞台で小鼓方幸清流催能の「養老」である（二十六歳）。ここで更に不幸は翌一月十五日が名古屋清韻会の社中会、番組には大槻家三代の番外仕舞「箙」文蔵「殺生石」秀夫「金札」十三が組まれてをり、地謡・後見の役も多々、田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』で「大槻十三氏がご逝去の翌日で秀夫氏も文蔵氏も不参でしたが代勤の宇治（正夫）田村（勇）南条（秀雄）氏らの地で無事に済みました。大阪はもとより名古屋にも偉大な業蹟を残されました大槻氏の逝去は、本当に惜しいことでした。一調のお相手で、安心しておつきあい願えるのは、この大槻十三氏と先代金剛巌氏のお二人でした」と追悼する。因に名古屋清韻会の発会は大正十四年（昭和九年、万齢会と共催の創立十周年記念素謡会から逆算）。

一月二十一日は宝生会第六期第一回。素謡「竹生島」馬糞富四夫、仕舞三番「巻絹」倉本雅「葛城」辰巳孝「是界」内藤泰二、「箙」畑富次、「佐渡狐」井上松次郎、「求塚」宝生九郎、金沢から大鼓・飯島佐六の来演がある。

一月二十八日、第四回やるまい会は「清水」井上礼之助、「節分」野村万作、「成上り」河村丘造、「空腕」茂山千之丞、仕舞「菊慈童」柴田初太郎、「法師が母」野村又三郎、能「杜若・恋ノ舞」観世元昭。替間やアシラヒ間をみせる訳でもない能、取って付けたように狂言に挟まれた仕舞、意図は不明。

この月、新春一月から、夫君野上豊一郎の影響もあって能楽に造詣の深い作家・野上彌生子の『秀吉と利休』が『中央公論』誌に連載される。利休の後妻りき、利休を訪ね挨拶に罷り出る鳥飼彌兵衛はりきの兄で全春流の先代家元喜勝の弟子、到来物の葡萄酒で持て成そうと利休。次は三人が閑談の場の一情景。

新作能の話にははじめから気乗りをしめさず、彌兵衛のほんの醉語に近いおしゃべりをきくやうな風情に見えた利休は、そこで石田三成の名がでると、厚い唇の両隅に皺をきざんで黙った。その仕方には砂のあひだの二枚貝が、なにか警戒的にぴたと口を閉ぢるに似たものがあった。りきは婀娜な黒い眼の半分を、すばやく兄から夫に移した。ひとり彌兵衛はむとんぢゃくに「明智討」の話題をすてず、なほ高い聲ではいへないが、關白様の御能ときては序之舞、中之舞がいつも男舞になる始末で、まづ囃子方が閉口するし、一番の能がどうにかすむまでは、地謡も、後見もはらはらする樂屋話をはなしつづけるのを、りきは兄妹らしく高びしゃに邪魔した。

月が替り二月十一日、掬水青陽会第五期第三回、素謡「鞍馬天狗」竹内六郎、舞囃子「芦刈」石谷初蔵、「箙」塚本秀雄、「船渡聟」井上松次郎、「杜若」柴田初太郎、仕舞四番「邯鄲」加賀敏彦、「巴」加藤丈太郎、「巻絹」柴田収武、「殺生石」久田秀雄、「天鼓」佐藤太俊。例により此の日のため一月二十九日に非公開で研究会を行ない、能三番は舞囃子での稽古。

二月十三日、中部日本新聞は「生活の中の能楽」の題で戦後盛んな女性の能楽への参加について観世流師範の福井道子（27）、先頃金剛流職分となった片岡道子（29）にその実態・実情を取材する。

第一の踏み出しに抵抗　幽玄という能の世界に圧倒されて、能はむずかしいものという先入観が強いようです。福井さんは「やはり初めて習う人は、第一歩の踏み出しに抵抗を感じるようです。この、能はむずかしいという印象をどうして崩すかが問題ですが、若い女性でもやれるという気易さを人々に印象づけている点では、私などは大いに役立っていると思います。謡でも特別に声を作る必要はなく、無理をせずに謡う方針なのでむずかしくはありません。普通、稽古事には楽器が必要ですが、謡にしても仕舞にしても本と扇子一本があれば充分です。むしろ他の稽古事より手軽なものと云えます。おばあさんでも一人で楽しめるし、子供でも立ち居ふる舞いをよくすることができ、家族的な稽古と云えます。また正しい姿勢は健康を作り出すし、得るところは大きいのです」と日常生活に及ぼすいろいろの利点をあげています。「能に何万円もかかるというのは発表したい人が大鼓・小鼓・太鼓・笛などの囃子を玄人に頼む費用が要るからです。謡を習っている人でも舞わない人は多いのですが、舞台を踏んでみたい人には経費も嵩みます。昭和十八年に婦人が能の舞台に進出できるようになって以来、家庭の主婦でも上達ぶりは目覚ましく、普通の能では飽きたらず新作の狂言や古い稀曲にまで手を伸ばす人がいるくらい」と云っています。

福井さんは十五歳で柴田収武に入門、芸大で能楽を専攻し卒業後、師範を受けるという恵まれた環境。しかしお弟子さんを抱え、出稽古なども多く、家庭を充分にみられなかったことも原因の一つで結婚に失敗。「主婦と能師範が両立できない難しさを知りました。趣味程度でしたら夫婦で楽しむことが出来たでしょうが―。しかし能に生きる道を選んだことを後悔しておりません」と福謡会を育てることに今は余念がありません。

男性に劣るはずはない　一方、片岡さんは先ほど春星会を創立、披露で大曲「望月」を舞いました。その舞の精神的にも体力的にも男性には引けをとらないという、エネルギッシュな意気込みは人々の注目を浴び、若い婦人の職分としての面目を施しました。片岡さんは「舞台に出て男女を少しも意識しません。体力的にも若いのですから男性に劣る筈はないのです」と自信に溢れていました。金剛流は名古屋地方ではまだ開拓の余地があり「先ずいい舞を舞って私自身が芸を充実させ、流儀を広めていきたい」と抱負を述べています。中学校時代から能の雰囲気を愛し、豊嶋弥左衛門に師事。のち京都の金剛宗家で内弟子として五年間修行、職分の位を得て、このほど独立したばかりです。未だ独身。「能は日本の古い歴史を教えてくれます。教養を高める意味でも家庭に持ち込みたい稽古事です。美しい動作はその人の品格を作り出しいつも背筋を伸ばすので健康が保てます。家の中の一人が始めだすと大抵一家そろってファンになってしまいます。また、よその家庭のお祝いごとなどに役立つ便利さもあります。精神面でも心の健康になります。一生かかっても卒業できない深い味わいが魅力なのです」と語っています。

二月十八日、名古屋観世会定式能初回。舞囃子「高砂」柴田初太郎、「弱法師」木原康次、「昆布売」佐藤卯三郎、「草子洗小町」観世元正、「唐船・盤渉」山本博之。

―以下次号―

◆初秋から仲秋の舞台◆

「初秋能第二部」「隅田川とカーリュウ・リヴァー」「第四回・三の会」「九皐会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「屋島・弓流・奈須之語」　シテ邦久、前は漁翁。「塩屋に帰り」休むに床几でなく下居、折から宿乞う旅僧ワキ雅介を一度は拒むも、都人と知り招じ入れ、〽屋島に立てる、で立つと、〽若の筵、では傷わしいが坐るよう左手指シて勧め、共に下居。心通わせる様は源平合戦の語に仕方の気合。三保の谷との組討ちに引き合う強々とした型、〽関の声絶えて、潮騒松籟ばかりが残る寂寥感など芸劫の力、「奈須」は靖浩、大兵の与市が潮を手水に合掌祈念の神妙から「ヒ、フッ」と矢を放つところ、パワー全開の趣。

後シテは義経。執心残る屋島の海、その〽夢物語申すなり、と小書で小鼓方（嘉津幸）からの床几に掛かるとイロエに立ち、弓流は弓に擬した扇を旨く小鼓の音に和してワキの前に落とすと、潮流の速さは囃子の急調、シテは一ノ松へ流れて、〽敵船近く、と戻って〽されども熊手を切り払ひ、と面使ヒ、扇に近付き拾い上げると再び床几に掛かる。きびきびした動きに冷静沈着な義経はクセからカケリへ、一ノ松へ抜け勾欄に寄ると〽あら物々しや、とユウケン扇に雄姿を誇示。キリは型所力強く極め、〽浦風なりけり、と走り込み、ワキが常座へ出、膝つき合掌留。爽やかな勝修羅だった。（1時間49分）

「柑子」　預けた珍しい三つ成りの柑子を出せ、と強い口調の主・小三郎を飄々と受け流す趣の太郎冠者シテ又三郎。その口舌の徒ぶりに「何れ食うたものは是非もない」と諦める主も、最後の一つには固執。が、〽人と柑子は変れども思ひは同じ涙かな、と俊寛の悲話に、また騙されて貰い泣く直情も我に返って詰問すれば、「それも私が、ハハハ、下されました」の横着。又三郎いかにも卑しい雇い人根性を活写。（10分）

「船弁慶・前後ノ替」　弁慶に従者（ワキ勝久・ワキツレ宰）の道行を省き直ぐ着詞。前シテ静・美和、義経（子方・勘吉郎）との同行を願う思いを弁慶に阻害されたと思いこむしんねりむっつりの抵抗の態も、義経から直接の言葉を聞くしおらしさは肩を落とす風情、心情がみえる。舞半ば、一ノ松勾欄に寄って義経を見込み、背を向けると幕へ見て膝をつきシオル切なさは、舞台に戻り舞上げればやがて出船、〽舟子ども、と立ち、抱エ扇は〽静は泣く〳〵、と耐え入りそうな様子、此のシテならこその痩身撫で肩の姿が役に適い上々。

後シテ知盛ノ怨霊は一政。〽あら不思議や、と正面から首（こうべ）を巡らし幕へみるワキ、シテは半幕で床几の姿を見せ、一旦幕へ姿消すと早笛で走り出る。白地青海波文半切・白地袷狩衣（袖折込・衣紋ニ着ル）の凛とした勇姿は長刀捌き美しく、義経との攻防は子方も旨い。キリは弁慶の呪力に〽（悪霊次第に）遠ざかれば、と三ノ松へ追い遣られると、頭を取りキッと義経を見込むや、疾風迅雷ふたたび義経に肉薄のところなど目覚ましかった。（1時間18分・9月4日・初秋能第二部）

「隅田川」　ホール能、「カーリュウ・リヴァー」と併演。シテ六郎。ワキツレ旅人・正樹の道行を省き、シテの出にはスポット・ライトが当たる。行方不明の子を思い乱れる母の心はカケリ、己の素姓・さ迷う理由を省き直ぐ〽もとよりも、と地上歌に。隅田川に着き、ワキ船頭・勝久との問答・掛合は業平の古歌に拠る都鳥をめぐる件（くだり）、「うたてやな」と船頭の無粋を咎めるのも都の連想から。〽わらはも東に思ひ子の、と船頭に無関心で居て欲しくないとの思い切々。〽恋路なれば、と船頭へ詰メルと〽我も亦、の地で拍子二ツ踏むのも己への鼓舞、報われぬ思いは〽問へども問へども、と笹で二度打ち据えるように正先へ出るところなど、惹き付ける。この一種徒労感は、〽限りなく遠くも、と笠に手をやりツツツと脇正へ出させる焦燥か。船中は微動だにせず、静かなワキの語に聞き入り、「終に事終って候」で初めて左手シオルが、徐々に不安の兆す胸中の思いをぐっと抱きしめ耐

（④面へつづく）

（②面「秋の清謡会」つづき）

定家　小林美和子

卒都婆小町　不破　峰子

番囃子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

松風　鬼頭みゆき　手嶋なみ江　高安　勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

舞囃子　老松　金原　孝典　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

山姥　立廻り　山口　耕造　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤　洋輝　竹市　学

番外仕舞　雨月　梅田　邦久

附祝言

主催　清謡会　清沢一政

TEL　〇五六四・五二・六九〇九

補佐　梅田邦久

（終了午後六時頃）

［入場無料］
［御来場歓迎］

第41回公演　鳳の会

一月七日（土）午後一時三十分始
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林和利

素囃子　神舞　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤孝一郎　太鼓　加藤　洋輝　笛　竹市　学

狂言　松楪　摂津の百姓　井上菊次郎　和泉の百姓　奏者　佐藤　友彦　鹿島　俊裕　後見　鷺見　政行　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤孝一郎　太鼓　加藤　洋輝　笛　竹市　学

狂言　縄綯　太郎冠者　佐藤　友彦　何某　今枝　靖雄　主人　今枝　郁雄　後見　鹿島　俊裕

狂言　金岡　金岡　井上　靖浩　妻　佐藤　融　後見　井上菊次郎　今枝　郁雄　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤孝一郎　笛　竹市　学　地謡　今枝　靖雄　佐藤　友彦　鹿島　俊裕　鷺見　政行

［入場料］（全席指定）
A席五〇〇〇円、B席三五〇〇円
学生二〇〇〇円
会員A席四〇〇〇円、会員B席二五〇〇円
取扱い＝チケットぴあ　052・320・9999　Pコード：364・989
井上菊次郎宅　FAX052・834・8607

（③面よりつづき）

えている印象。船を下りてからは、塚の前のクドキ、膝をつき〽この土を返して、と双手で土を掬い返す型から〽この世の姿を、とがっくり安座双シオリの悲痛。シテを励まし念仏を勧めるワキ、〽南無や、の連吟に哀憐の情も一入に思われる。子方は梅若美和音、幼なさがいじらしく、幻を追うシテの手の下を二度掻い潜り、〽また消え消えと、逃げるところ、その無邪気な鬼ごっこが涙（多分シテも）を誘う。キリは、〽草茫々と、した塚を呆然と見詰め、〽たゞ標ばかり、でツツと塚に寄ると、慈しむように双手で擦り下ろしながら膝をつき、〽哀れなりけれ、とシオリ、返シ句に立って直り右ウケ地一杯に詰メ、大鼓一打、シオリ留。六郎、総じて型少な、内面描写に冴え。（1時間10分）

「カーリュウ・リヴァー」 英作家ヘンリイ・ジェイムズ著『ねじの回転』に拠る同名の室内オペラで著名なベンジャミン・ブリテン（一九一三―一九七六）の作曲。昭和三一年、N響指揮で来日の際、水道橋能楽堂は二月十一日の第一回梅渓会で「隅田川」シテ梅若武久（後に雅俊、一九一〇―一九九五）子方・梅若善政（当代六郎、当時八歳）を見て感銘、想を得たという。

シテ（テノール）、ワキ・ワキツレ（バリトン）、何れも二期会々員、子方・美和音はキリで露台に姿を現わすだけだがスポット・ライトが当たり如何にも天上の聖霊の趣。船頭は小格子着付・袖無シ・半袴、旅人は段熨斗目着付・掛素袍・括袴・杖、シテは直面・付髪（左右二垂ラス）・縫箔脱ギ下ゲ・狂ヒ笹、地謡座前とおぼしき辺に作物の舟を出し、装束付からも可成り現実味。場内は暗く、ホリゾントに十字架、その前に燭台。

冒頭、背後からのコーラスは僧衣に紛う黒づくめの一団（二期会マイスタージンガーの八名）、先導の修道院長に率いられ燭を手に客席中央を静々と下りてくるところは、グレゴリオ聖歌を聴きミサの荘厳に身を置く思いも。舞台に上がり、〽見よ神は弱きを助く、と修道士、〽各々とくと見給えや、と修道院長（訳詞・若杉弘）。物語の展開はおおよそ原曲を踏襲するが、劇中では修道士の一団が船に乗り合わせる巡礼者ともなり、ワキ・ワキツレ共々シテと積極的に関わってくるのが面白い。

受難のシテ狂女を救うのは神、シテ以下が舞台を退き、再び燭を手に暗闇の中を鎮魂の祈祷を唱えながら去って行く修道士たち、新通英洋指揮の七名から成る管弦楽と相俟ち「カーリュウ・リヴァー」一曲は正に「死者のためのミサ」レクイエム、粛然とさせられる。シテ狂女のテノール（経種廉彦）が、オペラを理由にもしアルト（ソプラノでは若過ぎ）が起用されていたら、多分、通俗に墜ちたであろうと思われるが、そこは原曲の能に忠実、テノールの感情表現の巧さもあって揺るぎない骨格の好舞台。宗教色豊かな詩情を湛えた梅若六郎の演出が見事。（1時間20分・9月10日・「隅田川」と「カーリュウ・リヴァー」・豊田市コンサートホール）

「三番叟・揉ノ段」 シテ又三郎。装束は替で白式の清浄。斯道八十年記念というが、〽おおさへおおさへおう、の掛け声も張りがあり、運ビも軽やかに足拍子も力強い。烏飛は二ツだったが八十四翁とは想像出来ない。元気、爽やかに勤める。（21分）

「徳阿弥でござる」 豊田市能楽堂の、万博記念講演に三河を舞台とする柳沢新治の新作狂言。

松平家に身を寄せる徳阿弥シテ小三郎、娘みずアド健太郎（鬘・振袖）と懇ろになるが世情は騒然、独りで逃げ出すつもりが子まで生した酒井家のうめ小アド隆行（ビナン・縫箔壷折・子ヲ伴フ）が現われて素行が露見し狼狽。そこへ、近隣の中村氏の襲撃を知って徳阿弥に挙兵を求める松平氏小アド高義（白鉢巻・括袴・法被・太刀）。親の顔を立ててこの緊張時、一気に女関係のいざこざ有耶無耶にの才略は徳阿弥、あっさり還俗して僧形は士烏帽子・括袴・掛素袍・太刀の武者姿に。キリは、中村氏とは和睦を結んだ、と協定譚も意気揚々の祝宴の場、〽雲居に上げん門出の、などと三人に謡わせて舞う小三郎の調子のよさ。〽なお千秋や萬歳と祝ふことこそ目出度けれ、と舞上げ、笛で笑ヒ留。女二人の装束付の工夫もあるが「鈍太郎」のように二人の納得づくの解決がなく、宴の後を思えば笑ヒ留も晴れやかさからは一寸距離もあろうか。それに〽なお千秋や萬歳と、は次の「靱猿」と付き過ぎ。全体は運び快調というより少々先を急ぐ忙しない感じで、僧と武者、二つの山場が印象を散漫にする惧れ。（23分）

「靱猿」 大名又三郎、猿曳小三郎、太郎冠者高義、小猿信朗、と又三郎家三代が昨年暮と同じ配役で勤める。初演では出をむずかった信朗君、今回は自由奔放の元気。物着に花笠と鈴付赤陣羽織、〽お庭に〳〵花が咲いたら、と扇の扱いも上手に喜々として大名に戯れ遊ぶ風も梅檀は双葉より芳し、である。キリの猿歌は小三郎の独吟。なお、替装束は騎者笠の工合が悪く、大名は途中で洞烏帽子に。いささかの瑕瑾なしとしない。（32分・9月11日・第4回三の会）

「松虫」 秋野に集い酒宴のあと散開する若者たち、シテ圭一（男）ツレ充・喜久（友人）。その様子どことなく気懸りな彼らに酒を売り、ゆっくりするよう勧めるワキ勝久（市人）に、「仰せまでもなし」とシテ（段熨斗目着付・白大口・黒地掛素袍・笠）。彼らは松虫の音に惹かれて叢に果てた亡友の不慮を悼み、亡友を慕い弔い酒を酌むのだと知る。

死なば諸共に、の亡友との誓いには若衆道の影、惧れた評判が漏れて悲しいが、亡友を偲び、松虫の音に誘われて市井の人に身をやつして現われたが〽恥かしや、とシテ。帰らんとして今少し友人達と名残りを、とワキに止められ、一ノ松から舞台へ戻るが、〽松虫の音に伴ひて、中入。前場、シテとツレ二人の道行の連吟が爽やかで、文字通り野遊山の〽面白や、であったが、一体にシテは陰気（当然か）な印象。

後シテは男ノ亡霊、弔いを喜び、ワキとの再会は掛合、直面でないので息が苦しい様で、〽あら懐かしの心や、とワキへ行くところも運ビが不安定。友情の種々相をいうクセから舞、袖捌キなど舞振り少々荒っぽいが一生懸命さを買う。（1時間18分）

「千鳥」 溜めるばかりの酒屋（小アド又三郎）の付け、祭酒を調達するのは偏に太郎冠者（シテ小三郎）の才覚に係ってくる。悪戦苦闘というよりは、窮地を如何に突破するかの頭脳戦争を楽しむ様な、騒々しい程の太郎冠者の奮闘に、仏頂面の酒屋も多分陥落させられるだろう、と初手から思わせる小三郎の熱演。（30分）

「菊慈童・遊舞ノ楽」 シテ慈童・喜之。〽それ邯鄲の枕の夢たのしむこと百年、だが慈童の枕はむかし周の穆王の枕を跨いだ科で流罪の今、藁屋の中で謡い出す低く沈んだ声調が沁々肺腑に滲み渡る。それが、魏の文帝の勅で薬水を尋ねるワキ勅使・雅介の来訪で、今が七百年の時を経ていると知るシテ。長命の因は、穆王が下賜の偈を菊の葉に写し、其処に置く露の滴りの飲用と知る。愁嘆は一転、藁屋を出ると、気持が晴れるようだと菊の花束を持ち楽（がく）を舞う。二段半ば唐団扇に替え一ノ松へ、袖被キ枕を見込むと更に二ノ松へ。流れを下に見る心にする〳〵と戻って来るところなど、如何にも楽しげ。舞上げ、再び〽谷陰の水の、と一ノ松へ。〽菊水の流れ、を面使ヒにみせ、小廻りから〽掬ひては施し、と膝ついて掬い、舞台へ戻ると脇正。〽月は宵の間、と袖返シて左を見上げ、〽よろ〳〵、退り、〽漂ひ寄りて、枕を戴く（写真）のも菊の酒の酔余は感恩の気持。キリは〽萬歳のわが君、とワキへ一礼、地の裡に橋懸へ。小廻りしつつ二ノ松でトメ。悠揚として軽やかな舞ぶりは正に遊舞、喜之巧演。（38分・9月17日・九皐会）

㊤九皐会「松虫」外山圭一、
㊦「千鳥」（左より）野村小三郎、野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

㊤九皐会「菊慈童・遊舞ノ楽」観世喜之　（杉浦賢次氏撮影）
㊦㊨宝生会「草紙洗」（左より）玉井博祐、飯冨雅介、辰巳大二郎、内藤飛能、小鼓・柳原冨司忠、笛・鹿取希世、
㊦㊧「乱」（左より）佐藤耕司、大鼓・寛鉱一　（宝生会提供）

「草紙洗」 宝生はシテ・ワキ共に登場楽がなく、先ずシテ小町・博祐が正中の床几にかかり作歌、次いでアイ下人・俊裕を伴うワキ黒主・雅介が一ノ松でそれを盗み聴くが、観世は名宣笛で先ずアイを伴うワキが舞台へ、次いで大小アシラヒで三ノ松に立つシテが作歌、それをワキが盗み聴く。囃子の有無は、同一空間に在るシテとワキの緊張の度合いにも影響しようか。独白のシテ博祐、歌合に臨む決意の程、静かな中にもきっぱりと、短いが前場に精彩。

後場は小町の歌が黒主に古歌と言い立てられ問答となるところ、男女の役柄が嵌り小町の愁嘆の様、黒主の憎気な様は引き立つも、平面的な舞台にならざるを得ず、厚みに欠ける憾み無きにしも。なお、宝生では小町を除き貫之以下全て風折烏帽子・厚板着付・白大口・長絹の朝臣、小町の横に官女二人が侍る観世に比し華やかさ、彩りは欠ける。

草子洗は洗う型の美しさ、〽入筆なれば、で草子を見込み居立つ黒主の観念する様、などが目立つ。物着あとも無難にキリは〽花の都の、と低く翳シてスミから左へ廻り常座でトメ。全女性の地謡を率いる雅の大奮闘。（1時間23分）

「隠狸」 噂で太郎冠者シテ菊次郎が狸を釣ること薄々は承知の主・靖浩、真偽質せば否、ならばと市へ狸を求めに遣る。余録のつもりの狸を只で取られては、と先に売る算段の太郎冠者、「狸売らう」と大声で呼ばわる処へ来かかる主。慌てる太郎冠者に「市立（いちだち・市と同義）には酒を飲むものぢゃ」と酒を勧める。咄嗟に狸を後ろ手に隠す太郎冠者、往還も気になるが、飲めば意地悪く舞を所望する主。「何ぢゃ、舞を舞へ」とやや呂律乱暴な太郎冠者だが狸が見つからぬよう慎重に小舞「兎」を舞うが、宴が進むにつれ酩酊、とどの詰りは相舞で「道明寺」のキリ。注意力も散漫になろうというもの。〽かの尊性に与へつつ、で狸は主に奪われ与えてしまい、〽夢は覚めにけり、でそれを覚ることに。謡の詞章を巧く嵌めこんだ舞歌に横溢する遊び心、小道具の狸が可成大きいのも愛敬。息の合った菊次郎親子の共演。（25分）

「乱」 シテ猩々・耕司、ワキ高風・勝久。海中から浮かび上がる心に幕を放れ、三ノ松で水を振り落すような所謂いやいやをする型も無く、全体に型少な。〽客人も御覧ずらん、とワキにアシラヒ、〽月星は隈もなき、と頭を取り、面使ヒ。〽（波の鼓）どうと打ち、と大きく打合、〽秋の調めや、と扇畳み乱になる。観世の様な波を蹴立てるような乱レ足、潮に委ねるような流レ足は見られないが、水鳥が水中から抜き脚する様な型（写真）が面白い。キリは〽秋の夜の盃、と左ツマミ扇を盃に見立てて眺める型に飲み足りた心をみせ、〽足元はよろ〳〵、と正中膝つき枕ノ扇、立つとユーケン扇にトメ。堅実な舞ぶりに耕司の真面目。（39分・9月18日・宝生会）

創立30年の「愛面会」
仮面展、記念式典を開催

昭和五十一年に、愛知県労働協会文化学園の工芸・面打ち教室（平井杢侃講師）の修了者により日本伝統の仮面づくりと調査・研究をめざして結成された「愛面会」（会長・浅井一元氏）は、このたび創立三十周年を迎え、多彩な記念事業を企画実施、その一環として、11月15日から20日まで、会員全員の作品を展示して「愛面会三十周年記念・仮面展」を名古屋市民ギャラリー・栄で開催、出展は能面45点、狂言面15点、伎楽面1点、舞楽面3点、民俗面8点、里帰り面9点、木彫り見本面120点。

同会では、能面展でなく、「仮面展」と名づけるのは、愛面会が制作する面は、能面、狂言面　伎楽面　舞楽面、民俗面など多岐にわたっているので発足当初から仮面展として実施されている。毎年来観者は千人を越えている。

なお里帰り面というのは、会員が制作して寄贈し、現地で活躍している面で、これまで大須観音（節分面）北設楽郡・東栄町・花祭面（河内地区）東栄町、花祭面（足込地区）として使われているもので、大須観音節分会で毎年使用されている面3点、愛知県東栄町花祭りで毎年使用される面6点。

さらに創立三十周年を祝して次の記念行事が予定されている。

一、記念講演会（愛面会と県労働協会主催）
平成17年12月4日(日)午後1時～午後3時
愛知県勤労会館（サンプラザ鶴舞）2階小ホール、参加費無料。
演題「面打ちの秘訣」（講師・平井杢侃氏）

一、記念式典
12月4日(日)午後3時10分～3時30分
愛知県勤労会館（サンプラザ鶴舞）2階小ホール

一、創立30周年記念パーティ
12月4日(日)午後3時50分～午後5時
愛知県勤労会館（サンプラザ鶴舞）

一、創立30周年記念誌発行
12月4日(日)記念式典当日配布、B5判65ページ（写真カラー）
仮面展には、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県労働協会が後援している。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成18年1月1日～3日）

◆NHK－FM能楽鑑賞・年始特集

◉1月1日(日)　11：00～11：50
番囃子「高砂」（喜多流）
シテ・地謡　粟谷菊生、シテツレ・地謡　粟谷明生、ワキ・地謡・出雲康雅、ワキツレ・地謡　長島　茂、地謡・粟谷浩之、内田成信、笛・一噌仙幸、小鼓・鵜沢速雄、大鼓　柿原崇志、太鼓・小寺佐七

◉1月2日(月)　11：00～11：50
狂言「田植」（和泉流）
野村　萬、野村万蔵、小笠原　匡、野村扇丞、吉住　講
狂言「鐘の音」
善竹忠一郎、善竹隆司、善竹隆平

◉1月3日(火)　11：00～11：50
番囃子「箙」（金剛流）
シテ・地謡　金剛永謹、ワキ・地謡　豊嶋三千春、地謡・松野恭憲、今井清隆、宇高通成、笛・森田保美、小鼓・曽和尚靖、大鼓・河村　大

◆NHK・教育テレビ・年始特集

◉1月1日(日)　7：00～8：00
能「翁」（金春流）
～十二月往来　父尉・延命冠者～
シテ・金春安明、千歳・茂山正邦、三番三・大蔵彌太郎、笛・杉　市和、小鼓・亀井俊一、大鼓・安福建雄　ほか

◉1月2日(月)　7：00～8：00
狂言「萩大名」（大蔵流）
シテ・茂山千作、太郎冠者・茂山千之丞、庭の亭主・茂山忠三郎
狂言「無布施経」（和泉流）
シテ・野村又三郎、アド・野村小三郎

◉1月3日(火)　7：00～8：00
能「春日龍神」～龍女之舞～（観世流）
前シテ・後シテ　梅若万三郎、前ツレ・古室知也、後ツレ・梅若紀長、加藤眞悟、ワキ・森　常好、笛・松田弘之、小鼓・幸清次郎、大鼓・柿原弘和、太鼓　観世元伯
後見・梅若万佐晴、中村　裕、梅若久紀
地謡・伊藤嘉章、青木一郎、馬野正基、八田達弥、遠田　修、長谷川晴彦、梅若泰志、青木健一

平成十八年度　名古屋観世会　定式公演

◇四月九日（日）十二時半
屋島　弓流シ　古橋　正邦
杜若　梅若　六郎
山本　順之

◇六月十一日（日）十二時半
千手　郢曲　観世　喜正
天鼓　弄鼓　観世　喜之
武田　志房

◇七月十六日（日）十二時半
観世左近十七回忌追善能
（舞囃子）海士　観世　芳伸
砧　梓之出　観世　芳宏
観世　清和
鵜飼　真如之月　観世銕之丞

◇九月十八日（祝）十二時半
井筒　観世　芳宏
山姥　白頭　梅田　嘉宏
大槻　文蔵

◇十一月十二日（日）十二時半
江口　祖父江修一
清沢　一政
梅田　邦久
安達原　黒頭　急進之出　武田　宗和

［入場料］
自由席（年六回分）二五〇〇〇円
指定券（年六回分）四三〇〇〇円
追善能当日券は一〇〇〇〇円

観世寿夫記念法政大学能楽賞
河村　隆司氏　櫻間　金記氏　受賞

法政大学（平林千牧総長）は、一九七九年（昭和五十四年）に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十六回の贈呈を重ねているが、本年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員（武田洋・法政大学常務理事、野村萬、みなもとごろう、松本雍、表章、西野春雄、山中玲子）が慎重に審議した結果、第二十七回の受賞者として、シテ方観世流・河村隆司氏、シテ方金春流・櫻間金記氏を決定した。
両氏の受賞理由は次のとおり。

［受賞者］
河村（かわむら）　隆司（たかし）　氏
［贈呈理由］
作品の本質を捉えて舞台に現出する豊かな芸力を持ち、特に昨年の〈姨捨〉では哀感を超越した孤独と宿業感を抽出してみせた。青年期の情熱から中年期の円熟を経て昨今の閑雅へと至る氏の舞台の軌跡は、世阿弥の言葉通り「若年より老後まで習い徹る」ものとして見事である。地頭としてもよき協力者を得、彫りの深い独特の叙情を産み出している。

［受賞者］
櫻間（さくらま）　金記（きんき）　氏
［贈呈理由］
揺るがぬ基礎技術に立脚し、作品の内容や演出の深い理解に支えられた氏の能は、近年とみに充実し、特に昨年の〈卒都婆小町〉や本年の〈砧〉の卓越した演技は、観る者に深い感銘を与えた。新しい演劇創造に参加し挑戦するなど、その幅広い活動と積極的な姿勢も、芸に対する真摯な取り組みとともに、高く評価される。
なお贈呈式は、「催花賞」の贈呈式と合わせ、明年一月十三日（金）午後六時より、東京・赤坂プリンスホテルで行われる。

催花賞　東海能楽研究会
東海地方の芸術文化の振興に貢献

法政大学は、第十七回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者として「東海能楽研究会」を決定した。

［受賞者］
東海能楽研究会（代表・筧鉱一氏）
［贈呈理由］
名古屋を中心とする東海地域の能楽史の解明と、次世代への継承・普及を目的とし、当地の能楽師と研究者が一体となって組織された同会の活動は、近代名古屋の能番組のデータベース化を基軸とし、詳細な索引を付した『近代名古屋の能楽を支えた人々』全三冊（平成13年刊）に結実した。名古屋ゆかりの（龍の口）の復曲、児童生徒を対象とした「伝統芸能上演会」の開催など、能楽の普及に果たした功績も大きい。
「催花賞」は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、一九八八年（昭和六三年）四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者、および能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設けた。「催花」は観世新九郎家伝来の額に基づく名称である。

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
（TEL 052－231－0088）

［平成18年1月］

3日(火)	名古屋能楽堂特別公演	（有料）	（番組①面）
7日(土)	第41回「鳳の会」公演	（有料）	（番組①面）
8日(日)	第50回学生能・狂言の会	（無料）	
9日(月)	名古屋清韻会	（無料）	（番組②面）
15日(日)	第8回万作を観る会	（有料）	（番組②面）
22日(日)	名古屋宝生会定式能	（有料）	（番組③面）
28日(土)	あいち「農楽」（のうがく）フェスティバル	（無料）	

NHK放送予定（平成17年12月～18年1月）

◆NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

12月25日	「融」（観世流）	武田志房ほか
1月8日	「養老」（宝生流）	三川　泉ほか
1月15日	「胡蝶」（観世流）	大槻文蔵ほか
1月25日	「羽衣」（再）（観世流）	津村禮次郎ほか
1月29日	「節分」（大蔵流）	山本東次郎ほか

名古屋能楽堂演能案内
名古屋能楽堂正月特別公演

平成十八年一月三日（火）午後二時始
名古屋能楽堂

（観世流）
能　翁
久田　勘鬼　奥津健太郎　藤枝　徹
久田勘吉郎
後見　梅田　嘉宏　河村総一郎
泉　嘉夫　船戸昭弘
柳原冨司忠
地謡　外山　圭一　大野　誠
後藤嘉津幸
黒田　博一
松山　幸親
加賀　敏彦
高橋　一瞭
清沢　一政
梅田　邦久
狂言後見　野村小三郎
野村又三郎

（和泉流）
狂言　二九十八
男　野村小三郎　お告げの女　伴野　俊彦
後見　野村又三郎

能　巴
泉　嘉夫
高安　勝久　筧　鉱一
後藤嘉津幸　竹市　学
松田　高義
地謡　八神　孝充　梅田　嘉宏
本田　勲　祖父江修一
須部　甫　梅田　邦久
高橋　瞭一　清沢　一政
（午後五時半頃終了予定）

舞囃子　絵馬
手力雄命　松山　幸親
天鈿女命　久田三津子
近藤　幸江　河村眞之介
後藤嘉津幸　鬼頭　義命
竹市　学
地謡　本田　勲
梅田　嘉宏
久田　勘鬼
須部　甫

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋城振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

第41回公演　鳳の会

一月七日（土）午後一時三十分始
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林　和利

素囃子　神舞
大鼓　河村眞之介
小鼓　後藤孝一郎
太鼓　加藤　洋輝
笛　竹市　学

狂言　松楪
拱津の百姓　井上菊次郎
和泉の百姓　佐藤　友彦
奏者　鹿島　俊裕
後見　鷺見　政行
大鼓　河村眞之介
小鼓　後藤孝一郎
太鼓　加藤　洋輝
笛　竹市　学

狂言　縄綯
太郎冠者　佐藤　友彦
何某　今枝　靖雄
主人　今枝　郁雄
後見　鹿島　俊裕
大鼓　河村眞之介
小鼓　後藤孝一郎
後見　井上菊次郎
今枝　郁雄
笛　竹市　学
地謡　今枝　靖雄
佐藤　友彦
鹿島　俊裕
鷺見　政行

狂言　金岡
金岡　井上　靖浩
妻　佐藤　融

入場料　前売一般　四五〇〇円（当日五〇〇円）
学生前売　二五〇〇円（当日三〇〇円）
取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ　0570・02・9999
市内プレイガイド、青少年文化センタープレイガイド（052・265・2015）

［入場料］（全席指定）
A席五〇〇〇円、B席三五〇〇円
学生二〇〇〇円
会員A席四〇〇〇円、会員B席二五〇〇円
取扱い＝チケットぴあ　052・320・9999
Pコード：364・989
井上菊次郎宅　FAX052・834・8607

法政大学能楽賞受賞者の略歴

河村　隆司　氏

シテ方観世流。日本能楽会会員。京都観世会会員。1928（昭和3）年1月13日、河村北星の四男として京都に生まれる。北星（本名・晴重）は、京観世五軒家の一つ林家の11世林喜右衛門幽玄に師事し、道也・禎二・晴天・隆司の四人の子供を能楽師に育て、昭和23年、河村定期研能会を創立、昭和31年には活動の拠点たる河村能舞台を建設した。

12世林喜右衛門矩玄・片山九郎右衛門に師事。初舞台は昭和7年〈玄象〉の仕舞。昭和27年12月、能楽協会主催第二回能賞の会では、禎二と共に上京出演し、禎二が一位、隆司は三位に入賞した。主な披演曲に〈道成寺・石橋・翁・砧・求塚・定家・朝長・三輪白式・卒都婆小町・鸚鵡小町・松浦作用姫・三山・摂待・木賊・江口平調返〉などがある。

能楽伝書の吟味・解読に秀で、その舞台は独特の雰囲気を湛えている。昭和50年より日本能楽会会員。河村定期研能会での活動はもとより、自身「初心の会」を主宰し、常に魅力的な舞台を創り上げる一方、後進の指導の功も大きい。文芸への造詣の深さ、強い表現力、そして高い精神性が結実した氏の舞台には世界観が存在し、小宇宙を内包すると言われている。

昭和58年〈善知鳥〉の演技で大阪文化祭賞本賞受賞。京都・大阪・鳥取などで青嵐会を主宰。趣味は能楽関係学術古書蒐集と文学、美術鑑賞。後継者に長男の栄重氏。

櫻間　金記　氏

本名、瀬尾菊次。シテ方金春流。昭和19（1944）年7月15日、大鼓方葛野流宗家預かり瀬尾乃武（人間国宝）の次男として東京に生まれる。昭和26年に兄辰之と共にシテ方金春流野村保に入門。初舞台は昭和27年八歳で〈善知鳥〉の子方。初シテは昭和39年の〈箙〉。昭和49年に〈道成寺〉を披く。昭和42年国学院大学文学部史学科卒業。師の没後、桜間道雄に師事。

昭和61年より日本能楽会会員。昭和55年、同流の本田光洋と「轍の会」を主宰、昭和63年には、観世流の浅井文義・喜多流の粟谷能夫と「三鈷の会」を結成、意欲的な活動を展開している。蒲生美津子構成による早歌の復曲や、「錬肉工房」主宰の岡本章構成・演出による能を取り入れた現代演劇〈水の声〉〈ハムレットマシーン〉など新しい試みにも積極的に参加。主な披演曲に〈石橋・乱双之舞・融笏之舞・道成寺・邯鄲・野宮・角田川・景清・山姥〉などがあり、新作能〈鷹姫・晶子みだれ髪・紫の上・伽羅沙・智恵子抄・不知火〉に出演。英国ブリテン・フェスティバルでは能形式を取り入れた外国人歌手による教会オペラ〈カーリュー・リヴァー〉の演出を手掛けた。

昭和52年より巣鴨女子高校（現・淑徳巣鴨高校）の正課「謡曲・礼法科」で20年間にわたり謡曲・仕舞を指導し、学生や初心者に対する講演・指導には定評がある。

現在、獨協大学講師。平成11年4月、四世桜間金記を襲名。桜間の芸の継承と後進の指導、普及にも務めている。著書に『能と義経―シテが語る―』（光芒社、2000）がある。

催花賞　東海能楽研究会

平成6年、大倉流大鼓方で当時能楽協会名古屋副支部長であった筧鉱一氏を中心に、名古屋の能楽の歴史を明らかにすると共に、次世代への継承のための普及活動を行うことを目的として結成された。会員は、能楽師、研究者、大学院生、能楽愛好者等で、現在、約40名。

最初の事業は、明治以降の名古屋を中心とする東海地域で催された能楽番組のデータベース化。筧氏収集の約5000枚の番組を入力し、平成13年には、明治元年から昭和63年までの資料をもとに番組集・人名索引・演目索引を作成して『近代名古屋の能楽を支えた人々』全三冊を刊行した。能楽番組の収集・整理とデータベース化は現在も継続中で、平成9年までのデータは椙山女学園大学三木邦弘助教授のホームページで公開されている。

この作業を通じて、能楽の愛好者は幼少時から祭囃子などで和楽器に触れることによって育って行くことが多いことを知り、次世代の愛好者育成のための活動にも取り組み、平成12年より、毎夏、玄人の出演で、平曲・能・狂言・日本舞踊・長唄・三曲などを、小・中学校の教員、児童生徒、愛好者を対象に、無料で「伝統芸能上演会」を開催している。

また名古屋ゆかりの能〈龍の口〉を復曲上演するなど、愛知県芸術文化の振興と向上に貢献し、そうした功績が評価され、平成14年度愛知県芸術文化選奨文化賞が贈られた。会員による研究成果の発表の場たる論集も継続して発行するなど、地道ながら着実にその成果を上げている。

戦後名古屋能楽史 ⑪

〔第十六章〕　昭和三十七年（一九六二）

竹尾　邦太郎

―承前―

三月、第七回を迎え、概ね此の月の第四・日曜日に催されるのが恒例の中日五流能、これに先立つ二日、今回当地初演の舞囃子「智恵子抄」につき作者・武智鉄二は「智恵子抄」の思い出、と題し、中部日本新聞夕刊に次の談話を寄せる。

高村光太郎の名作「智恵子抄」を能楽化して上演する計画を立てたのは、昭和三十年の秋のことであった。

その前年、木下順二の「夕鶴」を現代能として取り上げた後だったし「智恵子抄」はできるだけ能の規格を外さないで、しかも近代性に富んだものにしたいと考えた。

この近代詩の名作を題材に選んだのには二つの大きい理由があった。一つは、能が曽て世阿弥という偉大な詩才の力で大成されたのに反し、その後、世阿弥に匹敵する大詩人を持っていない。現在の新作でもその憾みは深い。高村光太郎なら詩才世阿弥の塁を摩するものありと考えたからだ。

もう一つは、私が光太郎の詩を選んで排列することが、直ちにドラマの世界を形成するという点が型に嵌った劇作家の戯曲を排斥する私の気持ちにぴったりしたことだ。

これは結局、光太郎の詩を制作年代順に並べることが理想的な構成であると悟るに致った。能の特色である三不一致（西洋的劇作法の三一致の否定）を、現代の反演劇の典型にまで高めて打ち出すことが出来ると思ったからだ。「智恵子抄」能楽化の企画を光太郎は誰よりも喜んでくれた。「おれの詩は能でやるのがいちばん適しているかも知れない」と側近の人に洩らしたという。しかし、能「智恵子抄」が上演されたとき、もう光太郎は此の世の人ではなかった。私は至高の観客を失ったのである。

初演は昭和三十二年五月、東京大曲の観世能楽堂においてなされた。作曲は観世銕之丞が受け持ち、囃子は幸祥光が中心となって努力してくれた。能楽界が古曲の紛い物でない真の新作能のため精力を結集したのは、この時が初めてであったと思う。そうして、その後にもまだない。私が戦争中、能のために尽くしたことがこのとき初めて報いられたのであった。そうして、この時っきりである。

私は能の創造的エネルギーが、長い封建的屈従の後に極度に低下していることを憂えた。それと同じ位、現代の観客のエネルギーの低下を憂えた。それで出来るだけ「智恵子抄」を長時間の作品に作

（③面へつづく）

「泰山府君」松野奏風画
（『金剛』第15巻第3号より転載）

名古屋清韻会

一月九日(祝)午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡　井筒　佐藤加代子　浅井　庸子
斎藤真佐子　安藤　敏子
冨田　郁子　中村喜久子
山口たき子　緒方　陽子
筑瀬　和子　御牧　紀代
久保田和代　伊藤るり子
木下　美蓉　野村　和子
地謡

藤戸　林本　政夫　中原　基夫
佐藤　尚雄

玄象　岩田　正子
田中　文子
樟本　圭子　中村　玲子
地謡　田中　泰子
青山　信江　中村喜久子
緒方　陽子　御牧　紀代
古井　佐季
後藤るり子　山田　富美

仕舞　養老　河野カズエ
玉葛　山本美代子
忠度　春日井夕紀子
田村　谷口　寛子

舞囃子　羽衣　和合之舞　川崎あきゑ　筧　鉱一　福井啓次郎　加藤　洋輝　大野　誠
枕慈童　バンシキ　山本　淳子　筧　鉱一　福井啓次郎　加藤　洋輝　竹市　学
西行桜　名倉　菊子　筧　鉱一　福井啓次郎　観世　元伯　大野　誠
船弁慶　西岡　隆子　筧　鉱一　福井啓次郎　加藤　洋輝　大野　誠

素謡　弱法師　吉川喜美子　泉　嘉夫

一調　三井寺　鬼頭貴代子　後藤孝一郎

舞囃子　梅枝　御牧　紀代　河村真之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

柏崎　思出之舞　古井　佐季　河村総一郎　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

山姥　替之型　篠田　幸子　河村総一郎　後藤嘉津幸　観世　元伯　鹿取　希世

独吟　景清　佐藤　尚雄

勧進帳　川崎　信義

能　隅田川　赤松　裕一　渡辺　節子　宝生　閑　大日方　寛　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

舞囃子　頼政　冨士道周明　河村真之介　後藤嘉津幸　鹿取　希世

邯鄲　バンシキ　桑原　信夫　河村真之介　柳原冨司忠　観世　元伯　鹿取　希世

融　舞返之伝　福間　克彦　河村真之介　後藤嘉津幸　観世　元伯　藤田六郎兵衛

錦木　佐久間美親　河村総一郎　柳原冨司忠　竹市　学

難波　加藤　千一　河村真之介　柳原冨司忠　観世　元伯　竹市　学

祝言　仕舞　嵐山　大槻　文蔵

主催　名古屋清韻会

（終了予定午後六時前）

［御来場歓迎］

第8回 万作を観る会

一月十五日(日)午後二時開演
名古屋能楽堂

一管　三番曳　笛　竹市　学

狂言　鍋八撥　鍋売　野村　万作　羯鼓売　月崎　晴夫　目代　野村万之介

狂言　酢薑　酢売　井上菊次郎　薑売　佐藤　友彦

狂言　釣針　太郎冠者　野村　萬斎　主・石田　幸雄　妻・深田　博治　腰元　竹山　悠樹　〃　月崎　晴夫　〃　時田　光洋　〃　岡　聡史　乙　高野　和憲

主催　なごや・万作の会
後援　名古屋稲門クラブ
愛知県稲門教育会
中日新聞社

入場料
一般前売　S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、B席六〇〇〇円
◆電子チケットぴあ
TEL0570（02）9999
◆プレイガイド（名古屋三越）
なごや・万作の会事務局
TEL052（251）1933
FAX052（242）0031

（②面よりつづき）

り上げた。上演時間一時間半を越え、シュール・レアリズムの効果を狙った世界最初の反演劇の上演は、私自身の果てしない満足感と、観客からの限りない不満の投げかけとの内に終わった。

今回、名古屋の中日五流能で「智恵子抄」の一部が舞囃子の形式で上演されるという。光太郎の詩魂と、民族伝統芸術のよさとが、きっと観客の胸を揺さぶることだろう。そうして私は、もう一度、この曲が完全な形で上演されることを待ち望んでやまない。

三月四日、名古屋観世九皐会は先代興観院（初代観世喜之）二十三回忌・亡母清光院（初代夫人糸子）三十三回忌追善の社中会。番外供養舞囃子「龍虎」観世武雄・喜之があり、三役に森茂好、幸円次郎、山本敬一郎・山本孝、柿本豊次が来演。

三月十八日、第四十二回名匠鑑賞能は春恒例の宝生流大会。「放下僧」野口禄久・辰巳孝、「隅田川」宝生九郎、「伊文字」和泉保之、「葵上・梓ノ出」宝生英雄、ワキ江崎直質、大鼓飯島佐六が来演。終演後、昭和三十六年度名古屋演劇ペンクラブ賞受賞式が行なわれ、清水笛四会長から和泉保之へ、当該年度の「髭櫓」「業平餅」など名古屋に於ける狂言活動に対して同賞が贈られる。

翌十九日、中部日本新聞は五流能に出演する当地の笛方藤田流宗家六郎兵衛を紹介、能芸術の一端が披瀝される。

「笛の本当の芸の味がでるのは四十代、五十代でしょうね。二十代までに一応の仕上げをし、三十代で個性をだし、四・五十代がいわば絶頂期、六十代になるとちょっと落ちますね。何しろ笛は相当体力も必要ですから……」と笛の藤田流家元、藤田六郎兵衛さんは語る。いま五十三歳の藤田さんは恰度円熟期の最高潮にあるとも言えるだけに、二十五日に県文化講堂で開かれる第七回中日五流能での藤田さんの笛は能芸術の極致を示すものだろう。

能の世界は、その各部門がすべて流儀の宗家によって代々受け継がれてきた。しかし、流儀がそのまま残っているのはシテ方の観世・宝生・金剛・金春・喜多の五流だけで、あとは何百年かの歴史の波に少しずつ挽き千切られていった。笛の宗家も、いまは三流が残っているだけ。しかも家元が現存するのはこの藤田流だけになった。

笛の音色をひたすらに守ってきた藤田さんは西区此米町で名古屋での十代目を継いでいる。尾州家とともに京都から来名した藤田家は、代々この此米町（昔は姫町といった）に住んでいた。だから今年で藤田家は三百三十八年目を迎えたことになる。

藤田さんと話をしていると、百年、二百年昔の話がつい先日のことのように思われてくる。そんな雰囲気が、この藤田流そのものの中にあるからだろう。藤田家代々に伝わる家宝「瓦落しの笛」（笛の音で瓦が落ちたといわれる名管）も、能の伝統と藤田家の歴史を語っている。そして「百年以上たたないと私たちの世界では古いとは言いません」という。それに笛は古くないと澄んだ音色がでない。「どうしても二・三百年たったものでないとダメです。しかも使いこんで二・三百年です」と語る。

「今はあまりいい物が出来ない。昔は一生かかって二本か三本作るといった具合で、とても現代では真似が出来ない。だから、今は良い物が無いのです」とも語る。代々吹き継がれてきた笛から出るのだから、その音色に厳しい伝統の香りがあるのは当然ともいえる。この笛の世界からだけでも能芸術の伝統の一端がわかる。

藤田さんは、今年の中日五流能では「二人静」と「花月」を受け持つ。優婉な曲と軽妙な曲、六歳から始めた厳しい修業の成果を一管の笛に托そうとする。

このあとを孫の昭彦君（八歳）に受け継がせることになっているという。来年、一子相伝の秘曲を披露することになっている昭彦君が、かたわらで行儀よく座っておぢいさんの話に耳を傾けていた。

三月二十五日、中日五流能の舞台は愛知文化講堂、二部制。第一部は「泰山府君」、金剛流のみがもつ世阿弥名作の稀曲「泰山府君」とは、一体どんな能だろうか。ここに百年不出の塵を払って金剛宗家により復活上演される。この機を逸しては今後再び観ることは出来ない。流友諸氏の必見を切にお勧めする、と『金剛』誌第15巻第3号は宣伝する。この初演時は前シテ金剛厳・後シテ豊嶋弥左衛門、ツレ今井幾三郎、ワキ岡治郎右衛門。今回はシテ金剛厳、ツレ豊嶋三千春、ワキ西村弘敬。新作狂言「とりかえばや」は前年九月五日、京都で狂言座により茂山七五三・千之丞・万代峯子で初演。今回は万代だけが茂山真吾に代わる。作者平岩弓枝は番組に「狂言と私と」の題で次の稿を寄せる。

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」が二本目である。最初の「雪まろげ」は、やはり昨年、この中日五流能で上演され、作者としては非常に嬉しかったのだが、あいにくその翌日が私の結婚式当日だったため気にかかりながら名古屋まで出かけてくることができなかった。それゆえ、ことしはなんとしても愛知文化講堂の片すみにすわるつもりである。

二本の狂言台本の最初のは好奇心で、二本目はむしろ楽しみながら書いてしまった。もし私が三本目を書くとすれば、こんどは相当に苦しまねばなるまいと思う。二つの狂言を書いたことで新作狂言の面白さと、むずかしさがようやくわかりかけてきたゆえんである。私の狂言に対する愛情は、より一層深いものになったようである。（狂言作家）

◆秋酣の舞台から◆

「観世会」「金剛定期能」と「先代久田秀雄廿三回忌追善第十八回久田勘鷗の会特別公演」「幸謡会能」「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「清経・替ノ型」 妻（ツレ拓司）の夢枕に現れる清経ノ霊（シテ芳伸）、淡津三郎（ワキ元）に托した形見の遺髪が無ければ忘れる事もあろうにと〳〵思ふも濡らす袂、悲嘆にシオル妻に貰い泣く清経。シオリが同時ではない微妙な間（ま）に、沈んだ湿っぽい空気を外すかに昔語りへもってゆくところ巧く、逃避行は君辺に在って宇佐八幡への神供のこと、そこに口を挟む妻、サシの些事を抜き一気に神託の不吉へと核心に迫るのが利く。小書でクセは〳〵心の中ぞ哀れなる、と橋懸へ。流浪の船出の心は、妻からも心理的に遠ざかりたい、の心とも思え、入水の前後も型美しく端正。クセ切から直ぐ〳〵さて修羅道に、になり、キリは〳〵

観世会「清経・替ノ型」観世芳伸
（杉浦賢次氏撮影）

第二部は能「花月」後藤得三、仕舞二番「松風」山田仁三郎「船弁慶キリ」桜間龍馬、能「大原御幸」観世銕之丞・梅若万三郎（法皇）・福王茂十郎、狂言「月見座頭」茂山弥五郎・大蔵弥太郎、「張良」宝生英雄・福王茂十郎、一部二部を通し、当地三役の外に福王茂十郎・久保田亘亮、藤田大五郎・森田光春、曽和博朗・三須錦吾・大倉六蔵、山本敬一郎・亀井俊雄・安福春雄、小寺金七・柿本豊次が来演。

四月一日・二日、名古屋山本観衛会大会（社中会）が主宰の山本博之来名二十五周年を記念して行われる。

番組冒頭、山本博之は「名古屋の稽古（出張について）」の題で次のように会の沿革に触れる。「先代宗家左近先生が名古屋御出勤に　その頃呉服町に能楽堂があってお供してまいりました　人の少ないときで　左近先生の通小町で私のツレを先代喜之先生と橋岡先生が幕を揚げて下さったという時代です　其の後布池町に当時として理想的な能楽堂が出来て　その頃今能評家として活躍しておられる西田三好氏が当地へ転勤してこられ観衛会の稽古が始ったようにおぼえます　それからここに二十五年を迎えることになりました　西田氏は大阪電気倶楽部で稽古を始め能を数番舞はれ又観衛会幹事として功労者です　其の後西田氏と会員の意見がぴったりいかず会の組織を改めて博勝会といたしましたが、ここに二十五周年を迎えますについて元の観衛会に復活することにしました　変らぬ御交誼を御願い申上げ一層斯道に貢献したいと思います」　番外として初日に仕舞三番「二人静」太田重次郎・加藤総兵衛「小袖曽我」千崎隆一・馬野義男「山姥」柴田初太郎、二日目に仕舞三番「柏崎クルイ」柴田初太郎「土蜘蛛」山本真義・勝一「（祝言）難波」山本博之、がある。

―以下次号―

無明も法性も乱るる敵、と踏む数拍子が象徴的だった。（1時間3分）

「蝸牛」 偶然だが敬老の日の当日。役では祖父御の長寿を願い、用うれば尚々寿命長遠という蝸牛を太郎冠者（小アド高義）に求めさせるアド主の又三郎も八十四翁、山伏（シテ小三郎）に散々翻弄される太郎冠者を見て「なぜに此の者を誑いた」と詰問する辺りなど元気一杯。囃子物に引き込む山伏に惹き込まれる太郎冠者（写真）、両人の呼吸ぴたり。（20分）

「一角仙人」 覇権を争い、雨を呼ぶ龍神（子方・観世淳夫、上田顕宗）を神通力で岩屋に幽閉した一角仙人（シテ銕之丞）に、旱魃を憂う帝は官人（ワキ勝久）と共に旋陀夫人（ツレ清司）なる美女を仙境に送り、仙人を酒色に溺れさせて神通力を失わせ、龍神を解放させる。

酒は不要とシテ、厚志は受けよとワキ、志を無にするは〳〵鬼畜にはなほ劣るべしと、シテは〳〵月の盃を、受け、静かに面を上げてツレを凝視すれば、ツレもシテを見返す心に直視、色香に迷い魅入られる予兆すでに、両者の心理状態あざやかにみせる。

舞になり、ツレの楽（ガク）に、シテも二段の前に立ち、惹き寄せられる様にツレに近づくと、肩にやる手が外れたか左胸に触れる扇情的な一瞬、それがツレの挑発ともみえ、連舞の二段は後に付いて覚束無げに踏む拍子にも愉悦。三段は興に乗り独り舞うシテを、ツレは地前に見守る。舞あと、〳〵さす盃も、と再び受ける酒に昏酔のシテを見届け、奥（ワキツレ正樹

（④面へつづく）

名古屋宝生会定式能（第150期 第1回）
一月二十二日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能　**養老**
内藤飛能
和久荘太郎
橋本宰
高安勝久
相元正樹
河村総一郎　加藤洋輝
福井啓次郎　大野誠
間　鹿島俊裕
後見　倉本雅　村上茂
玉井博祐　地謡　織田哲也　石黒孝
鬼頭京子　玉井道夫　馬場富四夫
寺部一威　稲川寿一

狂言　**宝の笠**
大野弘之
佐藤融
佐藤友彦
後見　今枝郁雄

仕舞　**笹ノ段**　水上輝和
源氏供養　衣斐正宜
野守　石黒孝
地謡　佐藤耕司　馬場富四夫　辰巳満次郎　辰巳大二郎

能　**東北**
衣斐愛
飯冨雅介　筧福井良治　鉱一鹿取希世
間　井上菊次郎
後見　竹内澄子　玉井博祐
地謡　柴田勲　青木尭　加賀山憲治　久野幸三　佐藤耕司　水上輝和　衣斐正宜　内藤飛能

主催　**名古屋宝生会**
名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
佐藤耕司方
電話FAX・〇五二―八〇三―七三七二
携帯TEL・〇九〇―一七四一―六二三四
当日券1万円（2枚綴）
［有料］
年4回5枚綴2万円

豊田市能楽堂新春能
一月七日（土）午後二時開演
豊田市能楽堂
（電話0565・35・8200）

ひとり翁　片山九郎右衛門　地謡　武田大志　武田邦弘　片山清司　青木道喜

（和泉流）狂言　**靭猿**
大名　野村又三郎
太郎冠者　野口隆行
猿曳　野村小三郎
子方　猿　野村信朗

（観世流）能　**草子洗小町**
子方　久田勘吉郎
ツレ　古橋正邦
〃　橋本忠樹
〃　分林道治
〃　河村博重
〃　梅田嘉宏
梅田邦久
替装束
後見　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　奥津賢太郎
青木道喜　青木智彦
片山九郎右衛門　本田武田邦弘　祖父江修一
久田勘鷗　須部甫勲　片山清司
清沢一政　橋本礒道
地謡

主催　**豊田市教育委員会**

［入場料］
全席指定　正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円
チケット扱い　豊田市能楽堂
チケットぴあ（TEL0570・02・9999）

観世会「蝸牛」左より野村又三郎、伴野俊彦（後見）、松田高義、野村小三郎　（杉浦賢次氏撮影）

観世会「一角仙人」左より高安勝久、観世銕之丞、片山清司

観世会「一角仙人」左より観世淳夫、上田顕崇、観世銕之丞　（杉浦賢次氏撮影）

世会）

「半蔀」 花の供養に、夏安居の僧（ワキ宗二朗）も知らぬ白い花を供える曰くありげな里女（シテ永謹）、名を問われ、賤が屋に咲く夕顔と答えれば、更に花の主のそなたは、と興を示すワキ、逡巡のすえシテは素姓仄めかし消える短い前場。

（③面よりつづき）

・宰）に乗るツレと、ワキが退くと天地鳴動。岩が割れ姿を現わす二龍神（写真）台から飛び下りると舞働は二少年の元気溌剌、毅然とシテに立ち向かう闘争も痛快で、キリは二龍に追い捲られてシテは幕へ逃げ、一龍が、三ノ松に残り留めた。

欺き欺かれる清司と銕之丞の、酒宴から舞への阿吽の呼吸、君命を体して仙境に赴き一角仙人にまみえての問答に至るワキの重み、子方の活躍の爽やか、引き締まった好舞台。（49分・9月19日・観

ワキとの問答にも窺われる面孫次郎・襟白赤・露芝文白摺箔着付・段替籠目地籬ニ撫子文唐織のシテの楚々とした風情は、薄暮に仄白く開く夕顔を暗示する。

後場は大小前に半蔀藁屋、紺引廻シとると、緋大口・白長絹（枝垂桜ニ蝶、裾に楓葉）の典雅な姿を現わす夕顔女（後シテ永謹）、半蔀を左手で押し上げる態に出ると、夕顔の花を介しての源氏の君との出合いをいう舞グセ。型どころ、〽あの花折れ、の命でスミから藁屋を指ス扇の先が半蔀へ触れる程にするすると進み、〽この花を、と扇に花を受ける心は左膝つき両手に戴くと、立って〽源氏つくづくと、見入るところ、素晴しい。寂しい身の上に灯る一刻の愛のぬくもり、序ノ舞の袖捌きにも控え目の喜びが。（1時間19分）

「鬼瓦」 訴訟が上首尾に片付き、その勢いは因幡薬師へ御礼詣りの大名（シテ千五郎）ジャガ〳〵と鰐口鳴らさないのも亢奮の余りか、頭の中はお堂を国許へも勧請したいの思いで一杯。堂の細部の佇まいあれこれ見てゆくうち鬼瓦に目がとまり、面相誰やらに似ると泣き出せば、驚く太郎冠者（アド忠三郎）にマイナス・イメージの顔の造作一々あからさまに指摘して我が女房懐しさに亦泣く始末。調子に乗る感情の起伏の落差の激しさはシテの純朴、見守るアドのぬくもりも亦佳。（15分）

「雷電」 左遷の遺恨晴らさんと菅丞相ノ霊（シテ通成、黒頭に童子に似る赭い面は小天神か、紫指貫）、曽ての師・法性坊（ワキ勝久）を訪ね久闊を叙すうち内裏を襲うこと打ち明け、法力を恃む勅あっても参内無きよう切願するが、〽勅使三度に及ぶならば、の言に居住まい俄に荒々しく扇を開き仏前の柘榴を〽おっ取って噛み砕き、と正先へ突進、膝つき掬い取る型から数拍子踏んで扇左に取り、〽妻戸にくわっと、と柘榴投げつける心に扇撥ネルところ、目にも留まらぬ鮮烈。

後場、御殿に見立てる一畳台が脇正と地前に。何事もなく後ワキ（沙門・小格子着付・白大口・紫水衣・掛絡）地前の一畳台に上がり右膝つき数珠を揉み、〽不思議や虚空に、の返シ句に左へ眺め、〽内裏は、で後シテ雷神が熨斗目を被いて出ると幕へ見込み、シテが一ノ松で被衣脱ぐや視線を移し対峙する。面擊・赤頭・赤地半切・紺地袷法被・赤打杖の雷神、舞台へ入ると二つの一畳台の間を激しく行き交い、ワキとの闘争は轟に強々と踏む四ツ拍子が二度、ワキを威嚇するが祈り伏せられる。キリは所謂死後の名誉回復の処遇、〽黒雲に打ち乗り、と三ノ松で乗込拍子にトメ。無理じいから理不尽な行動を起こすシテ、受けて立つ泰然自若のワキ、前場の問答と後場の闘争、共に迫力あり面白かった。（50分・9月25日・金剛定期能・金剛能楽堂）

「卒都婆小町・一度ノ次第」 シテ勘鴟披キ。小書でシテが先に出る。路傍の朽ちた卒都婆に憩う老女（勘鴟）、上洛途次の高野山ノ僧（ワキ茂十郎ワキツレ知登）に見咎められ、仏道問答の末に素姓知られ、老小町落魄の今、物乞いの狂気から人恋しさは四位少将の憑依へ。百夜通いの苦衷を知って後世を願い、悟道に入ろうという。

踵ごく僅かに上げ、のめる様な心に足裏滑らせる老女の運ビ、問答にみせた拗ねるような口吻、杖捨て〽なう物賜べなう、とワキに迫るところ、物着あとは〽胸苦しや、で扇を胸に当てる型でなく頬（くずお）れるように下居してワキを見こんだところ、など〳〵慎重入念な役づくりに初演に思えぬ充実度。ただ卒都婆の床几、後見が持ち出すのでなく、予め出して置く方が（軽業的にピタリ座る要はなく、老人の杖で何処か腰を下ろすところは無いかと探っても）と思わぬでもなかった。（1時間26分）

「飛越」 小川を飛び越すだけだが運動神経の鈍い新発意（シテ又三郎）には至難、様々に試みるのを見かね、ならば手をつないで、と檀家（アド菊次郎）が手を貸すが駄目で濡れ単。それを嘲笑され、シテは曽てアドが相撲で惨めな負け方をしたのを持ち出し揶揄、取っ組み合いの相撲になる。

茶の湯不調法に折角同道を請うたシテを怒らせ、あまつさえ転かして逃げるアドに茶の湯の会はどこえやら。道々は湯の滾る音から講釈する自慢げなシテの優位、川へ出ては軽侮の口調もあらわにアドの優越感、熟達の両者。（15分）

「烏帽子折」 折は曲げたり、畳み重ねたりして物の形を造ること（折紙、折烏帽子）。

東へ下る三条吉次・吉六（ワキ勝久ワキツレ雅介）の中に紛れ逃避行の牛若丸（子方勘吉郎）、早打（アイ俊裕）の触レに追手が掛かるを知り、変装のため烏帽子屋（シテ清和）に飛び込み左折の烏帽子を求める。はき〳〵と口跡爽やかな利発な子方、受けるシテは淡々とした中にも力の籠った詞（コトバ）の情味、両者の問答が素晴しく、左折にまつわるシテの語もまた明晰で説得力。

支払い代りに受け取る刀が曰く物で、シテも知らなかった妻（ツレ拓司）の素姓から刀の持主が牛若丸と知れ、奇しくも子方と邂逅するツレの、共にシオルところなどは逆境に在るが故の切なさ、平伏のシテは感慨を新たにする。世が世ならばの思いは別れのとき、〽痛はしの御事や、のシテ・ツレ連吟の哀調は〽目も当てられぬ、とツレのみシオル。健気な子方へ改めて餞に刀を返すシテの義気、前場、シテと子方の詞の美しさが光る。

後場は美濃赤坂宿、夜盗来襲の報を齎す宿主（アイ友彦）、毅然と待ち受ける子方、頭目・熊坂長範輩下の先陣（アイ靖浩・小三郎・融）は先づ物見に靖浩、シテ柱に掴まり勾欄に上ったところを押されて舞台に落ち、小三郎は手に持つ松明を打ち落され、融は松明に息吹きかけて火勢を強め投げつけるが踏み消され、三人連なり舞台へ入れば、子方は松明を拾って投げつけ靖浩を斬る。斬られて肝を潰し、あとの二人に左右から抱えられ「恐ろしや恐ろしや」と幕へ逃げると、代って大挙打し掛けるのは郎党八名（立衆シテツレ）である。

長範（後シテ清和）は先陣の消息を尋ね、一旦は退く気配もみせるが面子に関わるとあって強襲の下知、三ノ松床几に掛かる威容には宗家清和の品位も。斬組は多勢を相手に子方の手捌きも鮮やか。でんぐり返る者、同士討ち、仏倒し、と多彩。キリは残るシテ独り、一ノ松へ進み大太刀抜くと舞台へ、子方に斬り立てられて脇座前に安座すると、更に組み討ちを挑むが外されて裾を払われ仏倒レ。よく統制のとれた立衆もよく、テンポ快調な活劇、見事だった。（1時間19分・10月1日・先代久田秀雄23回忌追善第18回久田勘鴟の会特別公演）

「隅田川」 旅人（ワキツレ幸治）の素袍上下・小刀は船頭（ワキ弥三郎）と同装、旅人は白大口・掛素袍・男笠がそれらしく景がよいのでは。狂女（シテ幸江）の女笠と重なるのを嫌ったろうか。

時機を得ず幸江はこれが初演という。それだけに満を持して挑むシテ像を女流らしく肌理こまかに演じる。ワキとの問答に「うたてやな隅田川の渡守ならば」となじる怒気が伝う持笹の幽かな震えが、〽隅田川の渡守とも覚えぬ事な宣ひそよ、に至り、目に見えて小刻みに震える辺りの描写の細かさ。業平の歌に触発されて都鳥にこだわるのも都に居て当然の我が子を尋ねる母の昂る心のうち。笠に手をやる常座から〽遠くも来ぬるものかな、と右へ眺めるところには春の愁いがあり、一転、我に返り〽乗せさせ給へ、と持笹打ち振るようにワキへ迫る心情も一方ならぬ母性の強さである。

船中は重々しくも情に溢れるワキ語の秀逸、身じろぎもせず聞き入るシテは石と化し、「遂に事終って」でシオルと下船促されるまでそのまま。ワキとの問答から我が子の死が現実と分り、〽なうこれは夢かや、と笠を投げ出し安座双シオリが唯一の激情と思え、クドキは憂いに深く沈む静かな独白。〽この土を、と二度掬い、〽この世の姿を、の双シオリもさめざめといった印象を受ける。

キリは念仏の声に面を深く垂れ、〽あれは我が子か、と居立つのも力弱く、双手拡げて幻影を追う空しさは塚を見て呆然と立ちつくし、〽草茫々、と塚へ一足詰メると面を垂れ、退って塚を後に〽哀れなりけれ、とシオリ留メ。諦観の色濃く、殊更に塚に纏わりつかないところが却って哀れ一入だった。地頭は師の文蔵、シテを支え、シテは応え、狂女の内面に深く迫る好舞台だった。（1時間18分・10月2日・幸謡会能・熱田神宮能楽殿）

「謀生種」 法螺吹き合戦にいつも負ける甥（シテ高義）、今度こそはと伯父（アド又三郎）に挑む。挑むからには先手、これが敗因とは気付かず亦負けるシテの愚直にアドの老獪が直截に出る。（17分）

「融・舞返」 シテ文蔵。番組に明記しないが小書は他に「思立ノ出」と「今合返シ」。田子前後とも手繰らず出ると、〽浦さび渡る、で一ノ松に置き、天秤棒は勾欄に立てかけ、その場で直ぐ旅僧（ワキ勝久）と問答になる。

融大臣の豪奢な造園の跡、問われるままに説明すれば、更にその謂れ求められ、正中下居に語るところ、身は汐汲みの老翁に、そこはかとなき気品は文蔵の資質、後シテ融大臣を暗示する。〽うら淋しくも荒れ果つる、と右へ静かに眺め渡すところ、茫漠たる廃趾が広がる。有為転変の世にあり変らぬは外郭の景色、湿っぽくなる雰囲気を転じる名所教えはワキに自慢する心、〽あれこそ大原や、と目付柱の先を遠く見るところ、声も弾むか。とこうするうち熱の入る余り忘れかける汐汲み、ハタと打合、一ノ松から田子を担ぐと大小前へ。田子を前後に振ってごろんと転がし、〽（月をも）袖に望汐の、と左、右と田子を眺め、一旦前へ出てから〽汐曇りに（かき紛れて）、と退いて行くところ、後ろ肩から外した天秤棒がピタリ左右の田子の上に載ったのには吃驚。シテはその侭シテ柱に紛れるように二ノ松で沈むと、〽跡をも見せず、の返シ句に立ち地一杯に中入する。

後シテは面中将・初冠（垂纓）黒垂・襟浅黄赤（?）白地縫箔着付・紫指貫・白単狩衣（蚊屋吊草文）・太刀の瀟洒はいかにも殿上人。正先で〽曲水の盃、と膝つき掬むと両手に捧げ、〽受けたり受けたり、と四ツ拍子、〽遊舞の袖、と正中で達拝掛の早舞。幕際まで行き左右にきりりと小廻りに右袖返シてクツロギ、三鼓の流シでする〳〵と戻るところ、急ノ舞に直っては一ノ松後勾欄へ行き、地になり〽未だ初月の宵々に、と舞台へ戻るなど、小書「舞返」は舞来たり舞去る英姿も颯爽。キリも型どころはき〳〵と極め、〽月もはや、と雲ノ扇から〽雲となり雨となる、と三ツ拍子、左袖巻上げると地の裡に入り、ワキが出て下居合掌にトメた。（1時間30分・10月14日・名古屋能楽堂定例公演）

梅猶会18年度大阪定期能公演

梅猶会の平成十八年度大阪定期能楽公演は1月15日（日）を初回として年四回公演が行われる。予定番組は次のとおり。

【第1回】 1月15日（日）　11時開演、大阪能楽会館
「翁」（梅若猶義）狂言「文蔵」善竹忠一郎、「杜若」梅若善久、「鞍馬天狗」（梅若吉之丞）

【第2回】 6月3日（土）　12時半開演、大阪能楽会館
「鶴亀」（梅若善高）狂言「入間川」善竹忠一郎、「隅田川」（池内光之助）、「鉄輪」井戸和男

【第3回】 9月2日（土）　12時半開演、大阪能楽会館
「橋弁慶」（梅若善久）狂言「鳴子遣子」（茂山千五郎）「半蔀」（井戸良祐）「融」（梅若基徳）

【第4回】 12月3日（日）　12時開演、大槻能楽堂
「景清」（井戸和男）狂言「狐塚」（善竹忠重）、「定家」（梅若修一）、「猩々乱」（立花香寿子）

各回とも仕舞。

〽年間会員券（4枚綴）1600円、前売券4500円（当日5000円）

梅猶会定期能連絡所＝〒560－0084　豊中市新千里南町3－18－12・梅若善高方、電話06－6831－7854